綿 貫 牛 道 遺 跡

国道354号高崎玉村地域活力基盤創造事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2012

群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

東毛広域幹線道路は、群馬県域の東毛と県央とを直結する新たな動脈として期待され、その整備は「はばたけ群馬・県土整備プラン」の主要な事業として、推進されてきました。そして国道354号の諸バイパスは、この東毛広域幹線道路の中核と位置づけられています。

本書で報告いたします綿貫牛道遺跡は、高崎駅東口に直結する計画路線域の高崎市綿貫町に所在し、この国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査された遺跡です。

調査は、群馬県高崎土木事務所からの委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成20・21年度に実施しましたが、縄文時代の遺物、古墳時代前期から江戸時代にいたる遺構と遺物などが検出され、この地域の長い歴史を物語る多種多様な情報がもたらされました。とりわけ古墳時代前期の溝、14世紀半ばから15世紀半ばにかけての屋敷遺構は、今後の中世史研究に寄与するものと考えられます。

最後に、発掘調査の実施から本書の刊行にいたるまで、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には終始ご協力を賜りました。上梓にあたり、皆様方に心から感謝申し上げまして序といたします。

平成24年12月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　須田榮一

例　言

1．本書は国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴い発掘調査された「綿貫牛道遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。

2．遺跡は高崎市綿貫町1841-1、は1841-6、1842、1846、1847番地(以上１区)、1838-4、1838-5、1848-2、1849-1、1849-2番地(以上２区)に所在する。

3．事業主体は群馬県西部県民局高崎土木事務所である。

4．発掘調査の主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年４月に公益財団法人に組織改定)である。

5．調査履行期間は平成20年５月16日～平成21年３月31日、平成21年３月31日～平成21年11月30日である。(調査期間は平成20年６月27日～９月30日、同年10月20日～平成21年３月24日、および平成21年４月１日～平成21年５月25日である。)

6．発掘調査体制は次のとおりである(職名は当時)。

平成20年度　綿貫牛道遺跡１・２区

発掘調査担当　菊池　実(主席専門員)・真下裕章(主任調査研究員)
洞口正史(主任専門員総括)・岩崎泰一(主任専門員総括)・谷藤保彦(主任専門員総括)・笹澤弘紀(調査研究員)

遺跡掘削請負工事　技研測量設計株式会社

委託　地上測量：株式会社横田調査設計　空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

平成21年度　綿貫牛道遺跡１区

発掘調査担当　菊池　実(上席専門員)・山田精一(主任調査研究員)

遺跡掘削請負工事　スナガ環境測設株式会社

委託　地上測量：株式会社シン技術コンサル　空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル

7．整理事業の期間と体制は次のとおりである(職名は当時)。

整理履行期間　平成22年４月１日～平成25年3月31日

整理担当　菊池　実(上席専門員)・飯森康広(専門員(総括))
遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐総括)　保存処理：関　邦一(補佐総括)

8．本書作成の担当者は次のとおりである。

編集　菊池　実・飯森康広、デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)

本文執筆　菊池　実(第１～３章、第４章第２節１～３、同第５節１・２)、飯森康広(第４章第１節、同第２節４～７、同第３節、同第５節３・４)。なお、第４章第４節は鑑定分析報告書(１：楢崎修一郎(生物考古学研究所)、２・３：株式会社パレオ・ラボ)を再編集した。

遺物観察　石器・石造物：岩崎泰一(上席専門員)　縄文土器：橋本　淳(主任調査研究員)　土師器・須恵器：神谷佳明(上席専門員)　中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員)　瀬戸美濃系陶磁器同定：藤澤良祐(愛知学院大学)　石材同定：飯島静男(群馬地質研究会)　出土人骨鑑定：楢崎修一郎(生物考古学研究所)　炭化材樹種同定・炭化種実同定：株式会社パレオ・ラボ(小林克也、佐々木由香、バンダリ-スダルシャン)

9．発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・高崎市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。

10．綿貫牛道遺跡の出土遺物と調査・整理の諸資料(遺構図・遺物実測図・写真類・各種台帳類)は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡　　例

1．遺構平面図は日本測地系国家座標(第Ⅸ系)を用いて測量した。本文中に使用した方位は全て座標北を使用している。真北との偏差は、調査区中央付近で、東偏０度26分48秒である。

2．遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを使用した。

3．遺構名称は１区・２区の各区で遺構種類ごとに通し番号をつけ、番号・遺構種類名で呼称した。また本文中では１区と２区に分けて報告する。

4．遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構　住居・竪穴状遺構－１：60、カマド－１：30、掘立柱建物－１：80、土坑－１：30、１：60、ピット－１：60、溝－１：40、１：60、１：80、１：100、１：200

遺物　土器－１：３、１：４、石器・石製品－１：１、１：３、鉄製品－１：１、１：２

5．本書の図版に使用したスクリーントーンは次のことを表示している。

焼土　灰　炭化物　粘土　漆　赤色塗彩

6．住居の床面積は、デジタルプラニメーターにより住居の壁の内側を3回計測し、その平均値である。住居の方位は竈を持つ壁に直交する壁を主軸線とした。遺構の計測値で全体を計測できないものについては、現存の値を記載し（　）に、推定で全体がわかるものについては〔　〕に表示した。

7．掘立柱建物の柱穴は、平面測量時の底面標高測点を原則として中心とし、その心々距離を計測した。各辺の長さの計測も同様とし、その平均を乗じて面積を算出した。なお、下屋及び庇を持つ場合も、同様に算出し加えた。下屋と庇の分類は、民家建築への移行を意識し、１ｍを境に狭い方を下屋、広い方を庇と表現した。また、調査区域外に延びるなど、建物が収束しない場合、m以上、㎡以上と記載した。主軸方位は棟方向を計測し、桁側二辺の方位を数値幅として、～によって示した。桁側長(桁行)を平均し、これを柱間で除して、桁行平均柱間を算出し、柱穴の偏りを判断する基準とした。規格は梁間・桁行の順で、○×○間と記載した。なお、柱穴は新たにＰ１から順に時計回りで付番し、調査時に呼称されたピット番号はそのまま残し計測表に付記し、非掲載遺物との照合に配慮した。

8．遺構名称は原則調査段階のものを踏襲し、欠番もそのままとした。また、やむを得ず整理段階で付番し直した場合も元番号を欠番とし、改称後の遺構本文中に旧名称を明記した。なお、欠番は以下のとおりである。

１区　住居９／土坑40・41、88～90／ピット294、312／溝２・８・15

２区　土坑３、14／墓１～３

9．遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

・遺物の出土位置の無記入は埋没土中、±○○は床面との差を表示。

・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。

・胎土表記中の細砂・粗砂・礫については、径２㎜以上を礫、径２～0.2㎜を粗砂、径0.2㎜以下を細砂とした。

・計測値の口：口径、胴：胴径、底：底径、高：器高、台：高台径を示す。単位はcmである。

・金属器観察表の計測値に（　）がついているものは残存部分での値である。

・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。

・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

10. 陶磁器の分類は以下に拠った。

・中世在地系土器胎土は、以下によりＡ・Ｂ２種類に分類した。

Ａ：透明鉱物、黒色鉱物、片岩細片含む。透明鉱物と片岩由来の雲母などを多く含む。

Ｂ：透明鉱物と黒色鉱物含む。片岩含まない。

・中世在地系の片口鉢と内耳鍋は、星野守弘「軟質陶器」『新編高崎市史 資料編３　中世Ⅰ』高崎市平成８年による。

内耳鍋　Ⅰ期：14世紀後半頃　Ⅱ期：14世紀末～15世紀前半　Ⅲ期：15世紀中頃　Ⅳ期：15世紀後半頃　Ⅴ期：16世紀前半

片口鉢　Ⅰ期：14世紀前半頃　Ⅱ期：14世紀中頃　Ⅲ期：14世紀後半頃　Ⅳ期：15世紀前半頃　Ⅴ期：15世紀後半頃　Ⅵ期：15世紀後半から16世紀

・中世在地系の皿は、木津博明「検出された遺構と遺物について」『上野国分僧寺・　尼寺中間地域１』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986による。

・肥前陶磁器は『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-』九州近世陶磁学会2000による。

・12から13世紀の中国磁器は、横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館1978による。

11. 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については以下のような表記をともに使用する。

浅間Ａ軽石：As-Ａ(1783年)　浅間Ｂ軽石：As-Ｂ(1108年)　榛名山二ッ岳軽石：Hr-FP(６世紀中葉)　榛名山二ッ岳火山灰：Hr-FA（６世紀初頭）　浅間Ｃ軽石：As-Ｃ（３世紀終末～４世紀初頭）　浅間板鼻黄色軽石：As-YP　浅間板鼻褐色軽石：As-BP

12. 本書に掲載した地図は下記のものを使用した。

国土地理院　地形図1:25,000「高崎」(平成14年５月１日発行)

国土地理院　地勢図1:200,000図「宇都宮」(平成18年４月１日発行)「長野」(平成10年２月１日発行)

高崎市　1:2,500全図(昭和54年測量)

第一軍管地方迅速測図『倉賀野駅』(明治18年測図)

目　次

口絵
序
例言
凡例
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　発掘調査に至る経緯 ･････････････････ 1
第２章　調査の方法と経過 ･････････････････ 4
　第１節　発掘調査の方法
　１グリッドの設定 ･････････････････････ 4
　２調査区の設定 ･････････････････････ 4
　３遺構の調査 ･････････････････････ 4
　第２節　調査の経過 ･････････････････ 4
　第３節　整理作業の方法 ･････････････････ 8
第３章　遺跡の立地と周辺の遺跡
　第１節　遺跡の立地 ･････････････････ 9
　第２節　周辺の遺跡 ･････････････････ 12
第４章　発掘調査の記録
　第１節　遺跡の概要
　１　遺構の概要 ･････････････････････ 21
　２　基本土層 ･････････････････････ 21
　第２節　１区の遺構と遺物
　１　竪穴住居 ･････････････････････ 25
　２　土坑 ･････････････････････ 58
　３　井戸 ･････････････････････ 69
　４　ピット ･････････････････････ 72
　５　溝 ･････････････････････ 82
　６　１号屋敷
　（１）掘立柱建物 ･････････････････････ 98
　（２）１号屋敷内の土坑 ･････････････････ 124
　（３）１号屋敷内の土坑(井戸状土坑) ･････････ 138
　（４）１号屋敷内の土坑(火葬跡) ･････････････ 139
　（５）１号屋敷内のピット ･････････････････ 139
　（６）１号屋敷内の溝 ･････････････････ 145
　７　１号屋敷周辺の遺構
　（１）掘立柱建物 ･････････････････････ 152
　（２）竪穴状遺構 ･････････････････････ 155
　（３）土坑 ･････････････････････ 155
　（４）井戸・土坑(井戸状) ･････････････････ 161
　（５）土坑(火葬跡) ･････････････････････ 165
　（６）集石遺構 ･････････････････････ 167
　（７）溝 ･････････････････････ 167
　（８）遺構外出土遺物 ･････････････････ 168
　第３節　２区の遺構と遺物
　１　竪穴住居 ･････････････････････ 174
　２　竪穴状遺構 ･････････････････････ 175
　３　土坑 ･････････････････････ 176
　４　井戸 ･････････････････････ 178
　５　ピット ･････････････････････ 180
　６　墓 ･････････････････････ 181
　７　火葬跡 ･････････････････････ 181
　８　炭化物集中遺構 ･････････････････ 183
　９　溝 ･････････････････････ 184
　10　畠 ･････････････････････ 199
　11　道路 ･････････････････････ 199
　12　遺構外出土遺物 ･････････････････ 199
　第４節　鑑定分析・自然科学分析 ･････････････ 203
　第５節　まとめと考察 ･････････････････ 211
報告書抄録
写真図版

挿図目次

第１図　国道354号高崎玉村バイパス路線図（１:60,000）……１
第２図　遺跡位置図（国土地理院地勢図１：200,000「宇都宮」
（平成18年４月１日発行）「長野」（平成10年2月1日発行）使用）…３
第３図　調査区および隣接遺跡位置図
（高崎市全図№41昭和54年測量１：2,500）……５
第４図　グリッド設定図……６
第５図　明治時代前半の周辺地形図
（第一軍管地方迅速測図「倉賀野駅」（明治18年測量）を使用）…10
第６図　遺跡周辺地形分類図１：50,000
（群馬県「土地分類基本調査」高崎（1993年）による）……11
第７図　高崎・前橋台地と井野川低地帯の地下断面図
（「新編高崎市史通史編１」p．90の図30を一部改変）……12
第８図　周辺遺跡の分布図……13
第９図　綿貫牛道遺跡全体図（1:500）……22
第10図　基本土層……23
第11図　発掘された周辺遺跡との位置関係図……25
第12図　１区１号住居、135号土坑……26
第13図　１区１号住居出土遺物……27
第14図　１区２号住居……28
第15図　１区２号住居出土遺物……28
第16図　１区３号住居（１）……29
第17図　１区３号住居（２）……30
第18図　１区３号住居（３）、同カマド……31
第19図　１区３号住居遺物分布図……32
第20図　１区３号住居掘り方図……33
第21図　１区３号住居出土遺物（１）……33
第22図　１区３号住居出土遺物（２）……34
第23図　１区３号住居出土遺物（３）……35
第24図　１区４号住居……37
第25図　１区４号住居掘り方図……38
第26図　１区４号住居出土遺物……38
第27図　１区５号住居……39
第28図　１区５号住居掘り方図……40
第29図　１区５号住居出土遺物……40
第30図　１区６号住居……41
第31図　１区６号住居掘り方図……42
第32図　１区６号住居出土遺物……42
第33図　１区７号住居……43
第34図　１区７号住居出土遺物……44
第35図　１区８・13・14・15号住居……45
第36図　１区８号住居カマド……46
第37図　１区８・13・14・15号住居掘り方図……46
第38図　１区８号住居出土遺物（１）……48
第39図　１区８号住居出土遺物（２）……49
第40図　１区13号住居出土遺物……50
第41図　１区14号住居出土遺物……50
第42図　１区15号住居出土遺物……51
第43図　１区９・10号住居……52
第44図　１区９・10号住居掘り方図……53
第45図　１区９号住居出土遺物……54
第46図　１区10号住居出土遺物……54
第47図　１区11号住居……55
第48図　１区11号住居出土遺物（１）……56
第49図　１区11号住居出土遺物（２）……57
第50図　１区１～３・９・22・35・36・38・39・44～46号土坑、
３・７号溝、114号ピット……59
第51図　１区47～50・106～114・122～124号土坑……61
第52図　１区115～121・127・128・131・135・160・161号土坑……63
第53図　１区125・126・129・130・132～134・136～138
・140・141・143・146号土坑……65
第54図　１区144・148・154～159・163～166号土坑、496号ピット…67
第55図　１区土坑出土遺物……68
第56図　１区１・２号井戸……69
第57図　１区１・２号井戸出土遺物……70
第58図　１区５号井戸と出土遺物（１）……70
第59図　１区５号井戸と出土遺物（２）……71
第60図　１区屋敷外ピット群１……73
第61図　１区屋敷外ピット群２及び
374・385・470・505号ピット出土遺物……74
第62図　１区屋敷外ピット群３……74
第63図　１区屋敷外ピット群４及び456号ピット出土遺物……75
第64図　１区屋敷外ピット群５……75
第65図　１区個別ピット（１）……76
第66図　１区個別ピット（２）……77
第67図　１区個別ピット（３）……78
第68図　１区個別ピット（４）及び501号ピット出土遺物……79
第69図　１区３号溝……82
第70図　１区１・４号溝（１）……84
第71図　１区１・４号溝（２）……85
第72図　１区１・４号溝（３）、４号溝出土遺物（１）……86
第73図　１区４号溝出土遺物（２）……87
第74図　１区４号溝出土遺物（３）……88
第75図　１区４号溝出土遺物（４）……89
第76図　１区４号溝出土遺物（５）……90
第77図　１区６号溝……92
第78図　１区７号溝と出土遺物……93
第79図　１区９号溝と出土遺物……94
第80図　１区10～12号溝、164号ピットと出土遺物……95
第81図　１区19・20・24・25号溝……96
第82図　１区26号溝……97
第83図　１区１号屋敷全体図……99
第84図　１区掘立柱建物分布図……101
第85図　１区２号掘立柱建物……102
第86図　１区３号掘立柱建物……103
第87図　１区４号掘立柱建物……104
第88図　１区７号掘立柱建物……105
第89図　１区８号掘立柱建物……107
第90図　１区９号掘立柱建物……108
第91図　１区10号掘立柱建物……108
第92図　１区11号掘立柱建物と出土遺物……110
第93図　１区12号掘立柱建物……111
第94図　１区13号掘立柱建物……111
第95図　１区14号掘立柱建物……113
第96図　１区15号掘立柱建物……113
第97図　１区16号掘立柱建物……115
第98図　１区17号掘立柱建物……115
第99図　１区18号掘立柱建物……116
第100図　１区19号掘立柱建物……116
第101図　１区20号掘立柱建物……118
第102図　１区21号掘立柱建物……118
第103図　１区22号掘立柱建物……119
第104図　１区23号掘立柱建物……120
第105図　１区24号掘立柱建物……121
第106図　１区25号掘立柱建物……121
第107図　１区26号掘立柱建物……123
第108図　１区27号掘立柱建物……123
第109図　１区１号屋敷内・周辺土坑分布図……125
第110図　１区４～８・10～14・18・19・23・24・26号土坑……127
第111図　１区15～17・20・21・25・27～29・42
・63号土坑、55号ピット……129
第112図　１区55・57～59・62・64・74～76号土坑、14号溝……131
第113図　１区65・67・69・72・79～87・90・91号土坑……133
第114図　１区70・71・73・77・78・92～99号土坑、161号ピット…134
第115図　１区７・16・25・58・59・65・67・69
・86・99号土坑出土遺物……137
第116図　１区66号土坑（井戸状）……138
第117図　１区168号土坑（火葬跡）と出土遺物……139
第118図　１区屋敷内ピット群、280号ピット出土遺物……140

第119図　Ⅰ区屋敷内個別ピット（１）…… 141
第120図　Ⅰ区屋敷内個別ピット（２）…… 142
第121図　Ⅰ区屋敷内個別ピット（３）…… 143
第122図　Ⅰ区５・16号溝 …… 146
第123図　Ⅰ区16号溝出土遺物 …… 147
第124図　Ⅰ区14・17・22・23号溝 …… 149
第125図　Ⅰ区17・22号溝出土遺物 …… 150
第126図　Ⅰ区１号掘立柱建物 …… 153
第127図　Ⅰ区５号掘立柱建物 …… 154
第128図　Ⅰ区６号掘立柱建物 …… 154
第129図　Ⅰ区１号竪穴状遺構 …… 155
第130図　Ⅰ区30 ～ 34・37・43・51 ～ 54・56・60号土坑 …… 157
第131図　Ⅰ区61・100 ～ 105・139・142・147・162・169号土坑 …… 159
第132図　Ⅰ区52・54・139・142・147号土坑出土遺物 …… 160
第133図　Ⅰ区３・４号井戸と出土遺物 …… 162
第134図　Ⅰ区６号井戸、68号土坑と出土遺物 …… 164
第135図　Ⅰ区145・149 ～ 153号土坑 …… 166
第136図　Ⅰ区１号集石遺構と出土遺物 …… 168
第137図　Ⅰ区13・18・21号溝、13・18号溝出土遺物 …… 169
第138図　Ⅰ区遺構外出土遺物（１）…… 170
第139図　Ⅰ区遺構外出土遺物（２）…… 171
第140図　Ⅰ区１号住居と同出土遺物 …… 174
第141図　Ⅰ区１号竪穴状遺構と出土遺物 …… 175
第142図　Ⅰ区１・２・４～15号土坑、９号土坑出土遺物 …… 177
第143図　Ⅰ区１～３号井戸、１・２号井戸出土遺物 …… 179
第144図　Ⅰ区ピット群、ピット …… 180
第145図　Ⅰ区４号墓と出土遺物 …… 182
第146図　Ⅰ区１～３号火葬跡 …… 182
第147図　Ⅰ区１・２号炭化物集中遺構 …… 183
第148図　Ⅰ区１～４号溝、２号溝出土遺物（１）…… 185
第149図　Ⅰ区２号溝出土遺物（２）…… 186
第150図　Ⅰ区５～12号溝 …… 188
第151図　Ⅰ区13 ～ 15号溝、14号溝出土遺物 …… 190
第152図　Ⅰ区16号溝と出土遺物 …… 191
第153図　Ⅰ区17号溝と出土遺物 …… 193
第154図　Ⅰ区18・24号溝、18号溝出土遺物 …… 194
第155図　Ⅰ区19号溝 …… 195
第156図　Ⅰ区19号溝出土遺物 …… 196
第157図　Ⅰ区20 ～ 23号溝、23号溝出土遺物 …… 197
第158図　Ⅰ区20号溝出土遺物 …… 198
第159図　Ⅰ区１～３号畠 …… 199
第160図　Ⅰ区１号道路と出土遺物 …… 200
第161図　Ⅰ区遺構外出土遺物（１）…… 201
第162図　Ⅰ区遺構外出土遺物（２）…… 202
第163図　Ⅰ区168号土坑（火葬跡）出土人骨部位図 …… 205
第164図　綿貫牛道遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 …… 208
第165図　綿貫牛道遺跡から出土した炭化種実 …… 210
第166図　綿貫小林前Ⅱ区溝跡130（左）と綿貫遺跡ＳＤ0005（右）…… 212
第167図　Ⅰ区２類建物変遷 …… 215
第168図　遺跡周辺旧地形復元図（下図：昭和期の航空写真）…… 217
第169図　在地系土器整理図 …… 219

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 16
第２表　Ⅰ区１号住居出土遺物 …… 27
第３表　Ⅰ区２号住居出土遺物 …… 29
第４表　Ⅰ区３号住居出土遺物 …… 36
第５表　Ⅰ区４号住居出土遺物 …… 38
第６表　Ⅰ区５号住居出土遺物 …… 40
第７表　Ⅰ区６号住居出土遺物 …… 42
第８表　Ⅰ区７号住居出土遺物 …… 44
第９表　Ⅰ区８号住居出土遺物 …… 49
第10表　Ⅰ区13号住居出土遺物 …… 50
第11表　Ⅰ区14号住居出土遺物 …… 51
第12表　Ⅰ区15号住居出土遺物 …… 51
第13表　Ⅰ区９号住居出土遺物 …… 54
第14表　Ⅰ区10号住居出土遺物 …… 54
第15表　Ⅰ区11号住居出土遺物 …… 57
第16表　Ⅰ区土坑出土遺物 …… 69
第17表　Ⅰ区１・２号井戸出土遺物 …… 71
第18表　Ⅰ区５号井戸出土遺物 …… 71
第19表　Ⅰ区ピット群出土遺物 …… 79
第20表　Ⅰ区屋敷外ピット計測表（１）…… 80
第21表　Ⅰ区屋敷外ピット計測表（２）…… 81
第22表　Ⅰ区４号溝出土遺物 …… 90
第23表　Ⅰ区７号溝出土遺物 …… 93
第24表　Ⅰ区９号溝出土遺物 …… 94
第25表　Ⅰ区10 ～ 12号溝出土遺物 …… 96
第26表　Ⅰ区掘立柱建物計測値一覧 …… 98
第27表　Ⅰ区２号掘立柱建物計測値 …… 103
第28表　Ⅰ区３号掘立柱建物計測値 …… 104
第29表　Ⅰ区４号掘立柱建物計測値 …… 105
第30表　Ⅰ区７号掘立柱建物計測値 …… 105
第31表　Ⅰ区８号掘立柱建物計測値 …… 107
第32表　Ⅰ区９号掘立柱建物計測値 …… 109
第33表　Ⅰ区10号掘立柱建物計測値 …… 109
第34表　Ⅰ区11号掘立柱建物計測値 …… 110
第35表　Ⅰ区11号掘立柱建物出土遺物 …… 110
第36表　Ⅰ区12号掘立柱建物計測値 …… 112
第37表　Ⅰ区13号掘立柱建物計測値 …… 112
第38表　Ⅰ区14号掘立柱建物計測値 …… 113
第39表　Ⅰ区15号掘立柱建物計測値 …… 113
第40表　Ⅰ区16号掘立柱建物計測値 …… 114
第41表　Ⅰ区17号掘立柱建物計測値 …… 114
第42表　Ⅰ区18号掘立柱建物計測値 …… 117
第43表　Ⅰ区19号掘立柱建物計測値 …… 117
第44表　Ⅰ区20号掘立柱建物計測値 …… 118
第45表　Ⅰ区21号掘立柱建物計測値 …… 118
第46表　Ⅰ区22号掘立柱建物計測値 …… 119
第47表　Ⅰ区23号掘立柱建物計測値 …… 120
第48表　Ⅰ区24号掘立柱建物計測値 …… 122
第49表　Ⅰ区25号掘立柱建物計測値 …… 122
第50表　Ⅰ区26号掘立柱建物計測値 …… 123
第51表　Ⅰ区27号掘立柱建物計測値 …… 123
第52表　Ⅰ区屋敷内土坑出土遺物 …… 137
第53表　Ⅰ区168号土坑（火葬跡）出土遺物 …… 139
第54表　Ⅰ区280号ピット出土遺物 …… 140
第55表　Ⅰ区屋敷内ピット計測表（１）…… 144
第56表　Ⅰ区屋敷内ピット計測表（２）…… 145
第57表　Ⅰ区16号溝出土遺物 …… 148
第58表　Ⅰ区17・22号溝出土遺物 …… 150
第59表　Ⅰ区１号掘立柱建物計測値 …… 153
第60表　Ⅰ区５号掘立柱建物計測値 …… 153
第61表　Ⅰ区６号掘立柱建物計測値 …… 153
第62表　Ⅰ区52・54・139・142・147号土坑出土遺物 …… 160
第63表　Ⅰ区３・４号井戸出土遺物 …… 163
第64表　Ⅰ区６号井戸・68号土坑出土遺物 …… 163
第65表　Ⅰ区１号集石遺構出土遺物 …… 168
第66表　Ⅰ区13・18号溝出土遺物 …… 168
第67表　Ⅰ区遺構外出土遺物 …… 172
第68表　Ⅰ区１号住居出土遺物 …… 175
第69表　Ⅰ区１号竪穴状遺構出土遺物 …… 175
第70表　Ⅰ区９号土坑出土遺物 …… 178
第71表　Ⅰ区１・２号井戸出土遺物 …… 179
第72表　Ⅰ区ピット計測表 …… 180
第73表　Ⅰ区４号墓出土遺物 …… 183
第74表　Ⅰ区２号溝出土遺物 …… 186
第75表　Ⅰ区14号溝出土遺物 …… 190
第76表　Ⅰ区16号溝出土遺物 …… 192
第77表　Ⅰ区17号溝出土遺物 …… 192

第78表　2区18号溝出土遺物 …… 194
第79表　2区19号溝出土遺物 …… 196
第80表　2区23号溝出土遺物 …… 198
第81表　2区20号溝出土遺物 …… 198
第82表　2区畠計測表 …… 199
第83表　2区１号道路出土遺物 …… 200
第84表　2区道構外出土遺物 …… 202
第85表　綿貫牛道遺跡出土人骨歯冠計測値 …… 206
第86表　綿貫牛道遺跡出土人骨まとめ …… 206
第87表　綿貫牛道遺跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 207
第88表　綿貫牛道遺跡から出土した炭化種実 …… 209
第89表　綿貫牛道遺跡から出土した試料別の炭化種実 …… 210
第90表　建物総括表 …… 214
第91表　瀬戸美濃系陶磁器総括表 …… 220

写真図版目次

Ｐｌ．１　遺跡全景航空写真
Ｐｌ．２　１区１号住居全景(北東から)
１区１号住居掘り方全景(北東から)
１区２号住居全景(南東から)
１区２号住居掘り方全景(北東から)
１区３号住居全景(南東から)
Ｐｌ．３　１区３号住居カマド全景(南東から)
１区３号住居貯蔵穴全景(南東から)
１区３号住居遺物出土状況(南東から)
１区３号住居遺物出土状況(北東から)
１区３号住居遺物出土状況(南から)
Ｐｌ．４　１区３号住居掘り方全景(南東から)
１区４号住居全景(北東から)
１区４号住居カマド全景(北東から)
１区４号住居掘り方全景(北東から)
１区４号住居貯蔵穴遺物出土状況(北東から)
Ｐｌ．５　１区５号住居全景(北から)
１区５号住居カマド全景(北から)
１区５号住居掘り方全景(北から)
１区６号住居全景(西から)
１区６号住居カマド使用面全景(西から)
１区６号住居掘り方全景(西から)
１区７号住居掘り方全景(北西から)
１区７号住居カマド全景(西から)
Ｐｌ．６　１区８号住居全景(西から)
１区８号住居カマド全景(西から)
１区８・13～15号住居掘り方全景(西から)
１区９号住居全景(南西から)
１区９号住居貯蔵穴遺物出土状況(北から)
Ｐｌ．７　１区９号住居掘り方全景(南から)
１区10号住居遺物出土状況(南西から)
１区10号住居カマド全景(西から)
１区10号住居掘り方全景(南西から)
１区11号住居掘り方全景(南西から)
Ｐｌ．８　１区11号住居遺物出土状況(西から)
１区11号住居遺物出土状況(北東から)
１区11号住居全景(南西から)
１区14号住居全景(北から)
１区14号住居掘り方全景(北から)
Ｐｌ．９　１区１号屋敷全景(上空から)
Ｐｌ．10　１区１号竪穴状遺構，32・43号土坑全景(北から)
１区１号掘立柱建物全景(北西から)
１区２号掘立柱建物全景(西から)
１区３号掘立柱建物全景(西から)
１区４号掘立柱建物全景(西から)
１区５号掘立柱建物全景(南東から)
Ｐｌ．11　１区１号土坑全景(北から)
１区２号土坑、18・20号ピット全景(南から)
１区３号土坑、６号ピット全景(北から)
１区４号土坑全景(南西から)
１区５号土坑全景(南から)
１区６号土坑全景(北から)
１区７・８・18・168号土坑、59号ピット全景(北東から)
１区９号土坑灰出土状況(北から)
Ｐｌ．12　１区10・11・14号土坑全景(東から)
１区11号土坑全景(南西から)
１区12号土坑全景(北東から)
１区13号土坑、68号ピット全景(南西から)
１区15・16・20・21号土坑全景(東から)
１区19号土坑、42・65・73・74・76・77号ピット全景(西から)
１区20・21・42号土坑全景(北から)
１区23号土坑全景(南から)
Ｐｌ．13　１区24号土坑全景(南から)
１区25・29号土坑全景(南から)
１区26号土坑全景(北西から)
１区27号土坑全景(東から)
１区28号土坑、84号ピット全景(北西から)
１区30号土坑全景(東から)
１区31号土坑全景(北東から)
１区33号土坑全景(東から)
Ｐｌ．14　１区34号土坑全景(北東から)
１区35号土坑全景(北から)
１区36号土坑、114・120号ピット全景(北東から)
１区37号土坑全景(東から)
１区38号土坑全景(南から)
１区39号土坑全景(北東から)
１区44号土坑全景(北から)
１区45号土坑全景(北から)
Ｐｌ．15　１区46号土坑全景(北から)
１区47号土坑全景(南から)
１区48号土坑全景(北から)
１区49・50号土坑全景(北から)
１区51号土坑セクション(南から)
１区52号土坑全景(南西から)
１区53号土坑全景(東から)
１区54号土坑全景(南東から)
Ｐｌ．16　１区55号土坑全景(西から)
１区56・60号土坑全景(西から)
１区57・58・62号土坑全景(西から)
１区58号土坑全景(西から)
１区59号土坑全景(西から)
１区61号土坑全景(西から)
１区62号土坑全景(西から)
１区63号土坑全景(北から)
Ｐｌ．17　１区64号土坑全景(西から)
１区65号土坑全景(北から)
１区66号土坑全景(北西から)
１区67号土坑全景(東から)
１区68号土坑全景(南東から)
１区69号土坑セクション(南から)
１区70・71号土坑全景(北から)
１区72号土坑全景(南から)
Ｐｌ．18　１区73号土坑全景(東から)
１区74号土坑全景(南から)
１区75号土坑全景(西から)
１区76号土坑全景(南から)
１区78号土坑セクション(南から)
１区79・80号土坑全景(北西から)
１区81・82号土坑全景(北から)
１区83号土坑全景(南から)
Ｐｌ．19　１区84号土坑全景(北から)
１区85号土坑全景(東から)
１区86号土坑全景(東から)

1区87号土坑全景(南から)
1区93・96・97号土坑、ピット群全景(西から)
1区99号土坑全景(南から)
1区103 ～ 105号土坑、ピット群全景(北西から)
P L．20　1区90号土坑全景(東から)
1区91号土坑セクション(南から)
1区92号土坑全景(北西から)
1区106号土坑全景(東から)
1区107号土坑全景(北東から)
1区108号土坑全景(南西から)
1区109号土坑全景(南東から)
1区110号土坑全景(南から)
P L．21　1区112・113号土坑全景(南から)
1区114号土坑全景(東から)
1区115号土坑全景(南から)
1区116 ～ 121・127・128・131号土坑全景(南から)
1区122号土坑全景(東から)
1区123号土坑全景(南東から)
1区124号土坑全景(南から)
1区125号土坑全景(南から)
P L．22　1区126・136・137号土坑全景(東から)
1区129号土坑全景(東から)
1区132号土坑全景(東から)
1区133号土坑全景(北から)
1区134号土坑全景(北東から)
1区135号土坑全景(東から)
1区138号土坑全景(北東から)
1区139・140号土坑全景(西から)
P L．23　1区141・146号土坑全景(南から)
1区142号土坑全景(北から)
1区143号土坑全景(南西から)
1区145号土坑全景(北から)
1区147号土坑全景(北東から)
1区148号土坑全景(北東から)
1区149号土坑全景(西から)
1区150号土坑全景(北東から)
P L．24　1区130・151号土坑全景(南東から)
1区153号土坑全景(南西から)
1区152号土坑全景(東から)
1区152号土坑骨片出土状況(西から)
1区154号土坑全景(北東から)
1区155・156号土坑全景(南から)
1区157号土坑全景(南から)
1区158号土坑全景(南から)
P L．25　1区160号土坑遺物出土状況(東から)
1区161号土坑全景(北東から)
1区162号土坑全景(北から)
1区165・166号(3号住居のカマド痕跡か)土坑全景(南西から)
1区168号土坑(B11号火葬墓)全景(北から)
1区168号土坑(B11号火葬墓)骨片出土状況(東から)
P L．26　1区1号井戸礫出土状況(北から)
1区3号井戸・1号集石礫出土状況(南西から)
1区3号井戸全景(東から)
1区4号井戸全景(東から)
1区5号井戸礫出土状況(北西から)
1区6号井戸礫出土状況(東から)
1区5号井戸全景(北から)
1区6号井戸全景(西から)
P L．27　1区2・8・11・16・19・23・26号掘立ピット全景(西から)
1区2・8・18・22号掘立ピット全景(西から)
1区2・11・13・14・16・24・26号掘立ピット全景(北西から)
1区6号掘立ピット全景(北西から)
1区7・10号掘立ピット全景(北東から)
1区7・10・12・18・21号掘立ピット全景(東から)
1区7・10・12・21号掘立ピット全景(東から)
1区8・15・19号掘立ピット全景(西から)
P L．28　1区7・10・12号掘立ピット全景(南西から)
1区7・18・21号掘立ピット全景(南から)
1区7・21号掘立ピット全景(南から)
1区8号掘立ピット9全景(西から)
1区8号掘立ピット15全景(北から)
1区8・18号掘立ピット、19号土坑全景(南から)
1区8・19号掘立ピット全景(北から)
1区10号掘立ピット3全景(南東から)
1区15号掘立ピット1全景(北から)
1区15号掘立ピット4全景(北東から)
1区18号掘立ピット3全景(北東から)
1区18号掘立ピット6全景(南から)
1区1～3号ピット全景(南から)
1区4・5号ピット全景(北から)
1区7～10号ピット全景(東から)
P L．29　1区11～14号ピット全景(南東から)
1区15～17号ピット全景(東から)
1区19号ピット全景(北から)
1区23号ピット全景(北東から)
1区43号ピット全景(南から)
1区45・47号ピット全景(北東から)
1区48号ピット全景(南から)
1区60号ピット全景(北東から)
1区88号ピット全景(北から)
1区89号ピット全景(北西から)
1区91～93号ピット全景(南東から)
1区94号ピット全景(北から)
1区95・99号ピット全景(北東から)
1区96・97号ピット全景(北西から)
1区98号ピット全景(南から)
P L．30　1区90・100・101・135号ピット全景(東から)
1区102・124・129号ピット全景(北西から)
1区103号ピット全景(東から)
1区104号ピット全景(東から)
1区105～107号ピット全景(南から)
1区108号ピット全景(北東から)
1区109号ピット全景(北東から)
1区110・143号ピット全景(北東から)
1区111・113号ピット全景(東から)
1区112・136号ピット全景(東から)
1区115号ピット全景(東から)
1区116・117号ピット全景(北西から)
1区118号ピット全景(北から)
1区119号ピット全景(北西から)
1区121号ピット全景(東から)
P L．31　1区122号ピット全景(北から)
1区123号ピット全景(北東から)
1区125号ピット全景(東から)
1区126・127号ピット全景(北東から)
1区128号ピット全景(北西から)
1区130・131号ピット全景(北から)
1区132～134号ピット全景(南東から)
1区137・138号ピット全景(東から)
1区139～141号ピット全景(北から)
1区142号ピット全景(西から)
1区145号ピット全景(南西から)
1区146号ピット全景(東から)
1区147号ピット全景(北から)
1区148号ピット全景(北西から)
1区149号ピット全景(北西から)
P L．32　1区150・151号ピット全景(東から)
1区152号ピット全景(北西から)
1区153号ピット全景(南東から)
1区144・154号ピット全景(西から)
1区155号ピット全景(東から)
1区338号ピット全景(西から)

1区301～305・361・366～368号ピット全景(北から)
1区341号ピット全景(西から)
1区306・307・355～358・398号ピット全景(北から)
1区477号ピット全景(南東から)
1区501号ピット遺物出土状況(北東から)
P L．33　1区330・340・359～361・365・404
・405号ピット全景(北西から)
1区350～354・397・406号ピット全景(北西から)
1区374～376・384～387・389・468・505
・515号ピット全景(北西から)
1区377・379・380・383・460～467号ピット全景(西から)
1区408～410・418～420・507・508号ピット全景(西から)
1区411～417・421・509・510号ピット全景(北から)
1区473・474・511～514号ピット全景(西から)
P L．34　1区1号溝全景(北西から)
1区1号溝全景(南東から)
1区2号溝全景(北から)
1区3号溝全景(北から)
P L．35　1区4号溝遺物出土状況(南東から)
1区4号溝遺物出土状況(南東から)
1区4号溝遺物出土状況(北東から)
1区4号溝遺物出土状況(南東から)
1区4号溝遺物出土状況(北東から)
1区4号溝遺物出土状況(北東から)
1区4号溝遺物出土状況(南東から)
P L．36　1区5号溝全景(北から)
1区6号溝全景(南東から)
1区7号溝全景(西から)
P L．37　1区9号溝全景(北西から)
1区13号溝全景(南から)
1区10～12号溝全景(南西から)
1区26号溝全景(北東から)
1区19号溝全景(北西から)
P L．38　1区16号溝全景(東から)
1区17号溝全景(東から)
1区18号溝全景(西から)
1区20号溝全景(北西から)
1区21号溝、53・147号土坑全景(北から)
P L．39　1区22号溝遺物出土状況(北から)
1区22号溝全景(北から)
1区23号溝、278号ピット全景(北から)
1区24号溝全景(西から)
1区25号溝全景(北から)
P L．40　2区全景(上空から)
P L．41　2区1号住居全景(南東から)
2区1号住居掘方全景(南から)
2区1号住居掘方東壁セクション(西から)
2区1号竪穴状遺構(東から)
2区1号竪穴状遺構セクション(南から)
P L．42　2区1号土坑全景(南から)
2区2号土坑全景(東から)
2区4号土坑全景(西から)
2区1号土坑セクション(南から)
2区2号土坑セクション(東から)
2区4号土坑セクション(東から)
2区5号土坑全景(東から)
2区6号土坑全景(東から)
2区7号土坑全景(南から)
2区5号土坑セクション(東から)
2区6号土坑セクション(東から)
2区7号土坑セクション(南から)
2区8号土坑全景(東から)
2区8号土坑セクション(東から)
2区9・15号土坑全景(東から)
P L．43　2区9・15号土坑セクション(東から)
2区10号土坑全景(南から)
2区11号土坑全景(東から)
2区12号土坑全景(南から)
2区10号土坑セクション(南から)
2区11号土坑セクション(東から)
2区12号土坑セクション(南から)
2区13号土坑全景(東から)
2区13号土坑セクション(東から)
2区1号井戸セクション上位(東から)
2区2号井戸全景(東から)
2区3号井戸セクション上位(南から)
2区1号井戸セクション(南から)
2区2号井戸セクション(南から)
2区3号井戸セクション(南から)
P L．44　2区2号ピットセクション(南から)
2区3号ピットセクション(南から)
2区4号ピットセクション(南から)
2区8～10号ピット全景(東から)
2区11号ピットセクション(南から)
2区13号ピットセクション(東から)
2区4号墓全景(東から)
2区4号墓セクション(東から)
2区4号墓遺物出土状態(東から)
2区1号火葬跡遺物出土状態(東から)
2区2号火葬跡遺物出土状態(東から)
2区3号火葬跡全景(西から)
2区1号火葬跡全景(東から)
2区1号炭化物集中遺構セクション(南から)
2区2号炭化物集中遺構セクション(南から)
P L．45　2区1号溝全景(南東から)
2区1号溝・6号土坑セクション(東から)
2区2号溝全景(南から)
2区2号溝セクション(西から)
2区3号溝全景(南から)
P L．46　2区3・4号溝セクション(南から)
2区5号溝全景(南から)
2区6号溝全景(西から)
2区5号溝南壁セクション(北から)
2区6号溝南壁セクション(北から)
2区7号溝全景(北から)
2区8号溝全景(北から)
2区7号溝北壁セクション(南から)
P L．47　2区9・10号溝全景(西から)
2区11・12号溝全景(西から)
2区13号溝全景(北から)
2区14号溝全景(北から)
2区13・17号溝セクション(西から)
2区15号溝全景(東から)
2区16号溝全景(東から)
2区16号溝セクション(南から)
P L．48　2区16号溝全景(西から)
2区16号溝セクション(西から)
2区17号溝全景(東から)
2区18号溝全景(南から)
2区19号溝東壁セクション(西から)
P L．49　2区19A～D号溝全景(北から)
2区19号溝北壁セクション(南から)
2区20号溝北壁セクション(南から)
2区21～23号溝北壁セクション(南から)
2区24号溝西壁セクション(東から)
P L．50　2区20～23号溝全景(北から)
2区1・2号畠全景(北から)
2区1号道路全景(北から)
2区3号畠全景(北から)
2区1号道路南壁セクション(北から)
P L．51　1区2号住居出土遺物、1区3号住居出土遺物
P L．52　1区3号住居出土遺物

ＰＬ．53　１区４～８号住居出土遺物
ＰＬ．54　１区８・13～15号住居出土遺物
ＰＬ．55　１区９～11・15号住居出土遺物
ＰＬ．56　１区土坑出土遺物、１区井戸出土遺物、１区屋敷外ピット出土遺物、１区ピット出土遺物、１区４号溝出土遺物
ＰＬ．57　１区４号溝出土遺物
ＰＬ．58　１区４号溝出土遺物
ＰＬ．59　１区４号溝出土遺物、１区11号溝出土遺物、１号掘立柱建物出土遺物、１区土坑出土遺物、１区土坑(火葬跡)出土遺物
ＰＬ．60　１区16号溝出土遺物、１区17・22号出土遺物、１区土坑出土遺物、１区井戸出土遺物、１区土坑(井戸状)出土遺物
ＰＬ．61　１区１号集石出土遺物、１区13号溝出土遺物、１区遺構外出土遺物
ＰＬ．62　２区１号住居出土遺物、２区１号竪穴状遺構出土遺物、２区土坑出土遺物、２区４号墓出土遺物、２区２・14号溝出土遺物
ＰＬ．63　２区16～20・23号溝出土遺物、２区遺構外出土遺物

第１章　発掘調査に至る経緯

綿貫牛道遺跡は高崎市綿貫町地内に所在する。高崎駅の東南約5.6㎞、関越自動車道高崎インターチェンジ出口から南南東約3.8㎞の位置にある。当遺跡は国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴って、平成20年度と21年度にわたって発掘調査された。

国道354号高崎玉村バイパスは、高崎駅と県東部の諸都市を結ぶ東毛広域幹線道路(高崎市－邑楽郡板倉町まで総延長58.6㎞)の一部を形成する全長5.3㎞のバイパスである。起点は高崎市綿貫町の国道354号(綿貫町北交差点)から終点は佐波郡玉村町大字福島の群馬県道40号藤岡大胡線(バイパス)までの区間である(第１図)。起点から佐波郡玉村町与六分までは平成23年６月12日に開通し、玉村町与六分(玉村町道を介して群馬県道24号高崎伊勢崎線と接続する)から終点まではそれ以前に開通している。また関越自動車道との交差地点ではスマートインターチェンジが建設中であり、平成25年度の完成を目指している。

この高崎玉村バイパスの整備は、平成５年度から着手されている。玉村町内の計画路線内における埋蔵文化財発掘調査は、県教育委員会、県土木部、中部県民局伊勢崎土木事務所による協議を経て、平成８年度から当事業団への委託が開始された。

高崎工区は西部県民局高崎土木事務所の所管事業で、前橋長瀞線から玉村町境まで、井野川右岸の高崎市綿貫町と同左岸の高崎市下滝町・下斎田町の約２㎞の区間である。平成16年度と19年度の県教育委員会の試掘調査によって、当該地区には古墳時代から平安時代を主とする集落跡が濃密に存在することが明らかになっていた。

平成19年度

高崎市綿貫町原北地内の調査については、平成19年11月16日付で高崎土木事務所から県教育委員会文化課に発掘調査の依頼が出された。これをうけて、平成19年11月20日付で県教育委員会文化課から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査の依頼があった。平成19年11月30日には西部県民局高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。

発掘調査の調査期間は平成20年１月４日から３月31日までの契約で、「綿貫原北遺跡」１区が調査された。調査

第１図　国道354号高崎玉村バイパス路線図(1：60,000)

の進展に伴い平成20年２月29日付で一部変更契約が締結された。３月からは来年度事務所用地の確保のために「綿貫伊勢遺跡」２区の東端部も調査を行っている。あわせて表面積2,268㎡(延べ4,854㎡)が調査された。

平成20年度

平成20年３月25日付で県教育委員会から、３月26日付で高崎土木事務所から「平成19年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査(分割２号)」の依頼があった。平成19年度繰越予算により発掘調査を実施するもので、調査は平成20年４月のみの１ヶ月間である。平成20年３月31日付で高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。４月８日には調査期間を５月31日までとする変更委託契約が締結された。原北遺跡１区468㎡、伊勢遺跡２区200㎡の計668㎡が調査された。さらに平成20年５月７日付で県教育委員会から、５月９日付で高崎土木事務所から「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の依頼があった。そして平成20年５月15日付で高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に発掘調査の受委託契約が締結された。調査期間は平成20年５月16日～平成21年１月31日である。「綿貫原北遺跡１区～３区、綿貫牛道遺跡１区・２区、綿貫伊勢遺跡１区～３区」の３遺跡の発掘調査が実施されることになった。この間、６月18日から７月４日まで下滝地区・綿貫地区をあわせて、県教育委員会文化財保護課による試掘調査が行われた。

平成20年９月10日には「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(分割２号)」と「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス地域自立活性化交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受委託契約が高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に締結された。前者の調査対象地は高崎市下滝町(下滝高井前遺跡)、下斎田町(下斎田重土薬師遺跡)、綿貫地内であり、調査期間は平成20年10月１日～平成21年１月31日である。後者は高崎市下滝町(下滝高井前遺跡)、下斎田町地内(下斎田重土薬師遺跡)で、調査期間は平成21年２月１日～３月31日である。その後、５月15日付と９月10日付(分割２号)で高崎土木事務所と受委託契約を交わした事業について、いずれも調査期間を２ヶ月延長して平成21年３月31日までとする変更契約が締結された。

綿貫地区においては、原北遺跡5,624㎡、牛道遺跡6,427㎡、伊勢遺跡5,735㎡の総計17,786㎡が調査されている。

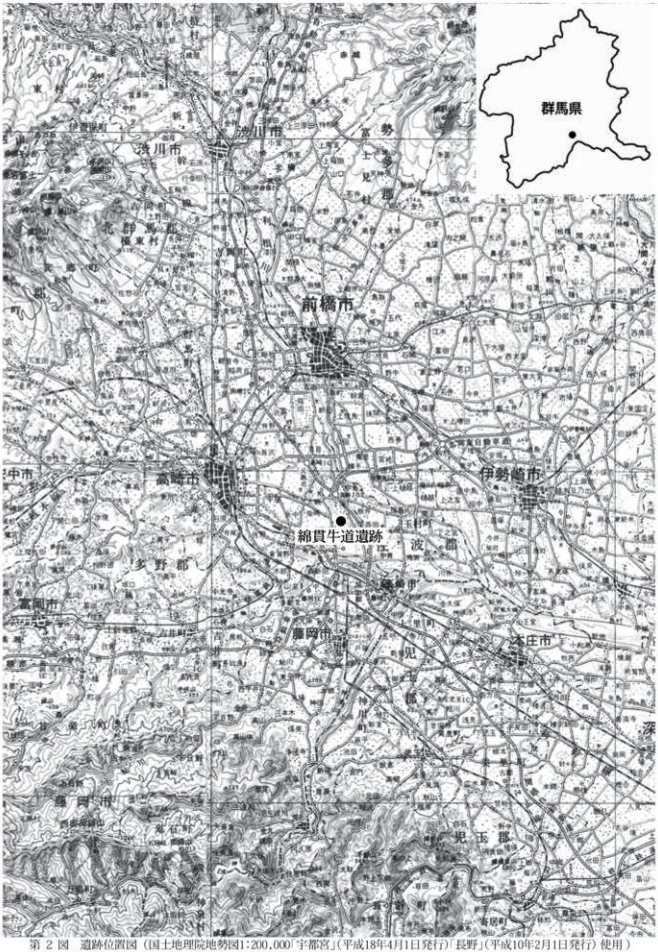
平成21年度

平成21年３月26日付けで高崎土木事務所から協議のあった「平成20年度国道354号高崎玉村バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査(分割３号)」と同(分割４号)が３月31日付で高崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間に受委託契約が締結された。前者の調査期間は平成21年４月１日～平成21年８月31日で、「綿貫牛道遺跡」と「綿貫伊勢遺跡」で実施された。後者の調査期間は平成21年９月１日～平成22年３月31日、「下滝高井前遺跡」と「下斎田重土薬師遺跡」で実施された。その後、綿貫伊勢遺跡と綿貫牛道遺跡の調査面積の拡大により、県教育委員会の調整通知をうけて、高崎土木事務所と発掘調査委託契約の一部変更について協議を行い、変更委託契約を締結した。「綿貫牛道遺跡」１区2,158㎡と「綿貫伊勢遺跡」１区3,282㎡の計5,440㎡が発掘された。

また「平成21年度国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」が、調査期間平成21年12月１日～同年12月31日まで「綿貫原北遺跡」１区607㎡で実施された。

このように、平成19年度に綿貫原北遺跡と綿貫伊勢遺跡の調査を開始、平成20年度は綿貫原北遺跡、綿貫牛道遺跡、綿貫伊勢遺跡、そして井野川左岸の下滝高井前遺跡、下斎田重土薬師遺跡の調査、平成21年度も引き続いて綿貫牛道遺跡、綿貫伊勢遺跡、綿貫原北遺跡の調査と下滝高井前遺跡、下斎田重土薬師遺跡がそれぞれ実施された。

本報告の綿貫牛道遺跡は、字境によって東に隣接する綿貫伊勢遺跡、西に隣接する綿貫原北遺跡との間に位置する。調査区は北西から南東に約117m、幅約77m、面積8,609㎡である。



第２図　遺跡位置図（国土地理院地勢図1:200,000「宇都宮」（平成18年4月1日発行）「長野」（平成10年2月1日発行）使用）

第２章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査の方法

１　グリッドの設定

国道354号高崎玉村バイパスに伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、平成８年度の調査開始以来採用しているグリッドの設定方法を当遺跡でも踏襲している。

グリッドの設定は国家座標にもとづき玉村町全域および高崎市内の該当地域を網羅するように、南東隅の座標Ｘ＝30,000・Ｙ＝－60,000を起点とする10km四方の区画を設定し、これを「地区」と呼称した。

次にこの「地区」を１km四方に分割して、南東隅から北方向に１～100の番号を付け「区」（大グリッド）とした。さらに、この「区」を100m四方に分割し、同様に１～100の番号を付け「中グリッド」とした。綿貫牛道遺跡は「96区」「97区」「６区」「７区」(中グリッド)に該当している(第４図)。

この「中グリッド」を、さらに５m四方に分割して「小グリッド」を設定した。一つのグリッドの大きさは５m×５mとなる。「小グリッド」には南東隅を起点として、西方向にアラビア数字を「１～20」、北方向にアルファベット「A～T」を付した。発掘調査の実施にあたっては、この「小グリッド」を基本としている。

本報告書で記載するグリッドは、地区・区の表記は省略して基本的に「中グリッド」と「小グリッド」を組み合わせて表記する。たとえば１区１号住居の場合は４つのグリッドにまたがるため、その記載方法は「97J・K-19・20」となる。

２　調査区の設定

発掘調査にあたっては、基準とする区画やグリッドとは別に、任意の調査区に区分している。

綿貫牛道遺跡は、字境によって東に隣接する綿貫伊勢遺跡、西に隣接する綿貫原北遺跡との間に位置する。調査区は北西から南東に約117m、幅約77mある。このために遺跡中央を東西に走る高崎市道を境界として北側を１区、南側を２区として調査区を設定した(第３・４図)。

１区の調査対象面積は4,259m^2、２区の調査対象面積は4,350m^{2}の計8,609m^{2}である。

３　遺構の調査

表土については重機によって掘削した。その後、人力による遺構確認作業を行い、遺構平面の確認後、埋没土層の確認用ベルトを任意に設定して移植ゴテなどで掘り下げた。遺構の掘削も人力によった。

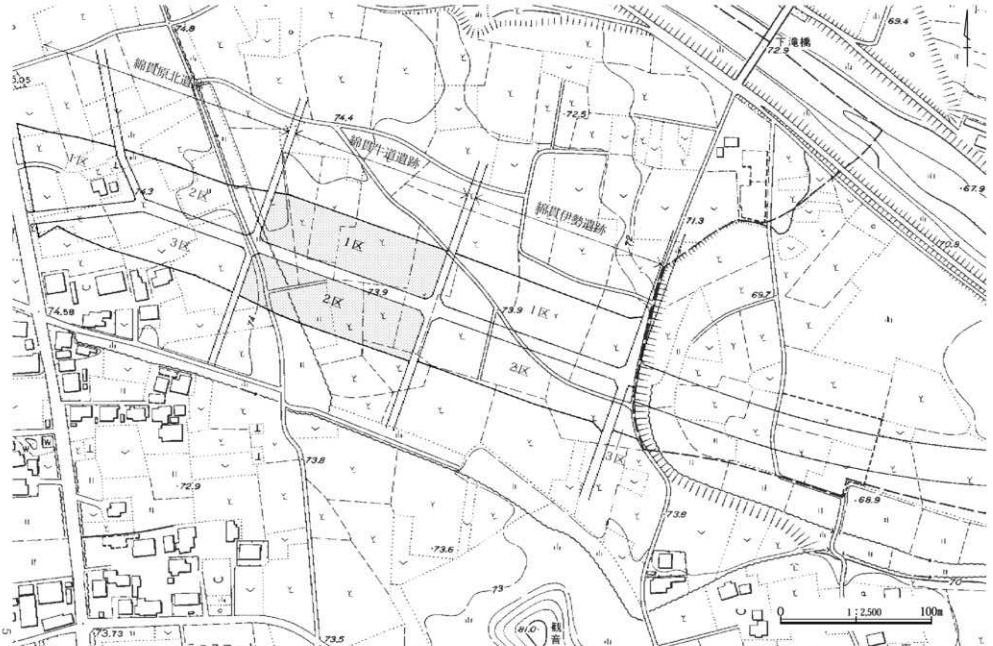
遺構番号は調査年や調査担当者の変更があることから、遺跡全体の通し番号ではなくて、調査区ごとに１から通し番号を付けた。

遺構測量は、平面図については電子平板によるデジタル測量を、断面図については手実測で行っている。住居・掘立柱建物、土坑などの平面図は1：20を基本とし、溝や畠については1:40とし、土層断面図は1:20で作成した。

遺構写真の撮影には、６×７cm判モノクロフィルムを使用、カラー写真はデジタルカメラを使用してハードディスク及びＤＶＤによるデータの記録保存をはかった。調査区の全景写真については、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

第２節　調査の経過

牛道遺跡１区と２区の調査については、原北遺跡・伊勢遺跡の調査と併行しながら実施している。１区の調査は菊池実と真下裕章の２名の担当で平成20(2008)年６月27日から９月30日(この間一時調査を中断している)、引き続いて１区と２区の調査を洞口正史と笹澤弘紀の２名で担当し10月20日から翌年の３月24日まで実施した。なお、この間担当者の一部変更があった。そして１区と２区の残り調査を平成21(2009)年４月１日から菊池実と山田精一の２名で実施、５月25日をもって牛道遺跡１区と２区の調査を終了した。



第 3 図　調査区および隣接遺跡位置図（高崎市全図No.41昭和54年測量1:2,500）

平成20(2008)年度

６月27日　綿貫原北遺跡２区の調査終了とともに綿貫牛道遺跡１区の遺構確認調査を開始する。

７月１日　土坑・ピットを検出し調査を行う。

２日　土坑・ピット、溝の全景写真を撮影。

４日　火葬墓(整理時に168号土坑と命名)の測量、炭化物を取り上げる。

９日　土坑・ピット、溝の掘削と全景写真、火葬墓の骨片出土状況の写真撮影を行う。

10日　火葬墓と土坑、ピットの全景写真と平面測量を実施する。

11日　一時調査を中断して、綿貫原北遺跡３区の調査に専念する。

※この間、原北遺跡３区調査のために調査を中断※

９月１日　調査を再開する。１区調査区の全体を重機による表土掘削を行う。

２日　重機による掘削とジョレンによる遺構確認作業を行う。

８日　遺構確認作業を継続する。

９日　土坑・ピット、溝の調査を開始する。

12日　４・６・７号溝の全景写真撮影、土坑・ピットの調査を継続する。

16日　４号溝の遺物出土状況の図面作成、遺物取り上げを実施する。

24日　４・８号溝の全景写真を撮影。午後空撮を実施する。

30日　本日をもって再度１区の調査を中断、菊池・真下の両担当は井野川対岸の下滝高井前遺跡調査のために移動する。プレハブの撤去。

10月20日　綿貫伊勢遺跡の調査班(洞口・笹澤)が牛道遺跡１区・２区の調査を再開する。なお、この班は伊勢遺跡の調査も併行して実施している。

27日　２区から土坑・ピットを検出する。

28日　引き続き２区１・２・４号土坑、１～４・８～11ピット、１～４号溝の全景写真を撮影する。

31日　２区１・２号墓の調査、３号土坑の全景写真を撮影する。

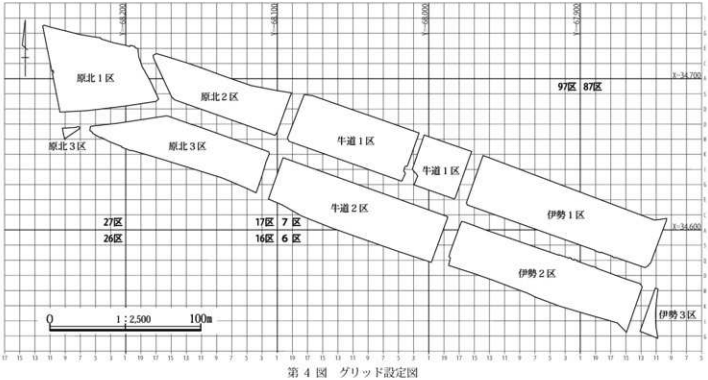
11月４日　２区１・２号墓、11～14号土坑、ピット、溝の調査を継続する。

10日　２区大溝の調査を行う。

11日　牛道２区、伊勢遺跡３区の空撮を実施する。

18日　当事業団の評議員・理事の遺跡視察が行われる。

12月１日　本日から担当者笹澤に代わり谷藤保彦が現場



第４図　グリッド設定図

担当者として着任する。

２日　１区の遺構確認作業を行う。現地説明会の準備を行う。

７日　遺跡現地説明会を開催､155名の見学者があった。

10日　２区の埋め戻しを開始、１区の遺構確認の調査を継続する。

15日　２区の埋め戻しを終了する。

19日　１区の溝の掘削を継続する。

25日　１区の溝の掘削を行う。本日をもって年内の調査を終了する。

平成21(2009)年

１月７日　担当者谷藤にかわって岩崎泰一が着任する。

８日　９～11号溝の調査、土坑の確認作業を行う。

13日　９号溝、44 ～ 47号土坑の測量を行う。

14日　44 ～ 50号土坑、2号井戸の調査を行う。

２月２日　高崎市教育委員会文化財保護課職員の来跡。以後、３月中旬まで調査の主力は伊勢遺跡になる。

２月26日　高崎土木事務所、工事関係者、調査担当者の３者で、道路工事と埋蔵文化財調査の工程調整を図る目的で安全協議会を開催する。

３月16日　土坑、溝の調査を行う。

23日　92 ～ 105号土坑の全景写真撮影を実施する。

24日　本日をもって20年度の調査を終了する。

※　※　※

平成21(2009)年度

４月１日　平成21年度の調査担当者は、菊池実と山田精一の２名である。

２日　現場開設準備。スナガ環境測設の金子・板垣両氏と打合せを行う。

８日　本日から作業を開始する。牛道遺跡１区の昨年度調査の継続を行う。土坑の調査、164 ～ 231号ピット、16号溝の調査に入る。

９日　１区１～８号住居の確認と285号ピットまでの確認を行う。

13日　１区９号住居の確認と写真撮影、147号までの土坑、342号までのピット、21号までの溝を検出する。

14日　１区389号までのピットの検出を行う。

15日　１区住居、掘立柱建物、土坑・ピット、溝の調査を継続する。149号土坑までを検出。

16日　１区４・６・７号住居のカマド調査を行う。

17日　住居カマド調査の継続と７号溝全景写真撮影を実施する。

20日　１区152号土坑までと480号ピットまでを検出する。引き続き住居の調査を継続する。

22日　各住居の遺物取り上げと掘り方調査を行う。

24日　１区９・11号住居の調査に入る。

28日　掘り方未調査の住居は３軒のみとなる。空撮の準備を行う。

５月１日　１区の空撮を実施する。

12日　１区３号住居の掘り方調査、11号住居の掘り方写真撮影。16・17・22号溝、68・152号土坑の写真撮影を実施する。

14日　１区３・10号住居の掘り方写真撮影、ピット群の写真撮影を実施する。

20日　１区８号住居の掘り下げ、14号住居の掘り方の写真撮影を実施する。

22日　１区８号住居の掘り下げ継続と埋め戻しを開

２区作業風景

２区作業風景

始する。

25日　高崎市やるベンチャーウィーク(中学生による職場体験)の一環で、高崎市立高南中学校の生徒４名が発掘を体験する。本日をもって牛道遺跡１区の調査を終了する。引き続き伊勢遺跡１区の調査を行う。

第３節　整理作業の方法

報告書作成のための整理作業は、平成22(2010)年４月１日から平成24(2012)年８月31日まで、綿貫原北遺跡・綿貫伊勢遺跡とともに実施した。

出土遺物については調査終了時までに洗浄され、遺跡略号、調査区、調査面、遺構名・グリッド名、遺物No.が注記されている。

整理作業においては、遺物を種別・器種別に分類した。そして縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等のそれぞれについて、接合・復元・写真撮影・実測・トレース作業を実施した。これについては、接合復元班、縄文実測班、石器専業班、実測班、トレース班、写真室がそれぞれに対応した。遺物の実測は手作業で実施したが、その一部については長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定して素図を作成、最終確認は手作業で行い図化した。これらのトレースも手作業で行い、作成したものをスキャニングしてデジタルデータ化して報告書掲載図とした。古銭、金属製品については当事業団保存処理室で錆落としの作業を実施後、実測等を行った。

遺構図については平面図と断面図の照合・修正とレイアウト作業を編集班で行い、デジタルトレースをデジタル専業班が行い報告書掲載図とした。

遺構写真については報告書に掲載する写真の選定とレイアウトを編集班で行い、調査時に撮影したネガフィルムのスキャニングと版下作成作業をデジタル専業班が実施した。遺物写真撮影は当事業団写真室でデジタルカメラを用いて行い、編集班のレイアウトをもとにデジタル専業班が加工・編集し、図版作成を実施した。

併行して本文・表・土層注記等の原稿執筆を行った。報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行った。

その後、校正作業を経て、平成24(2012)年12月に『綿貫牛道遺跡』として発掘調査報告書(本報告)の刊行を行った。

報告書の掲載資料については、管理台帳作成後、収納作業を行ったが、掲載されなかった遺物については出土地区・遺構ごとに分類して収納作業を行った。

第３章　遺跡の立地と周辺の遺跡

第１節　遺跡の立地

綿貫牛道遺跡は高崎市綿貫町地内に所在する。高崎駅の東南約5.6㎞、関越自動車道高崎インターチェンジ出口から南南東約3.8㎞の位置にある。

遺跡の所在する高崎市は関東平野の北西縁にあり、平成の大合併によって市域西端は長野県北佐久郡軽井沢町、東端は埼玉県児玉郡上里町に接している。市街地から赤城山・榛名山・妙義山の上毛三山を望むことができる、群馬県西部のいわゆる西毛地区に位置している。市内には、利根川・烏川・碓氷川など、大きな一級河川が流れ、遺跡地のすぐ東側を井野川が南東流して烏川に合流している(第２・５図)。

高崎市域(平成の大合併前)の地形は、市域西部にひろがる高さがほぼそろい浸食が進んで急傾斜の斜面とやせ尾根の連なる岩野谷(観音山)丘陵、榛名山南面の裾野にひろがる相馬ヶ原扇状地と丘陵縁辺部の扇状地、東縁を広瀬川そして西縁を烏川までの連続した比較的平坦な高崎・前橋台地、段丘と谷底平野からなる井野川低地帯、烏川・碓氷川流域の氾濫原に区分される。

以下、『新編　高崎市史　通史編１　原始古代』(平成15(2003)年)と群馬県『土地分類基本調査　高崎』(平成４(1993年))の内容を参考として記述する。

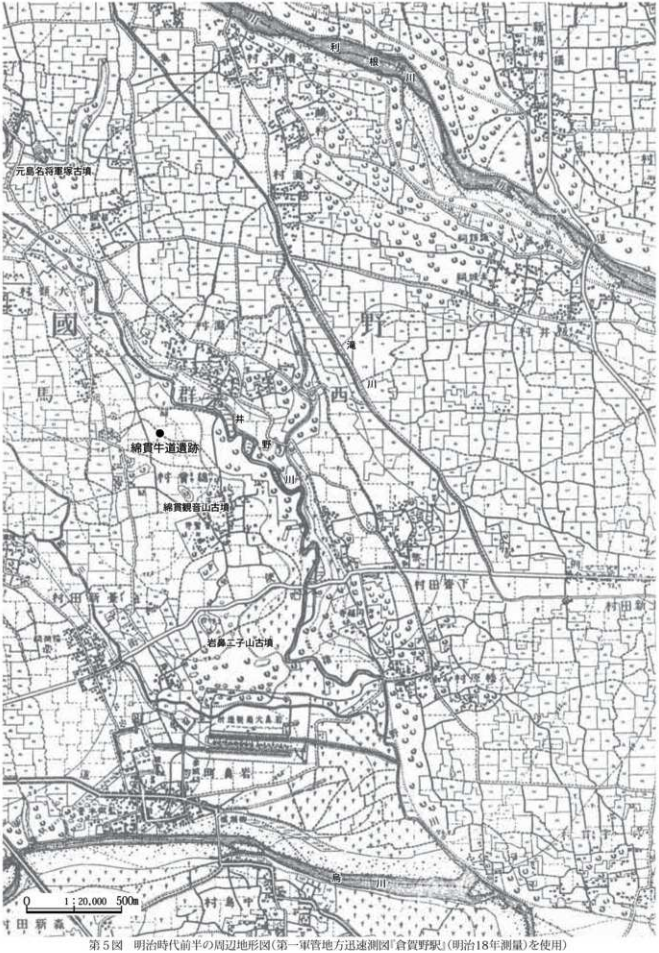
前橋台地の中央付近を流れる井野川流域には、井野川低地帯がひろがっている。この低地帯を境にして、前橋台地の西域を特に高崎台地と呼ぶ場合もある。高崎・前橋台地は、およそ2.1万年前、浅間山の噴火に伴う大規模な山体崩落によって流れ下った前橋泥流と呼ばれる堆積物によってその土台が形成されている。

高崎市域で前橋台地に属する地域は、市域の東縁にあたる八幡原町から新保田中町に至る地域、すなわち、井野川の流域にひろがる低地帯の東側から利根川の流路までの地域である。台地の土台を形成する前橋泥流の上位にはローム層や小河川・湿地の堆積物が重なっている(第６図)。

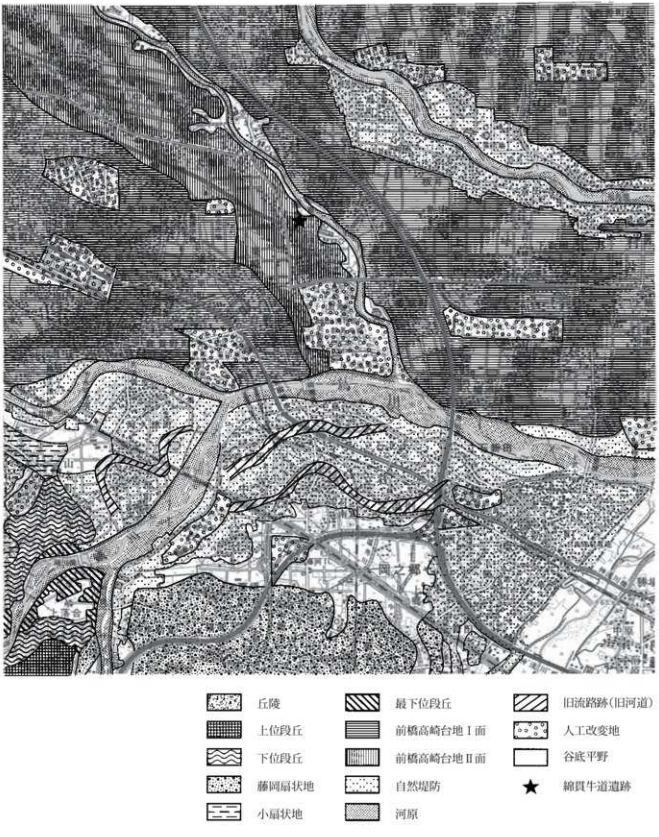
一方、高崎台地では前橋泥流の上に高崎泥流が堆積している。この泥流の下に浅間板鼻黄色軽石(As-YP)が認められることから、およそ1.1万年前の堆積と考えられている。その発生原因は榛名山南西麓から秋間丘陵付近で起きた大きな地震が関係している可能性が指摘されている。台地の上は比較的平坦で洪水などの災害に遭いづらいことから、古墳時代にはすでに水田の開発が行われている。

高崎台地と前橋台地を区切る井野川低地帯は、両台地より一段低く幅600m～700mで帯状に分布する。段丘崖は、岩鼻～栗崎付近で比高10m前後、柴崎付近で５m～３mと北西へ比高を減少し、南大類付近で不鮮明になる。この低地帯は前橋泥流堆積後の比較的早い時期に、昔の「利根川」によって形成された地形である。この旧利根川の流路に、およそ1.7万年前の「陣場岩なだれ」による堆積物が流れ込み、榛名山の裾野からやや遠い井野川下流域を除いてその姿を消してしまった。その後、埋め立てを免れた現在の井野川低地帯の中は、砂層やシルト層を堆積させる小河川と湿地が広くひろがる環境がつくられた。そして1.1万年前に、高崎泥流がこの低地帯にも流れ込み、埋め立てが進んだのである。この低地帯の地形をさらに詳細にみると、何段かの段丘面に区分することができる。これらの段丘のうち、当遺跡や綿貫観音山古墳がのる段丘は、最も高位にあり広く連続している。この井野川の高位段丘には、高崎台地の面と同じく高崎泥流が堆積している(第７図)。

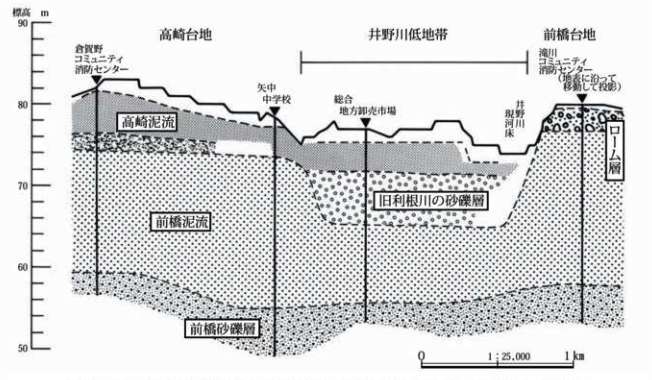
当遺跡は井野川低地帯の標高約74mに立地している。第６図の分類に従うと前橋高崎台地Ⅱ面に該当する。調査時に行った土層の観察から得られた基本土層は第10図に示し、第４章第１節２で詳述してある。



第５図　明治時代前半の周辺地形図（第一軍管地方迅速測図『倉賀野駅』（明治18年測量）を使用）



第6図　遺跡周辺地形分類図1：50,000（群馬県『土地分類基本調査』高崎(1993年)による）



第７図　高崎・前橋台地と井野川低地帯の地下断面図（『新編高崎市史通史編１』p.90の図30を一部改変）

第２節　周辺の遺跡

現在の高崎市は、平成18(2006)年に高崎市と群馬郡下の群馬町・箕郷町・榛名町・倉渕村・多野郡新町との合併、さらに平成21(2009)年に多野郡吉井町との合併で誕生した新市である。

遺跡の所在する高崎市綿貫町は、市東部の「岩鼻地区」にある。井野川下流右岸に位置し、対岸は高崎市の「滝川地区」になる。

明治22(1889)年の町村制施行により、周辺６村(岩鼻町、綿貫村、台新田村、栗崎村、東中里村、矢中村)が合併し西群馬郡岩鼻村が成立する(第５図)。明治29(1896)年に西群馬郡と片岡郡の統合により群馬郡に属した岩鼻村は、戦後の昭和32(1957)年、高崎市と群南村へ分割編入される。この時に綿貫と栗崎は群南村に編入された。そして昭和40(1965)年、群南村は高崎市へ編入され現在に至っている。

第８図は高崎市の「岩鼻地区」と「滝川地区」を主体に「大類地区」と「京ヶ島地区」の一部、関越自動車道の東に位置する玉村町西端にかけて形成された遺跡の分布図である。遺跡番号の１が当遺跡であり、８までが国道354号高崎玉村バイパス建設に伴って調査された遺跡である。また９～15は県道前橋長瀞線と北関東自動車道建設関連の高崎市所在遺跡になる。16～23は関越自動車道関連の遺跡、112～118は北関東自動車道建設関連の前橋市所在の遺跡、119～121は県道前橋長瀞線建設関連の前橋市所在の遺跡になる。このように遺跡地周辺は大規模な発掘調査が継続的に行われている。

以下、当遺跡周辺の歴史的環境を時代を追って記述する。なお、文中の遺跡名の後ろに付く〔　〕番号は第８図の遺跡番号に対応している。

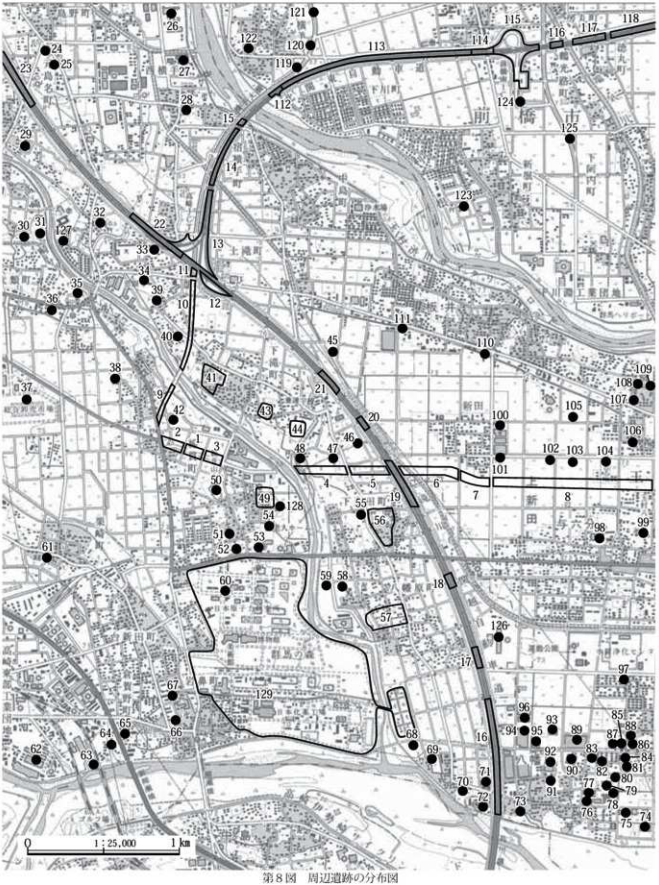
１　旧石器時代

当遺跡では旧石器時代の遺物は検出されていないが、遺跡から南1.8㎞の烏川左岸段丘上に立地している岩鼻坂上北遺跡〔66〕から槍先形尖頭器１点が出土している。

２　縄文時代

当遺跡では１区の９号土坑覆土中から多孔石１点が出土している。このほか１区を主体に中期の土器片が出土している。

遺跡周辺の井野川右岸段丘上にあっては、隣接する綿



第８図　周辺遺跡の分布図

貫原北遺跡〔２〕や同伊勢遺跡〔３〕から中期の土器片と石皿や打製石斧などの石器、南東約700mに位置する綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔54〕からも中期後半の土器片、綿貫小林前遺跡〔９〕では打製石斧が出土している。北西約1.3kmの下大類蟹沢遺跡〔35〕からは石鏃やスクレイパーが出土している。いずれも遺構外からの出土である。

一方、井野川左岸段丘上では、遺跡対岸の下滝高井前遺跡〔４・47〕から前期諸磯ｂ式期の住居１軒と土器片、続く下斎田重土薬師遺跡〔５〕からも同時期の土器片が出土している。当遺跡から南東2.4kmに位置する八幡原Ａ遺跡〔17〕からも諸磯ｂ式期と思われる住居１軒が検出されている。八幡原稲荷遺跡〔126〕からは前期後半と中期の土器片、下滝梅崎遺跡〔44〕からは縄文時代の可能性のある土坑１基と剥片が出土している。下斎田・滝川Ａ遺跡〔19〕では中期後半加曽利Ｅ式の土器片が出土した土坑１基と前期黒浜式、諸磯式の土器片が出土している。滝川Ｃ遺跡〔21〕では前期黒浜式の土器が一括出土している。下滝天水遺跡〔10〕からは陥穴と考えられる土坑と早期から中期にかけての土器片、上滝遺跡〔22〕では前期から後期に至る土器片と石鏃が出土している。元島名Ｂ遺跡〔23〕は遺構外からの中期後半の摩耗した土器片１点のみであった。玉村町城の上新田新田西遺跡〔６〕でも前期と中期の土器片と石鏃など、上新田中道東遺跡〔８〕からは中期後半から後期前半の土器片と石鏃28点、有舌尖頭器４点などが出土している。角渕伊勢山Ⅳ遺跡〔78〕からは前期諸磯ｃ式の土器片が出土し、上之手石塚遺跡〔84〕では石器が出土している。利根川右岸の前橋台地上では宿横手三波川遺跡〔14〕から石鏃など９点が出土している。

このように当遺跡周辺の遺跡分布を見てくると、井野川下流域左岸段丘上に縄文時代の住居が構築されるのは前期の諸磯ｂ式期からと判断される。そして当遺跡の周辺では中期になって縄文人の活動の痕跡が認められるものの集落が営まれるほどではなかったようだ。

3　弥生時代

当遺跡からは弥生時代の遺構と遺物は検出されていない。

井野川下流域の当遺跡周辺における弥生時代遺跡の分布は縄文時代と同様に希薄で、綿貫伊勢遺跡〔３〕に後期の土器片が認められるだけである。

しかし遺跡地の北西約３kmの井野川中流右岸では、高崎情報団地Ⅰ遺跡や万相寺遺跡から後期樽式土器を伴う住居や方形周溝墓、左岸でも同様に元島名遺跡や鈴ノ宮遺跡のように後期の集落や方形周溝墓が検出され、さらに当遺跡の北約2.6kmの利根川右岸の西横手遺跡群〔27〕からも樽式土器片が検出されている。このように弥生時代後期になって井野川中流域には集落や墓域が形成されていることがわかる。

なお、井野川と烏川との合流点に近く、両河川の左岸台地上の縁辺部にある八幡原若宮遺跡〔70〕からは、弥生時代中期後半から末に属する土器片が採集されている。

4　古墳時代

当遺跡からは、古墳時代前期と後期の住居が検出されている。

前期の遺跡は弥生時代の遺跡が希薄であった井野川下流域で急激に増加する。石田川式土器を伴う、この時期の集落を井野川右岸と左岸で見てみよう。

当遺跡の所在する井野川右岸にあっては、綿貫原北遺跡〔２〕で外周に溝をもつ竪穴住居(周溝をもつ建物)を含め３軒、当遺跡と同一集落を構成する綿貫伊勢遺跡〔３〕、綿貫小林前遺跡〔９〕では住居44軒と方形周溝墓１基、井戸と溝が検出されている。このうちの１軒からは銅鏃が出土した。綿貫遺跡〔42〕では住居６軒と方形周溝墓２基・溝数条、綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔54〕では住居３軒と土坑１基、不動山東遺跡〔53〕では住居２軒が検出されている。

一方、井野川左岸では当遺跡から北600m、綿貫小林前遺跡の対岸に位置する下滝天水遺跡〔10〕から住居25軒(その可能性を含めて)が検出されている。下滝高井前遺跡〔４〕では住居・土坑・溝、下滝梅崎遺跡〔44〕からは住居２軒と方形周溝墓１基、下斎田・滝川Ａ遺跡〔19〕で住居３軒・方形周溝墓１基・土坑４基である。滝川Ｃ遺跡〔21〕では住居の検出はなくて土坑と溝、同じく上滝社宮司東遺跡〔45〕も土坑だけの検出であった。上滝遺跡〔22〕では住居３軒・土坑７基・溝１条、元島名下河原遺跡〔127〕からは大溝１条が検出されている。当遺跡の南東約2.8kmに位置する玉村町下郷遺跡〔16〕からは、住居３軒・土坑10基・溝１条・方形周溝墓27基・円形周溝墓２基などが検出されている。なお、外周に溝をもつ竪穴住居(周溝

をもつ建物)は、前橋市の横手早稲田遺跡〔119〕５軒、横手湯田遺跡〔113〕７軒、玉村町の上新田中道東遺跡〔８〕２軒、上之手八王子遺跡〔97〕５軒、上之手石塚遺跡〔82〕１軒が検出されている。

当遺跡の北北西1.6km、井野川左岸に位置する４世紀前半築造の元島名将軍塚古墳〔32〕は、墳丘長91m～96mの前方後方墳である。埋葬施設は粘土槨で小型仿製鏡や石鋼が出土、墳丘裾部からは底部穿孔の二重口縁壺が出土した。井野川右岸の古墳としては、当遺跡の北西方向1.8kmの位置に４世紀後半の築造と考えられている柴崎蟹沢古墳がある。この古墳には正始元年銘のある三角縁神獣鏡など４面の銅鏡が副葬されていた。

４世紀初頭の浅間山Ｃ軽石(As-C)が降下する前後の時期に、当遺跡周辺一帯を含む高崎市東部から前橋市南部や玉村町にかけての低湿地であった地域では大規模な開発が進められ、水田が広げられていった。As-C混土上・下面で水田が検出されているのは、下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕である。

前期の遺跡に比べて中期の遺跡は数少ない。右岸の不動山東遺跡〔53〕では格子目叩目文をもつ韓式系土器の甕が出土した５世紀代の住居１軒が検出されている。岩鼻二子山古墳〔60〕や不動山古墳〔52〕の築造の背景に渡来人、渡来系文物との関わりが考えられる。左岸の下滝天水遺跡〔10〕からは一辺約35mの方形区画になる溝が検出されたが、この溝は５世紀の豪族居館に伴う溝と推定されている。元島名下河原遺跡〔127〕では住居５軒が検出された。

井野川下流域の右岸段丘上には綿貫古墳群が形成されている。『上毛古墳綜覧』作成時に４基の前方後円墳(南から岩鼻二子山古墳、不動山古墳、普賢寺裏古墳、綿貫観音山古墳)と17基の円墳の合計21基が確認された。しかし、現在の「群馬の森」一帯にあった、陸軍岩鼻火薬製造所の建設(明治13年)やその後の敷地拡張に伴い、多くの古墳が壊されていったものと思われる。実際はさらに多くの古墳が段丘上一帯に築造されていたものであろう。

当遺跡の南東約600mに位置する普賢寺裏古墳〔51〕は、墳丘長約80mの前方後円墳である。埋葬施設は竪穴系と考えられること、また墳丘形状から５世紀前半の築造が推定されている。現在の日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所敷地内には、５世紀前半から中頃の築造と考えられている、墳丘長約115mの前方後円墳・岩鼻二子山古墳〔60〕が南方向に前方部を向けて築造されていた。後円部から２基の舟形石棺が出土した。副葬品は五神四獣鏡、鉄製武器・農耕具、石製模造品などが出土している。この古墳は岩鼻火薬製造所の敷地拡張にともなって大正から昭和初期には壊されてしまった。５世紀中葉築造の不動山古墳〔52〕は墳丘長94mで、太田天神山古墳と相似形の築造企画を有する前方後円墳である。主体部には舟形石棺が用いられている。烏川との合流地点付近の河岸段丘上には若宮八幡北古墳〔68〕が築造されている。墳丘長46.3mの帆立貝式古墳で造り出し部を有する。埋葬主体部は舟形石棺で５世紀後半の築造と考えられている。この古墳の南側、烏川段丘上には若宮・八幡原古墳群が形成されている。

後期の遺跡は、右岸で綿貫原北遺跡〔２〕や綿貫伊勢遺跡〔３〕、綿貫小林前遺跡〔９〕では住居10軒弱、不動山東遺跡〔53〕から住居１軒、綿貫堀米前Ⅱ遺跡〔54〕では34軒の住居が検出されている。下大類蟹沢遺跡〔35〕からは住居28軒・溝６条・古墳１基が検出されている。左岸では下滝高井前遺跡〔４〕で集落、下滝赤城遺跡〔48〕から住居５軒、元島名下河原遺跡〔127〕では住居13軒と末期の住居６軒、上滝遺跡〔22〕では住居３軒・土坑４基・溝２条が検出された。八幡原稲荷遺跡〔126〕からは６世紀後半から７世紀後半に属する住居23軒が検出されている。

当遺跡の南東約250mに位置する綿貫観音山古墳〔50〕は、６世紀後半の築造で綿貫古墳群最後の前方後円墳と考えられている。墳丘長97.5mで二段築成、二重の周堀が巡る。榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩を積み上げた大型横穴式石室が構築されている。墳丘には円筒埴輪や形象埴輪が樹立され、副葬品には鏡、装身具、武器・武具、馬具、銅製水瓶、須恵器などがある。

左岸では慈眼寺〔34〕裏境内付近から南東800mにわたり古墳の分布が見られる。６世紀後半の築造で墳丘長47m、複室構造の横穴式石室を有する下滝２号墳(前山古墳)〔39〕や直径40mの御伊勢山古墳〔40〕などがある。

６世紀初頭の榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)下水田は多くの遺跡で確認されている。下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北Ⅲ遺跡〔11〕・上滝五反畑遺跡〔12〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群〔15〕・

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等　●墳墓　□水田・畠　△遺物のみ							参考文献
			縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	近現代	
1	綾貫牛道遺跡	高崎市綿貫町	△		○	○		○●		本報告書
2	綾貫原北遺跡	高崎市綿貫町	△		○	○	○	○●		団:『年報27』2008　『年報28』2009
3	綾貫伊勢遺跡	高崎市綿貫町	△	△	○	○		○●		団:『年報27』2008　『年報28』2009
4	下滝高井前遺跡	高崎市下滝町	○		○	○	○			団:『年報28』2009
5	下斎田重上葉師遺跡	高崎市下斎田町	△		○	○□	○	○		団:『下斎田重上葉師遺跡』2010
6	上新田新田西遺跡	玉村町上新田	△		○	○□	○□	□		団:『上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡』2009
7	上新田赤塚遺跡	玉村町上新田				○□	○			
8	上新田中道東遺跡	玉村町上新田	△		○●		□	○		団:『年報24』2005
9	綾貫小林前遺跡	高崎市綿貫町			○	○	○	○		団:『綾貫小林前遺跡』2006
10	下滝天水遺跡	高崎市下滝町	△		○□	○□	○	□		団:『下滝天水遺跡』2004
11	上滝榎町北Ⅲ遺跡	高崎市上滝町			□			○		
12	上滝五反畑遺跡	高崎市上滝町			○□	○□	○	○□		団:『上滝五反畑遺跡』1997
13	上滝榎町北遺跡	高崎市上滝町			□	□	○	□		団:『上滝榎町北遺跡』2002
14	宿横手三波川遺跡	高崎市宿横手町	△		○□	○□	○□	○□		団:『宿横手三波川遺跡』2001
15	西横手遺跡群	高崎市宿横手町			○□	○□	○●	○●		団:『西横手遺跡群』2001
16	下郷遺跡	玉村町八幡原			○●		○			群馬県教育委員会『下郷』1980
17	八幡原A遺跡	高崎市八幡原町	○			○	○	○		団:『八幡原A・B遺跡　上滝　元島名A遺跡』1981
18	八幡原B遺跡	高崎市八幡原町			△	△	○□	○□		
19	下斎田・滝川A遺跡	高崎市斎田町	○		○●	○		○		団:『下斎田・滝川A遺跡　滝川B・C遺跡』1987
20	滝川B遺跡	高崎市上滝町								
21	滝川C遺跡	高崎市上滝町	△		○					
22	上滝遺跡	高崎市上滝町	△		○	○	○	○		団:『八幡原A・B遺跡　上滝　元島名A遺跡』1981
23	元島名B遺跡	高崎市元島名町	△		△	△	○			団:『元島名B遺跡・吹屋遺跡』1982
24	島野堀渠遺構群	高崎市島野町					○			『新編高崎市史資料編3中世』1996
25	元島名諏訪北遺跡	高崎市元島名町				□				高崎市教育委員会『高崎市内遺跡理蔵文化財緊急発掘調査報告書』1992
26	西横手遺跡群(Ⅱ)	高崎市萩原町・西横手町			□	□	□			高崎市教育委員会『西横手遺跡群(Ⅱ)』1990
27	西横手遺跡群(Ⅰ)			△	●□	□	□			高崎市教育委員会『西横手遺跡群(Ⅰ)』1989
28	明徳元年在銘宝篋印塔	高崎市西横手町					●			高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
29	元島名内出	高崎市元島名町					○			『新編高崎市史資料編3中世』1996
30	降照屋敷	高崎市中大類町					○			『新編高崎市史資料編3中世』1996
31	中大類輪具遺跡	高崎市中大類町			○	○		○		高崎市教育委員会『高崎市内遺跡緊急理蔵文化財発掘調査報告書』1989
32	元島名将軍塚古墳	高崎市元島名町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
33	上滝Ⅱ遺跡	高崎市上滝町			○□		○			団:『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』2002
34	慈現寺	高崎市下滝町					○			『新編高崎市史資料編3中世』1996
35	下大類蟹沢遺跡	高崎市下大類町	△		○●	○				高崎市教育委員会『下大類蟹沢遺跡』1993
36	下大類・中道下遺跡	高崎市下大類町			○	○				高崎市教育委員会『下大類・中道下遺跡』2010
37	下大類遺跡	高崎市下大類町			○	○				高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
38	稲荷山古墳	高崎市綿貫町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
39	前山古墳	高崎市下滝町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
40	御伊勢山古墳	高崎市下滝町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
41	下滝館	高崎市下滝町					○			『新編高崎市史資料編3中世』1996
42	綾貫遺跡	高崎市綿貫町			○●	○	○			高崎市教育委員会『綾貫遺跡』1985
43	下滝屋敷	高崎市下滝町					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
44	下滝梅崎遺跡	高崎市下滝町	○		○●	○	○			高崎市教育委員会『高崎市内小規模埋蔵文化財緊急発掘調査概要』1995
45	上滝社宮司東遺跡	高崎市上滝町			○	○				高崎市遺跡調査会『上滝社宮司東・斎田北遺跡　下滝高井前・赤城遺跡』1990
46	上滝斎田北遺跡	高崎市上滝町			□	□				
47	下滝高井前遺跡	高崎市下滝町	△		△	△				
48	下滝赤城遺跡	高崎市下滝町			○		○			
49	堀米屋敷	高崎市綿貫町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
50	綾貫観音山古墳	高崎市綿貫町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
51	普賢寺裏古墳	高崎市綿貫町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
52	不動山古墳	高崎市綿貫町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
53	不動山東遺跡	高崎市綿貫町			○	○				不動山東遺跡調査会『不動山東遺跡』1986

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等 ●墳墓 □水田・畠 △遺物のみ							参考文献
			縄文	弥生	古墳	8世紀～平安	中世	近世	近現代	
54	綿貫堀米前Ⅱ遺跡	高崎市綿貫町	△		○	○	●			高崎市遺跡調査会『綿貫堀米前Ⅱ遺跡』2000
55	天神山古墳	高崎市下斎田町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
56	下斎田城	高崎市下斎田町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
57	八幡原館	高崎市八幡原町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
58	灰塚屋敷	高崎市八幡原町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
59	八幡原灰塚Ⅱ遺跡	高崎市八幡原町			○●	○	○			高崎市教育委員会『岩鼻扇上北遺跡 八幡原灰塚Ⅱ遺跡 飯塚新田西・堀田遺跡 高崎市内水田遺跡一覧』1994
60	岩鼻二子山古墳	高崎市綿貫町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
61	飯玉山古墳	高崎市栗崎町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
62	倉賀野東古墳群大道南群	高崎市倉賀野町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
63	むじな山古墳	高崎市倉賀野町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
64	弁天山古墳	高崎市倉賀野町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
65	乙大応寺遺跡	高崎市倉賀野町			●					高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』1991
66	岩鼻坂上北遺跡	高崎市岩鼻町	△（旧石器）		●			○		高崎市教育委員会『岩鼻坂上北遺跡 八幡原灰塚Ⅱ遺跡 飯塚新田西・堀田遺跡 高崎市内水田遺跡一覧』1994
67	岩鼻の砦	高崎市岩鼻町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
68	若宮八幡北古墳	高崎市八幡原町			●					高崎市教育委員会『高崎市遺跡分布図』1998
69	若宮館	高崎市八幡原町					○			『新編高崎市史 資料編3 中世』1996
70	八幡原若宮遺跡	高崎市八幡原町		△	○●		○	○		高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書17』2003
71	天神塚古墳	玉村町八幡原			●					玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
72	天神塚Ⅱ遺跡	玉村町八幡原			●					玉村町教育委員会『角渕伊勢山遺跡・角渕伊勢山Ⅳ遺跡・下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
73	八幡原城	玉村町八幡原					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
74	蟹沢遺跡	玉村町角渕					○	○		玉村町教育委員会『蟹沢遺跡』2001
75	蟹沢Ⅱ遺跡	玉村町角渕					○ □			玉村町教育委員会『蟹沢Ⅱ遺跡』1993
	蟹沢Ⅲ遺跡	玉村町角渕					○			玉村町教育委員会『蟹沢Ⅲ遺跡』1993
	蟹沢Ⅳ遺跡	玉村町角渕					○			玉村町教育委員会『蟹沢Ⅳ遺跡』1993
76	角渕伊勢山遺跡	玉村町角渕			○●			○		玉村町教育委員会『角渕伊勢山遺跡・角渕伊勢山Ⅳ遺跡・下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
77	角渕伊勢山Ⅱ遺跡	玉村町角渕			○●	○				玉村町教育委員会『角渕伊勢山Ⅱ遺跡』2000
78	角渕伊勢山Ⅳ遺跡	玉村町角渕	△		○●	○				玉村町教育委員会『角渕伊勢山遺跡・角渕伊勢山Ⅳ遺跡・下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
79	薬師前遺跡	玉村町上之手					○			玉村町教育委員会『薬師前遺跡・薬師前Ⅱ遺跡』2001
80	薬師前Ⅱ遺跡	玉村町上之手					○			
81	新井屋敷	玉村町上之手					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
82	上之手石塚遺跡	玉村町上之手			○●	○	○			玉村町教育委員会『上之手石塚遺跡』2000
83	上之手石塚Ⅱ遺跡	玉村町上之手				○●				玉村町教育委員会『行人塚Ⅱ遺跡・行人塚Ⅳ遺跡・堀街道遺跡・堀街道遺跡（第2次）・上之手石塚Ⅱ遺跡』2003
84	上之手石塚Ⅲ遺跡	玉村町上之手		△		○		○		玉村町教育委員会『上之手石塚Ⅲ遺跡』1993
	上之手石塚Ⅳ遺跡	玉村町上之手	△			○				玉村町教育委員会『上之手石塚Ⅳ遺跡』1993
85	行人塚遺跡	玉村町上之手				○	○		○	玉村町教育委員会『神明遺跡・行人塚遺跡・十王堂Ⅲ遺跡・中郷遺跡・松原Ⅱ遺跡・杉山遺跡』2006
86	行人塚Ⅱ遺跡	玉村町上之手				○				玉村町教育委員会『行人塚Ⅱ遺跡・行人塚Ⅳ遺跡・堀街道遺跡・堀街道遺跡（第2次）・上之手石塚Ⅱ遺跡』2003
87	行人塚Ⅲ遺跡	玉村町上之手				○				玉村町教育委員会『行人塚Ⅲ遺跡』2000
	行人塚Ⅳ遺跡	玉村町上之手				○				玉村町教育委員会『行人塚Ⅱ遺跡・行人塚Ⅳ遺跡・堀街道遺跡・堀街道遺跡（第2次）・上之手石塚Ⅱ遺跡』2003
88	行人塚Ⅴ遺跡	玉村町上之手				○				玉村町教育委員会『行人塚Ⅴ遺跡』2001
89	宇賀遺跡	玉村町宇賀			○	○	○●			玉村町教育委員会『宇賀遺跡』1999

番号	遺跡名	所在地	○集落・溝等　●墳墓　□水田・畠　△遺物のみ							参考文献
			縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	近現代	
90	宇賀館	玉村町宇賀					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
91	宇賀城	玉村町宇賀					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
92	赤城遺跡	玉村町宇賀			○●		○			玉村町教育委員会『赤城遺跡』2004
93	赤城Ⅱ遺跡	玉村町八幡原			○	○	○			玉村町教育委員会『赤城Ⅱ遺跡』1993
94	八幡原赤塚遺跡	玉村町八幡原				○□				玉村町教育委員会『角渕伊勢山遺跡・角渕伊勢山Ⅳ遺跡・下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
95	八幡原赤塚Ⅱ遺跡	玉村町八幡原				○	○	○		玉村町教育委員会『赤塚Ⅱ遺跡』2000
96	稲荷遺跡	玉村町八幡原				○		○		玉村町教育委員会『稲荷遺跡』1999
97	上之手八王子遺跡	玉村町上之手			○	○□				玉村町教育委員会『上之手八王子遺跡』1991
98	与六屋敷	玉村町与六分						○		群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
99	玉村八幡宮	玉村町下新田					○			玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
100	中道西遺跡	玉村町上新田				□				玉村町教育委員会『中道西遺跡(第1次・第2次調査)』1996
101	中道西Ⅱ遺跡	玉村町上新田			○	○□		○	○	玉村町教育委員会『中道東遺跡 中道西Ⅱ遺跡 蛭堀東遺跡(第2次調査)・中道東Ⅱ遺跡・中道東Ⅲ遺跡(第2次調査)』2008
102	中道東遺跡	玉村町上新田			○	○□	○	○	○	
103	中道東Ⅱ遺跡	玉村町上新田			○	○□	○□	○	○	
104	蛭堀東遺跡	玉村町上新田			○	○□	○	○	○	
105	一本木遺跡	玉村町板井			○	○□		○	○	玉村町教育委員会『一本木遺跡』2004
106	石原屋敷	玉村町斎田					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
107	町田屋敷	玉村町斎田					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
108	温井西屋敷	玉村町斎田					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
109	温井東屋敷	玉村町斎田					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
110	八反田遺跡	玉村町板井				□				玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
111	天神前遺跡	玉村町板井				○□				玉村町教育委員会『天神前遺跡・大明神遺跡・北小路遺跡』2002
112	横手南川端遺跡	前橋市横手町			○□	○□	○□	○□		団:『横手南川端遺跡　横手湯田遺跡』2002
113	横手湯田遺跡	前橋市横手町	△	△	○□	○□	○□	○□		
114	中村遺跡	前橋市鎧光路町	△		○□	○□	○	○●		団:『中村遺跡　西田遺跡』2002
115	西田遺跡	前橋市鎧光路町	○		○□	○□	○	○●		
116	鎧光路橋橋遺跡	前橋市鎧光路町				○□	○●			団:『鎧光路橋橋遺跡』2002
117	徳丸高駅遺跡	前橋市徳丸町			○□	○□	○●			団:『徳丸高駅遺跡』2005
118	徳丸仲田遺跡	前橋市徳丸町	○	○	○□	○□	○●			団:『徳丸仲田遺跡(1)』2001　『徳丸仲田遺跡(2)』2002
119	横手早稲田遺跡	前橋市横手町	○		○□	○□	○□	○□	○	団:『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手川端遺跡』2001
120	横手宮田遺跡	前橋市横手町			□	○□	□	○		
121	亀里平塚遺跡	前橋市亀里町			□	□	□	○●		
122	浅間神社古墳	前橋市横手町			●					群馬県遺跡台帳
123	新堀城	前橋市新堀町					○			群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
124	下阿内壱町畑遺跡	前橋市下阿壱町			○□	●□	○			団:『下阿内壱町畑遺跡、下阿内前田遺跡』2001
125	下阿内前田遺跡	前橋市下阿壱町			○□	○□	○●			
126	八幡原稲荷遺跡	高崎市八幡町	△		○		○	□		『新編　高崎市史資料編2』2010
127	元島名下河原遺跡	高崎市元島名町			○					『新編　高崎市史資料編2』2010
128	文安の宝塔	高崎市綿貫町					●			『新編　高崎市史資料編3中世』1996
129	陸軍岩鼻火薬製造所	高崎市綿貫町・宮沢町							☆	『陸軍岩鼻火薬製造所の歴史』2007

西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱ〔27・26〕・上滝斎田北遺跡〔46〕、利根川左岸では横手南川端遺跡〔112〕・横手早稲田遺跡〔119〕・横手湯田遺跡〔113〕・横手宮田遺跡〔120〕・亀里平塚遺跡〔121〕などである。さらには６世紀中葉の榛名山二ツ岳降下軽石層(Hr-FP)下水田が利根川流域で確認されている。右岸側で宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群〔15〕、左岸側で横手早稲田遺跡〔119〕・横手湯田遺跡〔113〕である。

5　奈良・平安時代

当遺跡からは８世紀代の住居が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡は古墳時代後期と同様の分布を示す。当遺跡周辺で見よう。井野川右岸では綿貫遺跡〔42〕から住居多数と土壇状遺構、溝が検出されている。土壇状遺構は９世紀後半から10世紀前半代までに築造されたと考えられる瓦葺建物である。綿貫小林前遺跡〔９〕では大集落、不動山東遺跡〔53〕は住居２軒、下大類蟹沢

遺跡〔35〕は住居72軒・溝17条である。左岸では下滝天水遺跡〔10〕や下滝高井前遺跡〔４〕で大集落、元島名下河原遺跡〔127〕で住居20軒、上滝遺跡〔22〕は住居２軒、下斎田・滝川Ａ遺跡〔19〕は住居９軒と土坑、八幡原灰塚Ⅱ遺跡〔59〕は住居１軒である。

天仁元(1108)年に降下した浅間Ｂ軽石層(As-B)下の水田が検出されている。下斎田重土薬師遺跡〔５〕・上滝斎田北遺跡〔46〕・下滝天水遺跡〔10〕・上滝榎町北Ⅲ遺跡〔11〕・上滝五反畑遺跡〔12〕・上滝榎町北遺跡〔13〕・宿横手三波川遺跡〔14〕・西横手遺跡群Ⅰ〔15・27〕・八幡原大鼻遺跡などである。

６　中世

当遺跡では14世紀から15世紀にわたる中世屋敷が検出されている。出土遺物に高級品は少ないが、中小領主層に関係する遺跡と考えられる。

当地域では鎌倉御家人として綿貫氏の存在が知られる。また、井野川を挟んだ東岸の高崎市八幡原町周辺は、上野国奉行人安達氏が基盤とした地域と言われ、伝屋敷跡として八幡原館〔57〕がある。安達氏は、弘安８(1285)年霜月騒動により滅亡し、影響下にあった玉村氏も没落したと言われるが、綿貫氏は勢力を保ち、正慶２(1333)年に河内国(大阪府)で楠木正成を討伐した際に作成された「楠木合戦注文」に、「綿貫三郎入道跡」、「綿貫二郎右衛門入道跡」の名が見える。

南北朝時代となり、上野国武士は上州白旗一揆として結束を固め、綿貫氏も構成員となっている。永享12(1440)年に幕府方が茨城県結城城を攻めた結城合戦では、一揆勢として参陣し、「綿貫越後守」、「綿貫多利房丸、同名亀房丸代」が首級を上げている。文安６(1449)年「掃部寮(かもんりょう)領上野国綿貫庄」の年貢は、10年間納入免除となっていた(『康富記』)。時期が一致するため、一説に綿貫氏の結城合戦での活躍に対する論功行賞であったとも言われる。その際、期限終了に伴う年貢納入の申し立ては、上杉氏被官木部氏が行っており、同荘園の代官であった可能性が高い。峰岸純夫氏によれば、掃部寮は朝廷の設営を取り仕切っており、「掃部寮領はそのための資材供給地で、綿貫庄は何時の頃か(おそらく保の成立する十一～十二世紀に)掃部寮領綿貫保として成立し、自生する藺(いぐさ)草や莨(薑)などを畳・筵・簾などの原料として貢納し」、「十五世紀の時点では、すでにこのような特産物の貢納はなくなり、一般的な荘園に転化していた」が、「依然として政府直轄地として宮内省掃部寮が管轄していた」(峰岸2000)としている。なお、当遺跡の南東約600mには、「文安の宝塔」〔128〕が建立されている。これは文安４(1447)年４月に、２基同時に建立されたもので、高さ90cmと立派である。堀米屋敷〔49〕に隣接する墓地内にあり、堀篭氏との関連も想定できるが、結城合戦から７年後であることから、綿貫氏との関係も思い起こされる。その後、綿貫氏は史料上確認できなくなり、勢力的に衰えたものと推測できる。

綿貫氏の存亡と直接関わったものか不明だが、15世紀後半に当地域周辺で大きな争乱があった。古河公方足利成氏と関東管領上杉氏が争った享徳の乱(1455～1458)である。成氏は、文明９(1477)年に上野国へ侵攻し、数ヶ月にわたり滝・島名(高崎市)に張陣している。その中心は下滝館〔41〕に比定される。周辺には下野勢ら8000人余の軍勢が陣を張ったという。同年12月、成氏軍は西方の和田(市内)へ進軍したため、当地域を横断したことがわかる。この争乱では、上杉家家宰職を勤めた白井長尾景信の子景春が上杉氏に敵対したため、上州一揆勢力でも動揺が生じている。一揆旗本の長野為業は長尾景春方にあった。綿貫氏の去就は明らかでないが、成氏の侵攻に際しては、おそらく与したがったと考えられる。いずれにしろ、この頃から衰退していくことと無関係とは考え難い。

綿貫地域に関係する武士として、ほかに小林氏がいる。小林氏は高山御厨(藤岡市)地頭であったが、観応３(1352)年「上野国綿貫保内 綿貫四郎次郎並同妻跡」を足利尊氏から与えられている。おそらく綿貫氏は、観応の擾乱(じょうらん)に関係して一時的に没落したものと推測されている。なお、小林氏は綿貫を所領として伝えており、永禄10(1567)年武田信玄に対して、所領として申請したが、中栗須(藤岡市)ほか100貫文を替え地として与えられ、領有は認められていない。また、地名として残る字小林との関係は不明である。武田氏領国時代、南方に隣接する岩鼻町には、「岩鼻之取出」(比定地不明)が置かれ、烏川方面への押さえとするが、破却が検討されている。

当遺跡の南東約600mには堀米屋敷〔49〕が知られている。ここに居住していた堀篭大学は、武田家臣高坂弾正

の三男で堀篭氏の養子となり、以後四代にわたり綿貫村の堀篭に居住と記している(「高崎近郷村々百姓由緒書」)。武田氏から本庄市内(埼玉県)で15貫文を与えられており、その後綿貫地内に土着したようである。

以上のとおり、当地域は綿貫氏をはじめとする武士勢力が深く関係した地域であったが、堀米屋敷を除けば、関係する城館遺構は知られていない。綿貫小林前遺跡調査の折、地域の情報をもとに編者が周辺を踏査した結果、字曲師の集落に環濠屋敷群が存在し、一部堀跡が残存する状況を確認した。範囲も広いが、やはり綿貫氏に関係する城館と考えるには、証左に欠けている。こうした状況下で、城館・屋敷遺構に関する発掘調査成果への期待度は高いと思われる。

当遺跡の西に隣接する綿貫原北遺跡〔２〕では、１～３区すべての調査区において、中世屋敷が発見されている。それらは、ルーズに意識し合いながら、間隔を開けて配置されている。当遺跡の屋敷とも、関係を模索すべき遺構である。区画溝により明確に囲まれた１区1号屋敷は、一辺30mを超える規模を有している。

東に隣接する綿貫伊勢遺跡〔３〕でも、１～３区に分割される形で中世屋敷１ヶ所が見つかっている。当遺跡から約85m離れた東端に位置するため、直接的な関係は見いだせないが、位置的に影響は想定される。１辺50mを超えて南方に広がり、３郭以上に分かれている。

井野川を挟んだ東岸の下滝高井前遺跡〔４〕でも、３区で中世屋敷１ヶ所と、区画遺構が見つかっている。中世屋敷は東西50m規模を有している。周辺には下斎田城〔56〕など良好に残る屋敷遺構が点在しており、これらと対比される遺構として重要なものである。足利成氏に関わる滝の陣への配慮も必要となる。

綿貫小林前遺跡〔９〕では、Ｐ東区、Ｐ北区にかけて二重の溝に囲まれた屋敷跡の一角が調査されている。外堀は東方調査区域外へ直線的に延びている。調査範囲では南北規模約22m以上であることが判明している。存続時期は出土遺物から14～15世紀代に位置づけられる。

井野川を挟んだ北岸の下滝天水遺跡〔10〕では、下滝館〔41〕の外堀に推定される溝２条が調査された。Ａ１区４・５溝であり、調査前は完全に埋没していたが、わずかな地形変化から堀跡に推定されていた。調査の結果、出土遺物はほとんど近世で、中世の遺物はわずかであった。現存する堀が水堀として機能している状況下では、発掘調査された溝も当然近世まで残存し使用されていたと判断される。館としての存続期間の問題は、課題として残されている。

以上の状況により、当地域は中世屋敷が集中して調査されていることがわかり、こうした成果を総括的にとらえる視点も必要となろう。

引用文献

峰岸純夫　2000『掃部寮領綿貫庄について』『新編高崎市史通史編２中世しおり』

7　近世

当遺跡は、近世において綿貫村に属している。当初は高崎藩領であったが、正徳元(1711)年から幕府領となった。南方約１kmには、日光例幣使街道が東西方向に走り、旅人の往来もあった。宿場は倉賀野宿と玉村宿があり、当地域は中間に位置するが、村域の南限を通過するため、影響はあまりないと見られる。当遺跡では、天明３(1783)年に降下した浅間Ａ軽石の除去に伴う復旧作業が、土層観察で確認された程度であり、目立った遺構はなかった。西側の綿貫原北遺跡〔２〕１区では、17世紀から19世紀にわたる生活に関係する土坑や溝が検出され、屋敷空間であったことが判明している。当遺跡も、そうした村落の一部であったと考えられる。

8　近代

当遺跡の南1.5km、現在の日本化薬株式会社高崎工場の敷地内に、明治13(1880)年陸軍の火薬製造所(当時の正式名称は東京砲兵工廠岩鼻火薬製造所〔129〕の建設がはじまった。その後、明治38(1905)年、大正７(1918)年、大正末年から昭和初年、昭和13(1938)年から14年、17(1942)年に敷地拡張が行われている。

この製造所の建設から度重なる敷地拡張によって、綿貫古墳群を構成する前方後円墳の岩鼻二子山古墳や円墳多数が壊されていった。出土遺物の一部は東京国立博物館に収蔵されている。

1945年まで存続した製造所は、現在の日本原子力研究開発機構・群馬の森・日本化薬の敷地を含む広大な面積があった。製造所跡は文化庁の近代化遺産総合調査や近代の遺跡調査(詳細調査)の対象となっている。

第４章　発掘調査の記録

第１節 遺跡の概要

１　遺跡の概要

（１）１区

全体では、竪穴住居14軒、竪穴状遺構１基、掘立柱建物27棟、土坑157基、井戸８基、火葬跡（土坑含む）７基、ピット352基、溝23条、集石遺構１基が検出される。遺構の年代は古墳時代（４世紀）から江戸時代にわたるが、時期を比定できない遺構も多い。このため、掲載は年代別ではなく、基本的に遺構別とした。ただし、中世については、調査区中央部にまとまりを持つ１号屋敷があり、周辺にも関連する遺構が見られるため、別に項目を立てることとした。

竪穴住居は調査区東端から約24ｍまでの範囲に14軒が集中する。古墳時代が８軒、飛鳥～奈良時代６軒である。なお、集落は当遺跡東端をほぼ西限として東方に展開し、綿貫伊勢遺跡に集中する。また、住居群と主軸方位が一致する９号溝は、出土量は少ないが同時期の遺物を含み、集落の西限となる溝と見なすことができる。

１号屋敷は、溝によって区画された屋敷であり、掘立柱建物、土坑、井戸ほかで構成される。土坑、井戸、火葬跡、溝などから中世遺物も出土しており、遺構の形態や方位などに共通性を認め、屋敷として一括した。なお、屋敷空間の外側にあるが、同時期の遺物が出土するものについては、周辺の遺構として取り上げた。したがって、中世遺物を伴わず、１号屋敷内に含まれない遺構に関しては、基本的に遺構別（２～５）で扱うこととした。

縄文時代の遺構は発見されなかったため、出土した遺物は遺構外遺物として掲載した。縄文時代前期後半２点、同中期後半２点である。

（２）２区

竪穴住居１軒、竪穴状遺構１基、土坑13基、井戸３基、ピット18基、墓１基、火葬跡３基、炭化物集中遺構２基、溝27条、道路１条、畠３か所が検出された。遺構の分布は散漫である。

竪穴住居、竪穴状遺構はともに古墳時代であり、調査区東端にあり、１区と同じ集落内に位置する。

土坑、井戸、火葬跡、墓で、時期が判明するものについては、すべて中世となる。分布状況は調査区東端にやや集中している。

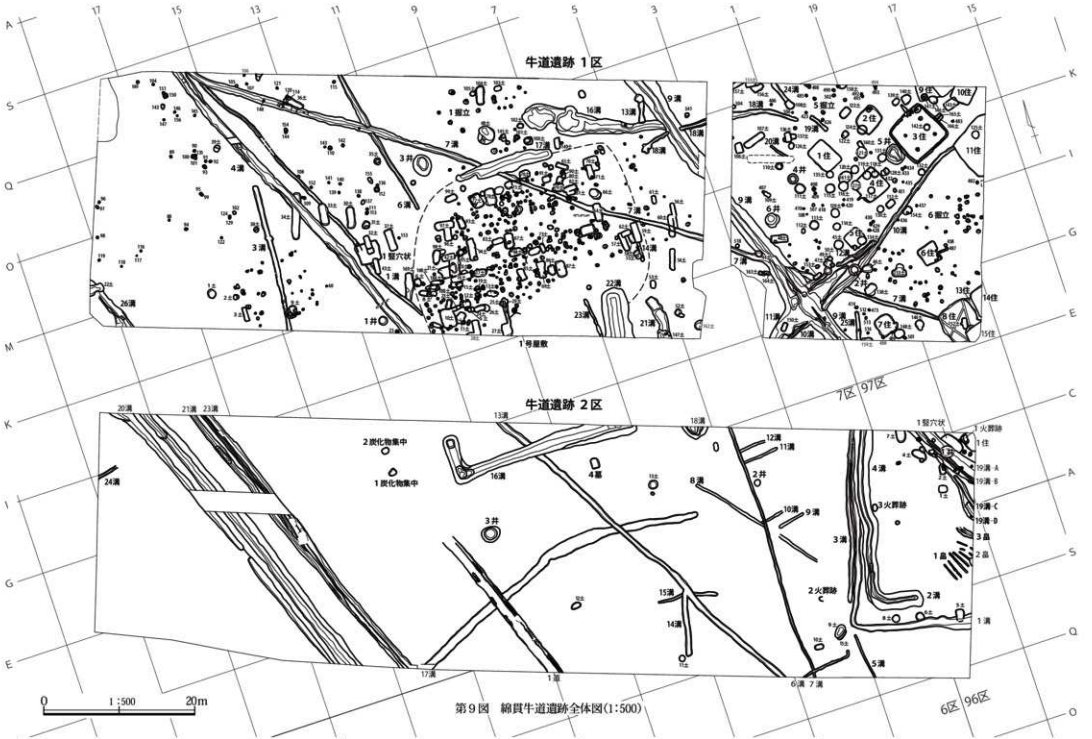
溝は古墳時代から江戸時代にわたる。特に２区16号溝は１区22号溝と同一で、１区１号屋敷の南辺から西辺を区画する溝である。また、形状は異なるが南側に並走する２区17号溝も中世の生活遺物をやや多く含み、屋敷周辺の遺構として注目される。なお、２区２・４号溝は中世の区画溝であり、１区１号屋敷とは別である。内部には建物やピットが少なく、火葬跡がやや見られ、１区にもその影響が認められる。２区20～23号溝は、１区26号溝、綿貫原北遺跡２区14号溝と同一である。２区22・23号溝は近世以降となるが、20・21号溝は天明３年よりかなり遡ると見られる。特に20号溝は幅が広く、東側に平らなテラス状の遺構が並走し、道路面を思わせる礫混土が被覆する。埋没土中に中世遺物がやや多く混入する状況からも、当遺跡や綿貫原北遺跡の中世屋敷群に介在する可能性がある。

縄文時代の遺構は発見されなかったため、出土した遺物は遺構外遺物として掲載した。縄文時代前期前半６点、同中期後半１点である。

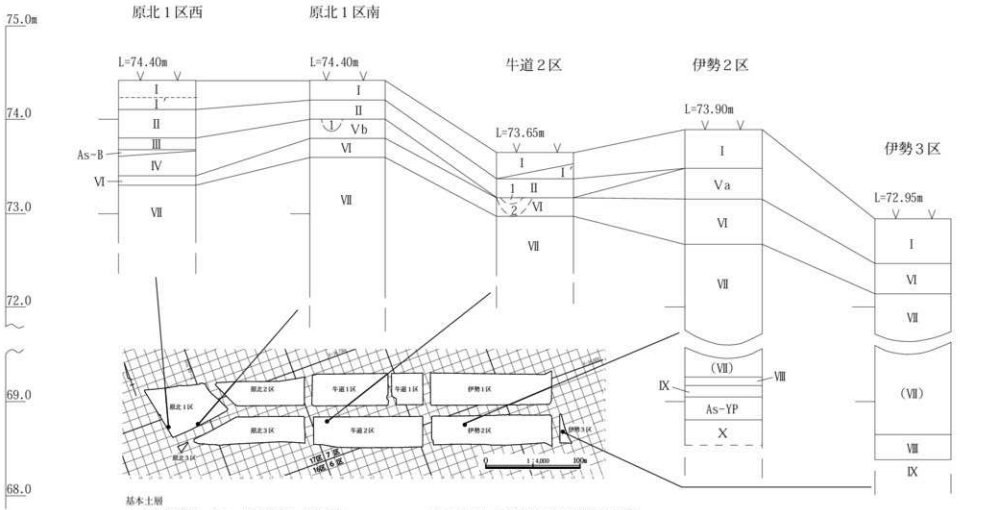
２　基本土層

東方から綿貫伊勢遺跡、当遺跡、綿貫原北遺跡は、東方を流れる井野川の旧河道上端部を起点に総延長2.2㎞を超える連続した遺跡である。これらの遺跡は全体として井野川低地帯に位置するが、井野川沿岸に広がる微高地を横断する状況であり、西端は粕川に向かう低湿な地形への変換点に位置する。したがって、煩雑となるが、３つの遺跡をあわせて、ここで扱う。

当遺跡の基本土層は、綿貫伊勢遺跡２区の状況が最も良く反映されており、これを基本とする。なお、綿貫牛道遺跡２区としたものは、同20号溝北壁を参考にしたもので、１・２区西端部分の局所的な状況であり注意を要



第9図　綿貫牛道遺跡全体図(1:500)



基本土層

Ⅰ　灰褐色砂質土　Ａｓ－Ａ少量に含む。現耕作土

Ⅰ'　灰褐色砂質土　Ａｓ－Ａ多量、ローム大ブロック多量に含む。は場整備造成盛土。

Ⅱ　灰褐色砂質土　Ａｓ－Ａ多量に含む。

1　Ａｓ－Ａ充填土(灰掻き溝)

2　暗褐色土　ややシルト質。水田耕作土の可能性。

Ⅲ　黒褐色～暗褐色砂質土　Ａｓ－Ｂを多量に含む。

Ａｓ－Ｂ

Ⅳ　灰褐色～黒褐色土　やや粘質。黄色粒・小礫少量に含む。

Ⅴａ 暗褐色土　白色軽石(ＦＰ軽石を含む)を含む。

Ⅴｂ 暗褐色～褐色土　ローム漸移層。黒褐色土をモザイク状に含む。

Ⅵ　明黄褐色ローム　汚れた感じ。

Ⅶ　にぶい黄橙～明黄橙色砂質土　井野川泥流堆積層。中小砂礫を多量に含む。よく締まる。鉄分凝集斑文目立つ。

Ⅷ　黒色土

Ⅸ　桃灰褐色砂

Ａｓ－ＹＰ

Ｘ　灰色砂

0　1:40　1m

第10図　基本土層

する。ちなみに、綿貫原北遺跡１区西は81号溝西壁を、同１区東は南壁と同３号井戸断面を、綿貫伊勢遺跡２区は北壁と中央深掘断面を、同３区は同１号井戸断面を参考に、基本土層を作成した。

遺跡周辺は全体として南東方向に緩やかに傾斜するため、基本土層中の各層位も南東方向に下降する傾向にある。Ⅰ層は表土であり、浅間Ａ軽石を少量含んでいる。遺跡全体として、ほ場整備による改変を受ける。Ⅰ層の厚さのばらつきは、この影響を受けており、Ⅰ′層である造成盛土を含んだ部分もある。Ⅱ層は元来遺跡全体に堆積すると思われるが、当遺跡東側から綿貫伊勢遺跡については、ほ場整備により除去されている。

浅間Ｂ軽石も遺跡全体に確認され、基本土層中に見られない調査区でも、遺構埋没土中に確認できる。純堆積は綿貫原北遺跡１区西で面的に確認できるが、厚さは数cm程度である。また、この部分に位置する１区84号溝断面では、赤褐色の火山灰層を確認することもできる。この部分は粕川へ向かって下降しており、以西では浅間Ｂ軽石直下の水田も想定される。上下に堆積する灰褐色～黒褐色土であるⅢ・Ⅳ層は、低湿な状況に伴うもので、この周辺に限定される。

綿貫原北遺跡１区東以東の微高地において、Ⅲ・Ⅳ層に相当するのがⅤ層である。漸移的にローム層となるⅤb層が西側に広がり、当遺跡から綿貫伊勢遺跡１・２区では比較的安定した暗褐色土を呈するⅤa層があり、FPを含む白色軽石が混じる。当遺跡の遺構確認面にあたる。

ここで問題となるのが、当遺跡２区として図示した部分である。造成盛土Ⅰ′層下位にⅡ層がやや厚くあり、切土は受けていない。ほ場整備施工以前は南北に帯状に続く低地であったらしい。Ⅱ層下面には天明３年に降下した軽石を天地返ししたと思われるＵ字形の浅間Ａ軽石集中部分（１層）が確認できる。なお、２区20号溝は幅の広い溝であり、１区26号溝及び綿貫原北遺跡２区14号溝と同一の溝である。結果としてこの範囲が帯状の低地として、後代まで地形に反映することとなる。Ⅱ層下位には水平に堆積する暗褐色土（２層）があり、水田耕作土の可能性が想定されている。一見小谷地状を呈するが、Ⅵ層以下は平坦である。

Ⅵ層は明黄褐色ロームであるが、Ⅶ層の影響もあり彩度に乏しい。Ⅶ層は砂礫を多く含んだ、にぶい黄橙色～明黄褐色砂質土で、井野川泥流堆積層である。遺跡全体に厚く堆積しており、綿貫伊勢遺跡２・３区の調査により、厚さ約3.5mが確認される。Ⅷ層は黒色土で低湿な状況が復元され、Ⅸ層砂層を挟んで、浅間板鼻黄色軽石が下位に堆積する。

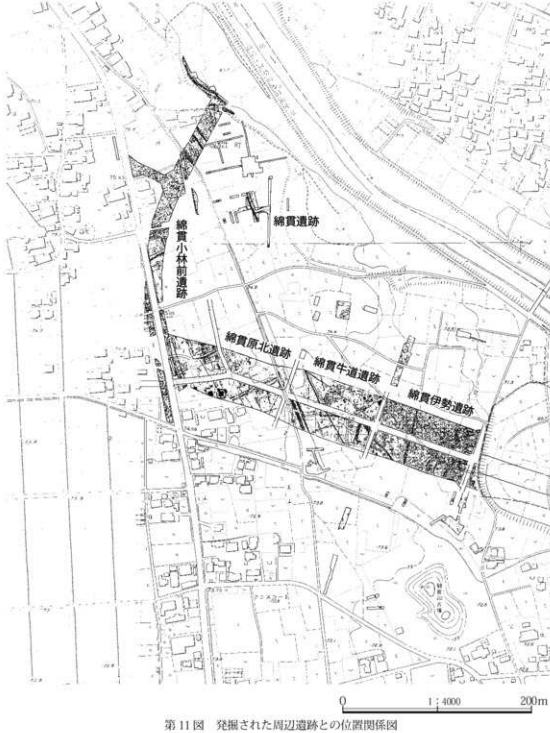
第２節　１区の遺構と遺物

１　竪穴住居

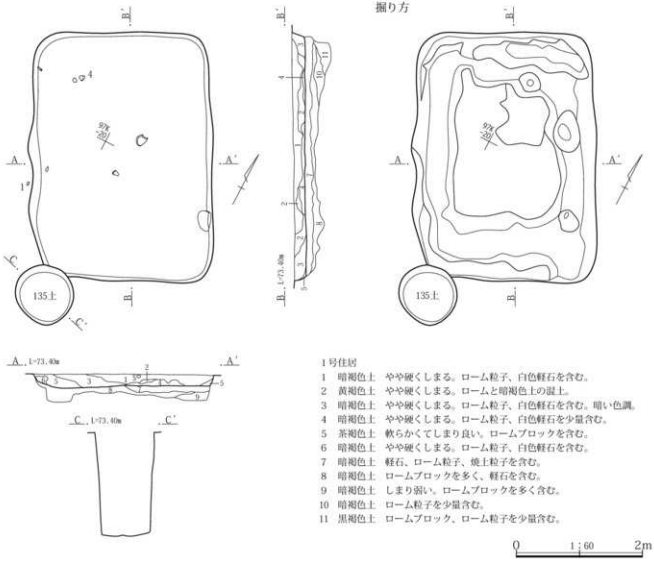
１区からは14軒の住居が検出されている。いずれも区の東側からの検出であり、綿貫伊勢遺跡１区・２区検出集落群の北西端に位置する遺構群となる。

個々の住居番号は調査区ごとに付けた番号をそのまま使用しているが、９号住居と12号住居は整理時に同一住居の可能性が高まったことから12号住居は欠番となっている。

その結果、古墳時代前期４世紀代の住居は１・２・９・11・13号の５軒、６世紀代の住居は５・６・10号の３軒、７世紀代の住居は３・４号の２軒、８世紀代の住居は７・８・14・15号の４軒となる。



第11図　発掘された周辺遺跡との位置関係図



第12図　１区１号住居、135号土坑

１号住居(第12・13図、ＰＬ．２、第２表)

位置　97Ｊ・Ｋ－19・20グリッド、２号住居の南西4.5ｍの所、検出された住居群の西端に位置している。南西端に135号土坑が接している。

形状　南北にやや長い隅丸長方形を呈する。

主軸方位　Ｎ－28°－Ｗ。

規模　面積10.01㎡、長辺(南北)3.95ｍ、短辺(東西)2.85ｍ、残存壁高13㎝～20㎝を測る。

床面　ほぼ平坦である。硬化面はあまり認められなかった。

炉　検出できなかった。床面に焼土の痕跡を認めることはできなかった。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱穴　明瞭な柱穴を検出することはできなかった。

周溝　なし。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～６層は住居覆土、７層～11層は掘り方充填土である。

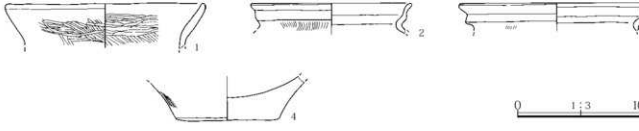
掘り方　全面に掘り下げているが、中央部を比較的残して四周を掘り下げる特徴がある。掘り方の深さは中央部で10㎝～15㎝、四隅で23㎝～40㎝を測る。

遺物　土器片の出土量は非常に少ない。Ｓ字状口縁台付甕の破片２点はいずれも覆土中からの出土である。

時期　極少量の遺物出土であること、また炉が伴わないことなどからも時期決定は難しいが、古墳時代前期４世紀の遺構と判断される。ただし住居として機能していたのかは不明である。

南西隅に接する135号土坑は、長径95cm・短径90cm・深さ160cmのほぼ円形を呈する。遺物の出土はなかった。

１号住居よりも新しい(第52図参照)。



第13図　１区１号住居出土遺物

第２表　１区１号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第13図	1	土師器 甕	口縁部片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は上半が横ナデ、下半はヘラ磨き。内面は口唇部が横ナデ、口縁部はヘラ磨き。	
第13図	2	土師器 台付甕	口縁部片	口 12.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、頸部はハケ目(１cmあたり７本)。	
第13図	3	土師器 台付甕	口縁部片	口 15.0	細砂粒/良好/黄橙	口縁部横ナデ、頸部はハケ目。	
第13図	4	土師器 甕	底部～胴部下位片	底 8.0	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙	底部と胴部は内外面とも器面磨滅のため不鮮明、一部ハケ目が残る。	

２号住居(第14・15図、ＰＬ.２・51、第３表)

位置　97Ｋ－18グリッド、１号住居の北東4.5mの所に位置している。西壁で124号土坑と重複している。124号土坑が新しい。

形状　東西にやや長い隅丸方形を呈する。

主軸方位　Ｎ－123°－Ｗ。

規模　面積7.01㎡、長辺(東西) 3.8m、短辺(南北) 2.8m、残存壁高５cm ～ 20cmを測る。

床面　ほぼ平坦であり、あまり硬化していない。

炉　明瞭な掘り込みは確認できなかったが、焼土の分布が床面中央西よりに長径45cm・短径35cmの範囲で検出された。炉になるものと思われる。

貯蔵穴　北東隅から検出された。長径74cm・短径49cm・深さ20cm ～ 28cmの楕円形を呈する。覆土は３層に分かれた。

柱穴　掘り方調査時にピット１基を検出した。Ｐ１は長径42cm・短径35cm・深さ30cmを測るが、柱穴になるかは不明である。

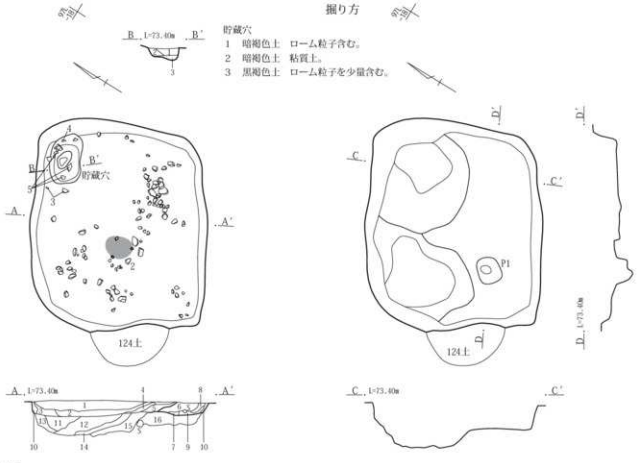
周溝　なし。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。６層～ 10層は住居覆土、16層は掘り方充填土である。１層～５層、11層～ 15層は別時期の掘り込みと思われる覆土の状態である。

掘り方　住居の北東部ほどが深く掘り込まれている。南半分の掘り方の深さは15cm ～ 20cmを測る。

遺物　土器の出土は少量で礫の出土がやや多い。第15図１～５は６世紀後半の遺物である。６・７は４世紀代のＳ字状口縁台付甕の破片である。住居セクションを見ると、１層～５層、11層～ 15層にかけて住居北東部に何らかの掘り込みがあったようである。１～５の遺物はその覆土に伴うものの可能性が高い。

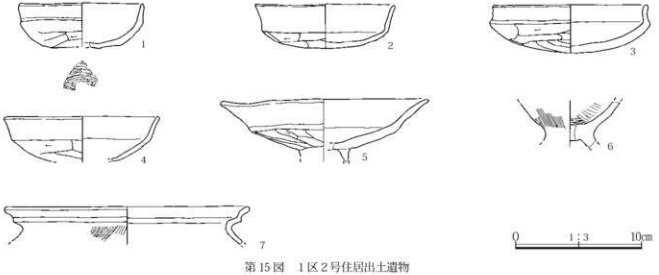
時期　古墳時代前期４世紀に比定される。６世紀後半に住居北東部において何らかの掘り込みが認められる。また重複している124号土坑は、長短ともに120cm・深さ10cmのほぼ円形を呈する。住居よりも新しい構築である。



２号住居
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石、焼土粒子を含む。
2　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ローム、白色軽石、焼土粒子を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
4　黄褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム主体の層。
5　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックをやや多く含む。
6　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石を含む。
7　黒褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を少量含む。
8　黄褐色土　４層とほぼ同一の層。
9　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを少量含む。
10　黄褐色土　軟らかい。壁の崩れ。
11　暗褐色土　ローム粒子を微量含む。
12　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック、白色粘土ブロックを含む。
13　褐色土　ローム粒子を多く含む。
14　褐色土　ロームブロック主体。
15　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック、白色粘土ブロックを含む。
16　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

0　1:60　2m

第14図　１区２号住居



第15図　１区２号住居出土遺物

第３表　１区２号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第15図 PL.51	1	土師器 杯	口縁部～底部片	口 9.4 高 3.6 底 6.4	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半は手持ちヘラ削り、底部は回転糸切りか。	
第15図 PL.51	2	土師器 杯	+8.7cm 3/4	口 10.7 高 3.5 稜 9.8	細砂粒/良好/明黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第15図 PL.51	3	土師器 杯	+3.9cm 1/3	口 12.0 高 3.8 稜 12.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第15図	4	土師器 杯	+29.0cm 口縁部～底部片	口 12.0 稜 10.8	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第15図 PL.51	5	土師器 高杯	+5.6～+18.5cm 杯身部2/3	口 16.2 稜 11.4	細砂粒/良好/橙	杯身部口縁部は横ナデ、稜下は手持ちヘラ削り。	
第15図	6	土師器 器台	受部下位～脚部上位	孔 0.8	細砂粒/良好/赤褐	受部はハケ目、脚部はヘラ磨きか。内面は受部がヘラ磨き。	
第15図	7	土師器 台付甕	口縁部片	口 19.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、頸部はハケ目。	

３号住居(第16～23図、ＰＬ．２～４・51・52、第４表)

位置　97Ｊ・Ｋ－16～18グリッド、４号住居の北東約４ｍの所に位置している。142号土坑に壊されている。

形状　隅丸方形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－25°－Ｗ。

規模　面積32.86㎡、長辺・短辺ともに6.1ｍ、残存壁高25cm～35cmを測る。

床面　ほぼ平坦である。

カマド　北壁中央のやや東よりに設置される。壁を掘り込み、燃焼部は床面に構築されている。長さ70cm、焚き口部幅54cm、袖を含めた幅は110cmで袖に土師器の甕が使用されている。燃焼部の中央にピット１基(長径33cm・短径23cm・深さ16cm)がある。支脚を据えたピットになるものと思われる。煙道は長さ120cm、幅23cm～45cmである。１層～15層はカマド覆土、16層・17層は住居覆土、18層～28層は掘り方充填土である。

貯蔵穴　北東隅から検出された。長径107cm・短径76cm・深さ10cm～25cmの楕円形を呈する。覆土は３層に分かれた。

柱穴　４基検出されている。Ｐ１は長径48cm・短径44cm・深さ55cm、Ｐ２長径40cm・短径37cm・深さ45cm、Ｐ３長径48cm・短径43cm・深さ22cm、Ｐ４長径35cm・短径32cm・深さ24cmである。Ｐ１－Ｐ２間の距離は2.36m、同じくＰ２－Ｐ３間は2.61m、Ｐ３－Ｐ４間は2.04m、Ｐ４－Ｐ１間は2.6mである。西壁に近接するＰ３とＰ４は比較的浅い。

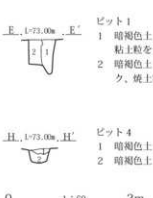
周溝　ほぼ全周している。幅10cm～20cm、深さ５cm～10cm。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～６層は住居覆土、７層～13層は掘り方充填土である。

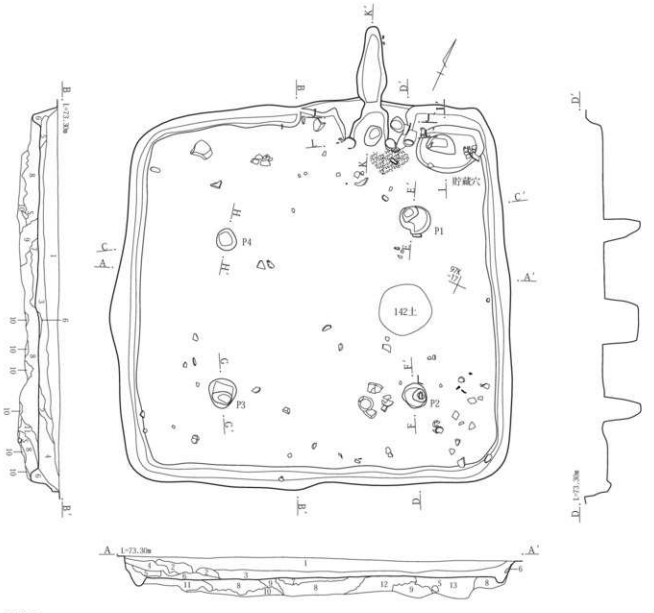
掘り方　住居中央部を比較的掘り窪めている。掘り方の深さは10cm～30cmを測る。

遺物　カマド袖に第19図16・17の土師器甕が使用されている。16は左袖に17は右袖使用である。カマド前面から貯蔵穴周辺では甕の出土が多く、床面南東隅からは土師器杯がややまとまって出土している。いずれも床面直上からの出土である。こも編み石５点も覆土中から出土している。

時期　出土遺物から７世紀前半に比定される。



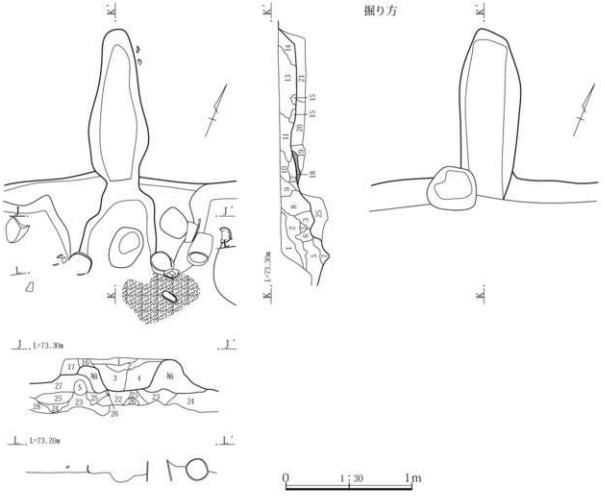
第16図　１区３号住居(１)



３号住居

1　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、ローム粒子を多量に、白色軽石を含む。
3　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性有り。ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子、白色軽石を少量含む。
4　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
5　黒褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ローム粒子,白色軽石を少量含む。
6　暗褐色土　軟らかくて粘性有り。ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
7　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
8　暗褐色土　ローム粒子、軽石、小礫、ロームブロックを多量に、焼土粒子を含む。
9　灰褐色粘質土　焼土粒子、小礫を含む。
10　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
11　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
12　暗褐色土　ロームブロックを多量に、小礫、軽石を含む。
13　暗褐色土　しまり弱い。ロームブロックを含む。

第17図　１区３号住居（２）

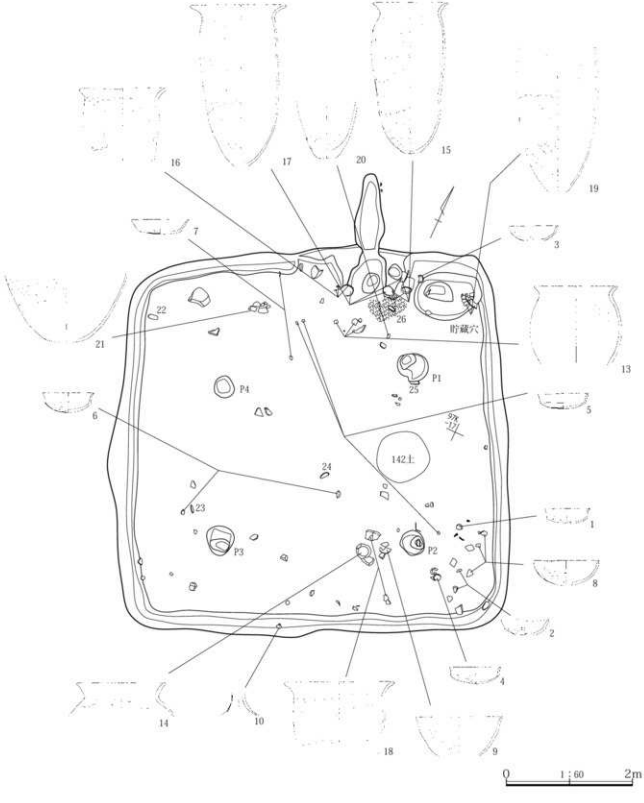


カマド

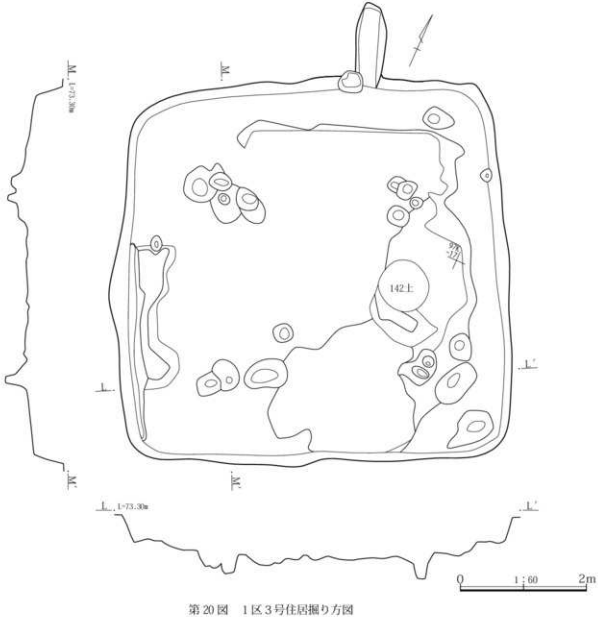
1　暗褐色土　軽石を少量含む。
2　暗褐色土　軽石、ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を微量含む。
4　暗褐色土　混合物はほとんどなし。
5　暗褐色土　軽石、焼土粒子を微量含む。
6　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物粒子を含む。
7　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物粒子、ローム粒子を含む。
8　暗褐色土　焼土ブロック、ローム粒子を多く含む。
9　暗褐色土　軽石を微量含む。
10　赤褐色土　焼土粒子を多く含む。
11　赤褐色土　13層よりも焼土を多く含む。
12　暗褐色土　炭化物粒子、焼土粒子を含む。
13　暗褐色土　軽石を微量含む。
14　暗褐色土　軽石、焼土粒子を多く含む。
15　暗褐色土　焼土ブロックを含む。
16　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
17　暗褐色土　軽石を含む。
18　焼土
19　暗褐色土　ローム粒子を含む。
20　暗褐色土　焼土粒子を多く含む。
21　暗褐色土　焼土粒子を含む。
22　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む。
23　暗褐色粘質土　軽石、焼土粒子を含む。
24　暗褐色土　ロームブロックを含む。
25　褐色土　軽石、ローム粒子を多く含む。
26　暗褐色土　灰を多く含む。
27　暗褐色土　灰、焼土粒子を少量含む。
28　暗褐色粘質土　ローム粒子を少量含む。

※袖は黄白色粘質土で構築。

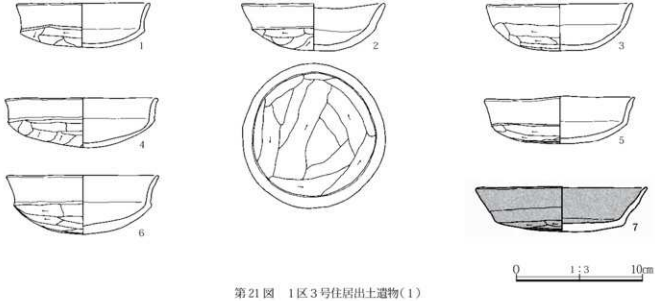
第18図　１区３号住居（３）、同カマド



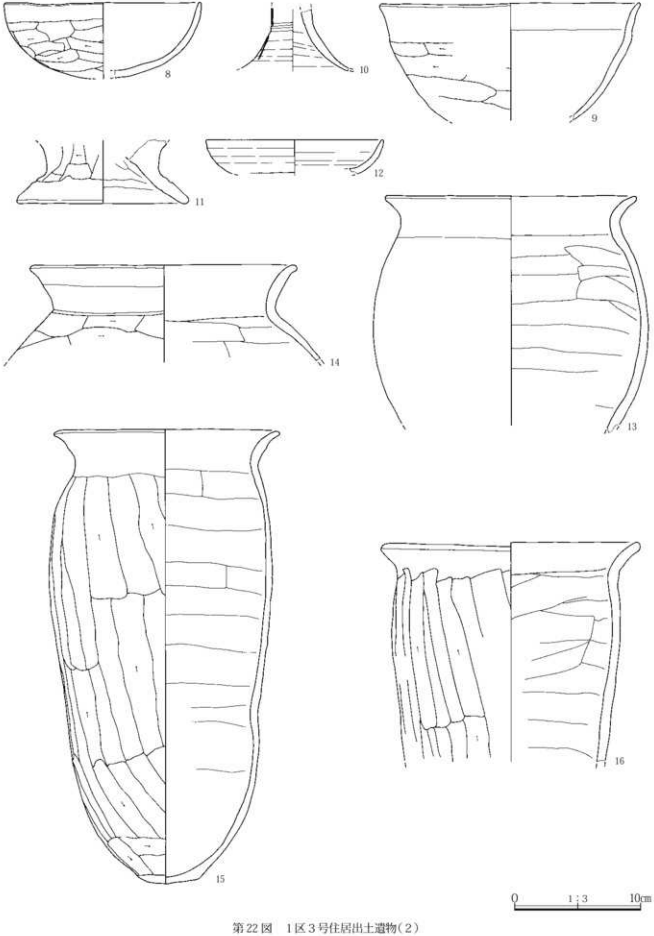
第19図　１区３号住居遺物分布図



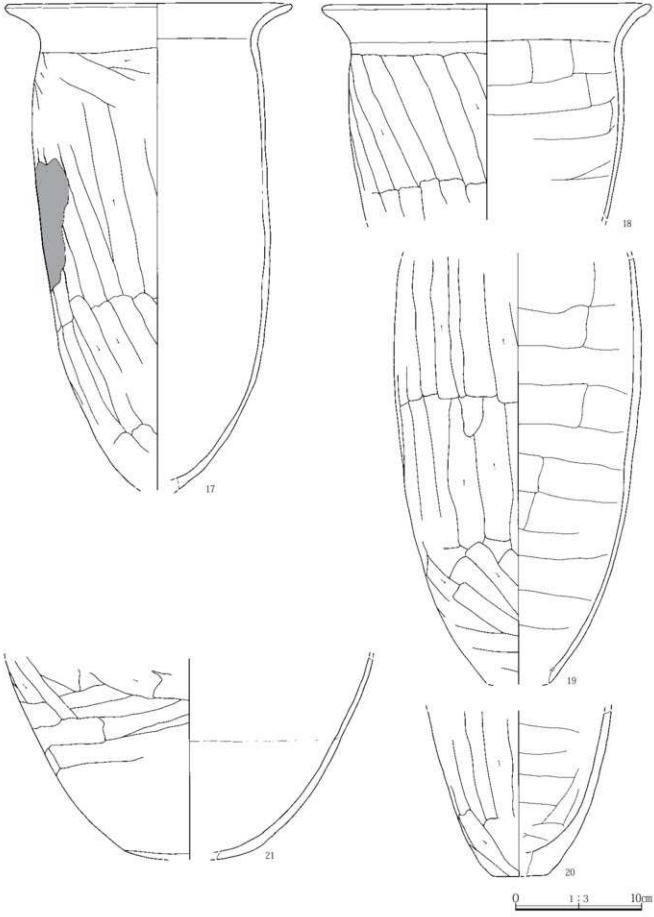
第 20 図　１区３号住居掘り方図



第 21 図　１区３号住居出土遺物（１）



第22図　１区３号住居出土遺物（２）



第23図　１区３号住居出土遺物（３）

第４表　１区３号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第21図 PL.51	1	土師器 杯	3/5	口 10.4　高 3.5 稜 9.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	2	土師器 杯	+1.8 ～ +4.6cm 完形	口 11.0　高 3.7 稜 9.7	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	3	土師器 杯	+2.3cm 3/4	口 11.3　高 3.6 稜 10.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	4	土師器 杯	+2.4cm 4/5	口 11.8　高 4.0 稜 11.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	5	土師器 杯	−1.3 ～ −1.6cm 底部～体部一部欠損	口 11.6　高 3.7 稜 10.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	6	土師器 杯	+1.9cm 口縁部～体部3/4欠損	口 11.8　高 4.6 稜 10.8	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第21図 PL.51	7	土師器 杯	+14.3cm 1/2	口 13.3　高 3.5 稜 10.0	細砂粒/良好/黄灰	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内外面とも漆塗り、一部剥落。
第22図 PL.51	8	土師器 鉢	+2.8 ～ +8.8cm 1/2	口 15.2	細砂粒・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第22図 PL.51	9	土師器 鉢	+0.9cm 口縁部～体部片	口 20.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第22図 PL.51	10	須恵器 高杯	+7.6cm 脚部片		細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。中位に2条の凹線が巡る。	左右一対に穿孔の線刻。
第22図	11	土師器 台付甕	脚部片	脚 13.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部上半はヘラ削り、下半は横ナデ。内面は上半がヘラナデ、下半は横ナデ。	
第22図	12	須恵器 高杯か	杯身部片	口 13.8	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第22図 PL.51	13	土師器 甕	−2.9 ～ +20.3cm 口縁部～胴部下位	口 19.4 胴 21.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第22図 PL.51	14	土師器 甕	−0.3cm 口縁部～胴部上位片	口 20.5	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第22図 PL.51	15	土師器 甕	−0.4 ～ −11.4cm 口縁部・胴部一部欠損	口 17.4　高 35.8 底 4.1	細砂粒・粗砂粒・片岩・角閃石/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第22図 PL.52	16	土師器 甕	+3.5 ～ +8.7cm 口縁部～胴部上半	口 19.8	細砂粒・粗砂粒・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第23図 PL.52	17	土師器 甕	+2.9cm 口縁部～胴部下位	口 22.0	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。	胴部の一部に粘土付着。
第23図 PL.52	18	土師器 甕	−1.4cm 口縁部～胴部上半	口 25.4	細砂粒多/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第23図 PL.52	19	土師器 甕	+0.6cm 胴部	胴 19.4	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第23図 PL.52	20	土師器 甕	+19.5cm 底部～胴部下位片	底 4.4	細砂粒・粗砂粒/良好/褐	底部と胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第23図 PL.52	21	土師器 甕	+3.8cm 底部～胴部下半	底 10.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい赤褐	底部から胴部はヘラ削り、底部と胴部下位は器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	

こも編石

NO.	石材	長	幅	重さ(g)
22	黒色片岩+2.4cm	16.7	7.4	764.6
23	黒色片岩	12.4	2.9	112.5
24	砂岩	16.9	5.3	517.4
25	雲母石英片岩	14.6	6.4	637.6
26	粗粒輝石安山岩	14.2	6.9	592.3

４号住居(第24 ～ 26図、ＰＬ．４・53、第５表)

位置　97Ｉ・Ｊ－18・19グリッド、３号住居の南西約４ｍの所に位置している。127号土坑により一部壊されている。覆土中に117 ～ 119号土坑が構築されている。

形状　方形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－116°－Ｗ。

規模　面積12.06㎡、一辺3.7ｍ、残存壁高12cm ～ 25cmを測る。西壁カマド面にやや段差がある。

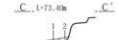
床面　ほぼ平坦である。硬化面はあまり認められなかった。中央部に焼土の堆積が認められた。

カマド　西壁の中央やや南よりに設置される。燃焼部は西壁下から床面にかけて構築され、長さ84cm、焚き口部の幅46cm、煙道は長さ70cm、幅30cmである。１層～ 11層はカマド覆土、12層～ 18層は掘り方充填土である。

貯蔵穴　床面の南西隅から検出された。長径45cm・短径40cm・深さ20cmの楕円形を呈する。覆土は４層に分かれた。第26図２の土師器杯が出土している。

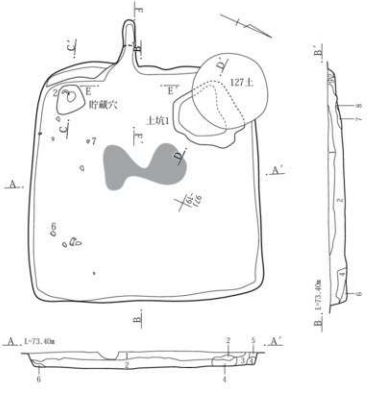
柱穴　検出できなかった。

周溝　検出できなかった。



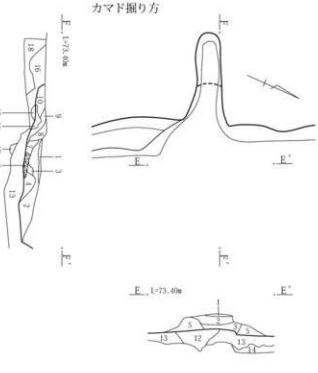
貯蔵穴
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を多く含む。

住居内土坑１
1　暗褐色土　小礫、ロームブロックを含む。
2　褐色土　ロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
5　暗褐色粘質土　粘土ブロックを含む。



４号住居
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子を多量に、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、ローム粒子、白色軽石を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
4　黒褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石、焼土粒子を少量含む。
5　黄褐色土　やや硬い。ローム主体に暗褐色土を含む。
6　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロック、白色軽石を含む。
7　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロック、白色軽石、焼土粒子を含む。
8　赤褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土主体に暗褐色土を含む。
9　茶褐色土　やや硬くしまる。焼土ブロック、ロームブロック、白色軽石を含む。

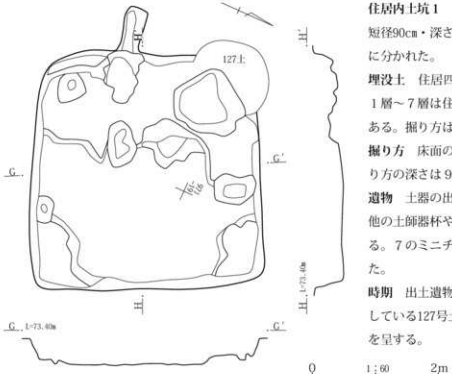
0　1:60　2m



カマド
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子を含む。
2　黄褐色土　軟らかくしまり良い。粘性有り。ロームブロック、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
3　褐色土　軟らかい。ロームブロックを多量に含む。
4　赤褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土を多量に炭化物粒子を含む。
5　暗褐色土　やや硬くしまる。焼土粒子、白色軽石を含む。
6　灰
7　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む。
8　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
9　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む。7層より焼土粒子がより多い。
10　黒褐色土　焼土粒子を多く含む。
11　暗褐色土　ローム粒子を微量含む。
12　暗褐色土　軽石、焼土粒子を含む。
13　暗褐色土　ローム粒子を含む。
14　褐色土　ロームを多く含む。
15　暗褐色土　軽石、焼土粒子を含む。
16　暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子、ロームブロックを含む。
17　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
18　暗褐色土　ローム粒子を含む。

0　1:30　1m

第24図　１区４号住居



第25図　１区４号住居掘り方図

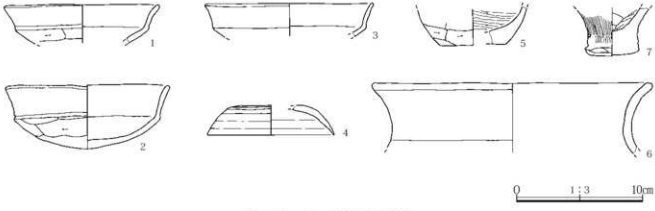
住居内土坑１　北西隅から検出された。長径102cm・短径90cm・深さ20cmの不正形を呈する。覆土は５層に分かれた。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～７層は住居覆土、８層・９層はカマド覆土である。掘り方は暗褐色土で充填されている。

掘り方　床面の東半分程をやや掘り下げている。掘り方の深さは９cm ～ 23cmを測る。

遺物　土器の出土は少ない。第26図２は貯蔵穴から、他の土師器杯や甕、須恵器蓋は覆土からの出土である。７のミニチュア土器は床直上からの出土であった。

時期　出土遺物から７世紀前半に比定される。重複している127号土坑は、直径120cm・深さ13cmの円形を呈する。



第26図　１区４号住居出土遺物

第５表　１区４号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第26図	1	土師器 杯	口縁部～体部片	口 12.0 稜 10.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第26図 PL.53	2	土師器 杯	+7.4cm 2/5	口 12.8　高 5.0 稜 11.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第26図	3	土師器 杯	口縁部～体部片	口 13.0 稜 12.2	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第26図	4	須恵器 杯蓋	口縁部～天井部片	口 10.0	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。	
第26図	5	土師器 鉢	底部～体部片	底 5.1	細砂粒/良好/明黄褐	底部から体部は手持ちヘラ削り。内面は横位のヘラ磨き。	
第26図	6	土師器 甕	+14.1cm 口縁部～頸部片	口 21.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。	
第26図 PL.53	7	土師器 ミニチュア	+5.8cm 底部～体部	底 4.1	細砂粒/良好/橙	底部はナデ、体部はかすかにハケ目が残る。内面はナデ。	

５号住居（第27～29図、ＰＬ．５・53、第６表）

位置　97Ｈ－19・20グリッド、４号住居の南西3.5ｍの所に位置している。134号土坑により壊されている。

形状　隅丸方形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－166°－Ｗ。

規模　面積4.87㎡、一辺2.4ｍ、残存壁高16㎝～20㎝を測る。

床面　ほぼ平坦である。

カマド　南西隅に設置される。燃焼部は床面を掘り込んで構築されており、長さ65㎝・焚き口部幅35㎝である。燃焼部中央に支脚の礫が残されていた。１層～６層はカマド覆土、７層～10層は掘り方充填土になる。

貯蔵穴　134号土坑下の東南隅から検出されたピットが貯蔵穴に該当するものと思われる。長径45㎝・短径30㎝・深さ35㎝の楕円形を呈する。覆土は２層に分かれた。

柱穴　検出できなかった。

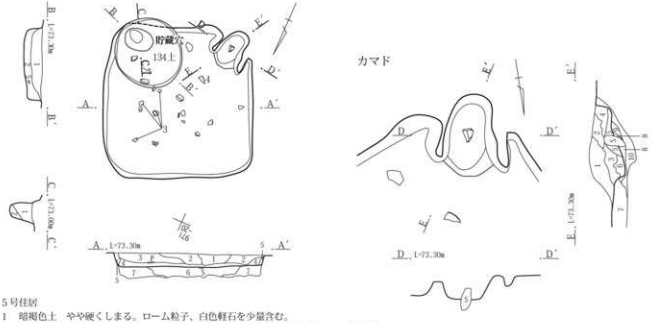
周溝　検出できなかった。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～５層は住居覆土、６層・７層は掘り方充填土である。

掘り方　全体的に15㎝ほど掘り下げている。

遺物　土器の出土量は少ない。第29図２の土師器杯はカマド覆土から、３と５の土師器甕は同一個体と思われる。いずれも覆土中からの出土であった。

時期　出土遺物から６世紀後半に比定される。重複している134号土坑は、長径112㎝・短径105㎝・深さ21㎝～29㎝のほぼ円形を呈する。



５号住居
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石、焼土粒子を含む。
4　暗褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ローム粒子、白色軽石を含む。
5　黄褐色土　軟らかくて粘性有り。ローム主体の層。
6　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多く含む。
7　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。

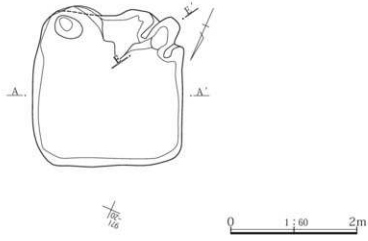
134号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、浅間Ｂ軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。サラサラしている。ロームブロックを少量、浅間Ｂ軽石、白色軽石を含む。

５号住居内ピット１（貯蔵穴）
1　暗褐色土　軽石、焼土粒子、ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。

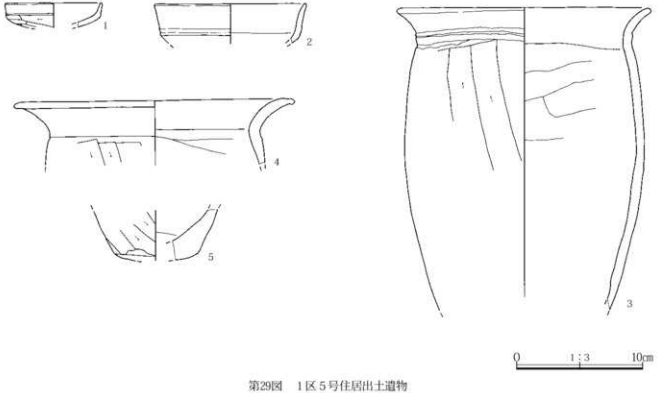
カマド
1　暗褐色土　軽石少量、ローム粒子を微量含む。
2　褐色土主　ローム粒子、ロームブロック主体。
3　暗褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、炭化物粒子を含む。
5　暗褐色土　ローム粒子を微量含む。
6　暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子、炭化物粒子を含む。
7　暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子、軽石を含む。
8　暗褐色土　焼土粒子を少量含む。
9　暗褐色土　炭化物粒子を少量含む。
10　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子を少量含む。

0　1:60　2m　　0　1:30　1m

第27図　１区５号住居



第28図　１区５号住居掘り方図



第29図　１区５号住居出土遺物

第６表　１区５号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第29図	1	土師器 杯	口縁部～底部片	口 7.4 稜 7.4	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第29図	2	土師器 杯	口縁部～体部片	口 11.8 稜 11.0	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第29図 PL.53	3	土師器 甕	+11.7 ～ 14.0cm 口縁部～胴部中位片	口 19.6 胴 18.8	細砂粒・粗砂粒・片岩・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第29図	4	土師器 甕	+3.6cm 口縁部～胴部上位片	口 21.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第29図	5	土師器 甕	底部～胴部下位片	底 6.6	細砂粒・粗砂粒長石/良好/明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

６号住居(第30～32図、ＰＬ．５・53、第７表)

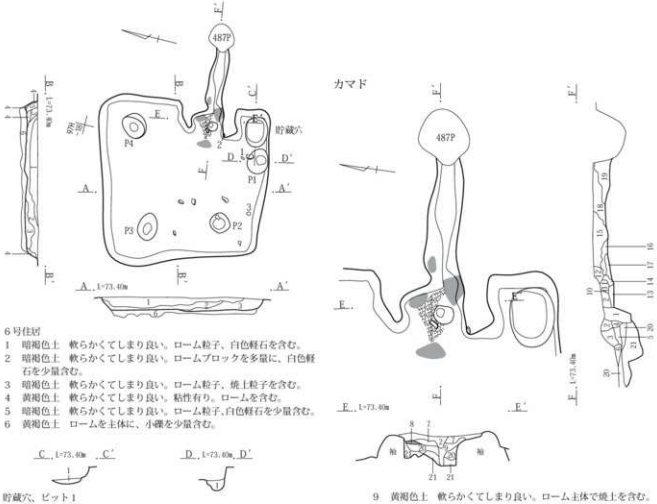
位置　97Ｇ－17・18グリッド、5号住居の南東約７ｍの所に位置している。487Ｐによってカマド煙道の一部が壊されている。

形状　方形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－83°－Ｅ。

規模　面積5.32㎡、長辺(南北)2.5ｍ～2.7ｍ、短辺(東西)2.3ｍ～2.7ｍ、残存壁高15㎝～20㎝を測る。

床面　ほぼ平坦である。全体的に硬化面はあまり認められなかった。

カマド　東壁の中央やや南よりに設置される。燃焼部は床面を掘り込んで造られており、煙道部は東に細長く突き出している。燃焼部中央にピット状の掘り込みがあり、支脚が備え付けられていた跡の可能性がある。セクションから判断するとカマド覆土１層がピット覆土になり、支脚の抜き取り痕跡と判断することも可能であろう。２層～19層はカマド覆土、20層・21層は掘り方充填土になる。燃焼部の長さ50㎝・幅40㎝、袖を含めた幅は100㎝、煙道の長さ100㎝以上、幅20㎝～26㎝を測る。

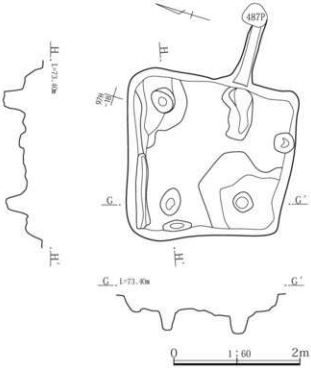


６号住居
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを多量に、白色軽石を少量含む。
3　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、焼土粒子を含む。
4　黄褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性有り。ロームを含む。
5　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子,白色軽石を少量含む。
6　黄褐色土　ロームを主体に、小礫を少量含む。

貯蔵穴、ピット１
1　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子を含む。

カマド
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。焼土ブロックを含む。
3　黄褐色土　やや硬くしまる。ロームを主体に、焼土ブロック、白色軽石を含む。
4　暗褐色土　軟らかい。ローム粒子、白色軽石を含む。
5　赤褐色土　軟らかい。焼土とロームの混土。
6　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土ブロック、炭化物粒子を含む。
7　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームを多量に焼土粒子を少量含む。
8　焼土
9　黄褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム主体で焼土を含む。
10　暗褐色土　焼土粒子を含む。
11　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。
12　褐色土　焼土ブロックを多く含む。
13　褐色土　灰を含む。焼土ブロック多い。
14　暗褐色土　11層に近いが焼土粒子含まず。
15　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多く含む。
16　暗褐色土　焼土粒子を少量含む。
17　褐色土　ロームブロックを多く含む。
18　暗褐色土　焼土粒子を少量含む。
19　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
20　暗褐色土　焼土粒子、灰、炭化物粒子を含む。
21　暗褐色土　ローム主体の層。
※袖は黄白色粘質土ブロック主体の層で構築。

第30図　１区６号住居



第31図　１区６号住居掘り方図

貯蔵穴　南東隅に位置する。長径48cm・短径36cm・深さ10cmの楕円形を呈する。覆土は１層である。

柱穴　ピット４基が検出された。柱穴になるものと思われるが、Ｐ１は不規則な位置にある。Ｐ１は長径40cm・短径33cm・深さ17cm、Ｐ２は長径32cm・短径28cm・深さ45cm、Ｐ３は長径40cm・短径30cm・深さ35cm、Ｐ４は長径40cm・短径34cm・深さ45cmである。Ｐ１－Ｐ２間の距離80cm、同じくＰ２－Ｐ３間83cm、Ｐ３－Ｐ４間120cm、Ｐ４－Ｐ１間距離155cmを測る。

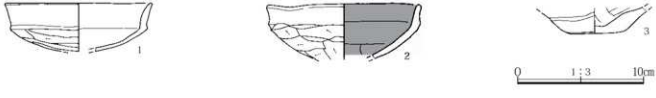
周溝　検出できなかった。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～５層は住居の覆土、６層は掘り方充填土である。

掘り方　ほぼ全面的に掘り下げるが、北東隅と南西隅がやや深い。掘り方の深さは４～12cmを測る。

遺物　土器の出土は少なかった。第32図２はカマドから、１と３は住居覆土中からの出土である。

時期　出土遺物から７世紀前半に比定される。



第32図　１区６号住居出土遺物

第７表　１区６号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第32図 PL.53	1	土師器 杯	+16.5cm 1/4	口 11.6 稜 10.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第32図 PL.53	2	土師器 杯	+5.6cm 1/4	口 11.8 稜 11.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
第32図	3	土師器 甕	+2.8cm 底部片	底 4.4	細砂粒/良好/にぶい黄褐	底部と側部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	

７号住居(第33・34図、Ｐ L.５・53、第８表)

位置　97Ｅ－19、Ｆ－19・20グリッド、６号住居の南西８ｍの所に位置している。南壁にピット２基(488P・489P)がある。

形状　隅丸方形を呈する。　**主軸方位**　Ｎ－73°－Ｅ。

規模　面積4.9㎡、長辺(南北)2.6ｍ、短辺(東西)2.4ｍ、残存壁高15㎝～25㎝を測る。

床面　ほぼ平坦である。硬化面は認められなかった。

カマド　東壁の南端部に設置される。壁面を若干掘り込んで造られ、袖石が残存している。全長110㎝・燃焼部の幅43㎝で、カマド前面に焼土と灰の分布が認められた。１層～６層はカマド覆土(３層はカマド構築材)、７層～13層は掘り方充填土になる。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱穴　掘り方調査時に床面中央やや西よりからピット１基が検出された。規模は長径40㎝・短径33㎝・深さ50㎝である。

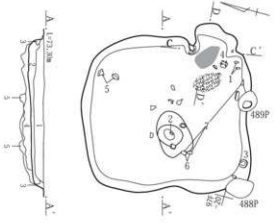
周溝　検出できなかった。

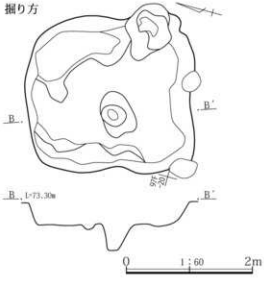
埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。１層～３層は住居覆土、４層・５層は掘り方充填土である。

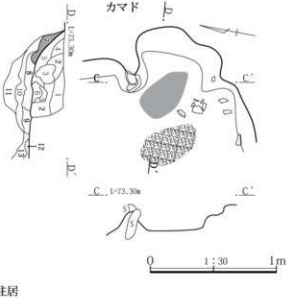
掘り方　ほぼ全面的に掘り下げている。深いところで18㎝を測る。

遺物　土器の出土量は少ない。第34図１と４の土師器杯はカマド内や周辺から床直上の出土である。３の杯は壁際からの出土であった。

時期　出土遺物から８世紀第２四半期に比定される。







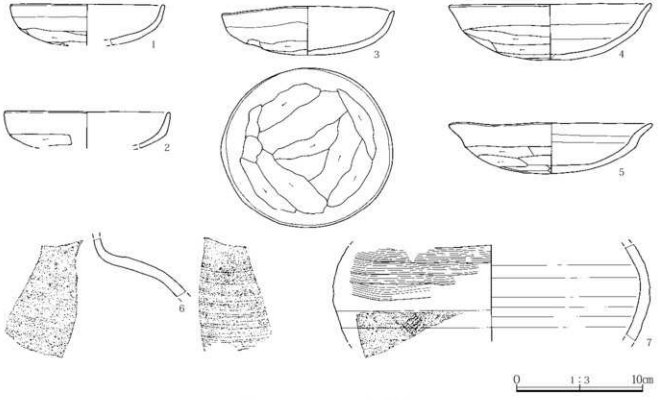
７号住居

1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石、炭化物粒子を少量含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石を含む。
3　黄褐色土　軟らかくて粘性有り。壁の崩れ。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを少量含む。
5　褐色土　ローム主体の層。

カマド

1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。炭化物、白色軽石を少量含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土粒子、白色軽石を含む。
3　灰白色土　やや硬くしまる。カマド構築材。
4　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土粒子、白色軽石を少量含む。
5　赤褐色土　軟らかくてしまり良い。焼土ブロックを多量に含む。
6　灰白色土　軟らかくて粘性有り。焼土ブロック、灰白色土ブロックを含む。
7　焼土
8　暗褐色土　灰層を多く含む。
9　暗褐色土　焼土粒子を含む。
10　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む。
11　暗褐色土　ローム粒子、小礫を含む。
12　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
13　褐色土　ローム主体の層。

第33図　１区７号住居



第34図　１区７号住居出土遺物

第８表　１区７号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第34図 PL.53	1	土師器 杯	-0.6～+0.6cm 1/4	口 12.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第34図	2	土師器 杯	+4.1cm 口縁部～体部片	口 12.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
第34図 PL.53	3	土師器 杯	+5.4cm 口縁部僅かに欠損	口 13.4　高 3.8	細砂粒・粗砂粒・角閃・/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第34図 PL.53	4	土師器 杯	+2.5cm 1/2	口 15.8　高 4.4 稜 14.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第34図 PL.53	5	土師器 杯	-0.6～+2.6cm 3/4	口 15.6　高 4.0 稜 13.6	細砂粒・軽石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第34図	6	須恵器 甕	+18.0cm 頸部～胴部上位片		細砂粒・長石/還元褐/灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部にカキ目。	
第34図	7	須恵器 甕	+5.1～+18.0cm 胴部片	胴 13.0	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部上半にカキ目。	

８号住居(第35～39図、ＰＬ．６・53・54、第９表)

位置　97Ｅ・Ｆ－17・18グリッド、７号住居の東5.5mの所に位置している。13号・15号住居と重複している。13号住居を壊し、15号住居に壊されている。

形状　南北にやや長い隅丸方形を呈するものと思われる。　**主軸方位**　Ｎ－73°－Ｅ。

規模　現状(調査区内)での面積21.16㎡、長辺(南北)5.8m、短辺(東西)4.3m～4.6m、残存壁高25cm～45cmを測る。

床面　ほぼ平坦である。全体的に硬化面が認められる。

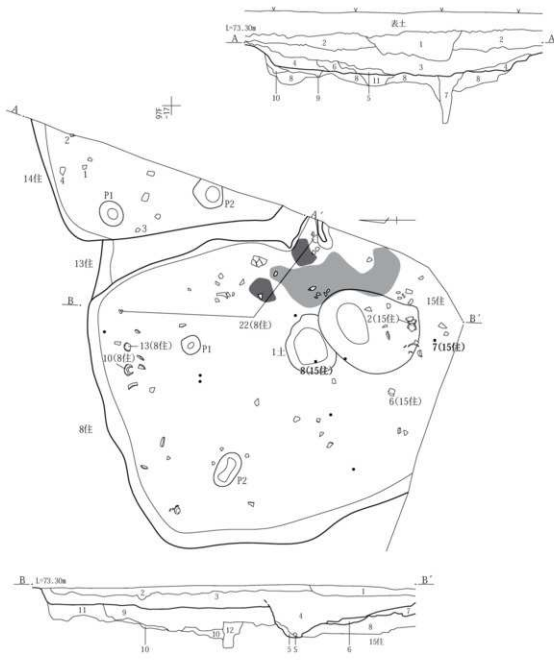
カマド　東壁の南よりに設置される。燃焼部は床面を掘り込んで造られている。全長75cm・燃焼部幅40cm、袖を含めた幅は80cmを測る。

貯蔵穴　検出できなかった。15号住居と重複している部分にあったものと思われる。

柱穴　Ｐ１とＰ２が主柱穴になるものと考えられる。Ｐ１は長径30cm・短径28cm・深さ25cm、Ｐ２は長径59cm・短径34cm・深さ30cmである。Ｐ１－Ｐ２間の距離は170cmを測る。

周溝　検出できなかった。

住居内土坑１　カマドの西から検出された。長径94cm・短径74cm・深さ22cm～42cmの楕円形に近い形状である。遺物の出土がやや多い。出土遺物から判断すると、この土坑は13号住居の土坑になるものと思われる。

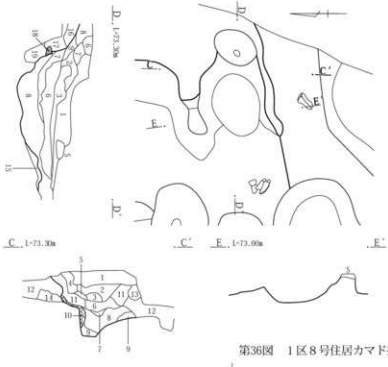


8・15号住居
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子,白色軽石,浅間Ｂ軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
4　暗褐色土　軟らかくてしまり有り。粘性有り。ローム粒子,焼土粒子,炭化物を含む。
5　暗褐色土　灰色粘土を含む。
6　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物ブロック、灰を多く含む。
7　暗褐色土　粘性弱い。ローム粒子を含む。
8　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
9　暗褐色土　ロームブロック、軽石を含む。
10　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
11　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
12　暗褐色土　粘性やや弱い。ローム粒子を含む。

14号住居
1　暗褐色土　小礫を多く含む。
2　暗褐色土　軽石、小礫を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、軽石を少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子を多く、ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　ローム粒子を含む。
6　暗褐色土　粘性強い。ロームブロックを多く含む。
7　暗褐色土　粘性やや弱い。ローム粒子を微量含む。(ピットフク上)
8　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を多く、炭化物粒子を少量含む。
9　暗褐色土　粘性強い。
10　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
11　暗褐色土　ロームブロック、炭化物粒子、灰を含む。

0　1:60　2m

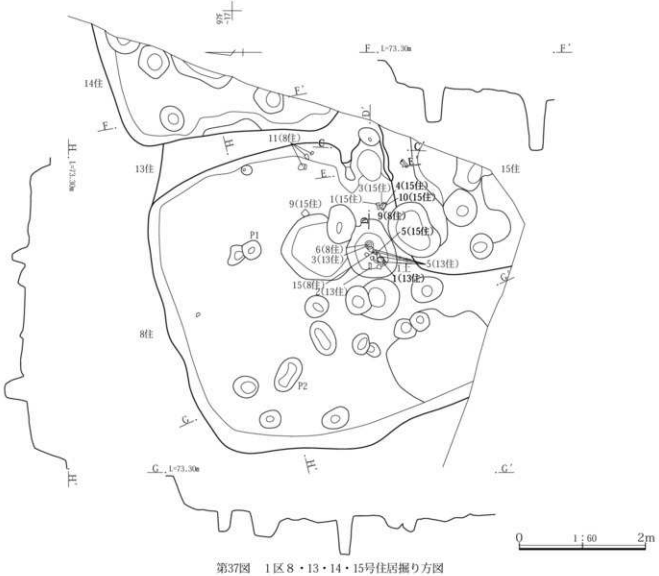
第35図　１区８・13・14・15号住居



カマド
1　暗褐色土　焼土粒子を含む。
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を含む。
3　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む。
4　暗褐色土　焼土ブロックを含む。
5　暗褐色土　焼土粒子を含む。灰がみられる。
6　赤褐色土　焼土ブロック。
7　暗褐色土　焼土粒子を多く含む。
8　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
10　灰　焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
11　暗褐色土　粘性強い。焼土ブロックを多く含む。
12　暗褐色土　粘性強い。ローム粒子、軽石を含む。
13　暗褐色土　粘性強い。焼土粒子を少量含む。
14　暗褐色土　粘性強い。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
15　暗褐色土　焼土ブロック、ローム粒子、炭化物粒子、灰を含む。
16　暗褐色土　しまり弱い。
17　暗褐色土　しまり弱い。ローム粒子多く含む。
18　焼土
19　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子を少量含む。

0　1:30　1m

第36図　１区８号住居カマド掘り方



第37図　１区８・13・14・15号住居掘り方図

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。２層・３層は住居の覆土、９層～12層は掘り方充填土である。６層～８層は15号住居の覆土になる。４層・５層は８号住居の埋没過程で自然の営力によって掘り窪められたものと思われる。

掘り方　全面的に掘り下げられ凹凸がある。深いところで47cmを測る。

遺物　３軒の住居の重複と１軒の住居が近接していたために、遺物取り上げ段階で一部混乱があった。土器はカマド周辺や北壁寄りから出土している。第38図１～10の土師器杯、17～20の須恵器蓋や杯も覆土からの出土である。25の円筒埴輪の破片、26の鎌も覆土からである。

時期　出土遺物から８世紀第２四半期に比定される。

13号住居(第35・37・40図、ＰＬ.６・54、第10表)

位置　97Ｅ・Ｆ－17グリッド、８号・14号住居と重複し壊されている。

形状　重複が激しいのと路線外に延びているために全容は不明である。　**主軸方位**　不明。

規模　現状での長辺(南北)3.3m、短辺(東西)0.5m、残存壁高16cm～21cmを測る。

床面　ほぼ平坦である。硬化面は認められなかった。

カマド　検出できなかった。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱穴　検出できなかった。

住居内土坑１　８号住居の掘り方調査時に検出された。長径94cm・短径74cm・深さ22cm～42cmの楕円形に近い形状である。遺物の出土がやや多い。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。

掘り方　全面掘り下げているが余り凹凸は認められなかった。

遺物　住居内土坑１から第40図１～３・５が出土している。４のＳ字状口縁台付甕は８号住居掘り方調査時に出土している。

時期　出土遺物から古墳時代前期４世紀に比定される。

14号住居(第35・37・41図、ＰＬ.６・８・54、第11表)

位置　97Ｅ・Ｆ－17 グリッド、13号住居と重複し、８号住居と接している。13号住居を壊している。

形状　現有道路下に延びているために不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。　**主軸方位**　不明。

規模　現状での面積3.53㎡、長辺(南北)3.3m、短辺(東西)２m、残存壁高15cm～30cmを測る。

床面　やや凹凸が認められる。

カマド　検出できなかった。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱穴　西壁際から２個のピットが検出された。Ｐ１は長径42cm・短径35cm・深さ50cm、Ｐ２は長径50cm・短径37cm以上・深さ87cmを測る。いずれも深い。

周溝　検出できなかった。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。３層～６層は住居覆土、８層～11層は掘り方充填土である。７層はＰ２覆土になる。

掘り方　全面的に掘り下げて凹凸がある。掘り方の深さは10cm～30cmを測る。

遺物　土器の出土量は少ない。第41図１～４の土師器や須恵器はいずれも覆土中からの出土である。

時期　出土遺物から８世紀第１四半期に比定される。

15号住居(第35・37・42図、ＰＬ.６・54・55、第12表)

位置　97Ｅ－17グリッド、８号・13号住居と重複し、14号住居と接している。

形状　現有道路下に延びているために全容は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。　**主軸方位**　不明。

規模　現状での長辺(東西)2.4m、短辺(南北)1.85m、残存壁高は36cmを測る。

床面　やや凹凸が認められる。

カマド　検出できなかった。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱穴　明瞭な柱穴は検出できなかった。

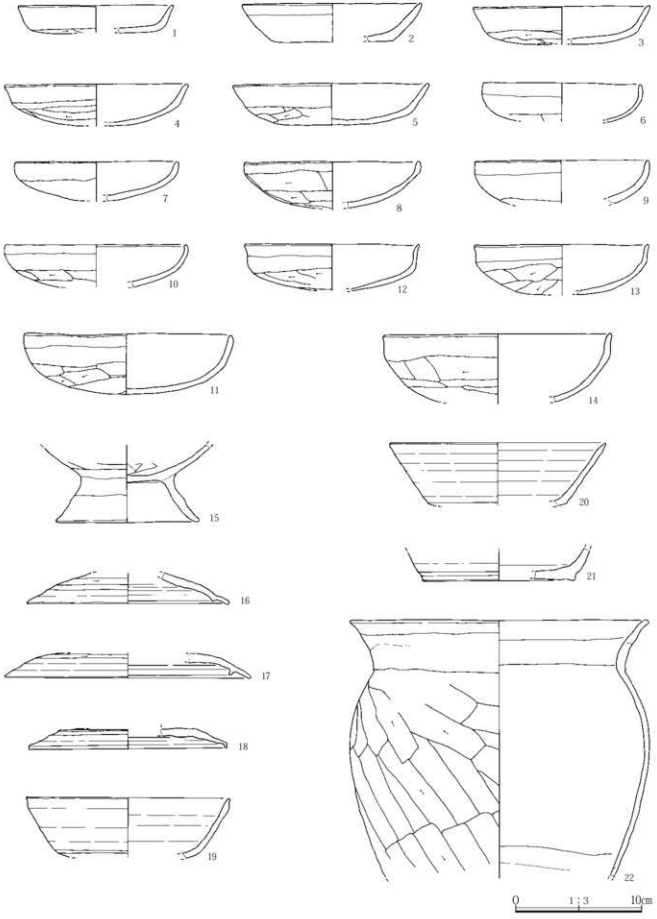
周溝　検出できなかった。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。６層・７層は住居覆土、８層は掘り方充填土である。

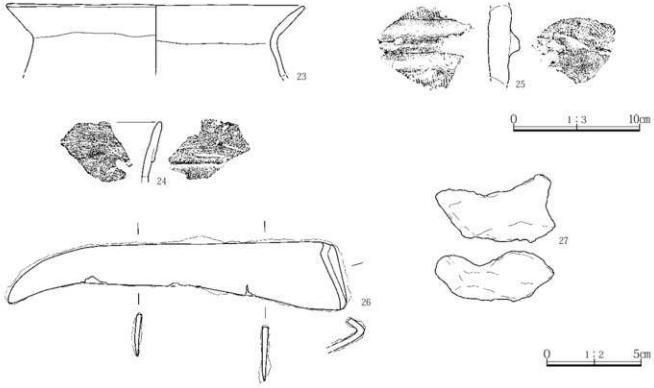
掘り方　全面的に掘り下げて凹凸がある。掘り方の深さは30cmを測る。

遺物　８号住居の掘り方調査時に、第42図１・３～５・９の土師器杯や甕、10の須恵器甕が出土した。いずれも住居北壁周辺からの出土で、量は多くはなかった。取り上げ時に８号住居の遺物と一部混乱している。

時期　出土遺物から８世紀第１四半期に比定される。



第38図　１区８号住居出土遺物（１）



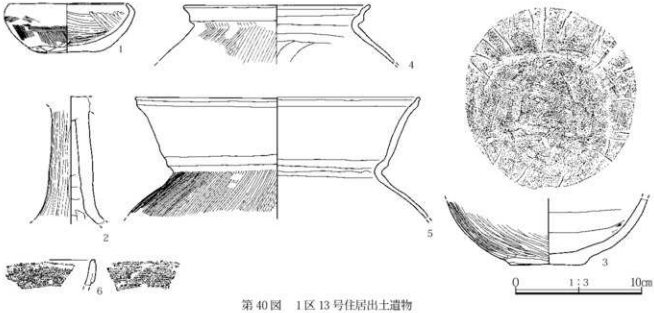
第39図　１区８号住居出土遺物（２）

第９表　１区８号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第38図	1	土師器 杯	口縁部～底部片	口 12.0 底 10.4	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	2	土師器 杯	口縁部～底部片	口 13.8　高 3.0 底 9.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	3	土師器 杯	1/5	口 13.8 稜 12.0	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	4	土師器 杯	1/5	口 14.4 稜 13.2	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	5	土師器 杯	1/4	口 15.2　高 3.2 稜 13.2	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	6	土師器 杯	+34.0cm 口縁部～底部片	口 12.2 最 12.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	7	土師器 杯	口縁部～底部片	口 12.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
第38図 PL.53	8	土師器 杯	1/3	口 13.6 最 14.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	9	土師器 杯	+9.0cm 口縁部～底部片	口 13.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	10	土師器 杯	口縁部～底部片	口 14.0 最 14.4	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	11	土師器 杯	+17.5cm 1/2	口 16.4　高 4.7	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図	12	土師器 杯	1/4	口 13.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	13	土師器 杯	+14.0cm 口縁部～底部片	口 13.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	14	土師器 杯	口縁部～片体部片	口 17.8	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
第38図 PL.53	15	土師器 台付甕	+10.4cm 脚部～胴部下位	脚 11.0 底 7.4	細砂粒/良好/橙	脚部は貼付。脚部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図	16	須恵器 杯蓋	口縁部～天井部片	口 15.6	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第38図 PL.53	17	須恵器 杯蓋	口縁部～天井部片	口 19.0	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第38図	18	須恵器 杯蓋	口縁部～天井部 2/5	口 15.6	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
第38図	19	須恵器 杯	口縁部～底部片	口 15.8 底 11.0	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
第38図	20	須恵器 椀	口縁部～底部片	口 16.8 底 10.8	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
第38図	21	須恵器 杯	底部～体部片	底 12.6 台 11.6	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は削り出し、底部は回転ヘラ削り。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第38図 PL.54	22	土師器 甕	+1.2cm 口縁部～胴部中位	口 23.2 胴 23.5	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい赤褐	外面頸部と内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第39図 PL.54	23	土師器 甕	口縁部～胴部上位小片	口 23.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第39図 PL.54	24	土師器 甕	口縁部小片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は折り返し。口縁部は上半が横ナデ、下半はハケ目。内面はヘラナデ。	
第39図 PL.54	25	埴輪 円筒	胴部小片		細砂粒/良好/にぶい赤褐	凸部は貼付で横ナデ。上下はハケ目(２cmあたりの本数不鮮明)。内面は残存部の上半がハケ目、下半はナデ。	

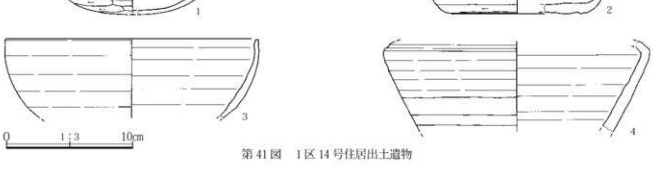
挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	取上番号	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第39図 PL.54	26	鉄製品	鎌	掘り方ワク上	17.8	3.5	0.3	64.3		刃部の一部が欠損する他完存する。中央より先端側の刃部の湾曲がみられ、研ぎ減りしたものと考えられる。基部に柄の木質の残存は見られない。
第39図 PL.54	27	鉄生産関連	鉄滓	掘り方	6.2	3.3	2.6	60.8		酸化土砂の付着と銹化が進行によって、表面の観察ができない。磁着度3　メタル度B(0)



第 40 図　１区 13 号住居出土遺物

第 10 表　１区 13 号住居出土遺物

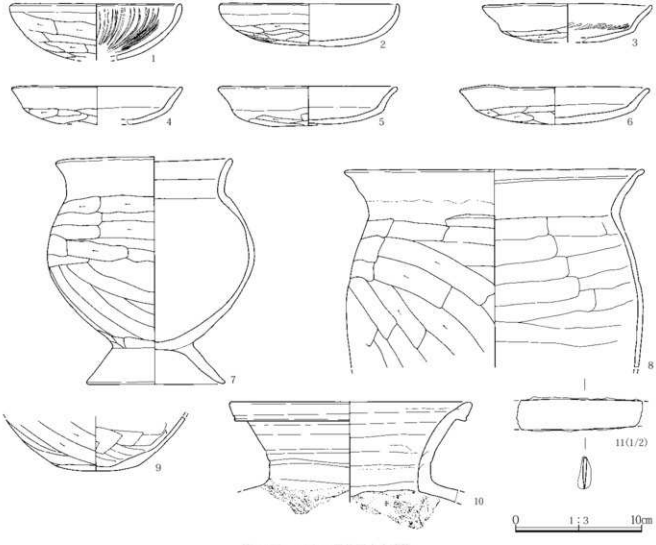
挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第40図 PL.54	1	土師器 杯	口唇部大部分欠損	口 9.2 高 3.9 底 5.4 最 10.3	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はハケ目(１cmあたり10本)、底部はヘラ削り。内面は体部から底部にヘラ磨き。	
第40図 PL.54	2	土師器 高杯	脚部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	杯身部は脚部に接合。脚部は縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第40図 PL.54	3	土師器 壺	底部～胴部下位片	底 5.8	細砂粒・長石/良好/淡黄	底部と胴部はヘラ磨き。内面は底部がハケ目(９～10本)、胴部はヘラナデ。	
第40図	4	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 14.4	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(１cmあたり４本)。内面胴部はナデ。	
第40図 PL.54	5	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 22.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(１cmあたり６～７本)。内面胴部はナデ。	
第40図	6	土師器 甕	口縁部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は折り返し。口縁部は外面がハケ目(１cmあたり９本)、内面はヘラナデ。	



第 41 図　１区 14 号住居出土遺物

第 11 表　１区 14 号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第 41 図 PL.54	1	土師器 杯	-19.3cm 1/4	口 11.7　高 3.4	細砂粒・片岩/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第 41 図	2	須恵器 杯	+12.6cm 底部～体部片	底 11.3 台 10.0	細砂粒・粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は削り出し、底部と体部最下位は回転ヘラ削り。	
第 41 図	3	須恵器 鉢	+14.4cm 口縁部～体部小片	口 19.7	細砂粒・黒色粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第 41 図	4	須恵器 長頸壺	-5.2cm 胴部片	胴 21.0	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下位は回転ヘラ削り。	



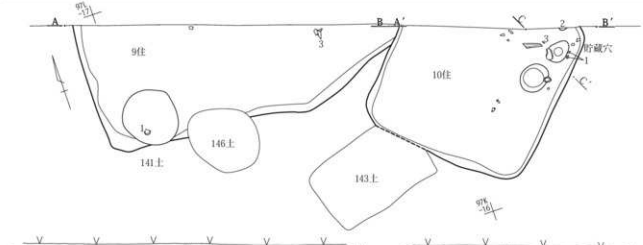
第 42 図　１区 15 号住居出土遺物

第 12 表　１区 15 号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第 42 図	1	土師器 杯	口縁部～底部片	口 13.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口唇部は横ナデ、口縁部から体部、底部は手持ちヘラ削り。内面は放射状ヘラ磨き。	
第 42 図 PL.54	2	土師器 杯	3/4	口 13.9　高 3.3	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第 42 図 PL.54	3	土師器 杯	1/3	口 13.2 稜 10.4	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面口縁部下位にヘラ磨き。	
第 42 図 PL.54	4	土師器 杯	口縁部～底部片	口 13.2 稜 11.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第 42 図 PL.54	5	土師器 杯	3/5	口 13.8　高 3.2 稜 11.8	細砂粒・粗砂粒・長石/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第 42 図 PL.54	6	土師器 杯	1/3	口 14.8　高 3.1 稜 12.6	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

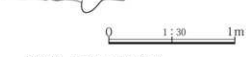
挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第42図 PL.54	7	土師器 台付甕	2/3	口 13.7　高 17.9 脚 10.6	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	脚部は貼付かの。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第42図 PL.55	8	土師器 甕	口縁部～胴部中位片	口 23.3 胴 23.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第42図 PL.54	9	土師器 甕	底部～胴部下位片	底 6.6	細砂粒/良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第42図 PL.55	10	須恵器 甕	口縁部～胴部上位片	口 18.8	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰白	口縁部はロクロ整形。胴部は外面に叩き痕、内面にアテ具痕が残る。	

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第42図 PL.55	11	鉄製品	刀子か	6.8	1.9	0.7	9.9		両端は欠損しており全体形が捉えられないため器種を確定することができないが断面が三角形状を呈する可能性があることから刀子と想定しておきたい。



9号住居
1　暗褐色土　ローム粒子、軽石を含む。
2　暗褐色土　やや粘性あり。ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
3　暗褐色土　ロームの流れ込み。
4　暗褐色土　ロームの流れ込み。
5　暗褐色土　しまり強い。ローム粒子、ロームブロックを含む。上面は硬化面となっている。
6　暗褐色土　軽石、ローム粒子を少量含む。
7　暗褐色土　炭化物粒子、ローム粒子を含む。
8　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
9　暗褐色土　５層に近いが、ロームブロックの径が大きく、粘土ブロックを含む。

10号住居
1　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　軽石、ローム粒子、焼土粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土　しまり強い。ローム粒子を多く含む。
5　暗褐色土　焼土粒子を多く、軽石を含む。
6　暗褐色土　軽石を含む。
7　暗褐色土　７層に近いが軽石がより少ない。
8　暗褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を含む。
9　暗褐色土　焼土粒子を多く含む。
10　灰褐色土　粘土層。
11　褐色土　ロームの流れ込み。
12　褐色土　しまり強い。ロームブロックを多く含む。
13　褐色土　しまり弱い。ローム主体。



第43図　１区９・10号住居

９号住居(第43～45図、ＰＬ．６・７・55、第13表)

位置　97Ｋ－16・17グリッド、２号住居の東5.5ｍの所に位置している。10号住居、141・146号土坑と重複して壊されている。

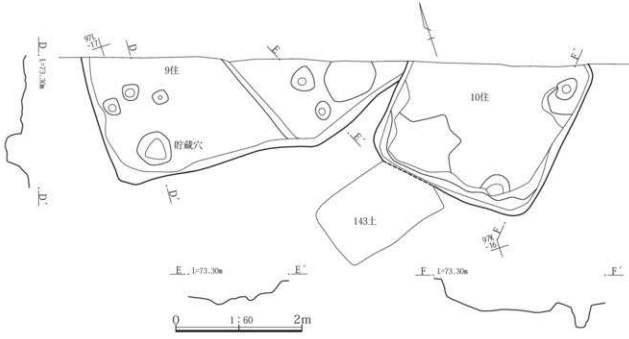
形状　路線外(調査区外)に延びているために不明であるが、隅丸方形を呈するものであろうか。　**主軸方位**　不明。

規模　現状での面積は6.13㎡、確認できた長辺(東西)５ｍ、短辺(南北)2.2ｍ、残存壁高は15㎝を測る。

床面　ほぼ平坦である。全体的に硬化が認められる。

炉　検出できなかった。

貯蔵穴　141号土坑下、床面北西隅から検出された。長



第44図　１区９・10号住居掘り方図

径55cm・短径53cm・深さ25cmのほぼ円形を呈する。土師器坩が出土している。

柱穴　掘り方調査時にピットが５個検出されたが、主柱穴にはならない。

周溝　なし。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。２層～４層は住居の覆土、５層・９層は掘り方充填土になる。６層～８層は別遺構の覆土になるものと思われる。

掘り方　深さ３cm～15cmほど東部分でやや深くなっている。

遺物　わずかに出土しているだけである。第45図１の土師器坩は貯蔵穴から、２～４の土師器は床直上からの出土である。

時期　出土遺物から古墳時代前期４世紀に比定される。

10号住居(第43・44・46図、ＰＬ．７・55、第14表)

位置　97Ｋ－15・16グリッド、３号住居の東約４ｍの所に位置している。９号住居・143号土坑と重複している。９号住居を壊し、143号土坑に壊されている。

形状　路線外(調査区外)にのびているために全容は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。

主軸方位　Ｎ－44°－Ｅ。

規模　現状(調査区内)での面積は5.54㎡、長辺(東西)2.77m、短辺(南北)2.7m、残存壁高は35cmを測る。

床面　ほぼ平坦である。全体的に硬化している。

カマド　調査区の北東際付近に設置される。床面の焼土の堆積から燃焼部は住居内に造られているものと思われる。焼土の検出範囲は南北の長さ50cm・東西の幅56cmである。

貯蔵穴　床面の北東隅に設置される。長径40cm・短径30cm・深さ40cmの楕円形を呈する。

柱穴　検出できなかった。

周溝　なし。

住居内土坑　貯蔵穴の南西から検出された。長径50cm・短径40cm・深さ７cmの楕円形を呈する。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。２層～12層は住居の覆土、13層・14層は掘り方充填土である。

掘り方　部分的に掘り下げられている。深さ５cm～10cmである。

遺物　土器の出土量は少ない。第46図１の土師器杯は貯蔵穴からの出土、２・３も貯蔵穴周辺からの出土であった。

時期　出土遺物から６世紀前半に比定される。

11号住居(第47～49図、ＰＬ．７・８・55、第15表)

位置　97Ｉ・Ｊ－15・16グリッド、９号住居の南東5.5mの所に位置している。

形状　現有道路下に延びているために完掘できなかった

が、隅丸方形を呈するものと思われる。

主軸方位　N－157°－E。

規模　現状(調査区内)での面積17.02㎡、現状での長辺(南北)5.7m、短辺(東西)5.2m、残存壁高は25cmを測る。

床面　やや凹凸が認められる。壁際を除いて全体的に硬化面が認められる。

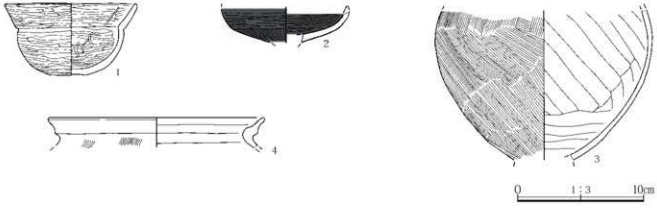
炉　調査範囲からは検出できなかった。

貯蔵穴　床面の南西隅に設置される。長径80cm・短径57cm・深さ43cmの東西に長い楕円形を呈する。覆土は３層に分かれ、土器片が出土している。

柱穴　主柱穴になるピット３個が検出された。Ｐ１は長径35cm・短径26cm・深さ45cm、Ｐ２は長径29cm・短径25cm・深さ48cm、Ｐ３は長径55cm・短径43cm・深さ45cm。Ｐ１－Ｐ２間の距離は2.65m、同じくＰ２－Ｐ３間2.35mである。

周溝　検出できなかった。

埋没土　住居四隅からの自然埋没土と考えられる。２層～４層は住居の覆土、５層・６層は掘り方充填土である。



第 45 図　１区９号住居出土遺物

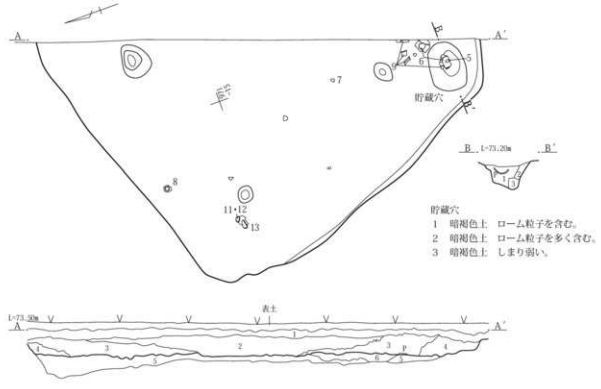
第 13 表　１区９号住居出土遺物

挿図 PL.No.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第 45 図 PL.55	1	土師器 坩	+8.6cm 3/4	口 10.3 高 5.6 底 2.8	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/赤褐	口縁部、胴部から体部はヘラ磨き。内面も全面にヘラ磨き。	
第 45 図	2	土師器 高杯	杯身部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	内外面に赤色塗彩。杯身部口縁部は横位、底部は放射状ヘラ磨き。内面は横位のヘラ磨き。	
第 45 図 PL.55	3	土師器 台付甕	胴部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部は外面がハケ目(1cmあたり10本)、内面はヘラナデ。	
第 45 図	4	土師器 台付甕	口縁部片	口 16.6	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。内面は頸部にヘラナデ。	

第 46 図　１区 10 号住居出土遺物

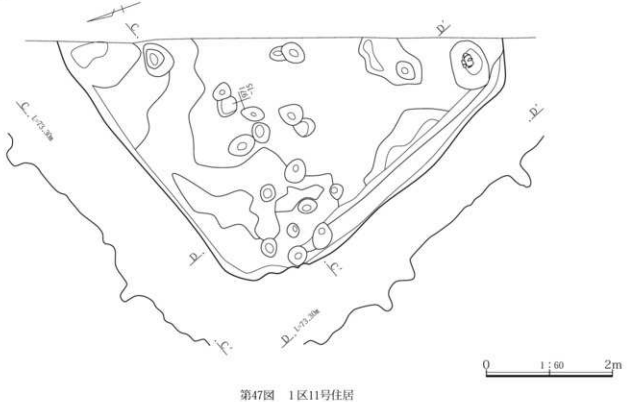
第 14 表　１区 10 号住居出土遺物

挿図 PL.No.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第 46 図 PL.55	1	土師器 杯	+3.9 ～ +15.3cm 1/3	口 13.0 高 3.9 稜 13.2	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第 46 図 PL.55	2	土師器 杯	-2.0cm 完形	口 13.2 高 4.5 稜 13.2 1.3	細砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面口縁部に格子状ヘラ磨き、底部から体部はヘラナデ。	底部に焼成後の穿孔がみられる。
第 46 図	3	土師器 杯	+1.2cm 口縁部～体部片	口 14.0 稜 14.0	細砂粒・褐色粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	



11号住居
1　暗褐色土　白色軽石を含む。
2　暗褐色土　黄褐色軽石を含む。
3　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を含む。
4　暗褐色土　３層よりロームブロックを多く含む。
5　暗褐色土　しまり強い。ロームブロック、軽石、焼土粒子を含む。
6　暗褐色土　しまり強い。上面は硬化面。ローム粒子を含む。

掘り方

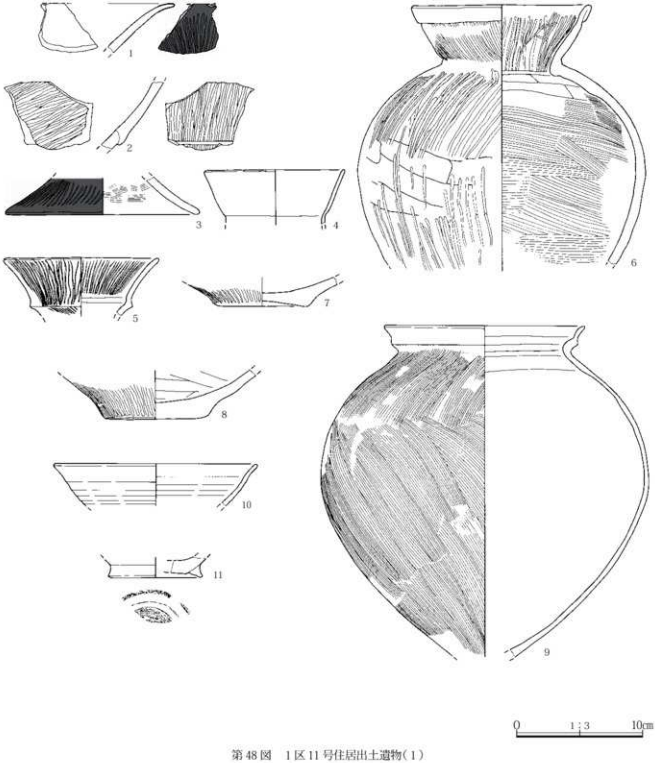


第47図　１区11号住居

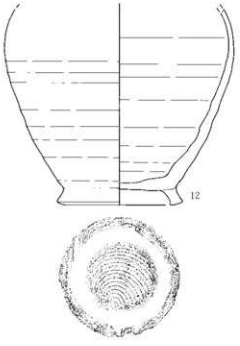
掘り方　全体的に掘り込まれているが、北壁周辺がやや深い。掘り方の深さは７㎝～35㎝を測る。

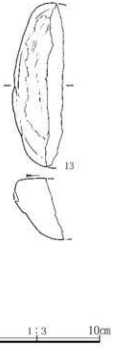
遺物　出土量は少ないが、貯蔵穴周辺から出土している。第48図５・６の土師器壺や９のＳ字状口縁台付甕は貯蔵穴から、１～３の土師器高杯は床直上からの出土である。10～12の須恵器椀や壺は９世紀後半の遺物で混入したものである。13・14は砥石で、13の砥石は11・12の須恵器と共伴している。

時期　出土遺物から古墳時代４世紀に比定される。



第48図　１区11号住居出土遺物（１）





第49図　1区11号住居出土遺物(2)

第15表　1区11号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第48図	1	土師器 高杯	杯部口縁部片		細砂粒/良好/にぶい黄褐	外面は赤色塗彩。外面は放射状ヘラ磨き、内面は上半が横ナデ、下半はヘラナデ。	
第48図	2	土師器 高杯	杯部片		細砂粒/良好/明赤褐	口縁部下に輪積み痕が残る。外面は縦位、内面は横位のヘラ磨き。	
第48図	3	土師器 高杯	脚部下半片	脚 14.8	細砂粒/良好/にぶい橙	外面は赤色塗彩。外面は放射状ヘラ磨き、内面はハケ目。	
第48図	4	土師器 坩	口縁部～頸部片	口 10.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも横ナデ。	
第48図	5	土師器 壺か	+12.8cm 口縁部～頸部片	口 12.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも放射状ヘラ磨き。	
第48図 PL.55	6	土師器 壺	-1.7cm 口縁部～胴部下位	口 13.8 胴 22.5	細砂粒・褐色粒/良好/灰黄褐	口縁部は折り返し。口唇部は横ナデ。口縁部はハケ目(1cmあたり5本)、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部は上位がヘラナデ、中位と下位はハケ目。	
第48図	7	土師器 壺	底部～胴部下位片	底 6.8	細砂粒/良好/にぶい橙	底部はヘラ磨き、胴部は縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第48図	8	土師器 壺	+1.6cm 底部～胴部下位片	底 8.0	細砂粒/良好/にぶい黄褐	底部はヘラ磨き、胴部は縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第48図 PL.55	9	土師器 台付甕	-1.7～+18.4cm 口縁部～胴部1/4	口 15.4 胴 25.4	細砂粒/良好/灰褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり7本)。内面は胴部がヘラナデ、器面磨滅のためか単位不明。	
第48図	10	須恵器 椀	口縁部片	口 15.8	細砂粒・片岩/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第48図	11	須恵器 椀	+10.4cm 底部片	底 7.1 台 7.0	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 PL.55	12	須恵器 長頸壺	+10.4cm 底部～胴部上位	底 8.8 台 8.0　胴 18.0	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	

挿図 PL.NO.	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第49図 PL.55	13	砥石	+11.3cm	礫砥石	変質蛇紋岩	12.9	(4.2)	306.6	背面側に縦位の刃ならし傷。破損部は小口部を敲打した段階で偶発的に破損。	
第49図 PL.55	14	砥石	フク土	中砥？	珪質頁岩	(3.9)	(3.8)	9.7	左側縁を粗く加工、右側縁は折取り後、研磨整形。背面側のみ使用面が残る。裏面剥落。石材は細粒・均質。両端を破損。	

２　土坑

１区からは169基の土坑が検出されている。しかし整理の過程で、40・41・88・89・167号の各土坑が欠番となったために計164基の土坑となった。このうち97基は１号屋敷に伴うものと、その周辺から検出された土坑である。このために１号屋敷に伴わない残り67基の土坑について記載する。

１号土坑(第50図、ＰＬ.11)

位置　７Ｌ－16グリッド

２号土坑の北西2.3ｍの所に位置している。長径122cm・短径112cm・深さ16cm～ 23cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は全体的に砂質で、遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

２号土坑(第50図、ＰＬ.11)

位置　７Ｌ－15グリッド

１号土坑の南東2.3ｍの所に位置している。長径73cm・短径68cm・深さ７cm～ 16cmの楕円形を呈する。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

３号土坑(第50図、ＰＬ.11)

位置　７Ｋ－15グリッド

２号土坑の南南東1.3ｍに位置している。長さ190cm・幅54cm～ 64cm・深さ９cm～ 13cmの南北に長い長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は砂質で、遺物の出土はなかった。時期不明。

９号土坑(第50図、ＰＬ.11)

位置　７Ｋ－14グリッド

３号土坑の東約５ｍに位置している。３号溝と重複しているが、土坑が新しい。長径160cm・短径157cm・深さ９cm～ 43cmの不正形を呈する。埋没土は炭化物や焼土粒子を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

22号土坑(第50図)

位置　７Ｍ－19グリッド

発掘区の西端に位置している。綿貫原北２区14号溝と重複している。溝より新しい。長さ197cm以上・幅94cm～130cm・深さ63cm～ 75cmの隅丸長方形を呈するものと思われるが、やや不整形である。底面はほぼ平坦である。埋 没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

35号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　７Ｎ－11グリッド

６号溝に近接している。長径86cm・短径85cm・深さ45cmの楕円形を呈する。埋没土は全体的に軟らかくてロームを含む。土師器甕の破片１点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

36号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　７Ｐ－12グリッド

７号溝、114号ピットと重複している。７号溝より新しく、ピットよりも古い。長さ265cm・幅90cm・深さ10cmの規模の大きい隅丸長方形を呈する。埋没土は全体的にやや硬い。土師器の杯と壺の破片が各１点出土している。機能・用途、時期は不明である。

38号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　７Ｍ－14グリッド

３号溝に近接している。長短ともに67cm・深さ９cm～ 20cmのほぼ円形を呈する。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

39号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　７Ｐ－15グリッド

38号土坑の北11.1ｍに位置している。長径90cm・短径70cm・深さ２cm～６cmの楕円形を呈する。確認面から底面までは浅く、やや凹凸がある。埋没土は炭化物や焼土粒子を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

44号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　７Ｉ－２グリッド

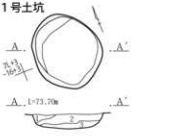
７号・９号溝と重複している。当土坑が新しい。長径94cm・短径79cm・深さ40cmの楕円形を呈する。埋没土はローム粒子を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

45号土坑(第50図、ＰＬ.14)

位置　97Ｈ－20グリッド

５号住居の西30cmに位置している。長径121cm・短径120m・深さ27cm～ 34cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土はロームを含む人為的埋土である。土師器杯は破片10点と甕の破片42点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

1号土坑



1号土坑
1　黒褐色土　砂質。ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　砂質。黒褐色土ブロック、ローム粒子をややや多く含む。
3　黒褐色土　砂質。ロームブロックを含む

2号土坑

2号土坑
1　黒褐色土　ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。

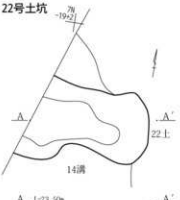
3号土坑

3号土坑
1　黒褐色土　砂質。
2　黒褐色土　砂質。ロームブロックを含む。

9号土坑．3号溝

9号土坑、3号溝
1　黒褐色土　やや砂質。炭化物を少量含む。
2　黒褐色土　炭化物をやや多く、焼土粒子を少量含む。
3　暗褐色土　やや粘質。ロームブロック、炭化物含む。
4　暗褐色土　粘質。ロームブロックをやや多く含む。
5　暗褐色土　均質。
6　黒褐色土　ロームブロックを含む。

22号土坑



22号土坑
1　暗褐色土　ややしまる。ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　粘性あり。ロームブロックを含む。
3　黒褐色土　均質。粘性強い。礫を含む。
4　暗褐色土　ややしまり粘性強い。ロームブロックを含む。
5　黒褐色土　粘性強い。黒褐色土とロームブロックの混土。

35号土坑

35号土坑
1　暗褐色土　軟らかくて粘性有り。ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
2　暗褐色土　非常に軟らかくて粘性有り。ロームを含む。

38号土坑

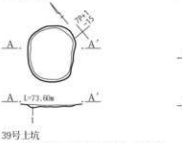
38号土坑
1　暗褐色土　ややしまり粘性あり。ローム小ブロックを含む。
2　暗褐色土　ややしまり粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。

36号土坑．114号ピット

36号土坑
1　暗褐色土　やや硬い。ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　やや硬い。ロームブロック、ローム粒子を含む。

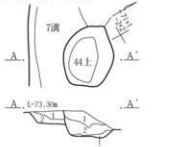
114号ピット
1　黄褐色土　軟らかくてしまり悪い。ローム主体で、暗褐色土が混じる。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり悪い。ローム粒子を多量に含む。
3　暗褐色土層　軟らかくて粘性有り。ローム粒子を含む。

39号土坑



39号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む。

44号土坑、7号溝



44号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を混入。
2　黒褐色土　ローム粒子を混入。
3　褐色土と黒色土の混土。

7号溝
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

45号土坑

45号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
2　黒色土　　ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む。
※１～３は人為的埋土

46号土坑

46号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
2　暗褐色土　暗褐色土・黒色土・ローム粒子の混土層。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
※１～３は人為的埋土

0　1:60　2m

第50図　１区１～３・９・22・35・36・38・39・44～46号土坑、３・７号溝、114号ピット

46号土坑(第50図、ＰＬ.15)

位置　97Ｇ－19グリッド

10号溝と重複している。当土坑が新しい。長さ140㎝・幅103㎝・深さ30㎝の隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土はローム粒子を多量に含む人為的埋土である。古墳時代前期の土師器片が出土している。機能・用途、時期は不明である。

47号土坑(第51図、ＰＬ.15)

位置　97Ｈ－20グリッド

12号溝と重複している。当土坑が古い。長径100㎝・短径95㎝・深さ27㎝～37㎝の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

48号土坑(第51図、ＰＬ.15)

位置　７Ｉ－１グリッド

６号井戸の南1.1ｍに位置している。長さ221㎝・幅98㎝・深さ５㎝～11㎝の長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は全体的に砂質で、土師器甕の破片4点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

49号土坑(第51・55図、ＰＬ.15、第16表)

位置　97Ｈ－20グリッド

47号・50号土坑と重複している。新旧関係は不明。長さ121㎝・幅104㎝・深さ10㎝の方形を呈する。底面は平坦である。埋没土にはローム粒子を少量含む。４世紀代の土師器高杯の脚部片が出土している。機能・用途、時期は不明である。

50号土坑(第51図、ＰＬ.15)

位置　97Ｈ－20グリッド

49号土坑と重複している。新旧関係は不明。現状での長さ64㎝・幅51㎝・深さ５㎝～８㎝である。底面は平坦である。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

106号土坑(第51図、ＰＬ.20)

位置　7Ｋ・Ｌ－１・２グリッド

107号土坑と接している。長さ130㎝・幅88㎝～98㎝・深さ５㎝～12㎝の方形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土はロームブロックを含む。土師器杯の破片３点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

107号土坑(第51・55図、ＰＬ.20、第16表)

位置　７Ｋ・Ｌ－１グリッド

106号土坑と接している。長さ300㎝・幅90㎝・深さ17㎝の規模の大きい隅丸長方形を呈する。底面は平坦である。埋没土はロームを含んでいる。平安時代の須恵器杯の破片が出土している。機能・用途、時期は不明である。

108号土坑(第51図、ＰＬ.20)

位置　97Ｌ－20グリッド

24号溝と重複している。長さ124㎝・幅77㎝～99㎝・深さ17㎝～27㎝の方形を呈するものと思われる。埋没土はローム粒子を含んでいる。土師器の甕と壺の破片14点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

109号土坑(第51図、ＰＬ.20)

位置　７Ｊ－1グリッド

111号土坑の西3.3ｍに位置している。長さ83㎝・幅46㎝～54㎝・深さ８㎝の隅丸長方形を呈する。底面は平坦である。埋没土はロームを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

110号土坑(第51図、ＰＬ.20)

位置　７Ｋ－1グリッド

４号井戸の北西約1.3ｍに位置している。長径96㎝・短径89㎝・深さ89㎝のほぼ円形を呈する。埋没土上層は浅間Ｂ軽石を含む。土師器甕の破片４点と須恵器甕の破片１点が出土し、底面近くから礫が出土している。機能・用途は不明であるが、井戸の可能性もある。

111号土坑(第51図)

位置　97Ｊ－20グリッド

４号井戸の南に位置している。長径132㎝・短径127㎝・深さ８㎝～19㎝の楕円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

112号土坑(第51図、ＰＬ.21)

位置　７Ｉ－１グリッド

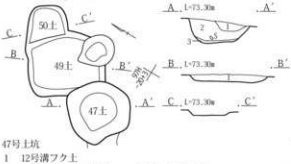
113号土坑の西約80㎝に位置している。長さ62㎝・幅43㎝・深さ25㎝の隅丸方形を呈する。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

113号土坑(第51・55図、ＰＬ.21)

位置　97Ｉ－20グリッド

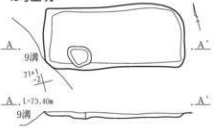
129号土坑の西２ｍに位置している。径117㎝・深さ12㎝～17㎝の円形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器杯２点・甕と壺の破片３

47・49・50号土坑



47号土坑
1　12号溝フク土
2　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子、小礫を含む。
3　褐色土　粘質。ロームブロックを含む。
49号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。

48号土坑

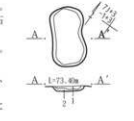


48号土坑
1　暗褐色土　砂質で粘性に乏しい。ローム粒子を含む。

108号土坑

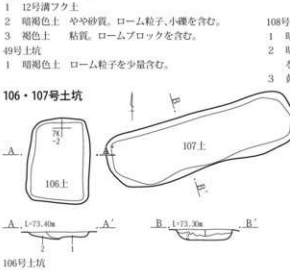
108号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石を含む。
3　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体で暗褐色土を含む。

109号土坑



109号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体に暗褐色土を含む。

106・107号土坑



106号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロック、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかい。ロームブロックを含む。
107号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体に暗褐色土を含む。

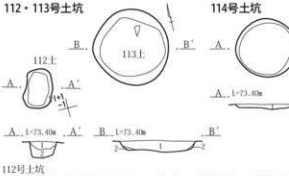
110号土坑

110号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ロームブロック、浅間B軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬い。ロームブロック、黄白色粘質土ブロックを多量に含む。
3　黄褐色土　軟らかくて粘性有り。ローム主体で暗褐色土を含む。

111号土坑

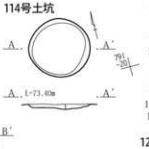
111号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間B軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかい。ロームブロックを多量に含む。

112・113号土坑



112号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくサラサラしている。ロームブロックを少量含む。
113号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間B軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかい。ロームブロックを多量に含む。

114号土坑

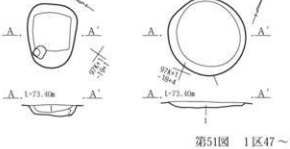


114号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。

123号土坑

122号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体に暗褐色土を含む。
124号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間B軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を少量含む。
123号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　硬くしまる。白色軽石を多量にロームブロックを含む。
3　暗褐色土　軟らかい。ロームブロックを含む。

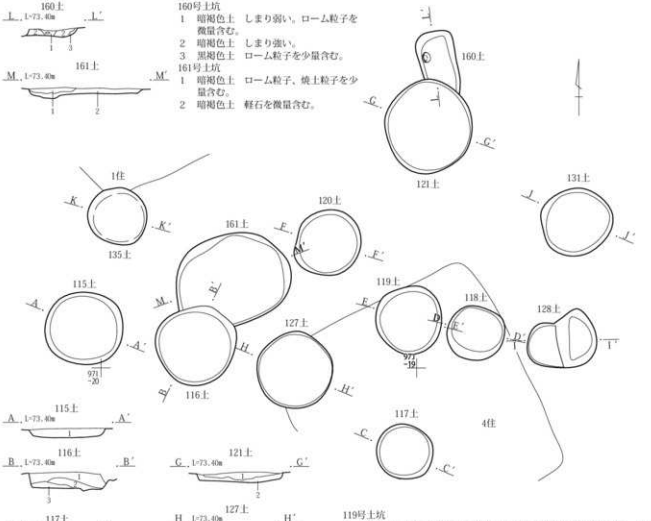
122号土坑



124号土坑

0　1:60　2m

第51図　1区47～50・106～114・122～124号土坑



160号土坑
1　暗褐色土　しまり弱い。ローム粒子を微量含む。
2　暗褐色土　しまり強い。
3　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。

161号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
2　暗褐色土　軽石を微量含む。

115号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。

116号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ロームブロック、浅間Ｂ軽石を含む。
3　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ロームブロックを含む。

117号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。

118号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。

119号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ローム粒子をやや多く含む。

120号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームを多量に含む。

121号土坑
1　暗褐色土　やや硬い。ロームブロックを多量に、白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、浅間Ｂ軽石を含む。

127号土坑
1　暗褐色土　軟らかい。ロームブロック、浅間Ｂ軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを多量に、浅間Ｂ軽石を含む。ロームブロック主体の暗褐色土と、浅間Ｂ軽石を含む暗褐色土が互層をなす。
3　暗褐色土　やや硬く、サラサラしている。浅間Ｂ軽石を含む。

128号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ロームブロックを多量に含む。
4　黄褐色土　軟らかくて粘性有り。ローム主体の層。

131号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。浅間Ｂ軽石を多量に、ローム粒子、白色軽石を含む。

135号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。黄白色粘質土ブロックを多量に、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。黄白色粘質土ブロックと暗褐色土の混土。

0　1:60　2m

第52図　１区115～121・127・128・131・135・160・161号土坑

点、須恵器甕の破片３点が出土している。機能・用途は不明である。

114号土坑(第51図、ＰＬ.21)

位置　97Ｉ－20グリッド

129号土坑の南約80cmの所に位置している。長径96cm・短径92cm・深さ７cmのほぼ円形を呈する。確認面から底面までは非常に浅い。埋没土はロームブロックを多量に含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

115号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－19・20グリッド

116号土坑の西約60cmの所に位置している。長径121cm・短径117cm・深さ14cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含んでいる。土師器杯の破片１点・甕の破片２点が出土している。機能・用途は不明である。

116号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｉ・Ｊ－19グリッド

161号土坑と重複している。当土坑が古い。長径127cm・短径125cm・深さ22cm ～ 27cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器壺の破片２点が出土している。機能・用途は不明である。

117号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｉ－18・19グリッド

４号住居の覆土中に構築されている。長径90cm・短径85cm・深さ12cmの円形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。土師器杯の破片２点・甕３点が出土している。機能・用途は不明である。

118号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－18グリッド

４号住居の覆土中に構築されている。長径89cm・短径85cm・深さ９cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

119号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－18・19グリッド

４号住居の覆土中に構築されている。長径108cm・短径105cm・深さ12cm ～ 17cmの円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

120号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－19グリッド

161号土坑に接している。長径105cm・短径100cm・深さ７cmの円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

121号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－18・19グリッド

160号土坑と重複している。当土坑が新しい。長径148cm・短径138cm・深さ９cm ～ 15cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器甕と壺の破片３点が出土している。機能・用途は不明である。

122号土坑(第51図、ＰＬ.21)

位置　97Ｋ－19グリッド

123号土坑の南約1.6mの所に位置している。長さ100cm・幅69cm ～ 78cm・深さ19cmの方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

123号土坑(第51図、ＰＬ.21)

位置　97Ｋ・Ｌ－18・19グリッド

124号土坑の北西２mの所に位置している。長さ157cm・幅100cm・深さ20cm ～ 31cmの隅丸長方形を呈する。埋没土はロームブロックを含む。土師器杯の破片１点・甕と壺の破片５点が出土している。機能･用途は不明である。

124号土坑(第51図、ＰＬ.21)

位置　97Ｋ－18グリッド

２号住居と重複している。当土坑が新しい。長短ともに122cm・深さ10cmの円形を呈する。確認面から底面までは浅い。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。平安時代の土師器片が出土している。機能・用途は不明である。

125号土坑(第53図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－15・16グリッド

11号住居の覆土中に構築されている。長径100cm・短径91cm・深さ９cm ～ 17cmのほぼ円形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器杯の破片７点・甕の破片４点が出土している。機能・用途は不明である。

126号土坑(第53図、ＰＬ.22)

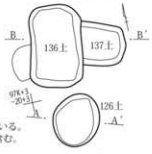
位置　97Ｋ－20グリッド

136号土坑の南に位置している。長径84cm・短径73cm・

125号土坑

125号土坑
1　暗褐色土　やや硬くサラサラしている。ローム粒子を少量、浅間Ｂ軽石を含む。

126・136・137号土坑

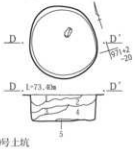


126号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム ブロック、白色軽石を含む。

136号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体の層。

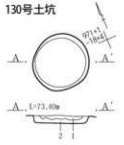
137号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石を少量含む。

129号土坑



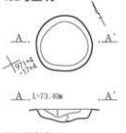
129号土坑
1　黄褐色土　やや硬くしまる。ロームを多量に、白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
3　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。
4　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を含む。

130号土坑



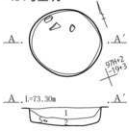
130号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、浅間Ｂ軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。サラサラしている。ロームブロックを少量、浅間Ｂ軽石、白色軽石を含む。

132号土坑



132号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームを多量に白色軽石を含む。

134号土坑

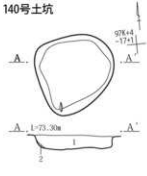


134号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、浅間Ｂ軽石を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。サラサラしている。ロームロックを少量、浅間Ｂ軽石、白色軽石を含む。

138号土坑

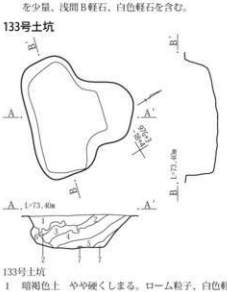
138号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロック、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　軟らかい。ローム主体で暗褐色土を含む。
3　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
4　黄褐色土　軟らかい。ロームと暗褐色土の混土。
5　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を多量に含む。

140号土坑



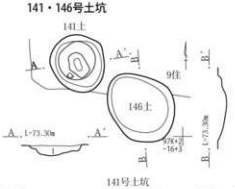
140号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体の層。

133号土坑



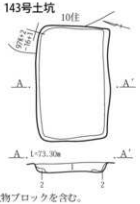
133号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム主体の層。白色軽石を含む。
3　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、白色軽石を少量含む。
4　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、炭化物粒子を含む。
5　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを少量含む。
6　茶褐色土　軟らかい。ロームブロックを多量に含む。
7　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を含む。

141・146号土坑



141号土坑
1　暗褐色土　ロームブロック、炭化物ブロックを含む。

143号土坑



143号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを含む。

0　1:60　2m

第53図　１区125・126・129・130・132 ～ 134・136 ～ 138・140・141・143・146号土坑

深さ５cmの楕円形を呈する。確認面から底面までは非常に浅い。埋没土はロームブロックを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

127号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｉ・Ｊ－19グリッド

４号住居の覆土中に構築されている。長短ともに119cm・深さ37cmの円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器杯の破片１点・甕の破片７点が出土している。機能・用途は不明である。

128号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－18グリッド

118号土坑の東に位置している。土坑の東部分を壊されている。現状での長さ110cm・幅70cm・深さ11cmの隅丸方形を呈するものと思われる。埋没土の１層・２層は新しい掘り込みで、３層・４層が土坑の埋土である。土師器甕の破片２点、須恵器甕の破片１点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

129号土坑(第53・55図、ＰＬ.22、第16表)

位置　97Ｉ－20グリッド

114号土坑の北約80cmの所に位置している。長径115cm・短径107cm・深さ42cmの円形を呈する。確認面から底面までは深く、底面は平坦である。埋没土はロームブロックを含む。４世紀代の土師器甕の破片と礫が出土している。機能・用途、時期は不明である。

130号土坑(第53図、ＰＬ.24)

位置　97Ｉ－18・19グリッド

151号土坑の西約50cmの所に位置している。長短ともに90cm・深さ13cmの円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

131号土坑(第52図、ＰＬ.21)

位置　97Ｊ－18グリッド

121号土坑の南東150cmの所に位置している。５号井戸に接する。長径111cm・短径104cm・深さ13cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を多量に含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

132号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｉ－17グリッド

10号溝と接している。長短ともに87cm・深さ10cm～20cmの円形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土はロームを含む。土師器甕と壺の破片３点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

133号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｇ－18・19グリッド

138号土坑の北東約2.6mの所に位置している。長さ190cm・幅160cm・深さ37cm～51cmの不整形を呈するが、その主体は隅丸長方形になる。確認面から底面まで掘り込みは深く、底面はほぼ平坦である。埋没土は全体的にロームブロックを含み、北東方向からの流れ込みと思われる。古墳時代６世紀後半の杯が出土している。機能・用途は不明である。

134号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｈ－19グリッド

５号住居の覆土中に構築されている。長径112cm・短径105cm・深さ21cm～29cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。古墳時代の土師器杯の破片３点・甕の破片９点が出土している。機能・用途は不明である。

135号土坑(第52図、ＰＬ.22)

位置　97Ｊ－19・20グリッド

１号住居と接している。長径95cm・短径90cm・深さ160cmの円形を呈する。湧水のために覆土は底面までを確認することはできなかった。埋没土は黄白色粘質土ブロックを多量に含む。古墳時代から平安時代の土器片が出土している。110号土坑と同様な機能・用途をもつ土坑と思われるが、浅間Ｂ軽石の堆積は認められなかった。

136号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｋ－20グリッド

137号土坑と重複している。当土坑が新しい。長さ130cm・幅82cm・深さ24cmの隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土はロームを含む。古墳時代の土師器杯１点・甕４点、須恵器甕の破片１点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

137号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｋ－20グリッド

136号土坑と重複している。当土坑が古い。現状での長さ70cm・幅68cm・深さ13cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。底面はやや凹凸がある。埋没土はローム粒子を含む。土師器杯の破片１点・甕の破片４点、須恵器甕

の破片１点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

138号土坑(第53・55図、ＰＬ.22、第16表)

位置　97Ｇ－19・20グリッド

133号土坑の南西約2.6ｍの所に位置している。長さ165cm・幅105cm ～ 138cm・深さ50cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。埋没土はロームを主体とする。須恵器甕の破片が出土している。133号土坑と同様な機能・用途をもっていたものと思われるが、詳細は不明。

140号土坑(第53図、ＰＬ.22)

位置　97Ｋ－17グリッド

139号土坑の東に位置している。長さ123cm・幅114cm・深さ23cmの隅丸方形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土はロームと炭化物粒子を含む。古墳時代の土師器甕と壺の破片17点と礫が出土している。機能・用途、時期は不明である。

141号土坑(第53・55図、ＰＬ.23、第16表)

位置　97Ｋ－16・17グリッド

９号住居の覆土中に構築されている。長径92cm・短径83cm・深さ５cm ～ 15cmのほぼ円形を呈する。底面は凹凸がある。埋没土は炭化物を含む。古墳時代４世紀代の台付甕破片が出土している。機能・用途、時期は不明である。

143号土坑(第53図、ＰＬ.23)

位置　97Ｋ－16グリッド

10号住居と重複している。当土坑が新しい。長さ181cm・幅116cm・深さ10cm ～ 15cmの長方形を呈する。底面は平坦である。埋没土はロームブロックを含む。古墳時代の土師器杯と椀の破片６点・甕の破片34点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

144号土坑(第54図)

位置　97Ｅ・Ｆ－18・19グリッド

148号土坑の東約1.7ｍの所に位置している。長径130cm・短径110cm・深さ14cm ～ 25cmのやや不整形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器甕と壺の破片６点が出土している。機能・用途は不明である。

146号土坑(第53図、ＰＬ.23)

位置　97Ｋ－16グリッド

９号住居と重複している。当土坑が新しい。長径120cm・短径95cm・深さ６cm ～ 15cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。古墳時代の土師器甕と壺の破片６点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

148号土坑(第54図、ＰＬ.23)

位置　97Ｅ・Ｆ－19グリッド

７号住居に接している。長径137cm・短径125cm・深さ14cmの楕円形を呈する。底面は平坦である。埋没にはロームブロックを含む。古墳時代の土師器杯の破片12点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

154号土坑(第54図、ＰＬ.24)

位置　97Ｈ・Ｉ－18グリッド

10号溝と接している。長径123cm・短径63cm ～ 102cm・深さ15cm ～ 20cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土はロームブロックを含む。土師器甕と壺の破片４点が出土している。機能・用途、時期は不明である。

155号土坑(第54図、ＰＬ.24)

位置　97Ｍ－20、７Ｍ－１グリッド

156号土坑と重複している。当土坑が新しい。長さ190cm・現状での幅64cm・深さ20cmの長方形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む。土師器甕と壺の破片７点が出土している。機能・用途は不明である。

156号土坑(第54図、ＰＬ.24)

位置　97Ｍ－20、７Ｍ－１グリッド

155号土坑に壊されている。現状(調査区内)で長さ148cm・幅103cm・深さ12cmの方形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

157号土坑(第54図、ＰＬ.24)

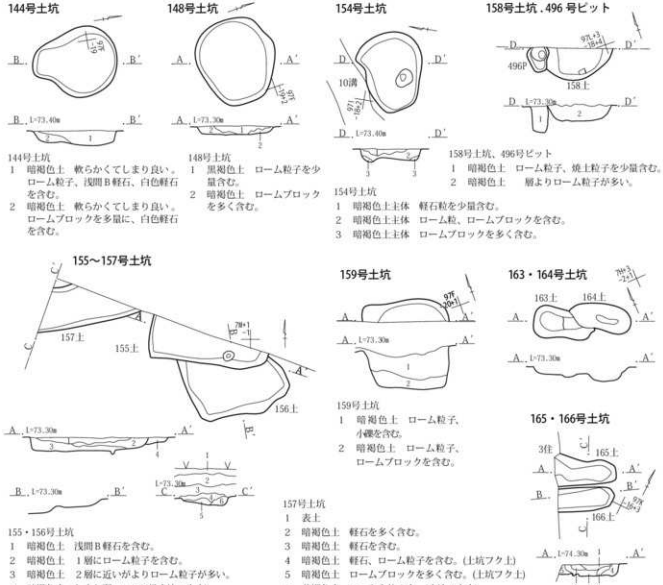
位置　７Ｍ－１グリッド

路線外(調査区外)に延びるために完掘できなかった。現状(調査区内)での長さ167cm・幅68cm・深さ５cm ～ 13cmである。埋没土はロームを含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

158号土坑(第54図、ＰＬ.24)

位置　97Ｌ－18グリッド

路線外(調査区外)に延びるために完掘できなかった。現状(調査区内)では長径128cm・短径50cm・深さ25cmの楕円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。埋没土はローム粒子を含む。土師器甕の破片１点が出土



144号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子、浅間Ｂ軽石、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。

148号土坑
1　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

154号土坑
1　暗褐色土主体　軽石粒を少量含む。
2　暗褐色土主体　ローム粒、ロームブロックを含む。
3　暗褐色土主体　ロームブロックを多く含む。

158号土坑、496号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
2　暗褐色土　層よりローム粒子が多い。

155・156号土坑
1　暗褐色土　浅間Ｂ軽石を含む。
2　暗褐色土　１層にローム粒子を含む。
3　暗褐色土　２層に近いがよりローム粒子が多い。
4　暗褐色土　しまり弱い。(156号土坑フク土)

165号土坑
1　暗褐色土　軽石、焼土粒子を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、軽石を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック、軽石を含む。
4　暗褐色土　焼土粒子、軽石、ロームブロックを多量含む。
5　暗褐色土　地山の流れ込み。

157号土坑
1　表土
2　暗褐色土　軽石を多く含む。
3　暗褐色土　軽石を含む。
4　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。(上坑フク上)
5　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。(上坑フク上)
6　黄褐色土　ローム主体の上。(上坑フク上)

166号土坑
1　暗褐色土　焼土粒子、軽石を微量含む。
2　暗褐色土　焼土粒子、ローム粒子を多く含む。
3　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子を少量含む。
4　暗褐色土　焼土粒子を少量含む。
5　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。

159号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子、小礫を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む。

第54図　１区144・148・154～159・163～166号土坑、496号ピット

している。機能・用途、時期は不明である。

159号土坑(第54図)

位置　97Ｅ・Ｆ－20グリッド

路線外(調査区外)に延びているために完掘できなかった。現状(調査区内)では長さ136㎝・幅36㎝・深さ56㎝～66㎝である。確認面から底面までの掘り込みは深い。底面はほぼ平坦である。埋没土はローム粒子を含む。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

160号土坑(第52・55図、ＰＬ.25・56、第16表)

位置　97Ｊ・Ｋ－18グリッド

121号土坑に壊されている。現状では長さ89㎝・幅61㎝・深さ14㎝の隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋没土はローム粒子を含む。副葬品と思われる10世紀代の椀が出土している。墓坑になるものと思われる。

161号土坑(第52・55図、ＰＬ.25、第16表)

位置　97Ｊ－19グリッド

116号土坑を壊して構築されている。長径187cm・短径142cm・深さ７cm ～ 15cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。埋没土は焼土粒子を少量含む。古墳時代４世紀代の坩が出土している。機能・用途、時期は不明である。

163号土坑(第54図)

位置　７Ｈ－２グリッド

164号土坑と重複している。新旧関係は不明。現状では長さ95cm・幅43cm・深さ10cm ～ 16cmの隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦である。遺物の出土はなかった。機能・用途、時期は不明である。

164号土坑(第54図)

位置　７Ｈ－２グリッド

163号土坑と重複し、9号溝と接している。新旧関係は不明。現状では長径100cm・短径41cm・深さ14cm ～ 23cmの楕円形を呈する。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明である。

165号土坑(第54図、ＰＬ.25)

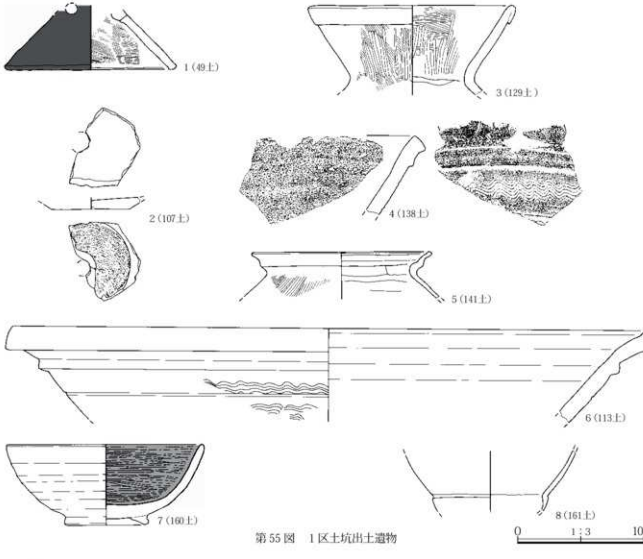
位置　97Ｊ・Ｋ－16グリッド

166号土坑に接し、３号住居に壊されている。現状では長さ96cm・幅36cm ～ 51cm・深さ15cm ～ 20cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦である。埋没土は焼土粒子を少量含む。遺物の出土はなかった。機能・用途は不明であるが、166号土坑とともに３号住居の古いカマドの痕跡とも考えられる。

166号土坑(第54図、ＰＬ.25)

位置　97Ｊ・Ｋ－16グリッド

３号住居に壊されている。現状では長さ89cm・幅38cm・深さ15cm ～ 20cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。埋土は全体的に焼土粒子を含んでいる。遺物の出土はなかった。165号土坑とともに３号住居の古いカマドの痕跡とも考えられる。



第 55 図　１区土坑出土遺物

第16表　１区土坑出土遺物

掲図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第55図	1	土師器 高杯	49上 脚部片	脚 12.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	外面は赤色塗彩、全体的にヘラ磨きか、単位不鮮明。内面はハケ目（1cmあたり９本）。	脚部上位に透孔が３カ所。
第55図	2	須恵器 杯	107上 上底部片	底 6.2 孔 1.7	細砂粒/酸化焔/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	底部に焼成後の穿孔、紡錘車に転用。
第55図	3	土師器 壺	129上 口縁部～頸部片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は折り返して横ナデ、その下位から頸部はハケ目後ヘラ磨き。内面もハケ目後ヘラ磨き。	
第55図	4	須恵器 甕	138上 口縁部片		細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。口縁部は凹線による区画、区画内はカキ目後波状文が巡る。	
第55図	5	土師器 台付甕	141上 口縁部～胴部上位	口 13.9	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目（1cmあたり６本）。内面は頸部から胴部にヘラナデ。	
第55図	6	須恵器 甕	113上 口縁部片	口 49.8	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。口縁部上位に断面三角形の凸帯。その下位に凹線による区画、凹線の上下に波状文が巡る。	
第55図 PL.56	7	黒色土器 椀	160上 高台の大半を欠損	口 15.2 高 6.4 底 6.4 台 6.0	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/酸化焔/にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部はヘラナデ。内面は全面ヘラ磨き。	
第55図	8	土師器 坩	161上 口縁部～体部片	頸 9.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。	

３　井戸

１号井戸（第56・57図、ＰＬ.26、第17表）

位置　７Ｊ－12グリッド

４号溝に近接している。長径117cm・短径112cm・深さ110cmの円形を呈する。断面は円筒形で底面は平坦である。埋没土の下層はロームブロックを多量に含み、上層は砂質である。埋没土からは９～10世紀代の須恵器杯と礫も出土している。

２号井戸（第56・57図、第17表）

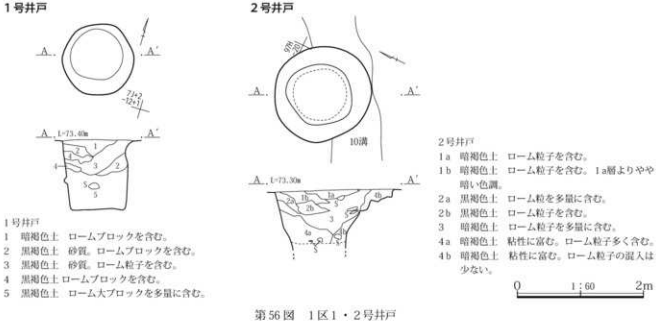
位置　97Ｇ－19・20、97Ｈ－20グリッド

10号溝と重複する。当井戸が新しい。長径151cm・短径149cm・深さ84cm以上で円形を呈する。底面は確認できなかった。埋没土の下層は粘性に富み礫の出土が多かった。９号溝出土の甕と同一個体の土器片が出土している。この他土師器甕類６点が出土。奈良～平安時代の所産と思われる。

５号井戸（第58・59図、ＰＬ.26・56、第18表）

位置　97Ｊ－17・18グリッド

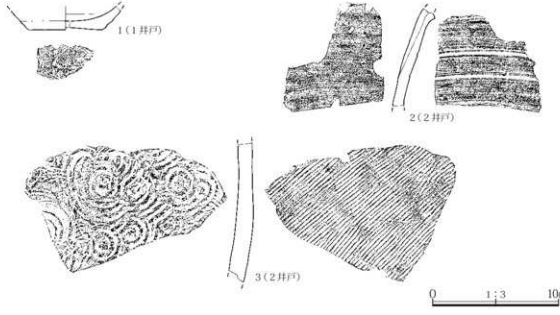
３号住居と接している。長径268cm・短径220cm・深さ195cmの上面は楕円形、底面は不正形を呈する。断面は中層からほぼ円筒形である。埋没土から４世紀代を主体とする多量の土器（第58・59図１～15）と底面から多量の礫が出土している。土師器杯椀類13片・壺甕類290片である。古墳時代前期の所産と思われる。



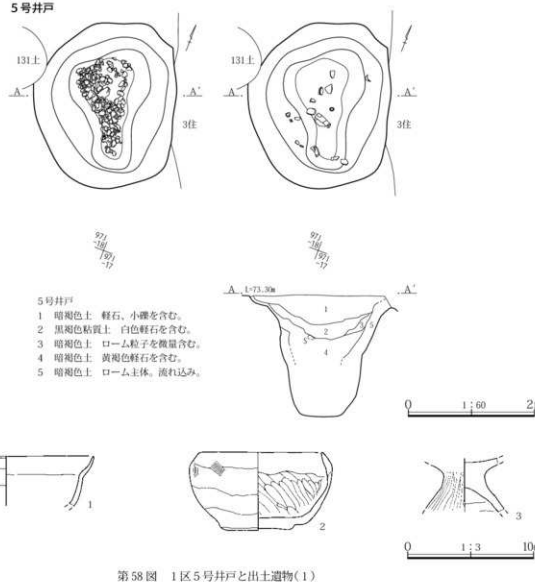
１号井戸
1　暗褐色土　ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　砂質。ロームブロックを含む。
3　黒褐色土　砂質。ローム粒子を含む。
4　黒褐色土ロームブロックを含む。
5　黒褐色土　ローム大ブロックを多量に含む。

２号井戸
1ａ　暗褐色土　ローム粒子を含む。
1ｂ　暗褐色土　ローム粒子を含む。１ａ層よりやや暗い色調。
2ａ　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。
2ｂ　黒褐色土　ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
4ａ　暗褐色土　粘性に富む。ローム粒子多く含む。
4ｂ　暗褐色土　粘性に富む。ローム粒子の混入は少ない。

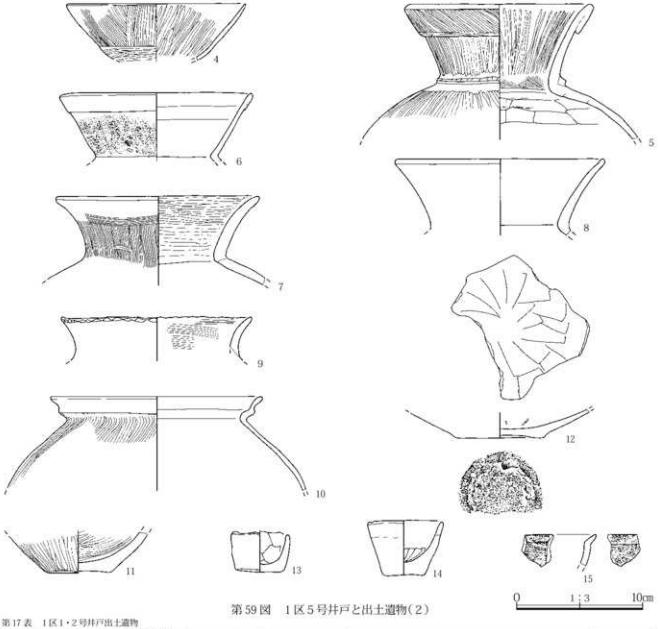
第56図　１区１・２号井戸



第57図　1区1・2号井戸出土遺物



第58図　1区5号井戸と出土遺物（1）



第59図　1区5号井戸と出土遺物(2)

第17表　1区1・2号井戸出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第57図	1	須恵器 杯	1井戸 底部～体部下位片	底 5.8	細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第57図	2	須恵器 甕	2井戸 口縁部片		細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形,回転右回り。口縁部は断面に貼り付け痕がみられる。	
第57図	3	須恵器 甕	2井戸 胴部片		細砂粒/還元焔/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

第18表　1区5号井戸出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第58図	1	土師器 杯	口縁部～体部片	口 13.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。	
第58図 PL.56	2	土師器 鉢	1/2	口 9.6 高 6.1 底 5.7 最 11.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	内面口唇部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデで一部にハケ目。口縁部から体部はナデ、底部はヘラナデ。内面は底部から体部にヘラナデ後ナデ。	
第58図 PL.56	3	土師器 高杯	杯身部底部～脚部上位		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は縦位のヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第59図	4	土師器 坩	口縁部～体部片	口 14.1	細砂粒/良好/にぶい黄橙	内外面とも赤色塗彩。口縁部から頸部は斜め、体部は横位のヘラ磨き。内面は体部から口縁部へ放射状ヘラ磨き。	
第59図 PL.56	5	土師器 壺	口縁部～胴部上位	口 14.2	細砂粒/良好/黄橙	口縁部は折り返し、頸部に粘土紐による凸帯を巡らす。口唇部はナデ、口縁部から頸部と胴部上位はヘラ磨き。内面は口縁部ヘラ磨き、頸部にハケ目が残る、胴部はヘラナデ。	
第59図 PL.56	6	土師器 壺	口縁部～頸部片	口 14.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は折り返し、口縁部から頸部は斜めのヘラナデ後横ナデ。内面はヘラ磨きか、磨滅度のため単位不明。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第59図 PL.56	7	土師器 壺	口縁部～胴部上位	口 15.6	細砂粒・粗砂粒・長石・/良好/橙	口縁部は上位が横ナデ、中位から頸部にかけては縦位のハケ目（１cmあたり10本）後最上位に段の構造のハケ目。胴部はヘラナデ。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第59図	8	土師器 壺	口縁部～頸部片	口 16.2	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は内外面とも横ナデ。	
第59図	9	土師器 甕	口縁部～頸部片	口 14.7	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口唇部は押圧文。口縁部は横ナデ。内面は横位のハケ目（１cmあたり７本）が残る。	
第59図 PL.56	10	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位	口 16.5	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目（１cmあたり５～６本）、内面胴部はナデ。	
第59図	11	土師器 甕	底部～胴部下位片	底 5.2	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	底部と胴部はヘラ磨き、内面は底部から胴部へのヘラ磨き。	
第59図	12	土師器 壺	底部～胴部下位片	底 6.6	細砂粒/良好/橙	底部は周囲がヘラ削り、中ほどは砂底が残る。胴部はヘラナデ。内面はヘラナデ。	
第59図 PL.56	13	手捏ね土器 椀形	完形	口 4.3 高 3.2 底 3.7	細砂粒・片岩/良好/に ぶい黄橙	口縁部から体部・底部ともナデ。内面は底部から口縁部に強いナデ痕が残る。	
第59図	14	手捏ね土器 椀形	口縁部3/4欠損	口 5.8 高 4.3 底 3.1	細砂粒/良好/に ぶい黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から体部・底部はナデ。内面は底部から体部下位にヘラナデ。	
第59図	15	土師器 杯	口縁部片		細砂粒/良好/に ぶい黄橙	口唇部は横ナデ。口縁部はナデ。内面は口唇部横ナデ。口縁部はヘラナデ。	

土坑と井戸について

67基の土坑と井戸について簡単にまとめる。

検出遺構の中で一番古いのは５号井戸で４世紀代の構築である。この井戸と形態や構造の酷似している遺構が、綿貫小林前遺跡からも検出されている。それはＱ区井戸跡18である。上面の平面プランは楕円形、底面は柄鏡形を呈し、断面は上方に向けてラッパ状に開いている。底面には石敷きが認められ、４世紀代の土器が覆土上層から中層にかけて出土した。

１号井戸と同様な遺構の可能性が考えられるものに、覆土に浅間Ｂ軽石の認められた110号土坑がある。いずれも平面形態は円形、断面形状は筒状を呈する。ただし１号井戸の覆土中には浅間Ｂ軽石の堆積は認められなかった。１・２号井戸と110号土坑を含めた３基の井戸は奈良から平安時代にかけての構築と思われる。

160号土坑は10世紀代の墓坑になる。この時期の住居は１区・２区からは検出されていない。

同一時期の構築で機能・用途が同一と思われる土坑多数が検出されている。それは円形を基調とした平面形態で、また確認面からの掘り込みも浅く覆土中に浅間Ｂ軽石を多量に混入する土坑群である。それは111・113・115～121・124・125・127・130・131・134・144号の計16基におよぶ。さらに125・144号土坑の２基を除くと、97Ｊ-19グリッドを中心に長径15m、短径10mの範囲にほぼ密集的に分布している。平安時代の所産と思われる。

このほかに133号土坑と138号土坑が同一の機能・用途を有していたものと思われる。隣接して存在し、規模も他の土坑よりもやや大きい隅丸長方形を呈し、掘り込みも深い。

46号土坑は人為的な埋め戻しが行われている。

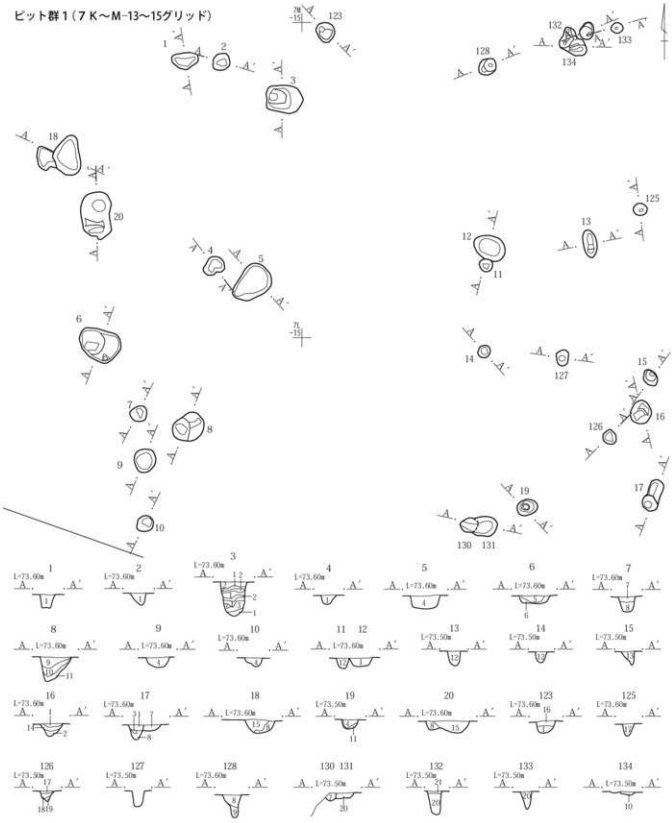
4　ピット

調査区全体で352基のピットを検出したが、ここでは１号屋敷内に分布するピット152基を除く、残り200基を扱う。ピットは比較的集中する部分を便宜的にピット群とし、ピット群１～５と呼称し、残りは個別扱いとした。非掲載遺物の出土量は第20・21表に示したとおりである。

ピット群１は調査区西寄りに位置する30基である。中央を南北に３号溝が走向し、土坑も点在するが、直接的なつながりは認められない。建物として認定できるものはなく、規則的に並ぶものも認めにくい。規模も比較的小さい。３号ピットは突出して大きなものとなるが、埋没土も暗褐色土と黄褐色土が互層堆積しており、人為的に埋め戻されたものと判断できる。

ピット群２～５は調査区東側に位置する。建物として認定できるものはなく、規則的に並ぶものも認めにくい。埋没土に特徴的なものはない。ピット群２では、やや多ク遺物が出土する。374・385号ピットで出土した須恵器杯蓋、470号ピットの土師器杯は、いずれも８世紀前半でまとまる。周辺には同時期である７・14・15号住居があり、関連が想定される。また、ピット群４は６号掘立柱建物と重複しており、特に密集する。深さは浅いものが目立ち、建物に関連する生活痕跡も考慮される。456号ピットから土師器杯が出土している。

個別に扱うピットは112基である。全体な特徴として、



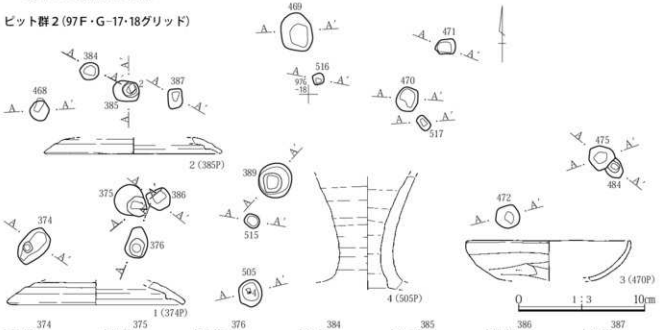
７Ｋ～Ｍ－13～15グリッドピット群

1　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
2　ローム＋暗褐色土
3　黄褐色土
4　暗褐色土　ローム大ブロックやや多量に含む。
5　黒褐色土　サラサラする。ローム小ブロックやや多量に含む。
6　暗褐色土　サラサラする。ローム小ブロック多量に含む。
7　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
8　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
9　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
10　黒褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
11　暗褐色土＋ローム大ブロック
12　黒褐色砂質土　ローム粒子少量に含む。
13　暗褐色砂質土　ローム小ブロックやや多量に含む。
14　暗褐色粘質土　ローム大ブロック多量に含む。
15　黒褐色土　ローム小ブロック少量に含む。
16　暗褐色土　ローム粒子微量に含む。
17　暗褐色砂質土　ローム粒子少量に含む。
18　黒褐色砂質土　ローム小ブロックやや多量に含む。
19　黒褐色砂質土　ローム大ブロック多量に含む。
20　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。
21　暗褐色土　褐色土ブロック含む。

0　1：60　2m

第60図　1区ピット群1

ピット群２(97Ｆ・Ｇ−17・18グリッド)

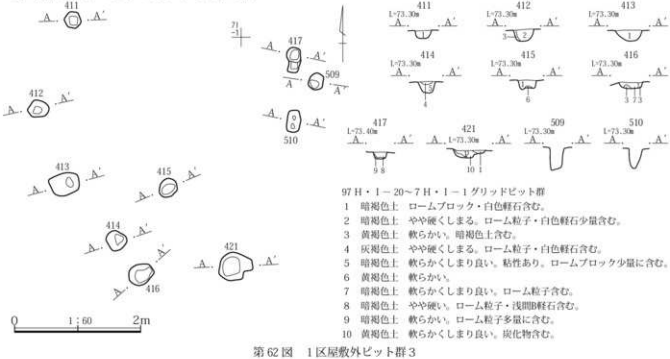


97Ｆ・Ｇ−17・18グリッドピット群
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量に含む。
5　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。

0　1:60　2m

第61図　１区屋敷外ピット群２及び374・385・470・505号ピット出土遺物

ピット群３(97Ｈ・Ｉ−20〜７Ｈ・Ｉ−１グリッド)



97Ｈ・Ｉ−20〜７Ｈ・Ｉ−１グリッドピット群
1　暗褐色土　ロームブロック・白色軽石含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子・白色軽石少量含む。
3　黄褐色土　軟らかい。暗褐色土含む。
4　灰褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子・白色軽石含む。
5　暗褐色土　軟らかくしまり良い。粘性あり。ロームブロック少量に含む。
6　黄褐色土　軟らかい。
7　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ローム粒子含む。
8　暗褐色土　やや硬い。ローム粒子・浅間B軽石含む。
9　暗褐色土　軟らかい。ローム粒子多量に含む。
10　黄褐色土　軟らかくしまり良い。炭化物含む。

第62図　１区屋敷外ピット群３

ピット群４(97G・H−16・17グリッド)

97G・H−16・17グリッドピット群
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
3　ロームブロック
4　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
5　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

第63図　１区屋敷外ピット群４及び456号ピット出土遺物

ピット群５(97G・H−18・19グリッド)

97G・H−18・19グリッドピット群
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。
3　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
4　暗褐色土　ローム粒子多量に含む。

第64図　１区屋敷外ピット群５

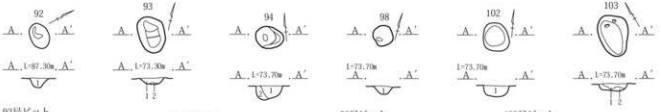
23号ピット
1　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
2　黒褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。

60号ピット
1　黒褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
2　黒褐色土＋ローム大ブロック

88・89号ピット
1　暗褐色土　褐色粒子・ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土

90号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

91号ピット
1　暗褐色土　ローブロック含む。



92号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

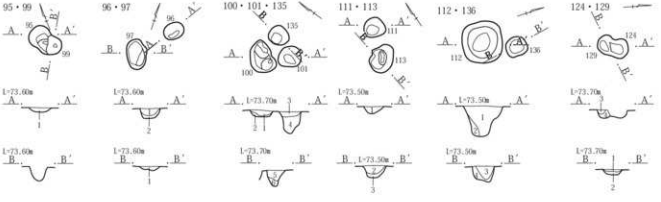
93号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土

94 号ピット
1　暗褐色土　しまる。ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

98号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

102号ピット
1　黒褐色土　暗褐色土小ブロック含む。

103号ピット
1　暗褐色土　炭化物粒子・ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土



95号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

96・97号ピット
1　暗褐色土　褐色粒子・ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土

100・101・135号ピット
1　暗褐色土　褐色土粒子含む。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　ロームブロック含む。
4　灰褐色土　ロームブロック含む。
5　暗赤灰色土　サラサラする。
6　黒褐色土　ローム粒子微量に含む。

111・113号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　灰褐色土　ローム粒子微量に含む。
3　灰褐色土　ローム粒子少量に含む。

112・136号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　黄白色土ブロック含む。
3　暗褐色土　ローム粒子含む。
4　暗褐色土

124・129号ピット
1　灰褐色砂質土
2　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
3　暗褐色土　ローム粒子含む。
4　暗褐色土

104号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

105号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。

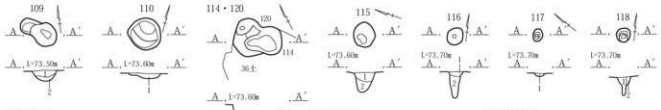
106号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土

107号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土

108 号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

0　1：60　2m

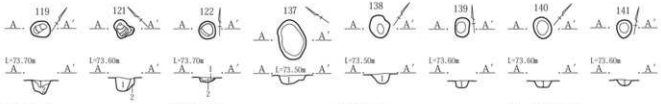
第65図　1区ピット（1）



109号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。
110号ピット
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子含む。

115号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量に含む。
116号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。

117号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
118号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量に含む。

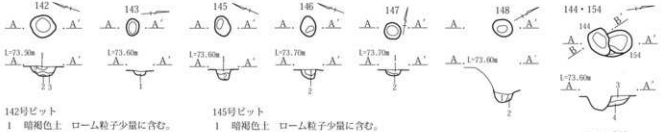


119号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ロームブロック含む。

121号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
2　暗褐色土＋ロームブロック

122号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

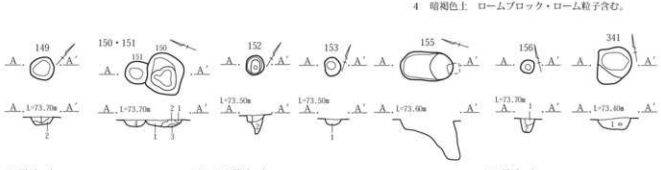
137・138号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
139～141号ピット
1　暗褐色土　褐色土ブロック含む。



142号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　ローム粒子含む。
143号ピット
1　暗褐色土　サラサラする。ローム粒子少量に含む。

145号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土
146・147号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　暗褐色土

148号ピット
1　黄褐色土　黄白色土・暗褐色土含む。
2　暗褐色土
144・154号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　ローム粒子含む。
4　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。



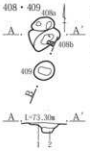
149号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　暗褐色土
152号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロック含む。

150・151号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
3　暗褐色土
4　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。
153号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量に含む。

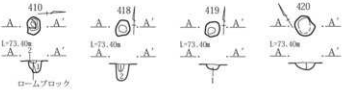
156号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
341号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

0　1:60　2m

第66図　1区ピット（2）

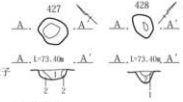


408b・409号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック・白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、白色軽石少量に含む。
4　暗褐色土　ローム粒子含む。



410号ピット
1　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ローム粒子・白色粒子含む。
2　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ロームブロック多量に含む。

418号ピット
1　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ローム粒子多量に含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック・白色軽石少量に含む。

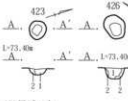


419号ピット
1　暗褐色土　軟らかくしまり良い。褐色土ブロック・白色軽石含む。

420号ピット
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック・白色軽石含む。

427号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・白色軽石少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。

428号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子含む。

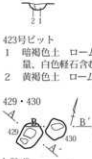


423号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量、白色軽石含む。
2　黄褐色土　ローム多量に含む。

407号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・白色粒子少量に含む。
2　黄褐色土　暗褐色土含む。

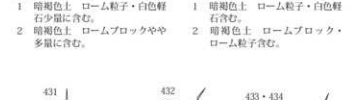
422号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子、白色軽石少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。

426号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・白色軽石少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。



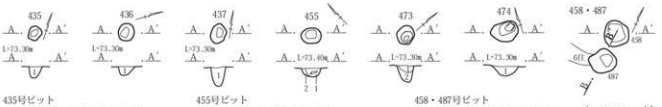
429・430号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量、白色軽石少量に含む。
2　黄褐色土
3　暗褐色土　ローム粒子・白色軽石含む。
4　暗褐色土　ロームブロック・白色軽石少量に含む。

431号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子・白色軽石少量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。



432号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　小礫少量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

433・434号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。



435号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

436号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

437号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

455号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

473号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

458・487号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

474号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

482号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

483号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

485号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

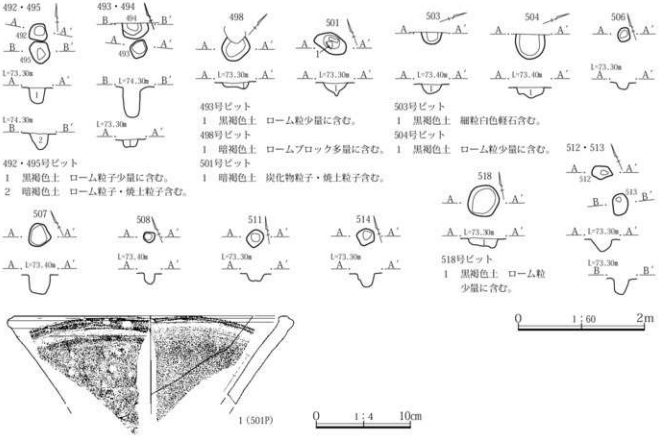
486号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

488号ピット
1　暗褐色土　軽石含む。

490・502号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

0　1:60　2m

第67図　1区ピット（3）



第68図　１区ピット(４)及び501号ピット出土遺物

第19表　１区ピット群出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第61図	1	須恵器 杯蓋	374P 口縁部片	口 13.6	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。天井部中ほどまでは回転ヘラ削り。	
第61図	2	須恵器 杯蓋	385P 口縁部片	口 13.6	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
第61図	3	土師器 杯	470P 口縁部～底部片	口 12.6	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第61図 PL.56	4	須恵器 長頸壺	505P 頸部～口縁部		細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部と頸部は接合。	
第63図	1	土師器 杯	456P 口縁部～体部片	口 12.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考
第68図 PL.56	1	在地系土器	片口鉢	501P	(31.0)			口縁部片	A	にぶい黄		断面はにぶい橙色、器表はにぶい黄色。器壁は厚い。体部は外反。口縁部強い横撫でにより、外面が窪み、やや突き出るように見える。口縁端部上面は僅かに窪む。口縁端部内面は突出し、先端は明瞭な稜をなす。体部内面に使用痕。口縁端部内面は若干平滑となるが、器表の摩滅は認められない。	Ⅲ期。

第 20 表　１区屋敷外ピット計測表(１)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片
1	７Ｌ－15	40	26	23	
2	７Ｌ－15	29	26	26	
3	７Ｌ－15	56	40	92	
4	７Ｌ－15	34	28	14	
5	７Ｌ－15	66	48	21	
6	７Ｋ－15	65	46	24	
7	７Ｋ－15	26	23	23	
8	７Ｋ－15	50	39	42	
9	７Ｋ－15	36	32	14	
10	７Ｋ－15	27	25	14	
11	７Ｌ－14	21	19	15	
12	７Ｌ－14	51	36	19	
13	７Ｌ－14	44	20	24	
14	７Ｋ－13	20	19	13	
15	７Ｋ－13	26	20	19	
16	７Ｋ－13	26	23	20	
17	７Ｋ－13	50	24	34	
18	７Ｌ－15	66	62	18	
19	７Ｋ－13	32	24	28	
20	７Ｌ－15	74	43	52	
23	７Ｊ－12	49	40	27	
60	７Ｋ－13	20	20	15	
88	７Ｎ－16	25	22	9	
89	７Ｐ－15	33	30	12	
90	７Ｐ－15	32	32	20	
91	７Ｏ－15	31	30	11	
92	７Ｏ－15	40	29	18	
93	７Ｏ－15	58	39	20	
94	７Ｎ－16	45	33	38	
95	７Ｏ－15	(43)	33	24	
96	７Ｏ－18	32	24	17	
97	７Ｏ－18	48	31	9	
98	７Ｎ－18	30	28	25	
99	７Ｏ－15	28	(22)	31	
100	７Ｐ－15	52	36	34	
101	７Ｐ－15	36	32	36	
102	７Ｎ－15	47	40	20	
103	７Ｑ－16	68	47	29	
104	７Ｒ－16	29	25	28	
105	７Ｑ－14	36	35	14	
106	７Ｑ－13	30	20	12	
107	７Ｑ－13	29	25	13	
108	７Ｎ－13	(38)	35	16	
109	７Ｎ－13	60	35	34	
110	７Ｏ－12	50	48	12	
111	７Ｍ－11	34	30	13	
112	７Ｍ－11	65	62	57	
113	７Ｍ－11	46	32	31	
114	７Ｐ－12	56	39	26	
115	７Ｐ－11	35	33	40	
116	７Ｎ－17	27	24	44	
117	７Ｎ－18	19	16	6	
118	７Ｎ－18	22	21	29	
119	７Ｎ－18	30	27	31	
120	７Ｐ－12	59	—	29	
121	７Ｑ－13	28	20	34	
122	７Ｍ－15	26	26	14	
123	７Ｌ－14	30	28	21	
124	７Ｎ－15	(46)	30	10	
125	７Ｌ－13	20	19	22	
126	７Ｋ－13	22	20	15	
127	７Ｋ－13	25	17	27	
128	７Ｌ－14	30	25	40	
129	７Ｎ－15	28	20	11	
130	７Ｋ－13	(28)	22	17	
131	７Ｋ－13	31	—	17	
132	７Ｌ－14	28	22	39	
133	７Ｌ－13	18	16	32	
134	７Ｌ－14	44	34	31	
135	７Ｐ－15	33	30	28	
136	７Ｍ－11	32	29	28	
137	７Ｍ－11	62	42	12	
138	７Ｍ－11	36	31	23	
139	７Ｎ－12	30	22	14	
140	７Ｎ－12	33	28	10	
141	７Ｎ－12	27	22	14	
142	７Ｏ－11	40	35	15	
143	７Ｏ－12	23	19	7	
144	７Ｐ－13	43	30	21	
145	７Ｑ－15	31	22	25	
146	７Ｑ－15	32	24	27	
147	７Ｑ－16	27	26	8	土師壺１
148	７Ｑ－13	32	25	19	
149	７Ｒ－16	38	36	14	
150	７Ｑ－15	70	64	17	
151	７Ｒ－15	(35)	34	11	
152	７Ｎ－13	30	28	32	
153	７Ｌ－11	29	24	11	
154	７Ｐ－13	(38)	36	16	
155	７Ｎ－11	81	44	63	土師杯１
156	７Ｑ－15	20	20	23	
164	97Ｈ－19	32	26	36	
341	７Ｍ－３	64	55	19	
374	97Ｆ－18	56	37	34	土師杯１・甕１
375	97Ｆ－18	54	44	28	土師杯１
376	97Ｆ－18	47	31	44	
377	97Ｇ－19	31	22	36	
379	97Ｇ－19	29	23	48	
380	97Ｇ－18	31	30	17	土師杯１
383	97Ｇ－19	44	40	19	土師壺２
384	97Ｇ－18	29	26	16	土師甕１
385	97Ｇ－18	40	29	36	
386	97Ｆ－18	36	30	32	土師甕４
387	97Ｆ－18	29	22	32	土師甕２
389	97Ｆ－18	53	50	30	土師甕１
407	７Ｊ－１	29	23	18	
408	97Ｊ－20	47	46	16	
409	97Ｊ－20	29	29	36	
410	97Ｉ－20	27	18	16	
411	７Ｉ－１	25	23	12	
412	７Ｈ－１	32	26	17	
413	７Ｈ－１	42	21	27	
414	７Ｈ－１	29	28	29	
415	７Ｈ－１	30	24	24	
416	７Ｈ－１	38	30	18	
417	97Ｈ－20	38	21	13	
418	97Ｉ－20	22	20	28	
419	97Ｉ－19	25	21	22	
420	97Ｉ－19	30	25	10	

第 20 表　１区屋敷外ピット計測表(２)

ピット№	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片
421	７Ｈ－１	50	42	12	
422	97Ｋ－20	29	28	16	
423	97Ｌ－20	29	26	12	
426	97Ｋ－19	38	30	20	
427	97Ｊ－19	42	38	16	
428	97Ｈ－19	38	28	34	
429	97Ｈ－19	42	28	24	土師甕６
430	97Ｈ－19	30	29	38	土師甕１
431	97Ｉ－18	49	39	21	
432	97Ｉ－18	55	54	30	
433	97Ｊ－18	35	29	12	
434	97Ｊ－17	26	26	26	
435	97Ｉ－18	22	20	20	
436	97Ｈ－18	26	24	13	
437	97Ｈ－18	31	22	30	土師甕１
440	97Ｈ－16	37	31	36	土師杯４・甕２
442	97Ｈ－16	48	37	22	
443	97Ｈ－16	46	37	33	土師杯椀２・甕１
444	97Ｈ－16	45	35	73	
445	97Ｈ－16	22	22	13	
446	97Ｈ－16	36	30	22	
447	97Ｈ－16	36	25	25	
448	97Ｈ－16	57	42	26	
449	97Ｈ－16	40	28	20	
450	97Ｈ－16	42	32	14	
451	97Ｈ－16	37	36	23	土師杯２・甕１
452	97Ｈ－17	52	50	19	
453	97Ｇ－16	48	44	26	
455	97Ｊ－18	30	23	16	
456	97Ｈ－17	44	39	36	土師杯１・壺甕６
458	97Ｇ－17	39	38	20	
460	97Ｇ－18	26	25	29	
461	97Ｇ－18	36	32	16	土師甕４
462	97Ｇ－19	34	24	25	
463	97Ｈ－19	40	32	37	
464	97Ｇ－19	38	32	24	須恵甕１
465	97Ｇ－19	38	26	24	
466	97Ｇ－19	33	25	14	
467	97Ｇ－19	62	36	56	
468	97Ｆ－18	30	27	43	
469	97Ｇ－18	59	46	19	
470	97Ｆ－17	36	32	18	土師杯４
471	97Ｇ－17	30	22	10	
472	97Ｆ－17	37	34	31	
473	97Ｆ－20	29	25	31	
474	97Ｆ－20	42	30	24	
475	97Ｆ－17	36	36	25	土師甕３
482	97Ｈ－16	38	28	15	
483	97Ｊ－16	30	22	20	
484	97Ｆ－17	(26)	26	35	
485	97Ｌ－19	32	26	30	
486	97Ｌ－20	24	24	35	
487	97Ｇ－17	38	35	21	
488	97Ｌ－19	41	28	28	土師杯１・甕１
489	97Ｆ－19	30	26	40	
490	97Ｌ－19	39	33	21	
492	97Ｌ－18	26	25	23	
493	97Ｌ－18	32	24	12	
494	97Ｌ－18	28	(24)	36	
495	97Ｌ－18	33	28	25	
498	97Ｌ－19	41	39	12	
499	97Ｇ－16	46	45	37	
500	97Ｈ－16	32	29	21	
501	97Ｅ－19	51	30	23	
502	97Ｌ－19	40	33	15	
503	７Ｌ－１	31	(18)	15	
504	７Ｌ－１	43	(37)	11	
505	97Ｆ－18	40	34	9	
506	97Ｌ－20	22	19	12	
507	97Ｉ－20	34	33	28	
508	97Ｉ－20	17	14	18	
509	97Ｈ－20	25	21	36	
510	97Ｈ－20	33	20	32	
511	97Ｆ－20	26	22	12	
512	97Ｆ－20	30	20	17	
513	97Ｆ－20	32	22	30	
514	97Ｆ－20	26	23	20	
515	97Ｆ－18	24	19	6	
516	97Ｇ－17	16	16	14	
517	97Ｆ－17	23	15	14	
518	７Ｉ－２	50	43	14	

散漫に分布している。埋没土に特徴的なものはない。規模も比較的小さいが、112号ピットは突出して大きく、むしろ土坑とすることも可能である。501号ピットの埋没土中位から第68図１の在地系土器片口鉢大片が出土する。埋没土に焼土粒子・炭化物粒子が含まれる点も注目される。周辺はピットが散漫に分布しており建物は想定しにくいが、同種の遺物を多量に含む２区２号溝の北側延長線上にあることから、区画された内部の遺構である可能性もある。

５　溝

調査区全体では23条の溝が検出されたが、９条については１号屋敷及び周辺の遺構として別に扱うため、ここでは残る14条を扱う。いずれも流水痕跡を持たない。調査区を縦断あるいは横断して広域に及ぶ溝は６条ある。１号溝は浅く軽微で性格不明である。これにほぼ並走する４号溝はやや深く、埋没土中に古墳時代の遺物が多く集中する点で注目される。この北端に接して南東方向に延びる７号溝も規模はやや大きいが、出土遺物は少ない。調査区中央東寄りの９号溝は断面逆台形の比較的大きな溝であり、中世に属する１号屋敷の区画溝よりも前出と考えられ、平安時代の遺物を含んでいる。これと直交する10号溝は、やや規模は小さく、調査区域外に及ぶ。26号溝は調査区南西隅で一部検出されたが、２区及び西側綿貫原北遺跡２区の所見から、埋没後も広域に及ぶ低地を形成していた。

ある程度の長さを持つが調査区域内で立ち上がりを持つ溝は２条である。３号溝は近世遺物を含み直線的で、何らかの区画を意識している。同様に６号溝も近世遺物及び浅間Ａ軽石を含み、ほぼ直線状である。

残る６条は調査区域外に延びるものもあるが、概して短いと考えられる。ただし、11号溝はやや幅も広く、火葬跡である150・153号土坑と重複または隣接する点で、他と違った状況にある。12・19・20・24・25号溝は小規模で短く近似し、分布も近接する。なお、12号溝は10号溝と接しており、関連も想定される。

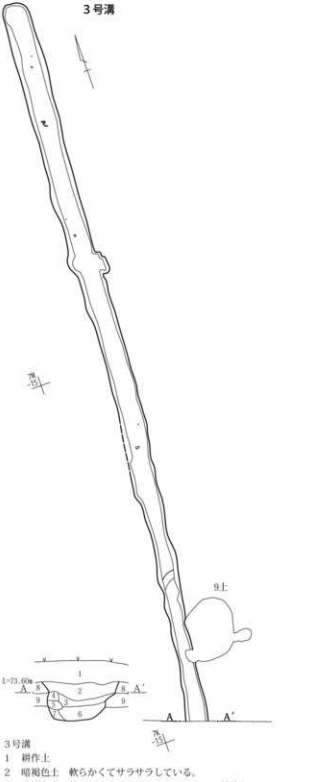
１号溝（第70～72図、ＰＬ.34）

位置　７Ｊ～Ｒ－11･15グリッド。33号土坑より前出で、１号竪穴状遺構、43・169号土坑、７号溝と重複するが新旧関係不明。南側は立ち上がるが削平による可能性が高い。平面形は直線に近く、やや蛇行する。走向方位はＮ－25°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は１㎝で、勾配0.02％で北方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ42.9m上端幅41～80m最大深24㎝である。土師器甕類が２片出土している。

備考　調査段階８号溝も同一として合成した。

３号溝（第69図、ＰＬ.34）

位置　７Ｋ～Ｎ－14グリッド。９号土坑より前出。南側は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－４°－Ｅ。断面形はＵ字形。底面は丸みを持つ。両端



３号溝
1　耕作土
2　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。
3　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。やや粘性あり。
4　茶褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。
5　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり
6　黄褐色土　やや硬くしまり粘性あり。ロームブロックを含む。
7　茶褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。
8　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。やや黒色味あり
9　茶褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。

第69図　１区３号溝

の比高差は14㎝で、勾配0.71％で南方へ下向する。埋没土下位は黄褐色土で埋まり、やや不自然である。規模は長さ19.7m上端幅42～100cm最大深14㎝である。土師器杯椀類２片・壺類２片、須恵器杯類１片・甕類１片、近世国産施釉陶器１片が出土している。

４号溝(第70～72図、ＰＬ.35・56～59、第22表)

位置　７Ｉ～Ｒ－11～15グリッド。34号土坑より前出。南北側とも調査区域外に延びる。遺物の状況は異なるが、２区13号溝と同一である可能性が高い。平面形は直線に近く、わずかに蛇行する。走向方位はＮ－24°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面は凸凹し、数mおきに軽微な土坑状に凹む。両端の比高差は３㎝で、勾配0.06％で南方へ下向する。自然埋没と思われる。規模は長さ47m上端幅82～150cm最大深43㎝である。遺物は非常に多く出土したが、上層中が多く底面のものは少ないため、ある程度埋没した後に投棄されたものと考えられる。遺物の分布は幾つかのまとまりがあり、大くくりでは４・５mの間隔を置き、段階的な投棄が想定される。前後関係は不明である。器種構成は祭祀に特化したものはなく、一様に生活色が強い。ただし、幾つかの傾向はある。中央付近では出土数は少ないが、３の土師器高坏、７の同器台があり、他と異なる。また、南端から約13m付近では、土師器壺５点(13、17～19、24)が集中している。掲載遺物の他に土師器杯椀類28片・壺甕類601片が出土している。須恵器甕類１片、中世・近世在地系土器鍋鉢類１片ずつは混入と考えられる。出土遺物から４世紀代に機能していたと考えられる。

６号溝(第77図、ＰＬ.36、第23表)

位置　７Ｍ～Ｑ－10・11グリッド。７号溝と重複するが新旧関係不明。北側は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－13°－Ｗ。断面形は逆台形。底面は凸凹と波打つ。両端の比高差は５㎝で、勾配0.24％で南方へ下向する。埋没土は浅間Ａ軽石を含む。自然埋没か。規模は長さ20.60m上端幅36～104cm最大深44㎝である。土師器杯類12片・壺甕類28片、中世在地系土器鍋鉢類２片、近世国産磁器２片・国産施釉陶器１片、近現代磁器１片が出土している。

７号溝(第78図、ＰＬ.36)

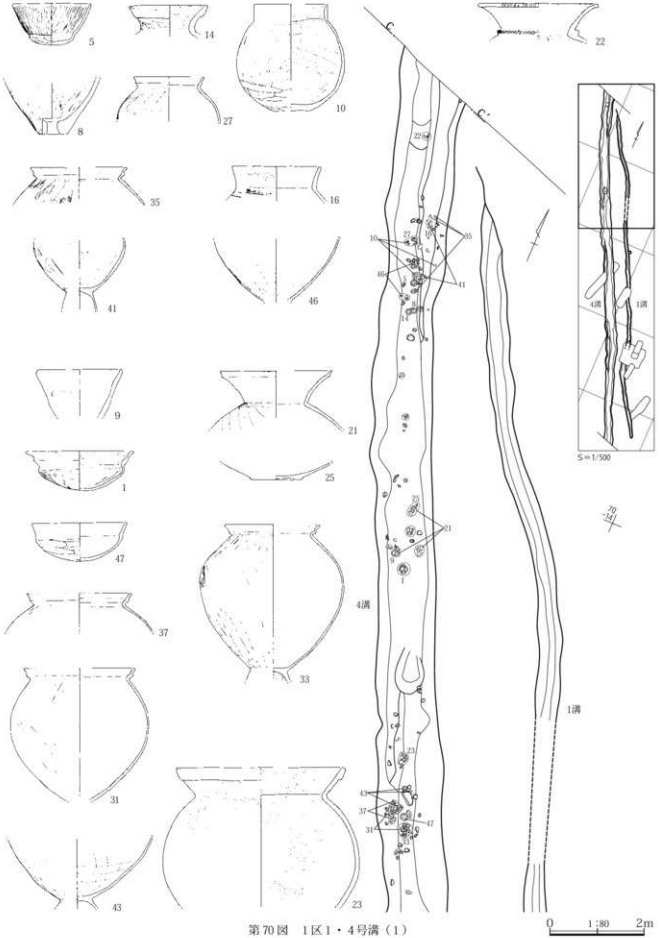
位置　97Ｅ～Ｇ－18～20、７Ｇ～Ｒ－１～15グリッド。56・60・64・72・75号土坑、６号溝より前出で、８号住居、36・44号土坑、８～11号溝と重複するが新旧関係不明。東西側とも調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－54°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面は凸凹する。両端の比高差は10㎝で、勾配0.01％で南東方へ下向する。自然埋没と思われる。規模は長さ104.60m上端幅39～113cm最大深25㎝である。中央付近で１の土師器杯(７世紀後半)が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類８片・壺甕類23片が出土している。

９号溝(第79図、ＰＬ.37、第24表)

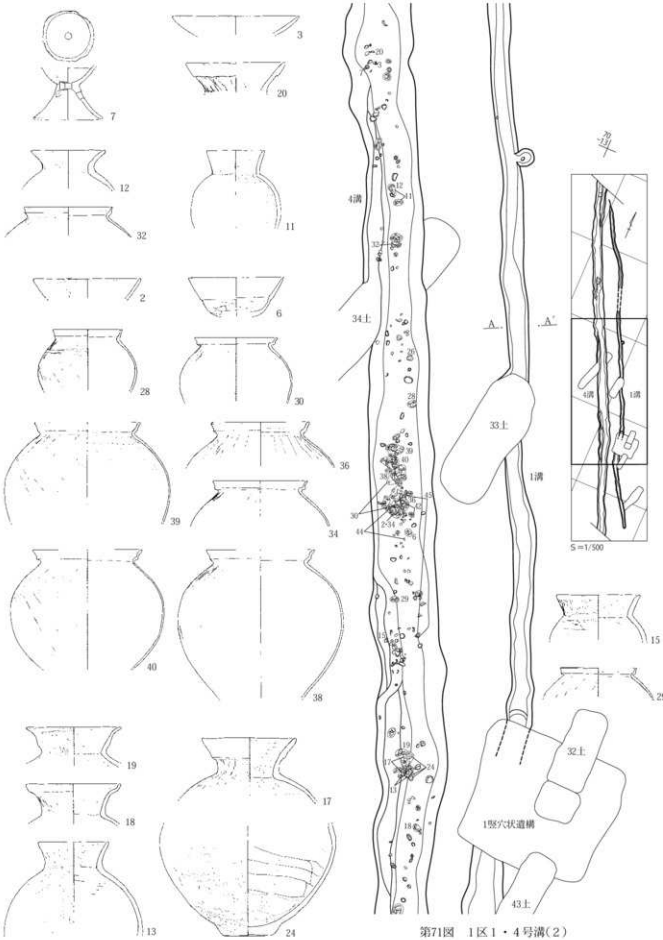
位置　７Ｆ～Ｎ－１～４グリッド。状況から51号土坑、16・18号溝より前出で、44号土坑、７・10・11号溝と重複するが新旧関係不明。南北側とも調査区域外に延びる。南方は２区19号溝の一部、綿貫伊勢遺跡２区17号溝と同一と考えられる。平面形はほぼ直線状。走向方位はＮ－20°－Ｗ。北半部の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦。南半部は複数の溝が重複して乱れる。両端の比高差は８㎝で、勾配0.18％で南方へ下向する。Ｃセクションは３時期に分かれるため、便宜的にａ～ｃに付番する。９ｃ号溝は後出で南北に走向する溝として調査される。ただし、位置・規模及び埋没土から７号溝と同一となる余地も残る。埋没土はロームブロックを多く含み、人為埋没の可能性がある。９ｂ号溝は９ａ号溝より後出で、断面形は逆台形に近く、北半部に近似する。Ｃセクション付近から西に屈曲し、11号溝と重複して不明となる。埋没土は均質で自然埋没か。９ａ号溝は最も前出で、底面は細く溝状に凹む。北半部とは形態が異なる。自然埋没と思われる。規模は長さ45.40m上端幅14～170cm最大深63㎝である。南端から約10m付近で、１の須恵器甕の胴部片が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類９片・壺甕類31片、須恵器杯類１片・甕類２片が出土している。住居は全て本溝より東にあり、集落の西限を示すと考えられる。

10号溝(第80図、ＰＬ.37、第25表)

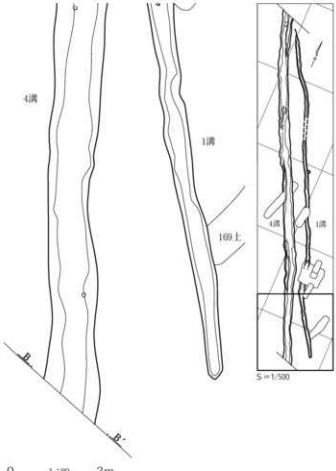
位置　97Ｇ～Ｊ－16～20、７Ｆ・Ｇ－１・２グリッド。164号ピット、12号溝より前出で、11号住居、９号溝と重複するが新旧関係不明。東西側とも調査区域外に延びる。平面形は直線に近く、やや蛇行する。走向方位はＮ－59°－Ｅ。断面形はＵ字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は４㎝で、勾配0.12％で南西方へ下向する。埋没土にロームブロックは多いが壁際が多く、自然埋没による崩落と考えられる。規模は長さ33.40m上端幅34



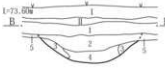
第70図　1区1・4号溝（1）



第71図　１区１・４号溝（２）



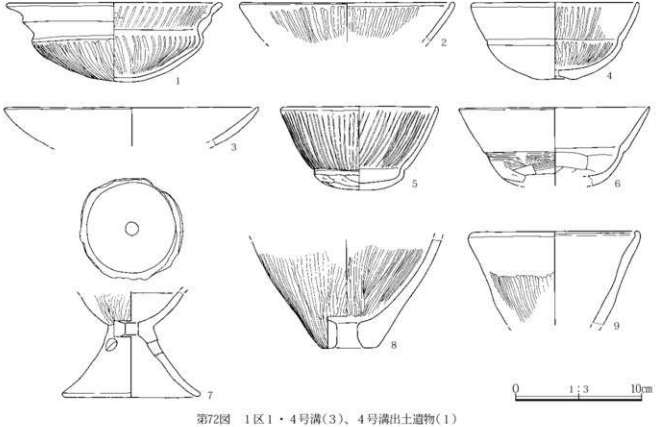
１号溝Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。



４号溝
1　暗褐色土　やや硬くしまる。軽石を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。ローム粒子を少量含む。
3　暗褐色土　非常に軟らかくてしまり良い。粘性あり。
4　暗褐色土　非常に軟らかく粘性あり。ロームブロック含む。４層より暗い色調。
5　暗褐色土　軟らかくて粘性あり。
6　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性あり。黄白色土粒子を多量に含む。
7　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ローム粒子、砂利を含む。

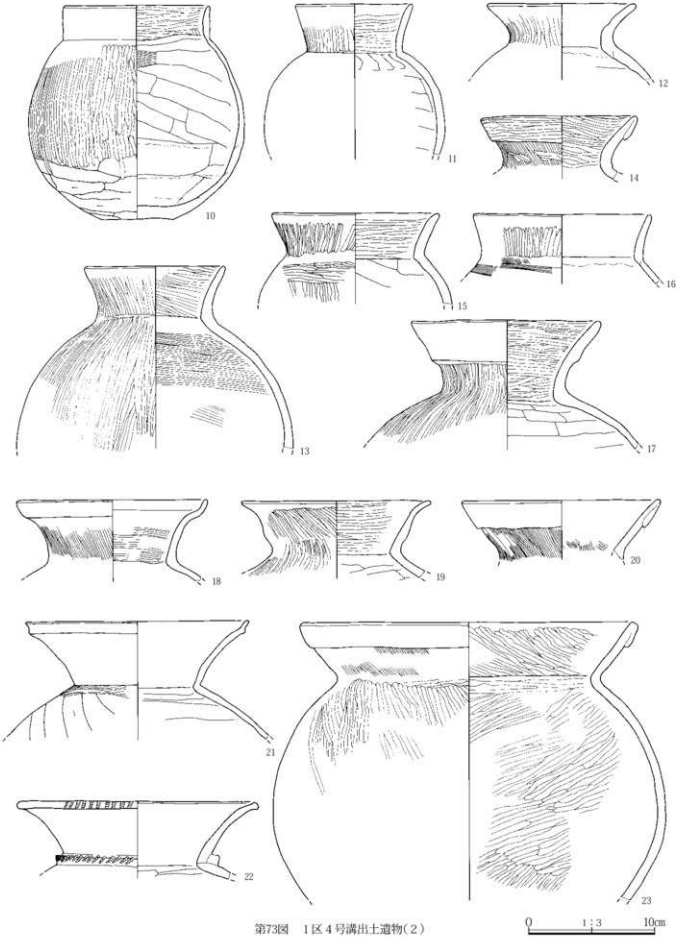
0　1:80　2m

（断面）
0　1:40　1m

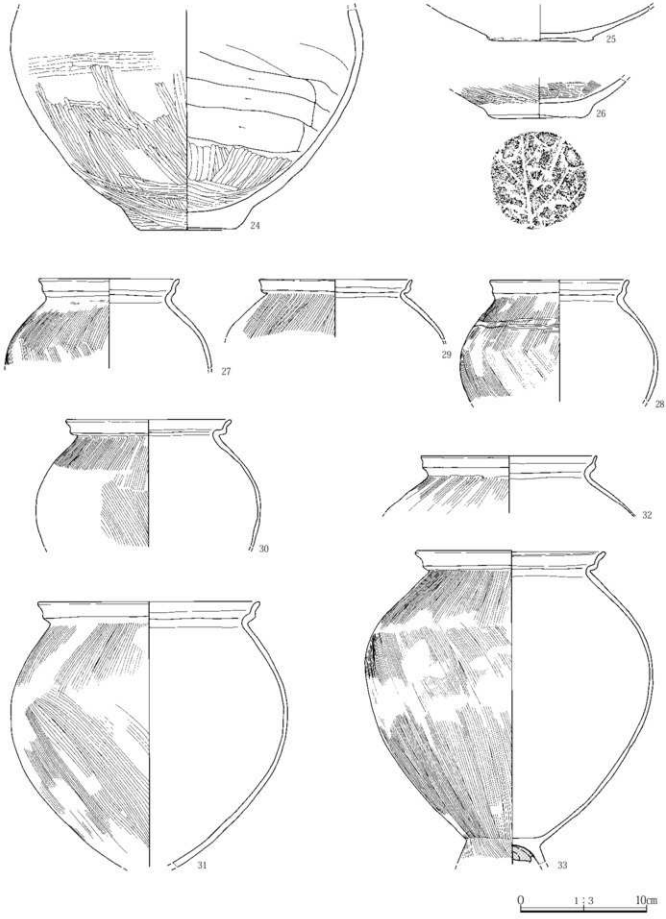


0　1:3　10cm

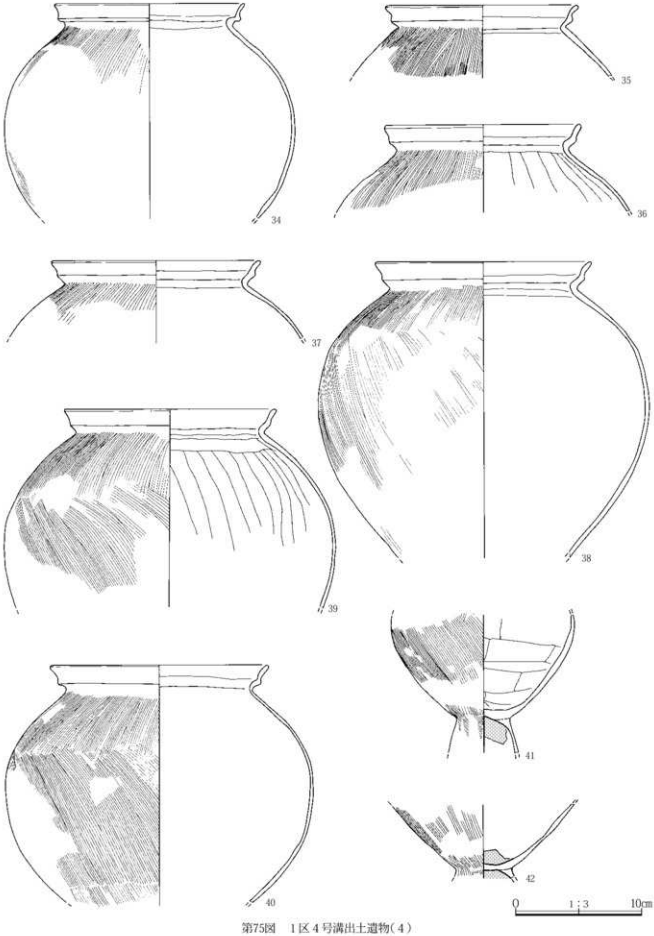
第72図　１区１・４号溝（３）、４号溝出土遺物（１）



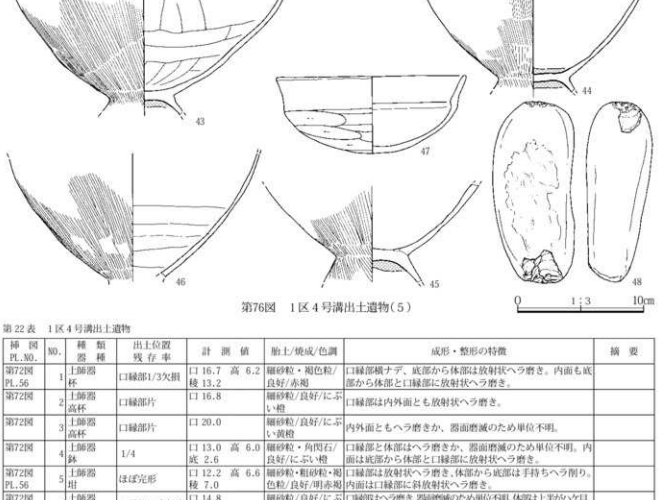
第73図　１区４号溝出土遺物（２）



第74図　１区４号溝出土遺物（３）



第75図　１区４号溝出土遺物（４）



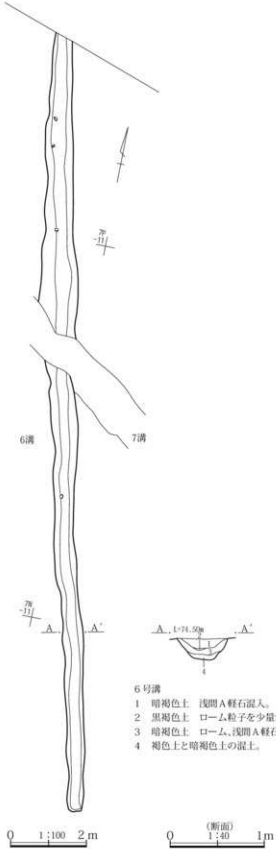
第76図　１区４号溝出土遺物（５）

第 22 表　１区４号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第72図 PL.56	1	土師器 杯	口縁部1/3欠損	口 16.7　高 6.2 稜 13.2	細砂粒・褐色粒/良好/赤褐	口縁部横ナデ、底部から体部は放射状ヘラ磨き。内面も底部から体部と口縁部に放射状ヘラ磨き。	
第72図	2	土師器 高杯	口縁部片	口 16.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも放射状ヘラ磨き。	
第72図	3	土師器 高杯	口縁部片	口 20.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	内外面ともヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。	
第72図	4	土師器 鉢	1/4	口 13.0　高 6.0 底 2.6	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙	口縁部と体部はヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。内面は底部から体部と口縁部に放射状ヘラ磨き。	
第72図 PL.56	5	土師器 坩	ほぼ完形	口 12.2　高 6.6 稜 7.0	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/明赤褐	口縁部は放射状ヘラ磨き、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
第72図	6	土師器 鉢	口縁部～底部片	口 14.8 稜 11.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部はヘラ磨き,器面磨滅のため単位不明.体部は上半がハケ目,下半はヘラ削り.内面は口縁部が横ナデ,底部から体部はヘラナデ.	
第72図 PL.56	7	土師器 器台	2/3	脚 10.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	受部は放射状ヘラ磨き、脚部もヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラ磨きであるが、器面磨滅のため単位不明。	脚部上位に円形の透孔が３カ所。受部口唇部は打ち欠かれている。
第72図 PL.56	8	土師器 有孔鉢	底部～体部下半	底 4.1 孔 2.3	細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部はヘラ削り、体部は縦位のヘラ磨き。内面は底部がヘラナデ。体部は縦位のヘラ磨き。	
第72図	9	土師器 鉢	口縁部～体部片	口 13.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部は縦位のヘラ磨き。内面は体部から口縁部にヘラナデ。	
第73図 PL.56	10	土師器 小型甕	1/3	口 11.4　高 16.7 底 5.6　胴 16.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上位から斜位のヘラ磨き、底部はヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。一部コハケ目。	
第73図 PL.57	11	土師器 壺	口縁部～胴部中位片	口 9.0 胴 14.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は縦位のヘラ磨き、胴部は器面磨滅のため単位不明。内面は口縁が横位のヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	12	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 11.4	細砂粒/良好/浅黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は縦位のヘラ磨き、胴部は器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	13	土師器 壺	口縁部～胴部上半片	口 10.8 胴 21.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から胴部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部は横位のヘラ磨き、胴部はハケ目（１cmあたり５本）。	
第73図 PL.57	14	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 12.1	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/浅黄	口縁部は折り返し、横位のヘラ磨き、頸部はハケ目（１cmあたり９本）。内面は横位のヘラ磨き。	
第73図	15	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	口 12.9	細砂粒・粗砂粒・片岩・雲母/良好/にぶい橙	口縁部は縦位のヘラ磨き、頸部はヘラ削りが残る、胴部は上位が横位、中位が縦位のヘラ磨き。内面は口縁部が横位のヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第73図	16	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	口 13.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/浅黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ。口縁部から頸部はヘラ磨き、胴部はハケ目（１cmあたり10本）。内面は口縁部下半にハケ目、器面磨滅のため単位不明。胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	17	土師器 壺	口縁部～胴部上位	口 14.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部が横位のヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	18	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 14.8	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部上半はヘラ磨き、器面磨滅のため単位不明、下半は縦位のハケ目（１cmあたり７本）。内面は口縁部下半に横位のハケ目。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第73図	19	上師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 14.8	細砂粒/良好/浅黄	口縁部は縦位のヘラ磨き、胴部はハケ目後ヘラ磨き。内面は口縁部が横位のヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第73図	20	上師器 壺	口縁部片	口 15.4	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部は折り返し、横ナデ、頸部はハケ目(1cmあたり10本)。内面は頸部にハケ。	
第73図 PL.57	21	上師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 17.4	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後頸部下にヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	22	上師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 18.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部凸帯は貼付、口縁部は横ナデ、胴部はハケ目か、口唇部と頸部凸帯に刺突文が巡る。内面胴部はヘラナデ。	
第73図 PL.57	23	上師器 壺	口縁部～胴部下位片	口 25.8 胴 30.6	細砂粒・粗砂粒・片岩・褐色粒/良好/明黄橙	口縁部は折り返し、口縁部は上半が横ナデ、下半から頸部はハケ目が残る、胴部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部から胴部に斜めのヘラ磨き。	
第74図 PL.57	24	上師器 壺	底部～胴部中位片	底 7.6 胴 27.6	細砂粒・角閃石/良好/にぶい黄橙	底部はヘラ削り、胴部はハケ目後ヘラ磨き。内面はヘラナデ後底部と胴部下位にヘラ磨き。	
第74図	25	上師器 壺	底部～胴部下位片	底 8.3	細砂粒/良好/にぶい橙	底部から胴部はヘラ削りか、器面摩滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	
第74図 PL.57	26	上師器 壺	底部～胴部下位片	底 7.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部は木葉痕が残る、胴部はヘラ磨き。内面は底部から胴部にハケ目(1cmあたり7本)。	
第74図 PL.57	27	上師器 台付甕	口縁部～胴部上半片	口 10.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。	
第74図 PL.58	28	上師器 台付甕	口縁部～胴部中位片	口 10.8 胴 15.4	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6～7本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第74図 PL.58	29	上師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 11.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり8本)。内面胴部はナデ。	
第74図 PL.58	30	上師器 台付甕	口縁部～胴部中位片	口 13.0 胴 17.6	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。	
第74図 PL.58	31	上師器 台付甕	口縁部～胴部下位片	口 13.2	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6～7本)。内面胴部はナデ。	
第74図	32	上師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 13.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。	
第74図 PL.58	33	上師器 台付甕	口縁部～脚部上位	口 14.8 底 5.8	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部から脚部はハケ目(1cmあたり7本)。内面は胴部と脚部がナデ。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第75図 PL.58	34	上師器 台付甕	口縁部～胴部下位片	口 14.8	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり7本)。内面胴部はナデ。	
第75図	35	上師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 14.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7～8本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.58	36	上師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 15.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.58	37	上師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 16.1	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5～6本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.58	38	上師器 台付甕	口縁部～胴部下位片	口 16.8	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6～8本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.59	39	上師器 台付甕	口縁部～胴部下位片	口 16.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.59	40	上師器 台付甕	口縁部～胴部下位片	口 17.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり7～8本)。内面胴部はナデ。	
第75図 PL.59	41	上師器 台付甕	脚部上位～胴部中位	底 4.1 胴 14.3	細砂粒/良好/にぶい橙	胴部はハケ目(1cmあたり6本)後下位の一部にナデ、脚部は一部ハケ目。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第75図	42	上師器 台付甕	脚部上位～胴部下位片	底 4.4	細砂粒/良好/赤褐	胴部と脚部は縦位のハケ目、一部器面摩滅のため不明。内面胴部はナデ。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第76図 PL.59	43	上師器 台付甕	脚部上位～胴部下半	底 5.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部から脚部はハケ目(1cmあたり7本)、内面は胴部がヘラナデ。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第76図	44	上師器 台付甕	脚部上位～胴部下位片	底 5.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部から脚部はハケ目(1cmあたり7本)、一部器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がヘラナデ。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第76図	45	上師器 台付甕	脚部上位～胴部下位片	底 5.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部から脚部はハケ目(1cmあたり7本)、内面は胴部がヘラナデ。	内外面の底部に砂粒の多い粘土が貼付。
第76図 PL.59	46	上師器 台付甕	胴部下半		細砂粒/良好/にぶい黄橙	胴部はハケ目(1cmあたり8本)、内面は胴部がヘラナデ。	
第76図 PL.59	47	上師器 杯	ほぼ完形	口 14.7 高 6.0 稜 13.6	細砂粒・長石・片岩・チャート/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第76図 PL.59	48	紙石	4溝	礫紙石	珪質頁岩	14.2	6.4	634.7	棒状礫平坦面が使用面。上側面の敲打は研磨後に形成されたもので、器種転用が明らかである。	



第77図　１区６号溝

～ 100cm最大深59cmである。北端で１の土師器杯などが出土する。掲載遺物の他に土師器杯類23片・壺甕類65片、須恵器甕類２片が出土している。出土遺物は７～８世紀とやや幅がある。

11号溝（第80図、ＰＬ.37・59、第25表）

位置　97Ｇ・Ｈ－20、７Ｆ・Ｇ－1・2グリッド。150号土坑、９号溝と重複するが新旧関係不明。南側は調査区域外に延びる。平面形は幅広い直線状で、北側は細くなる。走向方位はＮ－63°－Ｅ。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦ながら、やや凸凹する。両端の比高差は16cmで、勾配1.14％で西方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ14.00m上端幅36 ～ 275cm最大深30cmである。埋没土中から土師器杯（６・７）などが出土する。掲載遺物の他に土師器杯類27片・甕類34片、須恵器杯椀類７片・甕類５片が出土している。出土遺物から７世紀に比定される。

12号溝（第80図、ＰＬ.37、第25表）

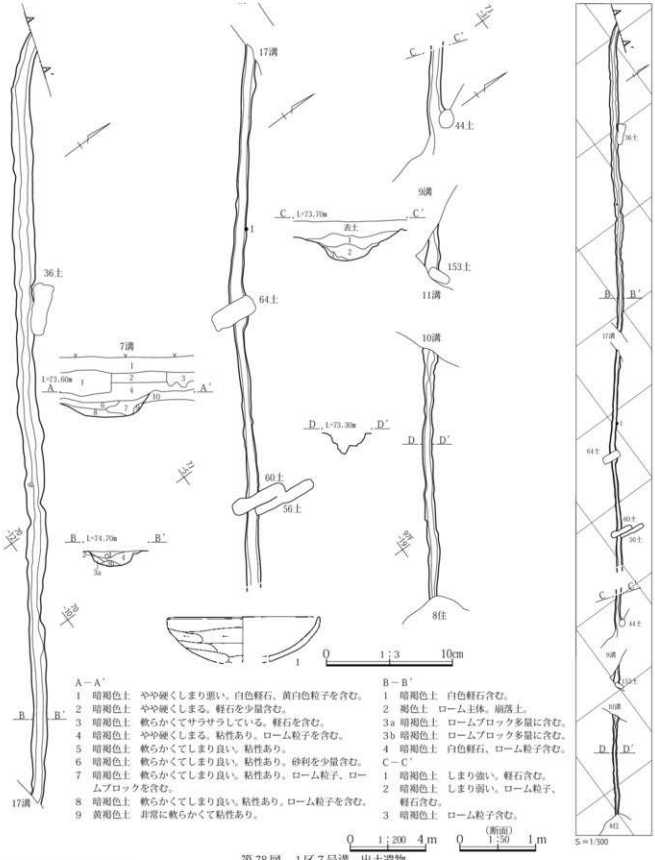
位置　97Ｈ－19・20グリッド。10号溝より後出。平面形は乱れた直線状。走向方位はＮ－75°－Ｅ。断面形はＶ～Ｕ字形。南北端とも斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹し、南半部は一段下がる。両端の比高差は５cmで、勾配0.46％で東方へ下向する。埋没土は黒みが強く、大礫も見られる。自然埋没と考えられる。規模は長さ10.90m上端幅43 ～ 88cm最大深47cmである。埋没土中から12の須恵器甕が出土する。掲載遺物の他に土師器杯椀類12片・壺甕類35片、須恵器杯類２片・甕類３片が出土している。

19号溝（第81図、ＰＬ.37）

位置　97Ｋ・Ｌ－19グリッド。平面形は直線状で、細長方形に近い。走向方位はＮ－33°－Ｗ。断面形は逆台形。底面は凸凹する。両端の比高差は１cmで、勾配0.35％で南方へ下向する。自然埋没と見られる。規模は長さ2.86m上端幅39 ～ 51cm最大深16cmである。遺物は出土していない。

20号溝（第81図、ＰＬ.38）

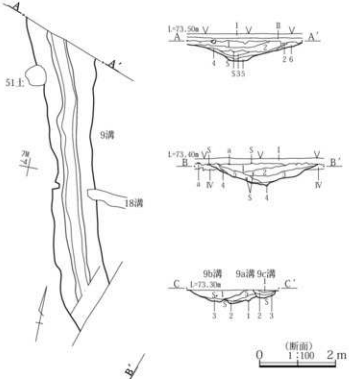
位置　97Ｋ－20 ～ ７Ｋ－１グリッド。南側は削平され消滅する。平面形はほぼ直線状。走向方位はＮ－37°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面はやや丸みを持つ。両端の比高差は３cmで、勾配1.14％で南方へ下向する。自然埋没と見られる。規模は長さ2.63m上端幅25 ～ 33cm最大深



第 78 図　１区７号溝、出土遺物

第 23 表　１区７号溝出土遺物

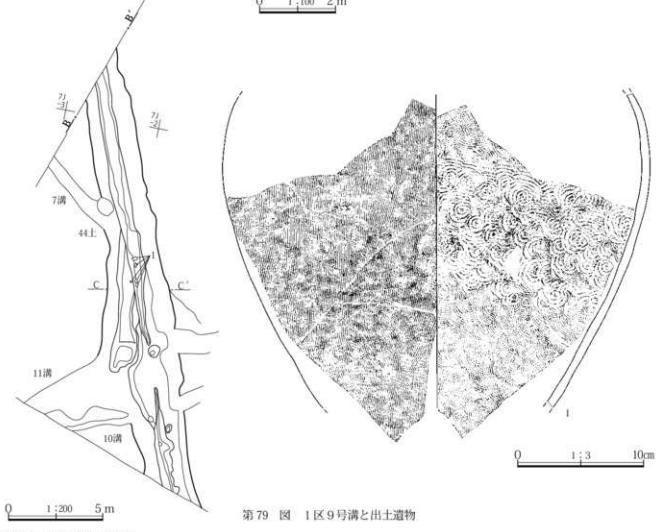
挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第78図	1	土師器 杯	口縁部～体部片	口 11.7 最 12.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	



９号溝Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、礫多量に含む。
2　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、礫多量に含む。
3　暗褐色土　２層よりやや明るい。鉄分の沈着あり。
4　暗褐色土　３層よりやや暗い。鉄分の沈着あり。粘性あり。
5　暗褐色土　粘性強い。ローム粒子を含む。
6　褐色土　　ローム粒子を含む。

９号溝Ｂ－Ｂ'
a　浅間Ａ軽石
1　黒褐色土　白色軽石混入。小礫混入。
2　暗褐色土　白色軽石、褐色軽石少量混入。礫の混入多い。
3　暗褐色土　２層よりやや暗い。礫0.5～1.5cmを含む。
4　暗褐色土　灰褐色ローム土を混入。粘性に富む。
5　暗褐色土　２層よりやや明るい。ローム粒子の混入多い。

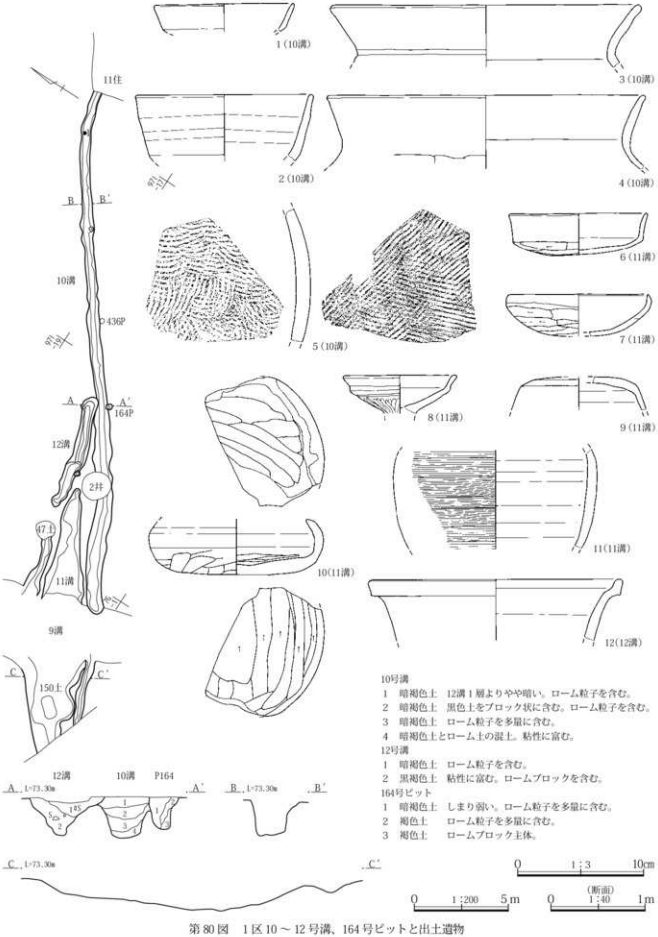
９号溝Ｃ－Ｃ'
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。
3　暗褐色土とローム土の混土。
4　暗褐色土　浅間Ａ軽石を含むか、小礫多量に含む。
5　暗褐色土　白色軽石、ローム粒子を含む。



第79　図　１区９号溝と出土遺物

第24表　１区９号溝出土遺物

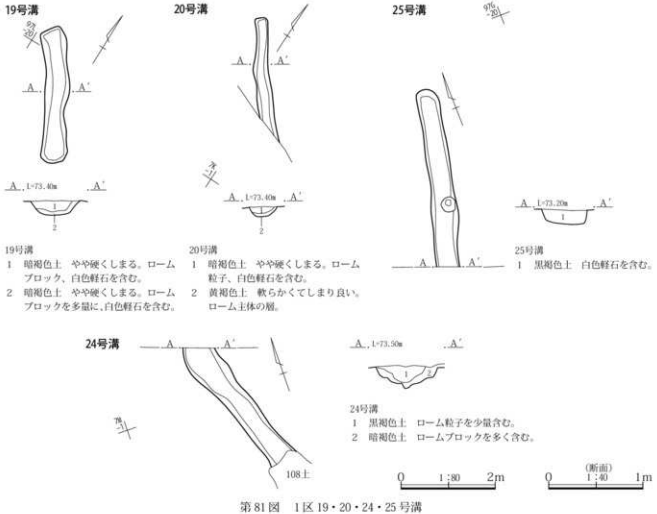
挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第79図	1	須恵器 甕	胴部片		細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焔/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	



第 80 図　１区 10 ～ 12 号溝、164 号ピットと出土遺物

第 25 表　Ⅰ区 10 ～ 12 号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第80図	1	土師器 杯	10号溝 口縁部～稜片	口 10.8 稜 9.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部 (稜下) は手持ちヘラ削り。	
第80図	2	須恵器 椀	10号溝 口縁部～体部片	口 13.6	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。外面口唇部に降灰が付着。	
第80図	3	土師器 甕	10号溝 口縁部～頸部片	口 24.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第80図	4	土師器 甕	10号溝 口縁部～頸部片	口 24.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第80図	5	須恵器 甕	10号溝胴部片		細砂粒・黒色粒/還元焔/灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第80図 PL.59	6	土師器 杯	11号溝 2/3	口 10.7　高 3.3 稜 10.2	細砂粒・褐色粒/良好/浅黄橙	口縁部横ナデ、体部 (稜下) から底部は手持ちヘラ削り。	
第80図	7	土師器 杯	11号溝 口縁部～底部片	口 10.0 最 10.5	細砂粒/良好/にぶい橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第80図	8	土師器 高杯	11号溝 杯身部片	口 8.6 稜 8.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部 (稜下) から底部は放射状ヘラ磨き。	
第80図	9	須恵器 杯蓋	11号溝 口縁部～天井部片		細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。天井部はやや雑な回転ヘラ削り。	
第80図	10	須恵器 短頸壺	11号溝 底部～胴部	底 10.6	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は手持ちヘラ削り。内面底部はナデ。	
第80図	11	須恵器 瓶	11号溝 胴部片		細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転方向不明。外面はカキ目。	
第80図	12	須恵器 甕	12号溝 口縁部片	口 19.4	細砂粒・粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転方向不明。	



19号溝
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロックを多量に、白色軽石を含む。

20号溝
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子、白色軽石を含む。
2　黄褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム主体の層。

25号溝
1　黒褐色土　白色軽石を含む。

24号溝
1　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

第 81 図　Ⅰ区 19・20・24・25 号溝

11㎝である。遺物は出土していない。

24号溝（第81図、ＰＬ.39）

位置　97Ｌ・Ｍ－20グリッド。北側は調査区域外に延びる。南側は108号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はＮ－18°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面は丸みを持って、やや凸凹する。両端の比高差は１㎝で、勾配0.32％で北方へ下向する。自然埋没と見られる。規模は長さ3.08ｍ上端幅52 ～ 69㎝最大深21㎝である。遺物は出土していない。

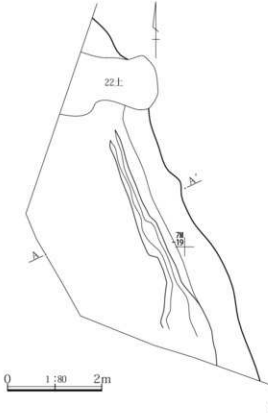
25号溝（第81図、ＰＬ.39）

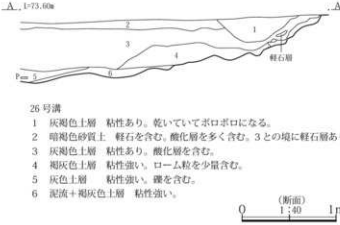
位置　97Ｆ－20グリッド。南側は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－15°－Ｅ。断面形は逆台形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は13㎝で、勾配3.49％で南方へ下向する。埋没土は均質だが、埋没状況不詳。規模は長さ3.72ｍ上端幅43 ～ 57㎝最大深13㎝である。遺物は出土していない。

26号溝（第82図、ＰＬ.37）

位置　７Ｌ・Ｍ－18・19グリッド。南北側とも調査区域外に延び、南側は２区20 ～ 23号溝と同一と見られ、北西側は綿貫原北遺跡２区14号溝と同一と考えられる。22号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は不明。走向方位はＮ－23°－Ｗ。東壁はめに立ち上がるが、西側立ち上がりは調査区域外となる。底面は非常に平坦で、２区20号溝と一致する。東壁に沿って細く溝があり、２区21 ～ 23号溝のいずれかと一致すると考えるが特定できない。両端の比高差は30㎝で、勾配3.55％で南方へ下向する。埋没土は均質に近く、２区側で確認された水田面は見られない。底面近くに礫を含む灰色土があり、２区側の所見と同様に道路面として貼られたことも考慮される。規模は長さ8.44ｍ幅2.96ｍ以上最大深76㎝である。遺物は綿貫原北遺跡２区14号溝と合成され、個別には記録されていない。

備考　調査段階の綿貫原北遺跡２区14号溝を名称変更。





第 82 図　1 区 26 号溝

６　１号屋敷

１区中央に中世の屋敷遺構があり、１号屋敷と呼称する。１号屋敷は区画溝でほぼ囲まれている。北辺は17号溝であり、これに対して北へ軸が傾いて並走する16号溝も該当する。両溝間の開口部は、北側の入り口と見なすこともできる。東辺は22号溝があるが、東辺全体ではなく、南半分を区画している。この溝は２区16号溝と同一であり、西に折れて南辺を区画し、更に外側長約25ｍで北側に直角に曲がり、７ｍ程で立ち上がる。この部分が西辺に当たる。１区ではこの西辺に該当する溝はなく、遺構の分布から西限と見なすことができる。以上から、１号屋敷の規模は、溝の外側長で南北約39ｍ、東西約25ｍと考えられる。内部の遺構は、掘立柱建物24棟、土坑64基、井戸状土坑１基、火葬跡１基、ピット152基である。なお、１号屋敷の東西に分布して中世と考えられる遺構は、次項で周辺の遺構として扱う。

（１）　掘立柱建物

１区では調査段階で認定されていた１～５号掘立柱建物５棟に加え、整理段階で新たに６～27号掘立柱建物22棟を追加認定した。分布については、調査区ほぼ中央に位置する中世の１号屋敷内に24棟、周辺に３棟が分布する。１号屋敷内部の24棟は、中世の土坑や溝と主軸方位が一致しており、直接の出土遺物はないが、中世と考えられる。

主軸方位に着目すると、第26表のとおり掘立柱建物は４種類に分類でき、２類は更に５つの群に細分できる。この２類は重複が著しく、１号屋敷内に分布する。

１類は屋敷外の６号掘立柱建物１棟である。

２類は後述するとして、３類は屋敷外の５号掘立柱建物と、１号屋敷東端の４号掘立柱建物の２棟である。主軸方位は真北に対して西へ５～12度傾く。両者の間隔は約33mあり、直接は関連づけにくい。ただし、後者は１号屋敷内の遺構群と主軸方位が異なっており、同じ遺構群には含め難い。

４類は屋敷外の１号掘立柱建物である。

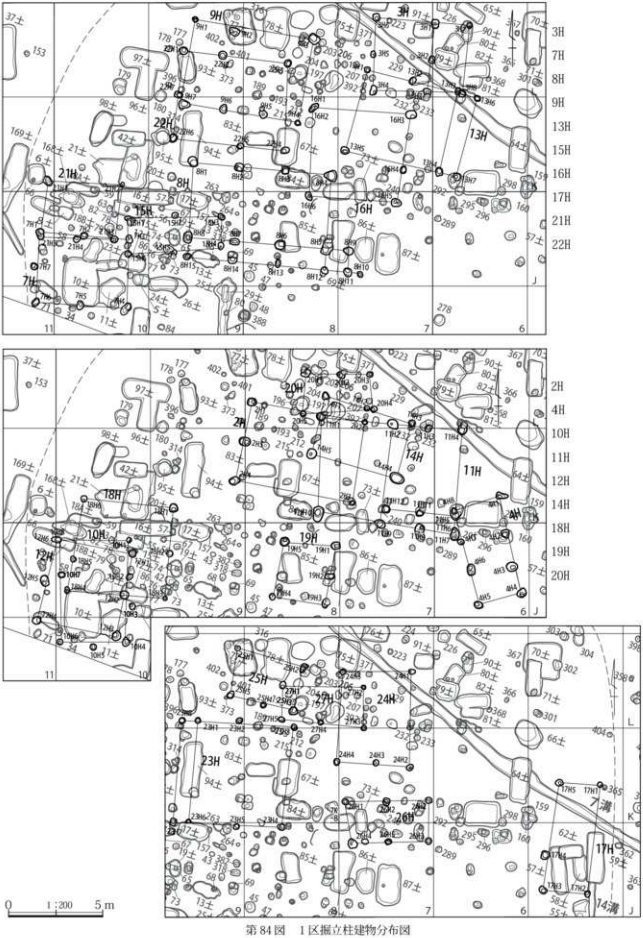
さて、２類は１号屋敷内の24棟中23棟を占める建物群である。主軸方位及び直交方向が真北に対して東へ19度傾くものから、逆に４度西へ傾くものまで、23度の幅を持つ一群となる。数値幅があり、更に分類可能に思えるが、建物同士の差はわずかで分類は不可能である。しかし、僅差ながら分布を考慮しながら、５つの群に分けることができる。

２類１群は同じく東へ11～19度傾く４棟で、13・14号掘立柱建物が相互に重複している。主屋は13号掘立柱

第 26 表　１区掘立柱建物計測値一覧

分類名	建物No	主軸方位	面積㎡	桁行平均	桁行平均柱間	寸尺	梁間平均	寸尺	規格	埋没状況	分類内での重複
1	6	N－20～25°－E	21.78	4.99			4.365	14.4	2間×1間・南北棟		
2-1	12	N－11～12°－E	18.06	4.40			4.105	13.5	1間×2間・南北棟	埋戻	
	13	N－76～77°－W	26.42	5.01			4.39	14.5	1間×2間・東西棟＋東下屋		13
	14	N－71～73°－W	14.55	4.725			3.08	10.2	1間×2間・東西棟		14
	25	N－75～77°－W	8.74	2.455			3.56	11.7	2間×1間・南北棟		
2-2	2	N－80°－W	26.59	6.17			4.31	14.2	2間×1間・東西棟		9
	9	N－80～81°－W	28.41	6.21	2.07	6.8	4.575	15.1	1間×3間・東西棟		2
	17	N－7～8°－E	12.98	5.77	1.923	6.3	2.25	7.4	1間×(3)間・南北棟		
	19	N－(6)～12°－E	8.11	3.025			2.68	8.8	1間×2間・南北棟		
2-3	8	N－85°－W	37.25	7.33	2.443	8.1	3.92	12.9	1間×3間・東西棟＋南・東下屋	柱痕	11/16
	11	N－(80)～84°－W	40.65	7.50	1.875	6.2	5.42	17.9	1間×3(4)間・東西棟		8/16
	16	N－85～86°－W	23.00	4.91			4.685	15.5	2間×1間・東西棟	埋戻	8/11
	18	N－5～(10)°－E	24.03	4.965			4.84	16.0	1間×2間・正方形		21
	21	N－86°－W	11.53	3.91			2.95	9.7	1間×2間・東西棟		18
	22	N－83°－W	26.83	5.745	1.915	6.3	4.67	15.4	2間×3間・東西棟	柱痕	
2-4	3	N－2～(7)°－E	17.98	3.795	1.898		2.96	9.8	1間×2間・南北棟＋東庇	柱痕	
	7	N－86～87°－W	17.68	4.825			3.665	12.1	2間×2間・東西棟		
	23	N－3～4°－E	26.85	4.99			5.38	17.8	2間×1間・南北棟＋西下屋		
2-5	10	N－0～2°－E	19.98	5.415	1.805	6.0	3.69	12.2	2間×3間・南北棟	柱痕	
	15	N－86～88°－E	8.53	4.945			1.725	5.7	1間×2間・東西棟		
	20	N－86～90°－E	7.18	3.565			2.015	6.7	1間×2間・東西棟		24/27
	24	N－0～4°－E	18.59	4.95			3.755	12.4	2間×1間・南北棟	柱痕	20/27
	26	N－89～90°－E	9.17	4.245			2.16	7.1	1間×2間・東西棟	柱痕	
	27	N－(85)～89°－W	8.67	4.325			2.005	6.6	1間×2間・東西棟		20/24
3	4	N－5～9°－W	13.09	5.235	1.745	5.8		0.0	1間×3間・南北棟	柱痕	
	5	N－8～12°－W	-11.33	4.32	2.16		3.36	11.1	1間×2間以上・南北棟		
4	1	N－35～39°－W	13.74	4.04	2.02		3.4	11.2	1間×2間・南北棟	埋戻	

第83図　1区1号屋敷全体図



第84図　１区掘立柱建物分布図

建物である。下屋を持たせることで面積を広くしている。

同２群は同じく８～10度東へ傾く４棟で、２・９号掘立柱建物は相互に重複する。小規模ながらこの２棟が主屋で、附属屋規模の19号掘立柱建物は９号掘立柱建物と柱筋が一致している。

同３群は同じく５～７度東へ傾く６棟で、８・11・16号掘立柱建物は相互に重複し、18・21号掘立柱建物も同様に重複している。主屋は８・11号掘立柱建物で、後者は調査区で最大規模を持つ。構造的にも間仕切りを持ち、特徴的な建物である。また、附属屋規模の18号掘立柱建物は16・22号掘立柱建物とそれぞれ柱筋が一致する。

同４群は同じく３・４度東へ傾く３棟で、相互に重複関係はない。主屋は23号掘立柱建物である。下屋を持たせることで面積を広くしている。

同５群は同じく東へ２度傾くものから、逆に西へ４度傾く６棟で、20・24・27号掘立柱建物は相互に重複し、10・15号掘立柱建物も同じく重複しあっている。20㎡を超える建物はなく、主屋とは見なしにくい。やや大きい10・24号掘立柱建物はともに南北棟で、建物群の北東部、南西部に偏在する。

同５群の状況でも判明するとおり、この細分がそのまま建物の共存関係を示すとは考えにくい。それは主軸方位が僅差であると同時に、建物の歪みが大きく、主軸方位自体に誤差が生じているからに他ならない。

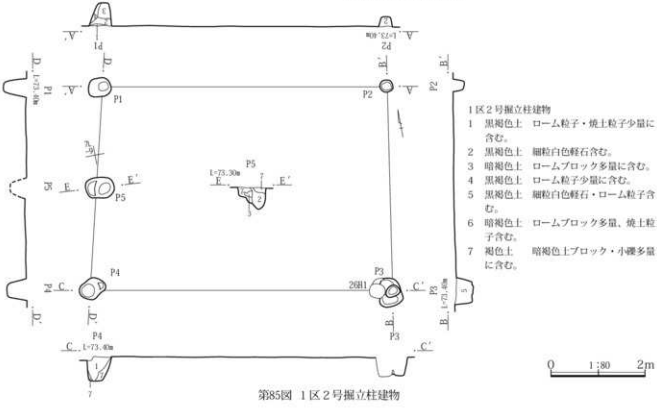
２号掘立柱建物（第85図、ＰＬ.10、第27表）

位置　７Ｋ・Ｌ－７～９グリッド。

重複　Ｐ３は26号掘立柱建物Ｐ１と重複するが新旧関係不明。９・11・13・14・16・20・22～27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－80°－Ｗ　**面積**26.59㎡

形態　２×１間・東西棟。北辺は南辺より54cm短いため、西辺は東へ内傾し、東辺は西に内傾して、平面形は台形。桁行は３間分の規模を持つが、柱穴は南北辺とも両端しかない。中間に柱がないと、建物として無理が生じる。この場合、67・92号土坑やピットなどとの重複によって不分明になった可能性や、補助的に礎石建てが併用されたことも考慮される。柱痕は見られず、Ｐ１は中位までロームブロックを多量に含んでいて、やや不自然である。Ｐ３～５の長径は54～61cmの楕円形で、底面も段差があり、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。Ｐ１・２は隅丸方形である。Ｐ２は径・深さともに25cm前後と小さい。柱穴の深さは50cm前後が主体である。詳細な規模は第27表のとおり。遺物は出土していない。



第85図　１区２号掘立柱建物

第27表　１区２号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		2間×1間・東西棟			面積	26.59㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－80°－W			位置	7K・L－7～9	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　5.90	P 1	47	40	48	隅丸方形	5.90	187
東辺　4.31	P 2	27	25	24	隅丸方形	4.31	393
南辺　6.44	P 3	61	48	38	楕円形	6.44	248
西辺　4.31	P 4	54	39	50	楕円形	2.16	333
	P 5	60	44	47	楕円形	P 1へ2.16	190

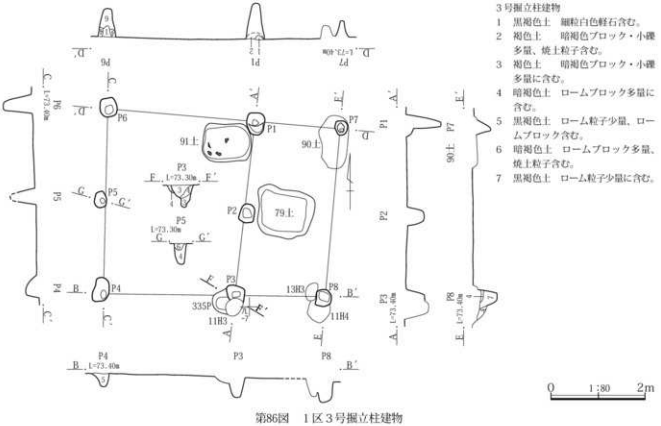
３号掘立柱建物(第86図、Ｐ L.10、第28表)

位置　７L－６・7グリッド。

重複　Ｐ３は11号掘立柱建物Ｐ３、335号ピットと、Ｐ７は90号土坑と重複するが新旧関係不明。Ｐ８は11号掘立柱建物Ｐ４より後出で、13号掘立柱建物Ｐ３と重複するが新旧関係不明。14・20・24号掘立柱建物と重複するが、柱穴同土の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－２～７°－E　　**面積**17.98㎡

形態　１間×２間＋東庇・南北棟。北辺は南辺より30cm長く、西辺は東辺より25cm長いため、北辺は東下がりに傾き、東辺は東へ外傾する。東庇も呼応して東へ外傾する。東辺の中間柱Ｐ２は10cm南に寄る。Ｐ１は柱痕が部分的に見られ、埋没土４・６は掘り方を充填したものと言える。Ｐ１・４の長径は47～52cmとやや長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は30～40cmである。柱穴の形態は隅丸方形がやや多く、ほかは楕円形である。柱穴の深さは32～78cmとばらつきがある。身屋部の北東隅に接してやや深い隅丸方形の91号土坑があり、埋没土中位に炭化物層を面的に含んでいる。壁際であり火処とは見なしがたく、何らかの内部施設であろう。79号土坑は東庇の中央に位置し、若干主軸方位が異なるが関連する可能性もある。詳細な規模は第28表のとおり。遺物は出土していない。



第86図　１区３号掘立柱建物

第28表　１区３号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×２間＋東庇・南北棟			面積	17.98㎡	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－２～７°－Ｅ			位置	７Ｌ－６・７	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　3.67	Ｐ１	47	40	78	隅丸方形	1.94	227
	Ｐ２	40	32	37	隅丸方形	1.73	―
南辺　2.81	Ｐ３	(47)	38	42	不明	2.81	―
西辺　3.92	Ｐ４	52	33	26	楕円形	1.98	219
	Ｐ５	33	27	54	楕円形	1.95	221
北辺　3.11	Ｐ６	40	37	60	隅丸方形	Ｐ１へ3.11	222
東庇　1.85	Ｐ７	30	27	32	楕円形	3.55	―
東庇　1.89	Ｐ８	39	37	43	隅丸方形	Ｐ３へ1.89	479

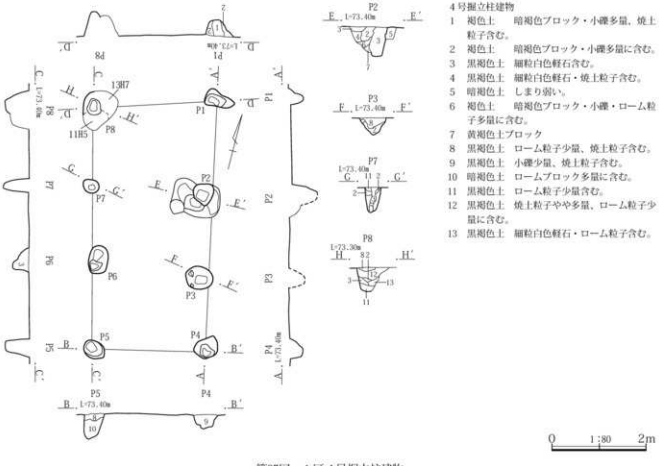
４号掘立柱建物(第87図、Ｐ Ｌ.10、第29表)

位置　７Ｊ・Ｋ－２グリッド。

重複　Ｐ８は11号掘立柱建物Ｐ５、13号掘立柱建物Ｐ７と重複するが新旧関係不明。

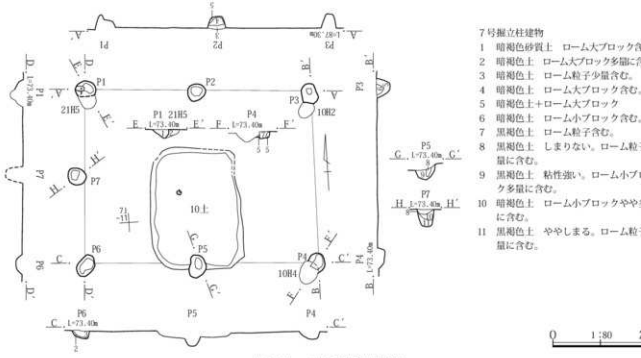
主軸方位Ｎ－５～９°－Ｗ　　**面積**13.09㎡

形態　１間×３間・南北棟。東辺は西辺より27cm長いため、北辺は西下がりに傾く。桁行柱間を平均すると、約1.745m・約5.8尺となるが、東辺のＰ１が北へ、Ｐ２が南に寄ることで30cm広い。Ｐ３も南に17cm寄る。西辺はほぼ３等分される。Ｐ２は複数のピットが重複するように見えるが、調査段階では分けられていない。Ｐ２部分を抽出したが、便宜的に周辺もあわせて掲載した。Ｐ７は柱痕が一部認められ、埋没土２は掘り方を充填したものと言えるが、全体としては均質なものが目立つ。Ｐ３、４～６の長径は49～66cmで、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の径は40cm前後が主体である。柱穴の形態は隅丸方形と楕円形が混在する。柱穴の深さは30cm台と50cm台にほぼ分かれる。詳細な規模は第29表のとおり。遺物は出土していない。



４号掘立柱建物
1　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、焼土粒子含む。
2　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
3　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
4　黒褐色土　細粒白色軽石・焼土粒子含む。
5　暗褐色土　しまり弱い。
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫・ローム粒子多量に含む。
7　黄褐色土ブロック
8　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子含む。
9　黒褐色土　小礫少量、焼土粒子含む。
10　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
11　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
12　黒褐色土　焼土粒子やや多量、ローム粒子少量に含む。
13　黒褐色土　細粒白色軽石・ローム粒子含む。

第87図　１区４号掘立柱建物



第88図　１区７号掘立柱建物

第29表　１区４号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×3間・南北棟			面積	13.09㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－5～9°－W			位置	7Ｊ・Ｋ・－2	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　5.37	Ｐ１	66	35	39	不整方形	2.04	299
	Ｐ２	46	43	56	隅丸方形	1.79	297
	Ｐ３	60	48	33	楕円形	1.57	309
南辺　2.44	Ｐ４	52	45	28	不整円形	2.44	325
西辺　5.10	Ｐ５	49	36	50	楕円形	1.71	310
	Ｐ６	61	40	31	隅丸方形	1.68	305
	Ｐ７	36	29	56	楕円形	1.72	291
北辺　2.56	Ｐ８	(34)	30	49	不明	Ｐ１へ2.56	293

第30表　１区７号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		2間×2間・東西棟			面積	17.68㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－86～87°－W			位置	7Ｉ・Ｊ－10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　4.71	Ｐ１	44	(29)	31	不明（重複）	2.31	26
	Ｐ２	38	37	31	円形	2.40	30
東辺　3.60	Ｐ３	44	31	29	隅丸方形	3.60	61
南辺　4.94	Ｐ４	36	(21)	15	不明（重複）	2.55	36
	Ｐ５	48	35	29	不整楕円形	2.39	72
西辺　3.73	Ｐ６	50	33	26	楕円形	1.90	32
	Ｐ７	40	35	39	円形	Ｐ１へ1.85	21

７号掘立柱建物(第88図、Ｐ Ｌ.27・28、第30表)

位置　７Ｉ・Ｊ－10・11グリッド。

重複　Ｐ１は21号掘立柱建物Ｐ５より後出。Ｐ４は10号掘立柱建物Ｐ４より前出で、Ｐ３は同掘立柱建物Ｐ２と重複するが新旧は確認できない。12・15・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－86～87°－Ｗ　　**面積**17.68㎡

形態　２間×２間・東西棟。南辺は北辺より23cm長いため、東辺は西へ内傾する。平面形はやや台形。北辺の中間柱Ｐ２は４cm西へ、南辺の中間柱Ｐ５は８cm同じく西へ寄る。西辺の中間柱Ｐ７はほぼ中央に位置するが、柱筋よりも外側へ張り出し、棟持柱と見なされる。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。Ｐ５・６の長径は48・50cmとやや長く、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は40cm前後が主体である。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。Ｐ７の深さは39cmとやや深く、棟持柱という性格に合致する。Ｐ４は15cmとやや浅い

が、全体として30cm前後を主体とする。建物の中央に断面皿状で整った長方形である10号土坑があり、内部施設と考えられる。Ｐ５と重複するが新旧関係は不明で、南辺は建物の南壁面と一致する。埋没土はサラサラとして炭化物を若干含む均質な黒褐色土で、人為埋没と言えるが、壁際に壁面からの崩落土が堆積しており、一定期間開口していたと見られる。10号土坑の規模は長径259cm短径191cm深さ17cmである。建物の詳細な規模は第30表のとおり。遺物は出土していない。

８号掘立柱建物(第89図、ＰＬ.27・28、第31表)

位置　７Ｊ・Ｋ－７～９グリッド。

重複　Ｐ２は19号掘立柱建物Ｐ２より前出で、Ｐ３は84号土坑と、Ｐ５・９は69号土坑と重複するが新旧関係不明。11・15・16・23号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－85°－Ｗ　　**面積**37.25㎡

形態　１間×３間・東西棟＋東庇・南下屋。桁行柱間を平均すると、約2.4433m・約8.1尺となるが、南辺のＰ６は東に７cm寄り、Ｐ７はＰ６・８間を等分する。各辺とも長さはほぼ均一で、整然として規格性が高い。南下屋の柱間は0.96～1.03m、東庇の柱間は1.11～1.23mで、桁行の半間に相当する。東庇の北東隅柱は未検出であるが、遺構写真から73号土坑の北西に想定できる。Ｐ２・６は柱痕が残り、埋没土５・８は掘り方を充填したものと言える。なお、Ｐ６は柱痕の中心断面ではないため細く、柱痕幅は計測できない。身屋部柱穴の長径は44～62cmで、下屋部は31～52cmと若干小さい。柱穴の形態は身屋部は隅丸方形・隅丸長方形で、庇・下屋部は楕円形に分かれる。北・東辺に接して、長方形で皿状の84号土坑と、やや深い69号土坑があり、内部施設の可能性もある。後者は東から人為埋没する。詳細な規模は第31表のとおり。遺物は出土していない。

９号掘立柱建物(第90図、第32表)

位置　７Ｋ・Ｌ－８・９グリッド。

重複　Ｐ５は191号ピットより後出で、Ｐ７は柱の立て替えでＰ８より後出。Ｐ２は77号土坑と重複するが新旧関係不明。２・20・22・23・25・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－80～81°－Ｗ　　**面積**28.41㎡

形態　１間×３間・東西棟。南辺は北辺より30cm短いが、Ｐ７の立て替えのためで、Ｐ８段階ではその半分程短いと思われる。このため、西辺は西へわずか外傾する。桁行柱間を平均すると、約2.07m・約6.8尺となるが、南辺のＰ５は東へ５cm寄り、Ｐ４も西へ寄るため、Ｐ４・５間は1.88mと19cm狭い。北辺のＰ２は77号土坑との重複により上位が不明であり、位置も柱筋より40cm程内側に入り込む。Ｐ２とＰ３間には78号土坑があり、重複による未検出の可能性もある。柱痕は見られない。埋没土にロームブロックを多量に含むものが目立つが、柱穴の中心からずれたものが多く、廃棄後の埋め戻しとは見なしにくい。Ｐ３・６の長径は59・48cmと若干長い楕円形で、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径も30～43cmとばらつきがある。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。柱穴の深さもばらつきがあるが、22・16cmと浅いＰ３・４を除き、38～60cmとやや深い。詳細な規模は第32表のとおり。遺物は出土していない。

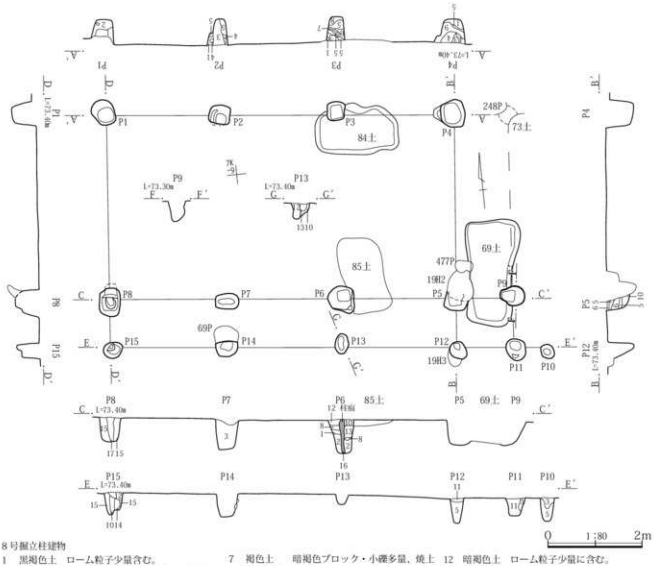
10号掘立柱建物(第91図、ＰＬ.27・28、第33表)

位置　７Ｉ・Ｊ－10・11グリッド。

重複　Ｐ４は７号掘立柱建物Ｐ４より後出で、Ｐ２は同掘立柱建物Ｐ３と重複するが、新旧関係は確定できない。Ｐ８は８号土坑より後出で、12号掘立柱建物Ｐ６と重複するが新旧関係不明。Ｐ１も15号土坑と重複するが同様。15・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－０～２°－Ｅ　　**面積**19.98㎡

形態　２間×３間・南北棟。西辺は東辺より13cm、北辺は南辺より26cm長いため、東辺は東へ外傾する。桁行柱間を平均すると、約1.805m・約6.0尺であるが、東辺のＰ２は南へ９cm、Ｐ３は北へ15cm寄るため、Ｐ２・３間は26cm狭い。西辺のＰ７も南へ10cm寄り呼応する。南辺の中間柱Ｐ５は柱筋から約20cm離れており、棟持柱と見なされる。東辺のＰ３や西辺のＰ７は柱筋の内外に外れており、全体として柱筋の通りが悪い。Ｐ６は柱痕が残り、埋没土10は掘り方を充填したものと言える。柱穴の径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。58cmと深いＰ３を除き、深さは20cm前後が主体で浅い。詳細な規模は第33表のとおり。遺物は出土していない。



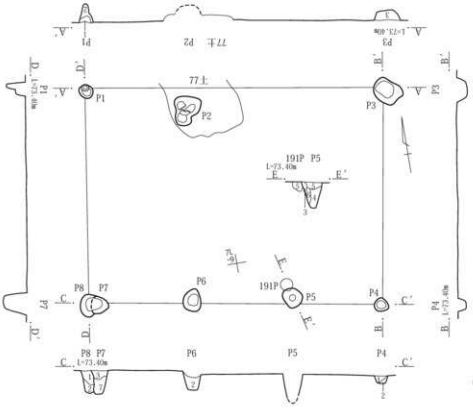
８号掘立柱建物

1　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロック含む。
3　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
4　褐色土　黄褐色土ブロック含む。
5　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
7　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、焼土粒子含む。
8　黄褐色土　暗褐色土ブロック含む。
9　黒褐色土　ローム粒子やや多量に含む。
10　暗褐色土　ロームブロック含む。
11　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、軽石含む。
12　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
13　暗褐色土　ローム粒子含む。
14　暗褐色土　均質
15　暗褐色土＋ローム大ブロック
16　暗褐色土　しまりない。
17　黒褐色土　しまる。ローム大ブロック含む。

第89図　１区８号掘立柱建物

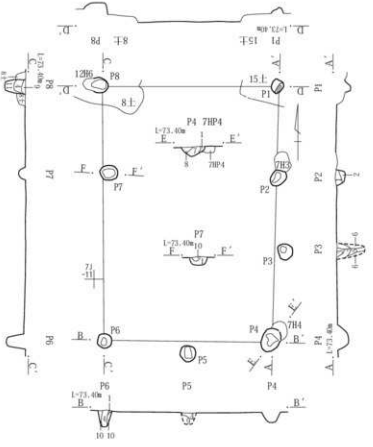
第31表　１区８号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×３間・東西棟＋東庇・南下屋			面積	37.25㎡	旧ピット番号
主軸方位					位置	７Ｊ・Ｋ－７～９	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　7.34	Ｐ１	56	44	57	隅丸方形	2.44	311
	Ｐ２	44	40	54	隅丸方形	2.46	262
	Ｐ３	(40)	36	55	隅丸方形	2.44	253
東辺　3.90	Ｐ４	62	54	49	隅丸方形	3.90	249
南辺　7.32	Ｐ５	48	(25)	47	不明（重複）	2.37、Ｐ９へ1.11	331
	Ｐ６	57	50	71	隅丸方形	2.47	163
	Ｐ７	49	33	66	隅丸長方形	2.48	319
西辺　3.94	Ｐ８	60	44	51	隅丸長方形	Ｐ１へ3.94	41
	Ｐ９	52	41	52	不定形	Ｐ11へ1.07	476
	Ｐ10	31	27	51	楕円形	0.69	277
	Ｐ11	48	41	37	楕円形	1.23	276
下屋　1.03	Ｐ12	40	33	56	楕円形	2.46	275
	Ｐ13	42	28	22	楕円形	2.42	51
	Ｐ14	46	33	50	楕円形	2.45	87
下屋　0.96	Ｐ15	37	35	48	楕円形	Ｐ８へ0.96	83



９号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
4　黒褐色土　ローム粒子微量に含む。
5　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量に含む。
6　黒褐色土　ローム粒子やや多量に含む。
7　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。

第90図　１区９号掘立柱建物



10号掘立柱建物
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　黒褐色土　ローム粒子含む。
3　暗褐色土　やや砂質
4　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
5　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
6　黒褐色土＋ローム大ブロック　しまらない。
7　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
8　暗褐色土＋ローム大ブロック
9　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
10　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
11　黒褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

第91図　１区10号掘立柱建物

第32表　１区９号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×３間・東西棟			面積	28.41㎡	旧ピット番号
主軸方位	N－80～81°－W				位置	７K・L－８・９	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　6.36	P１	30	28	41	円形	2.20	176
	P２	(63)	(55)	38	不定形	4.25	—
東辺　4.58	P３	59	47	22	隅丸長方形	4.58	202
南辺　6.06	P４	31	28	16	円形	1.88	214
	P５	43	37	60	隅丸方形	2.11	192
	P６	48	38	40	楕円形	2.07	336
西辺　4.57	P７	(40)	35	50	円形	P１へ4.57	184
	P８	(48)	(21)	48	不明（重複）		185

第33表　１区10号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		２間×３間・南北棟			面積	19.98㎡	旧ピット番号
主軸方位	N－０－２°－E				位置	７I・J－10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　5.35	P１	28	25	(13)	円形	1.89	—
	P２	35	30	(19)	楕円形	1.54	75
	P３	34	31	58	円形	1.95	70
南辺　3.56	P４	(51)	39	22	楕円形	1.80	37
	P５	34	34	24	円形	1.80	35
西辺　5.48	P６	30	30	38	円形	3.58	33
	P７	39	31	16	楕円形	1.90	27
北辺　3.82	P８	33	(30)	25	楕円形	P１へ3.82	50

11号掘立柱建物(第92図、ＰＬ.27、第34・35表)

位置　７J～L－６～８グリッド。

重複　Ｐ４は３号掘立柱建物Ｐ８より前出で、Ｐ８は287号ピットより後出。Ｐ１は27号掘立柱建物Ｐ４と、Ｐ５は４号掘立柱建物Ｐ８、13号掘立柱建物Ｐ７と、Ｐ11は282号ピットと、Ｐ12は240号ピットと、それぞれ重複するが新旧関係不明。２・14・16・20・24・26・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－80～84°－W　　**面積**39.91㎡

形態　１間×３(４)間・東西棟。北辺は南辺より28cm長いため、西辺は西へ外傾し、南辺は東下がりに傾く。平面形はやや歪む。柱穴の配置はやや特異であり、中央Ｐ２・９の柱筋を境に東西で様相を変える。ただし、Ｐ９・10間の柱穴は未検出であるが、遺構写真から73号土坑脇の落ち込み底面に想定できる。また、Ｐ12の西に２号掘立柱建物Ｐ３があり、規模から本遺構の柱穴が含まれている可能性も考慮される。この場合、間仕切りとして扱っているＰ５・12間の柱筋が側柱となる可能性も生じる。この柱筋の柱間は0.84～0.85mと桁行の半間に相当する。全体の桁行は３間であるが、構造を考慮して便宜的に４間として扱う。桁行柱間を平均すると、約1.875m・約6.2尺であるが、北辺のＰ３は７㎝東に、南辺のＰ９は35㎝西に寄る。Ｐ６は柱痕状に見え、埋没土２はロームブロックを多量に含むが、重複するＰ７の影響も考えられる。Ｐ10は長径82cmと長い楕円形で、埋没土２により上位から埋まり、廃棄後に柱を抜き取り、人為的に埋められた可能性もある。一方、南辺はＰ７のほか、287・242号ピットもＰ８・９と重複しており、柱の立て替えも想定される。そのほかの柱穴の径は45㎝前後が主体である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。柱穴の深さは25㎝前後の浅いもの３基と、48～65㎝と深い６基でほぼ二分される。詳細な規模は第34表のとおり。Ｐ10から不明鉄製品が出土している。

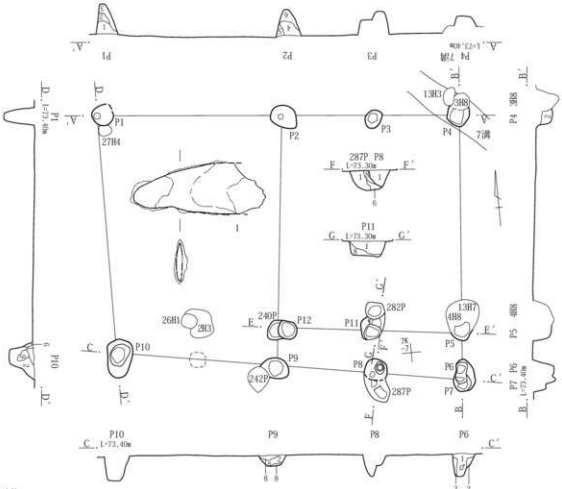
12号掘立柱建物(第93図、ＰＬ.27・28、第36表)

位置　７I・J－10・11グリッド。

重複　Ｐ５は24号ピットより後出で、Ｐ１は15号掘立柱建物Ｐ１、39号ピットと、Ｐ２は12号土坑と、Ｐ３は11号土坑と、Ｐ４は４号土坑と、Ｐ６は10号掘立柱建物Ｐ８、８号土坑と重複するが新旧関係不明。７・15・18・21号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－11～12°－E　　**面積**18.06㎡

形態　１間×２間・南北棟。南辺は北辺より９㎝長いた



11号掘立柱建物

1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　暗褐色土　粘土ブロック多量に含む。
4　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
5　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、焼土粒子少量に含む。
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
7　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子微量に含む。
8　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
9　暗褐色土　ロームブロックごく多量に含む。

第92図　１区11号掘立柱建物跡と出土遺物

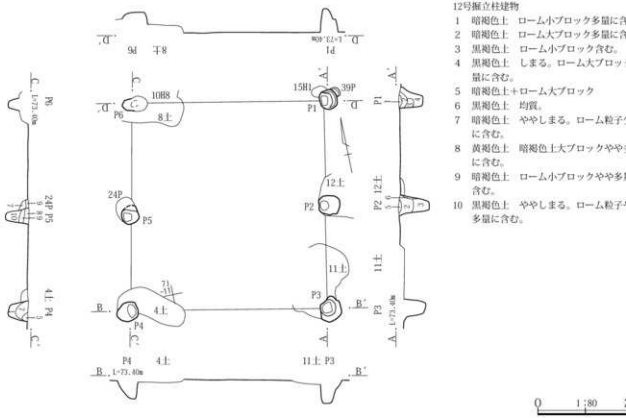
第34表　１区11号掘立柱建物計測値

建物全体の規模			1間×3(4)間・東西棟			面積	39.91㎡	非掲載遺物	旧ピット
主軸方位	N－80～84°－W					位置	7Ｊ～Ｌ－6～8	破片数	番号
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)				形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ					
北辺　7.60	P 1	45	45	65		円形	3.89		209
	P 2	62	46	61		楕円形	1.96	上師直2	230
	P 3	41	32	52		楕円形	1.80	上師直1	335
東辺　5.63	P 4	47	(32)	26		不明	4.64	土師直壺3	480
	P 5	(49)	(33)	36		不明	1.00、P11へ1.91		293
南辺　7.28	P 6	(51)	38	48		不明	0.34		290
	P 7	45	(34)	37		不明	1.81		290
	P 8	48	(47)	53		円形	2.22		286
	P 9	60	44	24		楕円形	3.35、P12へ0.85		243
西辺　5.10	P10	82	52	53		楕円形	Ｐ１へ5.10		252
	P11	49	(40)	35		不明(重複)	1.78		283
	P12	40	38	24		円形	Ｐ２へ4.53		241

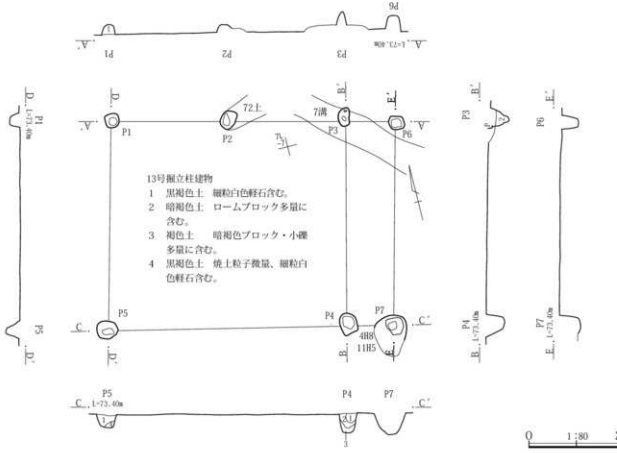
第 35 表　１区 11 号掘立柱建物出土遺物

挿図 PL.80.	NO.	種別	器形	取上番号	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第 92 図	1	鉄製品	不明	フク上 P 10	6.9	2.7	0.3	20.9		不明。形状は鎌の先端部分に類似しているが、上下ともに刃部状を呈している。

12号掘立柱建物
1　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
2　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
4　黒褐色土　しまる。ローム大ブロック多量に含む。
5　暗褐色土＋ローム大ブロック
6　黒褐色土　均質。
7　暗褐色土　ややしまる。ローム粒子少量に含む。
8　黄褐色土　暗褐色土大ブロックやや多量に含む。
9　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
10　黒褐色土　ややしまる。ローム粒子やや多量に含む。



第93図　１区12号掘立柱建物



第94図　１区13号掘立柱建物

第36表　１区12号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×２間・南北棟			面積	18.06㎡	旧ピット番号
主軸方位	N－11～12°－E				位置	７Ｉ・Ｊ－10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴№	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　4.40	Ｐ１	40	36	51	隅丸方形	2.22	39
	Ｐ２	44	40	56	隅丸方形	2.18	54
南辺　4.15	Ｐ３	55	47	48	不整円形	4.15	64
西辺　4.40	Ｐ４	45	40	41	円形	2.01	31
	Ｐ５	(38)	36	48	隅丸方形	2.40	22
北辺　4.06	Ｐ６	(26)	(24)	(25)	不明(重複)	Ｐ１へ4.06	50

第37表　１区13号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×２間・東西棟＋東下屋			面積	26.42㎡	井掲載遺物	旧ピット番号
主軸方位	N－76～77°－W				位置	７Ｋ・Ｌ－６・７	破片数	
桁・梁の規模(m)	柱穴№	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺　4.92	Ｐ１	30	29	21	隅丸方形	2.41		390
	Ｐ２	41	30	16	楕円形	2.51		－
東辺　4.33	Ｐ３	40	23	38	楕円形	4.33	土師甕２	481
南辺　5.10	Ｐ４	44	36	40	隅丸方形	5.10		285
西辺　4.45	Ｐ５	45	38	30	楕円形	Ｐ１へ4.45		217
東下屋　1.10	Ｐ６	33	28	33	隅丸方形	4.31		478
東下屋　0.95	Ｐ７	(67)	(40)	45	不明(重複)	Ｐ４へ0.95		293

め、東辺は若干西へ内傾する。西辺の中間柱Ｐ５は20cm南に寄る。柱痕は見られない。ロームブロックを多量に含む埋没土が目立ち、特に埋没土２はＰ１・２、埋没土８はＰ５の上位に水平方向に埋没しており、廃棄後に人為的に埋められた可能性が高い。Ｐ３・４の長径は55・45cmと若干長く、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は40cm前後を主体とする。柱穴の形態は隅丸方形と円形が混在する。深さは41～56cmとやや深い。詳細な規模は第36表のとおり。遺物は出土していない。

13号掘立柱建物(第94図、Ｐ L.27、第37表)

位置　７Ｋ・Ｌ－６・７グリッド。

重複　Ｐ２は72号土坑と、Ｐ３は７号溝と、Ｐ７は４号掘立柱建物Ｐ８、11号掘立柱建物Ｐ５と重複するが新旧関係不明。２・14・16・20・24・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－76～77°－W　　**面積**26.42㎡

形態　１間×２間・東西棟＋東下屋。東辺が西辺より18cm長いため、南辺は西下がりにやや傾く。北辺の中間柱Ｐ２は西に５cm寄る。東下屋の柱間は0.95～1.10mで、桁行の半間に相当する。柱痕は見られない。Ｐ４は埋没土にロームブロックが目立つが、柱穴の中心を逸れている。他に埋没土で特徴的なものはない。柱穴の径は40cm前後を主体とする。柱穴の形態は隅丸方形と楕円形が混在する。Ｐ１・２は他に比べて浅いが、そのほかの深さも30～40cmとやや浅い。詳細な規模は第37表のとおり。遺物は出土していない。

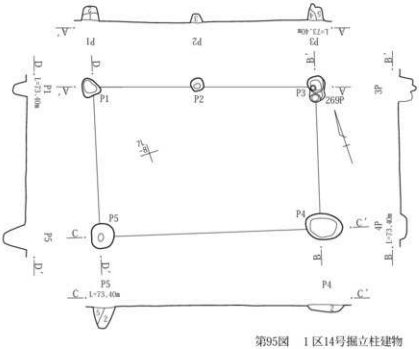
14号掘立柱建物(第95図、Ｐ L.27、第38表)

位置　７Ｋ・Ｌ－７・８グリッド。

重複　Ｐ３は269Ｐと重複するが新旧関係不明。２・11・13・16・20・24・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

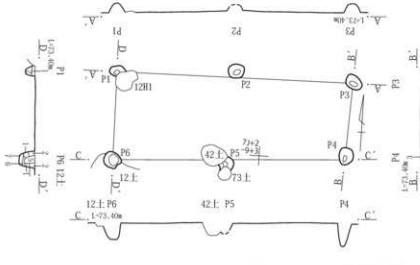
主軸方位N－71～73°－W　　**面積**14.55㎡

形態　１間×２間・東西棟。西辺が東辺より22cm長いため、南辺は西下がりに傾く。北辺の中間柱Ｐ２は10cm西に寄る。柱痕は見られない。Ｐ１・４・５はロームブロックを多量に含む埋没土１・２により上位まで埋まっており、廃棄後に人為的に埋められた可能性が高い。Ｐ４は長径80cmで底部の平坦な楕円形であり、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径も27～53cmとばらつきがある。柱穴の形態は隅丸方形と楕円形が混在する。深さは13～52cmでばらつきがある。詳細な規模は第38表のとおり。遺物は出土していない。



14号掘立柱建物
1　暗褐色土　ロームブロック多量、焼土粒子微量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
4　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
5　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

第95図　１区14号掘立柱建物



15号掘立柱建物
1　暗褐色土　ローム粒子少量含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
4　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
5　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
6　暗褐色土＋ローム大ブロック
7　黒褐色土　均質。

第96図　１区15号掘立柱建物

第38表　１区14号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×2間・東西棟			面積	14.55㎡		旧ピット番号
主軸方位		N－71～73°－W			位置	7K・L－7・8		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺　4.74	P 1	39	32	29	隅丸三角形	2.27		208
	P 2	27	27	18	隅丸方形	2.47		391
東辺　2.97	P 3	37	(34)	33	隅丸方形	2.97		269
南辺　4.71	P 4	80	55	13	楕円形	4.71		236
西辺　3.19	P 5	53	48	52	隅丸方形	P 1へ3.19		213

第39表　１区15号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×2間・東西棟			面積	8.53㎡		旧ピット番号
主軸方位		N－86～88°－E			位置	7J－9・10		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺　5.00	P 1	(35)	(23)	20	楕円形	2.53		81
	P 2	33	29	13	隅丸方形	2.47		378
東辺　1.59	P 3	38	27	21	楕円形	1.59		381
南辺　4.89	P 4	36	30	49	楕円形	2.53		44
	P 5	31	(30)	21	不明(重複)	2.36		－
西辺　1.86	P 6	(37)	35	36	円形	P 1へ1.86		53

15号掘立柱建物(第96図、Ｐ Ｌ．27・28、第39表)

位置　７Ｊ－９・10グリッド。

重複　Ｐ１は12号掘立柱建物Ｐ１と、Ｐ５は42・73号土坑と、Ｐ６は12号土坑と重複するが新旧関係不明。７・８・10・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－86 ～ 88°－Ｅ　　**面積**8.53㎡

形態　１間×２間・東西棟。西辺が東辺より27cm長いため、北辺は東下がりに傾く。南辺の中間柱Ｐ５は８cm西に寄る。Ｐ６の埋没土６・７は掘り方を充填したものと言えるが、上位は柱痕と見なしにくい。柱穴の径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。Ｐ４は49cmとやや深いが、そのほかは13 ～ 36cmと浅い。詳細な規模は第39表のとおり。中央部に楕円形で浅い19号土坑があり、内部施設の可能性もある。遺物は出土していない。

16号掘立柱建物(第97図、Ｐ Ｌ．27、第40表)

位置　７Ｊ・Ｋ－７・８グリッド。

重複　Ｐ１はＰ２より前出である。２・８・11・13・14・24・26号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－85 ～ 86°－Ｗ　　**面積**23.00㎡

形態　２間×１間・東西棟。北辺は南辺より70cm長いため、東辺は東へ外傾する。東辺の中間柱Ｐ４は11cm北に寄る。柱痕は見られない。Ｐ５の埋没土は黒褐色土と褐色土が水平方向に互層をなし、Ｐ６は大礫で上位まで埋まることから、廃棄後に人為的に埋められた可能性が高い。柱穴の径は50cm前後にまとまるが、概して長円に近く、柱が抜き取られた可能性がある。Ｐ１・２の重複も同様な状況が考慮される。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。Ｐ３の深さは74cmと深く、埋没状況も異例だが、そのほかは18 ～ 38cmと概ね浅い。詳細な規模は第40表のとおり。遺物は出土していない

17号掘立柱建物(第98図、第41表)

位置　７Ｊ・Ｋ－５グリッド。

重複　Ｐ２は14号溝と重複するが新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－７～８°－Ｅ　　**面積**12.98㎡

形態　１間×(３)間・南北棟。南辺が北辺より16cm長いため、東辺は西へ内傾し、南北辺とも西下がりに傾く。桁行は形態から３間と見られ、柱間を平均すると約1.9233m・約6.3尺となり、西辺Ｐ４の位置とほぼ一致する。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。柱穴の長径は28 ～ 46cmとばらつきがある。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは17 ～ 30cmとばらつくが全体に浅い。詳細な規模は第41表のとおり。遺物は出土していない。

18号掘立柱建物(第99図、Ｐ Ｌ．27・28、第42表)

位置　７Ｊ・Ｋ－９・10グリッド。

重複　７・10・12・15・21・23号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－５～ 10°－Ｅ　　**面積**24.03㎡

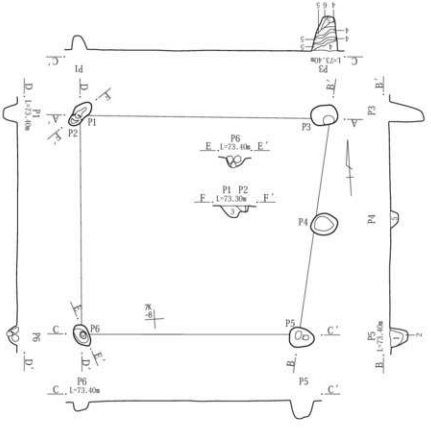
形態　１間×２間・正方形。南辺が北辺より43cm長いため、西辺は東へ内傾する。西辺の中間柱Ｐ５は73cm南に寄っており、東辺のＰ２と付合しない。Ｐ２・３は柱痕

第40表　１区16号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		２間×１間・東西棟			面積	23.00㎡	井掲載遺物破片数	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－85 ～ 86°－Ｗ			位置	７Ｊ・Ｋ－７・８		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
北辺　5.26	Ｐ１	(35)	29	28	不明(重複)	Ｐ３へ5.27	土師壺類２	211
	Ｐ２	(28)	23	28	楕円形	－		210
東辺　4.63	Ｐ３	47	42	74	隅丸長方形	2.21		234
	Ｐ４	48	46	18	楕円形	2.43		237
南辺　4.56	Ｐ５	52	42	38	楕円形	4.56		243
西辺　4.74	Ｐ６	51	31	20	楕円形	Ｐ１へ4.74		344

第41表　１区17号掘立柱建物計測値

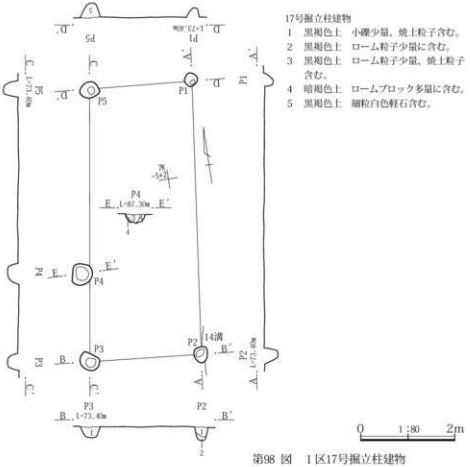
建物全体の規模		１間×(３)間・南北棟			面積	12.98㎡	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－７～８°－Ｅ			位置	７Ｊ・Ｋ－５	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　5.76	Ｐ１	28	28	17	円形	5.76	364
南辺　2.33	Ｐ２	33	29	28	楕円形	2.33	327
西辺　5.78	Ｐ３	43	34	22	楕円形	1.91	326
	Ｐ４	46	42	20	円形	3.90	308
北辺　2.17	Ｐ５	39	34	30	楕円形	Ｐ１へ2.17	300



16号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　焼土粒子微量、細粒白色軽石含む。
4　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
5　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
6　褐色土　粘土ブロック含む。

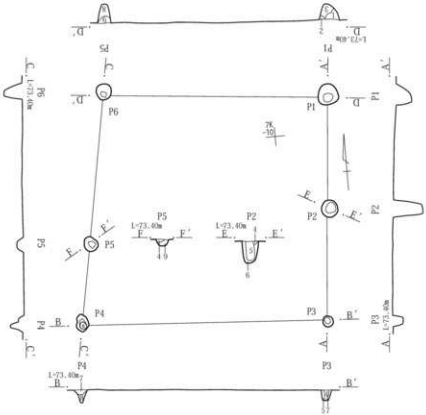
P６(1/40)礫出土状況

第97図　１区16号掘立柱建物



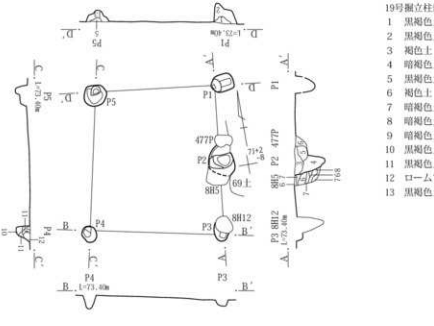
17号掘立柱建物
1　黒褐色土　小礫少量、焼土粒子含む。
2　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子含む。
4　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
5　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

第98 図　１区17号掘立柱建物



18号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
4　暗褐色土　均質。
5　暗褐色土　ローム粒子含む。
6　暗褐色土　ややしまる。ローム小ブロック多量に含む。
7　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
8　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
9　暗褐色土　ローム粒子微量に含む。

第99図　１区18号掘立柱建物



19号掘立柱建物
1　黒褐色土　ローム粒子多量、細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、焼土粒子含む。
4　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
5　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
7　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。
8　暗褐色土　ロームブロック含む。
9　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
10　黒褐色土　均質。
11　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
12　ロームブロック
13　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。

第100図　１区19号掘立柱建物

にも見えるが、明確な充填土は見られない。Ｐ１・４は長径46・38cmとやや長く壁面は斜めで、Ｐ４の底面は段差を持ち、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。63cmと深いＰ２を除き、柱穴の深さは14～38cmと浅い。詳細な規模は第42表のとおり。遺物は出土していない。

19号掘立柱建物(第100図、ＰＬ.27、第43表)

位置　７Ｊ－８グリッド。

重複　Ｐ２は８号掘立柱建物Ｐ５より後出で、471号ピットと重複するが新旧関係不明。Ｐ３は同じく８号掘立柱建物Ｐ12と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位Ｎ－６～12°－Ｅ　　**面積**8.11㎡

形態　１間×２間・南北棟。東辺は西辺より21cm長いため、北辺は西下がりに傾く。Ｐ２は東辺を等分する。Ｐ２・４の埋没土にロームブロックが目立つが、柱穴の中心を逸れている。他に埋没土で特徴的なものはない。柱穴の長径は36～70cmとやや大きく、Ｐ１・５は底面が二段に分かれており、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の形態は隅丸方形と円形が混在する。深さは13～56cmとばらつきがある。詳細な規模は第43表のとおり。遺物は出土していない。

20号掘立柱建物(第101図、第44表)

位置　７Ｌ－７・８グリッド。

重複　Ｐ１は25号掘立柱建物Ｐ２と、Ｐ２は24号掘立柱建物Ｐ５と重複するが新旧関係不明。２・３・９・14・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－86～90°－Ｅ　　**面積**7.18㎡

形態　１間×２間・東西棟。南辺は北辺より33cm長いため、東辺は西へ、西辺は東へ内傾して、平面形は台形となる。北辺の中間柱Ｐ２は東に５cm寄る。柱痕は見られない。埋没土に褐色土が目立つが、地山の影響であろう。Ｐ１の長径は53cmと長く、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは22～49cmとばらつきがある。詳細な規模は第44表のとおり。遺物は出土していない。

21号掘立柱建物(第102図、ＰＬ.27・28、第45表)

位置　７Ｊ・Ｋ－10・11グリッド。

重複　Ｐ５は７号掘立柱建物Ｐ１より前出で、Ｐ１は６号土坑、Ｐ２は21号土坑、Ｐ５は７号掘立柱建物Ｐ１と重複するが新旧関係不明。10・12・18号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－86°－Ｗ　　**面積**11.53㎡

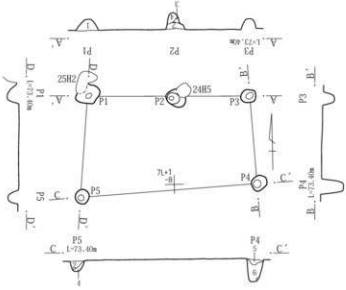
形態　１間×２間・東西棟。北辺は南辺より18cm長いため、東辺は東へ外傾する。南辺の中間柱Ｐ４は４cm東に寄る。柱痕は見られない。Ｐ５の埋没土はロームブロックを多量に含むが、重複の影響も考慮される。そのほかの埋没土に特徴的なものはない。Ｐ１は長径55cmと長い楕円形で、底面は二段分かれる。Ｐ５の底面は平坦も同様で、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは27～46cmとややばらつきがある。詳細な規模は第45表のとおり。遺物は出土していない。

第42表　１区18号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×２間・正方形			面積	24.03㎡	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－５～10°－Ｅ			位置	７Ｊ・Ｋ－９・10	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　4.73	Ｐ１	46	45	34	不整円形	2.35	266
	Ｐ２	36	35	63	円形	2.38	40
南辺　5.18	Ｐ３	24	23	22	円形	5.18	85
西辺　4.95	Ｐ４	38	27	27	不整楕円形	1.74	52
	Ｐ５	32	28	14	楕円形	3.21	28
北辺　4.75	Ｐ６	35	32	38	円形	Ｐ１へ4.75	62

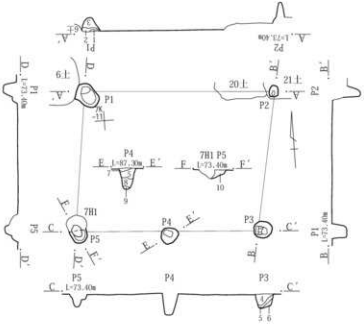
第43表　１区19号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		１間×２間・南北棟			面積	8.11㎡	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－６～12°－Ｅ			位置	７Ｊ－８	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
東辺　3.13	Ｐ１	48	36	46	隅丸方形	1.57	251
	Ｐ２	70	54	56	不明（重複）	1.58	332
南辺　2.85	Ｐ３	(41)	(28)	13	不明（重複）	2.85	275
西辺　2.92	Ｐ４	36	30	30	円形	2.92	46
北辺　2.51	Ｐ５	47	44	27	円形	Ｐ１へ2.51	256



20号掘立柱建物
1　褐色土　粘土ブロック含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
4　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
5　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量、焼土粒子少量に含む。

第101図　１区20号掘立柱建物



21号掘立柱建物
1　暗褐色砂質土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
3　暗褐色土　ややしまり粘性あり。ローム粒子少量に含む。
4　暗褐色土　ローム粒子含む。
5　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
6　黒褐色土　ローム粒子含む。
7　暗褐色土　均質。
8　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
9　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
10　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。

第102図　１区21号掘立柱建物

第44表　１区20号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×２間・東西棟			面積	7.18㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－86～90°－E			位置	７Ｌ－７・８	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　3.40	Ｐ１	53	(43)	25	隅丸方形	1.75	201
	Ｐ２	43	(31)	36	楕円形	1.65	205
東辺　1.87	Ｐ３	31	27	26	隅丸方形	1.87	369
南辺　3.73	Ｐ４	34	29	49	円形	3.73	220
西辺　2.16	Ｐ５	30	29	22	円形	Ｐ１へ2.16	199

第45表　１区21号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×２間・東西棟			面積	11.33㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－86°－W			位置	７Ｊ・Ｋ－10・11	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　4.00	Ｐ１	55	40	29	楕円形	4.00	49
東辺　2.93	Ｐ２	(24)	19	36	楕円形	2.93	－
南辺　3.82	Ｐ３	36	35	39	円形	1.88	38
	Ｐ４	37	35	46	円形	1.95	29
西辺　2.97	Ｐ５	(42)	35	27	不明(重複)	Ｐ１へ2.97	25

22号掘立柱建物(第103図、ＰＬ.27、第46表)

位置　７Ｋ・Ｌ－８・９グリッド。

重複　Ｐ４は67号土坑より後出で、Ｐ１は93号土坑と重複するが新旧関係不明。２・９・23・25・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－83°－Ｗ　　**面積**26.83㎡

形態　２間×３間・東西棟。南辺は北辺より31cm長いため、東辺は西へ内傾する。桁行柱間を平均すると、約1.915ｍ・約6.3尺であるが、北辺のＰ２は31cm東へ、南辺のＰ５は43cm西へ寄る。Ｐ２は柱痕が残り、埋没土３は掘り方を充填したものと言える。柱穴の径は45cm前後が主体である。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは18～57cmとばらつきがある。詳細な規模は第46表のとおり。遺物は出土していない。

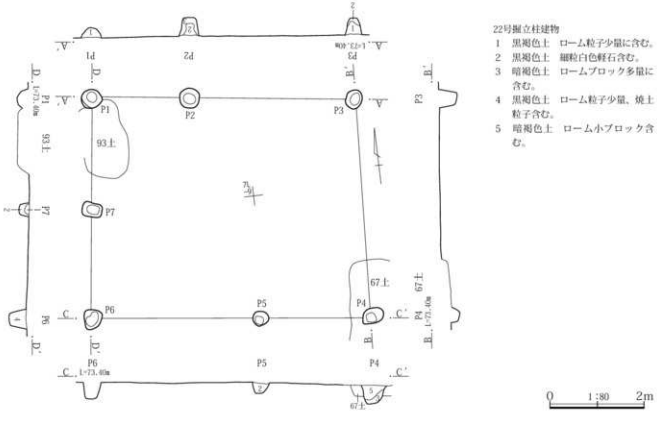
23号掘立柱建物(第104図、ＰＬ.27、第47表)

位置　７Ｊ・Ｋ－８・９グリッド。

重複　Ｐ６は17号土坑と重複するが新旧関係不明。２・８・９・18・22号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－３～４°－Ｅ　　**面積**26.85㎡

形態　２間×１間・南北棟＋西下屋。北辺は南辺より18cm長いため、東辺は東へ外傾する。北辺の中間柱Ｐ２は32cm西に、南辺の中間柱Ｐ５は11cm東に寄る。Ｐ２・５とも北辺・南辺の柱筋より外側に張り出しており、棟持柱と見なされる。この場合、棟方向は柱筋よりも西に傾く。西下屋の柱間は0.84～0.85mとやや狭い。Ｐ４は



第103図　１区22号掘立柱建物

第46表　１区22号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		2間×3間・東西棟			面積	26.83㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－83°－W			位置	7K・L－8・9	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　5.59	P 1	45	41	24	円形	2.06	342
	P 2	43	41	41	円形	3.52	186
東辺　4.64	P 3	40	34	57	楕円形	4.64	195
南辺　5.90	P 4	48	33	18	隅丸方形	2.38	162
	P 5	33	31	24	円形	3.52	334
西辺　4.70	P 6	43	37	36	不整楕円形	2.32	313
	P 7	42	29	22	隅丸長方形	P 1へ2.39	181

褐色土で上位まで埋まっており、人為埋没が考慮される。柱穴の径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは23 ～ 56cmとややばらつきがある。西下屋壁面に沿って、細長方形の95号土坑があり、内部施設と考えられる。焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。詳細な規模は第47表のとおり。P5から中世在地系土器鍋鉢類１片が出土している。

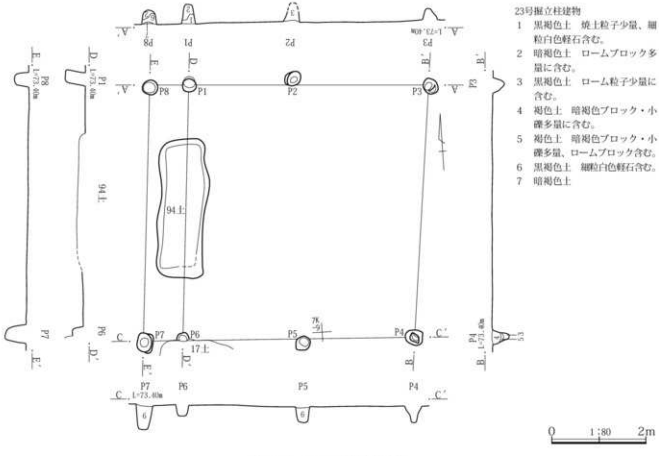
24号掘立柱建物(第105図、ＰＬ.27、第48表)

位置　７Ｋ・Ｌ－７・８グリッド。

重複　Ｐ５は20号掘立柱建物Ｐ２と重複するが新旧関係不明。２・３・11・13・14・16・24・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同土の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－０～４°－Ｅ　　**面積**18.59㎡

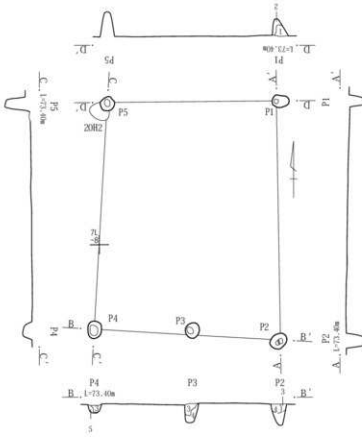
形態　２間×１間・南北棟。東辺が西辺より24cm長く、南辺は北辺より39cm長いため、南辺は東下がりに傾き、西辺は東ややや内傾する。平面形はやや台形。南辺の中間柱Ｐ３は５cm東に寄り、柱筋より内側に入り込んでおり、棟持柱と見なされる。Ｐ１・３・４は柱痕が一部残り、埋没土２・４・５は掘り方を充填したものと言える。柱穴の径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは22 ～ 53cmとややばらつきがある。詳細な規模は第48表のとおり。遺物は出土していない。



第104図　１区23号掘立柱建物

第47表　１区23号掘立柱建物計測値

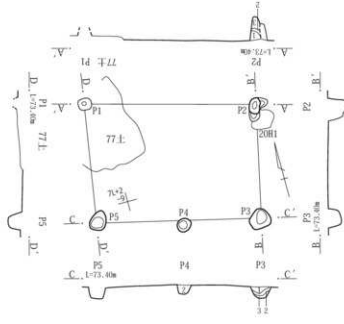
建物全体の規模		２間×１間・南北棟＋西下屋			面積	26.85㎡	旧ピット番号
主軸方位		Ｎ－３～４°－Ｅ			位置	７Ｊ・Ｋ－８・９	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　5.08	Ｐ１	29	27	42	円形	2.22	183
	Ｐ２	37	31	41	円形	2.86	315
東辺　5.35	Ｐ３	35	30	23	楕円形	5.35	372
南辺　4.90	Ｐ４	37	32	35	楕円形	2.34	255
	Ｐ５	33	30	32	円形	2.56	265
西辺　5.41	Ｐ６	25	(18)	23	不明(重複)	8.2、Ｐ１へ5.41	158
西下屋　0.84	Ｐ７	43	40	56	円形	5.39	267
西下屋　0.85	Ｐ８	32	31	34	円形	Ｐ１へ0.85	182



24号掘立柱建物
1　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量、焼土粒子少量に含む。
3　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
4　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
5　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

0　1:80　2m

第105図　１区24号掘立柱建物



25号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

0　1:80　2m

第106図　１区25号掘立柱建物

第48表　１区24号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		2間×１間・南北棟			面積	18.59㎡	非掲載遺物	旧ピット
主軸方位		N－０～４°－E			位置	７K・L－７・８	破片数	番号
桁・梁の規模(m)	柱穴№	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)		
		長径	短径	深さ				
東辺　5.07	P１	35	26	36	楕円形	5.07	土師杯１	228
南辺　3.95	P２	37	30	47	楕円形	1.92		235
	P３	33	30	44	円形	2.03		218
西辺　4.83	P４	37	29	22	楕円形	4.83		216
北辺　3.56	P５	31	30	53	円形	P１へ3.56		―

第49表　１区25号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		2間×１間・南北棟			面積	8.74㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－75～77°－W			位置	７L－８・９	
桁・梁の規模(m)	柱穴№	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　3.63	P１	28	25	―	隅丸方形	3.63	―
東辺　2.37	P２	34	20	51	楕円形	2.37	200
南辺　3.49	P３	45	41	27	不整円形	1.66	198
	P４	30	28	19	円形	1.83	188
西辺　2.54	P５	43	33	28	楕円形	P１へ2.54	400

25号掘立柱建物(第106図、第49表)

位置　７L－８・９グリッド。

重複　P１は77号土坑と、P２は20号掘立柱建物P１と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。2・9・22・27号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－75～77°－W　　**面積**8.74㎡

形態　２間×１間・南北棟。北辺は南辺より14cm長いため、西辺は西へ外傾する。南辺の中間柱P４は８cm西に寄り、柱筋より外側へ張り出すが、構造上棟持柱とは見なし難い。P２・３は埋没土が水平方向で、人為埋没も考慮される。P３・５の長径は45・43cmとやや長く、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは19～51cmとばらつきがある。詳細な規模は第49表のとおり。遺物は出土していない。

26号掘立柱建物(第107図、P L.27、第50表)

位置　７J・K－７グリッド。

重複　P１は２号掘立柱建物P３と重複するが新旧関係不明。11・13・16号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

主軸方位N－89～90°－E　　**面積**9.17㎡

形態　１間×２間・東西棟。北辺は南辺より33cm長いため、西辺は西へ外傾する。北辺の中間柱P２は４cm西に、南辺の中間柱P５は９cm西に寄り、両者符号する。P２・５は柱痕が残り、埋没土４は掘り方を充填したものと言える。50cm前後と大きいP６を除き、径は35cm前後を主体とする。柱穴の形態は隅丸方形と円形・楕円形が混在する。深さは24～57cmとばらつくがやや深い。西辺寄り中央に長方形でやや深い73号土坑があり、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。詳細な規模は第50表のとおり。遺物は出土していない。

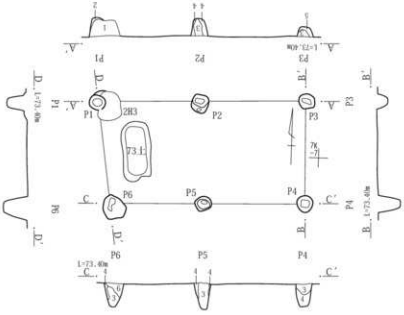
27号掘立柱建物(第108図、第51表)

位置　７K・L－７・８グリッド。

重複　P４は11号掘立柱建物P１と重複するが新旧関係不明。２・９・13・14・20・22・24・25号掘立柱建物と重複するが、柱穴同士の重複がなく新旧関係不明。

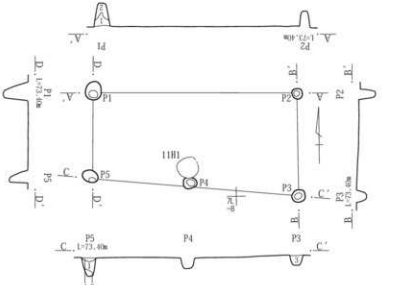
主軸方位N－85～89°－W　　**面積**8.67㎡

形態　１間×２間・東西棟。東辺は西辺より35cm長いため、南辺は東下がりに傾く。南辺の中間柱P４は西に12cm寄る。柱痕は見られない。P１はロームブロックを多量に含む埋没土２が中位まで埋めるが、柱穴の中心を逸れている。そのほかの埋没土も特徴的なものはない。柱穴の径は30cm前後を主体とする。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。深さは21～50cmとばらつきがある。詳細な規模は第51表のとおり。遺物は出土していない。



26号掘立柱建物
1　黒褐色土　ローム粒子・細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
3　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
4　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
5　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
6　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。

第107図　１区26号掘立柱建物



27号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒子少量、焼土粒子含む。

第108図　１区27号掘立柱建物

第50表　１区26号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×２間・東西棟			面積	9.17㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－89～90°－E			位置	７Ｊ・Ｋ－７	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　4.41	Ｐ１	(41)	33	38	楕円形	2.16	248
	Ｐ２	38	36	35	隅丸方形	2.25	239
東辺　2.16	Ｐ３	36	33	24	隅丸方形	2.16	284
南辺　4.08	Ｐ４	36	34	49	円形	2.13	288
	Ｐ５	34	30	57	隅丸方形	1.95	245
西辺　2.16	Ｐ６	50	49	51	不整円形	Ｐ１へ2.16	250

第51表　１区27号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×２間・東西棟			面積	8.67㎡	旧ピット番号
主軸方位		N－85～89°－W			位置	７Ｋ・Ｌ－７・８	
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	深さ			
北辺　4.30	Ｐ１	39	33	50	楕円形	4.30	194
東辺　2.18	Ｐ２	23	21	36	円形	2.18	370
南辺　4.35	Ｐ３	28	26	21	円形	2.30	304
	Ｐ４	29	23	22	楕円形	2.07	―
西辺　1.83	Ｐ５	35	26	38	楕円形	Ｐ１へ1.83	317

（２）１号屋敷内の土坑

１号屋敷内で64基の土坑が検出された。分布では１号屋敷南西部が多く、次いで外縁部や建物の内外に分布する例がある。平面形は、以下のとおり10種類に分類され、分布にも特徴が認められる。南西部は多種類の土坑が混在しており、小規模な建物が６棟分布することとも関連が想定される。以下、形態別に概要を述べる。

土坑形態	数量	掘立関連内部
隅丸方形	6	2
長方形	2	1
隅丸長方形	34	3
細長方形	3	1
隅丸細長方形	1	
両丸長方形	11	
円形	2	
楕円形	3	1
不整方形	1	
不整長楕円形	1	
計	64	8

隅丸方形は６基で、分布は２か所に分かれる。規模の違いから２種類に細分される。規模の大きい４基のうち、70号土坑は竪穴状遺構と呼ぶことも可能である。屋敷の北東外縁部に位置し、周辺に遺構は希薄である。上部構造を持つことも想定される。屋敷西南隅の10号土坑も大きく、７号掘立柱建物がむしろ上屋となっている。それよりやや小さい21・27号土坑は、10号土坑周辺に位置するが、建物の関連は想定し難い。26号土坑は南西建物群の外縁に位置する。小規模で主軸方位は周辺と異なる。形態的には楕円形や両丸長方形のものに近似する。残る小規模な79号土坑は、10号土坑の西側近くに位置するが、３号掘立柱建物の内部である。床面に作られた軽微な掘り込みと考えられる。なお、同建物内部には隅丸長方形の91号土坑も存在する。

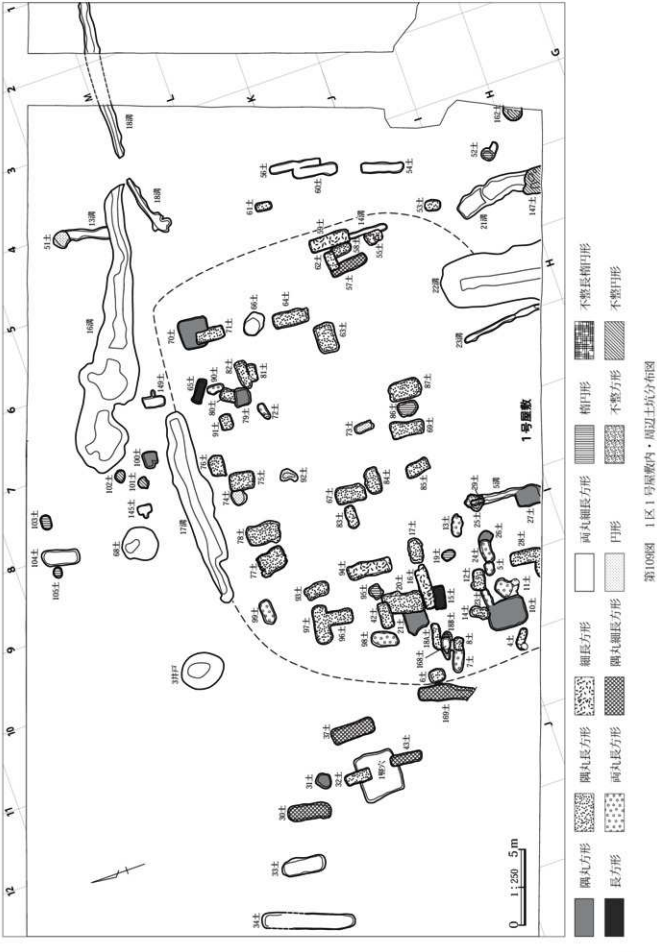
長方形は２基で、分布は２か所に分かれる。15号土坑は屋敷西部で、細長方形の16号土坑と重複し、建物との関連が想定されるが、該当するものはない。65号土坑は北東外縁部に位置するが、周辺の遺構と主軸方位が顕著に異なり、建物も含めて関連はうかがえない。

隅丸長方形は35基で、全体のほぼ半数を占める。やや大きく方形に近い８基と、それ以外の28基に細分でき、後者は掘立柱建物の内部施設と見られる５基、深さが特に深い２基を別扱いすれば21基が残る。方形に近い８基のうち、75～78号土坑の４基は17号溝近くに分布し、すべて浅い一群である。残る４基はそれに比べて深く、中央に67号土坑、その東から南に63・87号土坑が分布する。これらは建物に隣接するものが多いが、直接結びつくものはない。20号土坑は西外縁部に離れている。建物内部となるのは５基で、69・84号土坑は８号掘立柱建物、73号土坑は26号掘立柱建物、91号土坑は３号掘立柱建物の内部である。基本的に床面に作られた軽微な掘り込みと考えられるが、69号土坑は深さ50㎝を超えており、貯蔵施設の可能性を持つ。同程度の深さを持つものは、ほかに２基ある。62号土坑は屋敷の東外縁部に位置する。17号掘立柱建物と重なるが、主軸方位が異なる。84号土坑は中央西寄りに位置し、23号掘立柱建物の南辺軒下に当たる。同建物の西下屋内には細長方形の94号土坑があることも参考となる。残る23基のうち、21基は屋敷の南西部と外縁部に分布する。これは土坑の全体傾向と同じである。なお、中央部には２基があり、83号土坑は若干主軸方位は異なるが、22号掘立柱建物の内部施設も考慮される。85号土坑も認定できていない建物との関連も想定される。外縁部の特徴として、長さ２ｍを前後する例が多く分布する。東外縁部では64・71号土坑、西外縁部では28・42・93・96・97号土坑である。特に軸方向をそろえた南北軸のものが目立つ。この傾向は細長方形や隅丸細長方形の例を含めて顕著である。

細長方形は３基で、屋敷の東西に分かれる。59号土坑は東外縁部に位置し、17号掘立柱建物の内部施設とは見なし難く、隅丸細長方形の57号土坑と一連である。残る２基のうち、94号土坑は23号掘立柱建物の西壁に沿う内部施設と見なされる。また、16号土坑はそのすぐ南に位置し、主軸方位は直交する。形態的に近似するが、関連する建物は見いだせない。

隅丸細長方形は57号土坑１基で、屋敷外縁部に位置する。17号掘立柱建物と重なるが、主軸方位が異なり内部のものとは見なし難い。むしろ、細長方形の59号土坑と一連である。

両丸長方形は11基で、屋敷の外縁角近くに分布する。形態として隅丸長方形に近いが、２種類程度に細分して



第108図　1区1号屋敷内・周辺土坑分布図

考えることができる。５・11号土坑は長さが短く楕円形にも近い。後者は建物と重なるが、主軸方位も異なり内部と見なし難い。残る８基のうち、13・24号土坑は５・11号土坑の東側に、23号土坑は同西側に、７・98・99号土坑は屋敷西辺に沿っている。72・90号土坑は屋敷北東部、58号土坑は同南東部にある。この形態の土坑は、58・90・99号土坑を除いて、残り８基はほぼ東西軸を採っている。建物との関係では、13・23・58・72・90号土坑が建物と重なるが、主軸方位と位置関係から内部とは見なし難い。ただし、58号土坑の南側は楕円形に凹み、関連する別の土坑が重複する可能性もある。本土坑は全体的な傾向として、建物外縁に位置する特徴を見いだせる。なお、99号土坑ではほぼ完形の天目茶碗が出土しており、特筆される。

円形は２基で、ともに屋敷内北半中央に位置する。74号土坑は浅く整った円形で、北辺17号溝に近い。人為埋没と考えられるが、その他の特徴はない。一方、92号土坑は27号掘立柱建物内部に位置するが、関連づける証左に欠ける。埋没土は特徴的で、最下位はロームブロック混土が顕著であり、桶などを据えた可能性も考慮される。

楕円形は３基で、19・86号土坑はともに浅く、前者は15号掘立柱建物の内部施設の可能性がある。ただし、埋没土に性格を示す状況は見られない。86号土坑も８号掘立柱建物の東辺に隣接し関連も想定される。95号土坑は屋敷内西端に位置し、主軸方位も周辺と異なるため、建物との関連も想定し難い。

不整方形は１基で屋敷南西部に位置する。29号土坑、５号溝と重複するため外形が乱れる。主軸方位も周辺とは異なり、建物との直接的な関連は想定できない。

不整長楕円形は18Ｂ号土坑１基のみである。重複の影響大きく、不明な点が多い。屋敷南西部に位置する。

４号土坑(第110図、ＰＬ.11)

位置　７Ｉ－10･11、７Ｊ－11グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－56°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は全体やや砂質で、埋没状況不詳。規模は長軸147㎝・短軸45㎝・深さ6㎝である。遺物は出土していない。

５号土坑(第110図、ＰＬ.11)

位置　７Ｊ－10グリッド。　24号土坑と接している。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－76°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、西半部は段を持って若干下がる。埋没状況不詳。規模は長軸91㎝・短軸60～66㎝・深さ14～20㎝である。須恵器甕類１片が出土している。

６号土坑(第110図、ＰＬ.11)

位置　７Ｋ－11グリッド。21号掘立柱建物Ｐ１、66号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－Ｓ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを含むが、埋没状況不詳。規模は長軸107㎝･短軸74～87㎝･深さ22～25㎝である。遺物は出土していない。

７・８号土坑(第110・115図、ＰＬ.11・59、第52表)

７号土坑　位置　７Ｊ－10・11グリッド。８号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長軸115㎝・短軸73㎝・深さ31㎝である。埋没土中から１の古瀬戸盤類大部片(14世紀末～15世紀初頭)が出土する。掲載遺物の他に土師器甕類１片が出土している。

８号土坑　位置　７Ｊ-10・11グリッド。168号土坑より後出で、10号掘立柱建物Ｐ８、12号掘立柱建物Ｐ６、７号土坑、と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸118㎝・短軸72㎝・深さ15㎝である。遺物は出土していない。

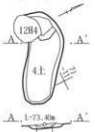
10号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｉ・Ｊ－10グリッド。７号掘立柱建物Ｐ５、11・14・23号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形を呈し、竪穴状遺構に類する。主軸方位はＮ－Ｓ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況は均質な黒褐色土である埋没土２で埋まり、人為埋没と言えるが、壁際に壁面からの崩落土が堆積しており、一定期間開口していたと見られる。規模は長軸259㎝・短軸191㎝・深さ10～17㎝である。７号掘立柱建物の南辺に接してほぼ中央に位置しており、建物を性格づける主要な内部施設であろう。須恵器杯類１片が出土している。

11号土坑(第110図、ＰＬ.12)

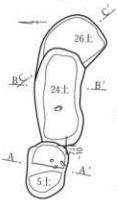
位置　７Ｉ・Ｊ－10グリッド。10号土坑と接している。

4号土坑



4号土坑
1　黒褐色土　やや砂質。
2　暗褐色土　やや砂質。

5・24・26号土坑

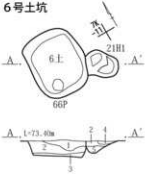


5号土坑
1　暗褐色土　サラサラしている。ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む。

24号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。しまらない。
2　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子を少量含む。
3　暗褐色土　やや砂質。しまらない。ロームブロックを含む。

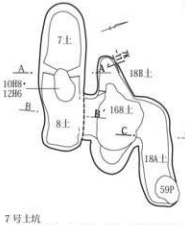
26号土坑
1　暗褐色土　しまる。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　しまる。暗褐色土とロームブロックの混土。

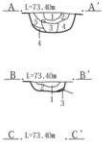
6号土坑



6号土坑、49号ピット
1　暗褐色土　砂質。ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。
3　暗褐色土　粘性有り。ややしまる。ローム粒子を含む。
4　暗褐色土　均質。
5　黒褐色土　ロームブロックを含む。

7・8・18 A・18 B号土坑



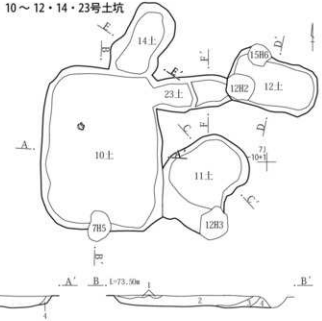


7号土坑
1　暗褐色土　しまる。ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む。
3　黒褐色土　ややしまる。ローム粒子を少量含む。
4　暗褐色土　粘質。暗褐色土とロームブロックの混土。
5　暗褐色土　ローム粒子を含む。

8号土坑
1　暗褐色土　暗褐色土とロームブロックの混土。
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。
3　黄褐色土　ロームブロック主体。

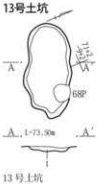
18号土坑
1　黒褐色土　やや砂質。
2　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子を少量含む。
3　黒褐色土　粘性あり。ロームブロックを含む。

10～12・14・23号土坑



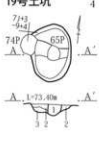
10号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　サラサラしている。ローム粒子、炭化物を含む。
3　暗褐色土　やや粘質。ローム粒子を含む。
4　暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む。

13号土坑

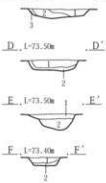


13号土坑
1　黒褐色土　ロームブロックを多く含む。

19号土坑



19号土坑、65号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。(65号ピットフク土)
2　暗褐色土　しまり良い。
3　暗褐色土　暗褐色土とロームブロックの混土。



11号土坑
1　黒褐色土　砂質。
2　黒褐色土　砂質。ロームブロックを含む。
3　暗褐色土　暗褐色土とロームブロックの混土。

12号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。
2　黒褐色土　粘性あり。ローム粒子を含む。

14号土坑
1　暗褐色土　粘性有り。
2　黒褐色土　ローム粒子を含む。

23号土坑
1　暗褐色土　やや粘質。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　暗褐色土とロームブロックの混土。

第110図　1区4～8・10～14・18・19・23・24・26号土坑

0　1:60　2m

平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－47°－Ｅ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は全体的に砂質で、北西から埋まる。規模は長軸150cm・短軸100～110cm・深さ11～15cmである。遺物は出土していない。

12号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－10グリッド。12号掘立柱建物Ｐ２、15号掘立柱建物Ｐ６、23号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－71°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸142cm・短軸76cm・深さ15～17cmである。遺物は出土していない。

13号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－９グリッド。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－63°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸150cm・短軸70cm・深さ５～７cmである。遺物は出土していない。

14号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－10グリッド。10号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－28°－Ｅ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没状況不詳。規模は長軸147cm・短軸69～80cm・深さ18～24cmである。土師器杯類１片が出土している。

15号土坑(第111図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－10グリッド。16号土坑より前出で、10号掘立柱建物Ｐ１、12号掘立柱建物Ｐ１、15号掘立柱建物Ｐ１、55・56号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は長方形。主軸方位はＮ－81°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸156cm・短軸73cm・深さ14～20cmである。遺物は出土していない。

16号土坑(第111・115図、ＰＬ.12・59、第52表)

位置　７Ｊ・Ｋ－９・10グリッド。20号土坑と接し、15号土坑より後出で、57号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形。主軸方位はＥ－Ｗ。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は炭化物を少量含み、ほぼ水平堆積する。規模は長軸268cm・短軸82cm・深さ20cmである。埋没土中から２の火打石が出土する。掲載遺物の他に土師器甕類２片が出土している。

17号土坑(第111図)

位置　７Ｊ－９グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－82°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸165cm・短軸90cm・深さ48～53cmである。遺物は出土していない。

18Ａ号土坑(第110図)

位置　７Ｊ・Ｋ－10グリッド。168号土坑より前出で、18Ｂ号土坑とは不分明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－76°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はローム粒子や炭化物粒子を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸120cm以上・短軸54cm・深さ8～11cmである。遺物は出土していない。

18Ｂ号土坑(第110図)

位置　７Ｊ・Ｋ－10・11グリッド。168号土坑より前出で、18Ａ号土坑とは別の遺構と見られるが不分明。平面形は不整長楕円形。壁は斜めに立ち上がり、底面は重複により消滅。埋没状況不詳。規模は長径188cm・短径135cm以上・深さ20cmである。遺物は出土していない。

19号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－９グリッド。65号ピットより前出で、74号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央で段を持って、南半部が若干下がる。埋没状況不詳。規模は長径93cm・短径64cm・深さ5～15cmである。15号掘立柱建物の中央部に位置し、内部施設である可能性も考慮される。遺物は出土していない。

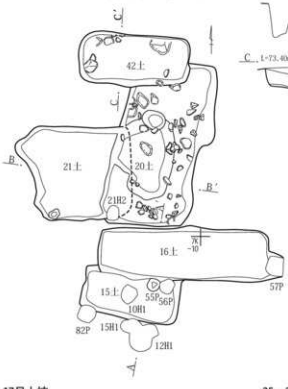
20号土坑(第111図、ＰＬ.12)

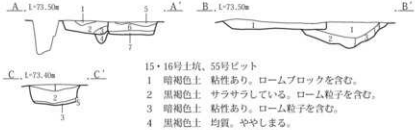
位置　７Ｋ－９・10グリッド。21号土坑より前出で、42号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－11°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は全体にほぼ平坦で、中央は丸みを持って凹む。地山の礫が多く露呈する。埋没土はローム粒子、礫を多く含む。埋没状況不詳。規模は長軸262cm・短軸131～150cm・深さ25～41cmである。遺物は出土していない。

21号土坑(第111図、ＰＬ.12)

位置　７Ｋ－10グリッド。20号土坑より後出。平面形は隅丸方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。残存深浅く埋没状況不詳。規模は長軸180cm・短軸145cm・深さ10～15cmである。遺物は出土していない。

15・16・20・21・42号土坑 . 55 号ピット





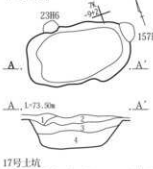
15・16号土坑、55号ピット
1　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　サラサラしている。ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　粘性あり。ローム粒子を含む。
4　黒褐色土　均質。ややしまる。
5　暗褐色土　ローム粒子を含む。
6　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。
7　灰褐色土　砂質。炭化物を少量含む。

20号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を多量に含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性有り。ロームブロック、ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ロームブロック、ローム粒子を含む。１層よりも暗い色調。
4　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性有り。

21号土坑
1　暗褐色土　やや硬い。ロームブロック、ローム粒子を含む。

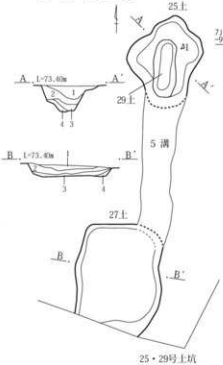
42号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。
　褐色土ブロックを少量含む。
2　灰褐色土　軟らかくて粘性有り。
3　灰褐色土　軟らかくてサラサラしている。

17号土坑



17号土坑
1　暗褐色土　しまる。ローム粒子を含む。
2　黒褐色土　やや砂質。ローム粒子を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロックを含む。
4　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。

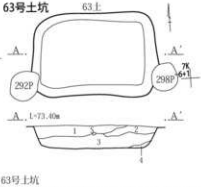
25・27・29号土坑



25・29号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子を含む。
3　黒褐色土　やや砂質。ローム粒子を含む。(29号土坑フク土か)
4　暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む。(29号土坑フク土か)

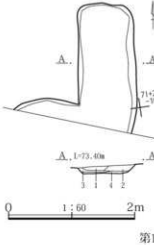
27号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。軟らかい。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックを含む。
3　黒褐色土　粘性あり。ローム粒子を含む。
4　黒褐色土　しまらない。ロームブロックをやや多く含む。

63号土坑



63号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でややしまっている。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　やや粘質でしまりやや弱い。ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームブロック、ローム粒子を含み炭化物粒子を少量含む。
4　暗褐色土　粘性やや強くしまっている。ロームブロックを少量含む。

28号土坑



28号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。
2　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。
4　黒褐色土　均質。粘性有り。

第111図　１区15 ～ 17・20・21・25・27 ～ 29・42・63号土坑、55号ピット

23号土坑(第110図、ＰＬ.12)

位置　７Ｊ－10グリッド。10・12号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形か。主軸方位はＮ－87°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。西半部は段を持って若干下がる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸120㎝以上・短軸52㎝・深さ13㎝である。遺物は出土していない。

24号土坑(第110図、ＰＬ.13)

位置　７Ｉ・Ｊ－９グリッド。５・26号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形。主軸方位はＥ－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸154㎝・短軸74㎝・深さ21～37㎝である。遺物は出土していない。

25号土坑(第111・115図、ＰＬ.13、第52表)

位置　７Ｉ・Ｊ－９グリッド。５号溝・29号土坑より後出。平面形は不整方形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は全体的にやや砂質でローム粒子を含み、自然埋没か。規模は長軸130㎝・短軸118㎝・深さ29㎝である。埋没土上位から３の在地系土器片口鉢口縁部片が出土する。出土遺物から中世に比定される。

26号土坑(第110図、ＰＬ.13)

位置　７Ｉ・Ｊ－９グリッド。24号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸方形か。主軸方位はＮ－38°－Ｗ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸110㎝・短軸84㎝・深さ８～10㎝である。遺物は出土していない。

27号土坑(第111図、ＰＬ. 13)

位置　７Ｉ－９グリッド。５号溝より後出。南端は調査区域外に延びる。平面形は隅丸方形か。主軸方位はＮ－３°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを含み、ほぼ水平堆積する。遺物の出土はなかった。規模は長軸170㎝・短軸140㎝・深さ16～20㎝である。遺物は出土していない。

28号土坑(第111図、ＰＬ. 13)

位置　７Ｉ－10グリッド。南端は調査区域外に延びる。平面形は隅丸長方形か。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸195㎝以上・短軸90㎝・深さ10～13㎝である。遺物は出土していない。

29号土坑(第111図、ＰＬ.13)

位置　７Ｉ・Ｊ－9グリッド。25号土坑より前出。平面形は隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土はロームブロックを含むが、埋没状況不詳。規模は長軸90㎝・短軸35㎝・深さ18㎝である。遺物は出土していない。

42号土坑(第111図、ＰＬ.12)

位置　７Ｋ－10グリッド。20号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＥ－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、地山の礫がやや多く露呈する。埋没土は全体的に軟らかく、ほぼ水平堆積する。規模は長軸173㎝・短軸82㎝・深さ26～33㎝である。遺物は出土していない。

55号土坑(第112図、ＰＬ.16)

位置　７Ｉ・Ｊ－５グリッド。14号溝より前出。平面形は隅丸長方形で、南側は大きく掘り込まれるため、２基の重複か。主軸方位はＮ－７°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。北側底面は平坦で、南側は凸凹する。埋没土下位は壁面崩落土を多く含み自然埋没か。焼土粒子・炭化物粒子を微量に含む。規模は長軸115㎝・短軸72～84㎝・深さ16～24㎝である。遺物は出土していない。

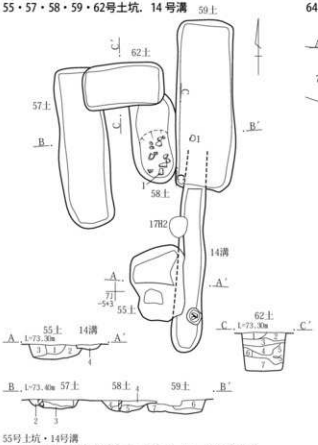
57号土坑(第112図、ＰＬ.16)

位置　７Ｊ－５グリッド。62号土坑より前出。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－６°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は全体的に浅間Ｂ軽石とロームブロックを多量に含んでおり、人為埋没か。規模は長軸250㎝・短軸80㎝・深さ10～14㎝である。遺物は出土していない。

58号土坑(第112・115図、ＰＬ.16、第52表)

位置　７Ｊ－５グリッド。59号土坑より後出で、62号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はＮ－３°－Ｗ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。南半部は楕円形に凹み、大円礫がやや多く出土する。この部分を別の土坑と考えれば、17号掘立柱建物の内部施設と考えることもできる。埋没土は均質な砂質土で人為埋没か。規模は長軸150㎝・短軸70㎝・深さ14～17㎝である。南半部凹み部分から４の在地系土器すり鉢底部大片が出土する。出土遺物から15世紀に比定される。

55・57・58・59・62号土坑，14号溝

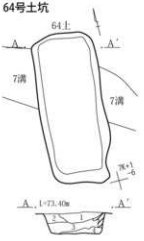


55号土坑・14号溝
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ローム粒子を含む。
2　褐色土　粘性やや弱く、しまっている。ロームブロックと暗褐色土の混土。焼土粒子を少量、炭化物粒子をわずかに含む。
3　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ローム粒子を含む。
4　暗褐色土　粘性やや弱く、しまりやや弱い。ローム粒子を多く含む。

57～59号土坑
1　暗褐色土　やや砂質。ややしまっている。ロームブロック、炭化物粒子、焼土粒子を含む。浅間Ｂ軽石を含むと思われる。
2　暗褐色砂質土　やや緻まっている。ロームブロック、ローム粒子を多く含む。浅間Ｂ軽石を含むと思われる。
3　黒褐色土　やや砂質で、ややしまっている。ロームブロック、炭化物粒子を含む。浅間Ｂ軽石を含むと思われる。
4　暗褐色土　やや砂質でしまりやや弱い。炭化物粒子を含む。
5　暗褐色砂質土　しまりやや強い。ロームブロックを含む。
6　黒褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
7　黒褐色土＋暗褐色土

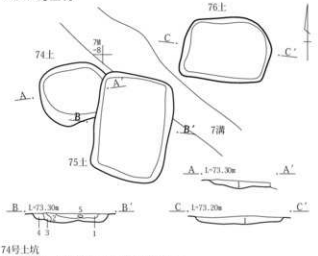
62号土坑
1　黄褐色ローム土　やや粘質でしまっている。暗褐色土、黒褐色土ブロックを含む。
2　黄褐色ローム土　粘性やや強くしまっている。
3　黄褐色ローム土　やや粘質でややしまっている。暗褐色土を含む。
4　黄褐色土　やや粘質でしまりやや弱い。暗褐色土、炭化物粒子を含む。
5　黒褐色土　やや粘質でややしまっている。ロームブロックを含む。
6　黄白色土　粘性弱い。しまっている。
7　黄白色土　粘性弱くしまりやや弱い。黒褐色土の小ブロックを含む。

64号土坑



64号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でややしまっている。
2　暗褐色土　粘性やや強く、しまり強い。壁面の崩落土。ロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　粘性やや弱く、しまりやや強い。ロームブロックを含む。
4　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームブロックを含む。

74～76号土坑



74号土坑
1　褐色土　やや粘質で、しまりやや強い。
　ロームブロックを少量、ローム粒子を多く含む。

75号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまりやや弱い。ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　粘性強く、しまり強い。ロームブロックをやや多く含む。
3　黄褐色土　ロームブロック主体。
4　暗褐色土　粘性強く、ややしまっている。ロームブロックを少量含む。

76号土坑
1　褐色土　粘性やや弱く、ややしまっている。
　ローム、黒褐色土のブロックを含む。

0　1:60　2m

第112図　１区55・57～59・62・64・74～76号土坑、14号溝

59号土坑(第112・115図、ＰＬ.16・59、第52表)

位置　７Ｊ－５グリッド。58号土坑、14号溝より前出。平面形は細長方形。主軸方位はＮ－２°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は浅間B軽石を含み、暗褐色土と黒褐色土、ロームブロックが混在し人為埋没。規模は長軸265㎝・短軸90㎝・深さ17～22㎝の規模である。埋没土上位から５の在地系土器片口鉢口縁部大片が出土する。出土遺物から14世紀後半頃に比定される。

62号土坑(第112図、ＰＬ.16)

位置　７Ｊ－５グリッド。57号土坑より後出で、58号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－86°－Ｅ。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土下位は礫を含むロームを主体とし、中位から黒褐色土混じりロームに変わり、水平に堆積する。最上位はロームを堅く締めており、人為的に丁寧に埋め戻す。規模は長軸130㎝・短軸70㎝・深さ61㎝である。遺物は出土していない。

63号土坑(第111図、ＰＬ.16)

位置　７Ｊ・Ｋ－６グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－86°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸200㎝・短軸130㎝・深さ33㎝である。土師器杯類１片・甕類４片、須恵器杯椀類３片が出土している。

64号土坑(第112図、ＰＬ.17)

位置　７Ｋ－５・６グリッド。７号溝より後出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－７°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は均質で人為埋没か。壁際の埋没土の乱れは、埋没後に壁面が崩落したものか。規模は長軸240㎝・短軸100㎝・深さ32㎝である。土師器杯類２片・甕類２片、須恵器杯類１片が出土している。

65号土坑(第113・115図、ＰＬ.17・59、第52表)

位置　７Ｌ・ＭＭ－６グリッド。平面形は長方形。主軸方位はＮ－54°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸165㎝・短軸64㎝・深さ20㎝である。埋没土中から６の在地系土器内耳鍋口縁部片が出土する。出土遺物から中世に比定される。

67号土坑(第113・115図、ＰＬ.17・59、第52表)

位置　７Ｋ－８グリッド。22号掘立柱建物Ｐ４より前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－７°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没状況不詳。規模は長軸200㎝・短軸110㎝・深さ20㎝である。埋没土中から７の銅銭(天聖元寶)が出土するが、骨などは出土していない。掲載遺物の他に土師器杯類１片・甕類３片、須恵器甕類１片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

69号土坑(第113・115図、ＰＬ.17、第52表)

位置　７Ｊ－７・８グリッド。８号掘立柱建物Ｐ５・９、19号掘立柱建物Ｐ２、477号ピットと重複するが新旧関係不明。北辺の開いたやや台形気味の隅丸長方形を呈する。主軸方位はＮ－８°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームの再堆積土を主体とし、東壁側から人為的に埋没する。規模は長軸225㎝・短軸90～117㎝・深さ47～54㎝である。８号掘立柱建物の東庇内南側に位置し、内部施設の可能性がある。埋没土中から８の在地系土器内耳鍋口縁部片が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類１片・壺甕類３片が出土する。出土遺物から14世紀後半頃に比定される。

70号土坑(第114図、ＰＬ.17)

位置　７Ｌ－５・６グリッド。71号土坑より前出。平面形は隅丸方形。主軸方位はＮ－５°－Ｅ。竪穴状遺構と呼ぶことも可能であり、上部構造を持つことも想定される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径200㎝・短径196㎝・深さ9㎝である。遺物は出土していない。

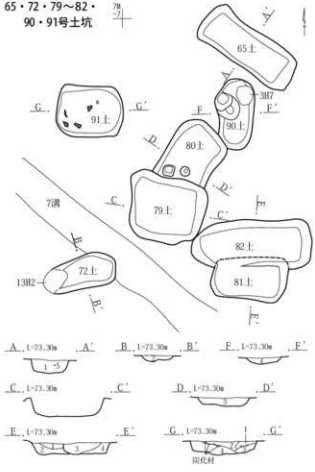
71号土坑(第114図、ＰＬ.17)

位置　７Ｌ－５・６グリッド。70号土坑より後出で、161号ピットより前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－３°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸193㎝・短軸88㎝・深さ14㎝である。遺物は出土していない。

72号土坑(第113図、ＰＬ.17)

位置　７Ｌ－７グリッド。７号溝より後出で、13号掘立柱建物Ｐ２と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－64°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は均質でローム粒子を含み、人為埋没か。規模は長軸119㎝・短軸44～54㎝・深さ６～

65・72・79～82・90・91号土坑

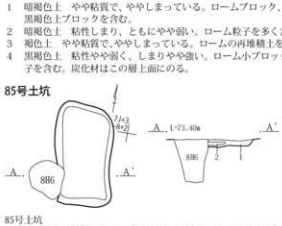


65・72・80・90号土坑
1　褐色土　粘性やや強く、しまっている。ロームの堆積土。
2　暗褐色土　粘性やや強い。ややしまっている。ローム粒子を多く含む。
3　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームブロック、ローム粒子を微量に、黒褐色土ブロックを含む。
4　暗褐色土　粘性やや弱い。ローム粒子、ロームブロックを含む。

81・82号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ローム小ブロックを少量含む。
2　暗褐色土　やや粘質で、しまりやや強い。ローム小ブロックを含む。
3　暗褐色土　やや粘質で、しまりやや強い。ローム小ブロックを含む。
4　褐色土　やや粘質で、しまりやや強い。ローム小ブロックをやや多く含む。

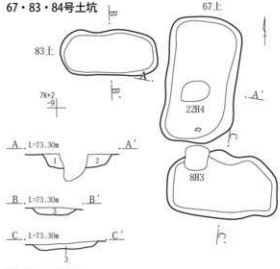
91号土坑
1　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームブロック、ローム粒子、黒褐色土ブロックを含む。
2　暗褐色土　粘性しまり、ともにやや弱い。ローム粒子を多く含む。
3　褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームの再堆積土を主体とする。
4　黒褐色土　粘性やや弱く、しまりやや強い。ローム小ブロック、ローム粒子を含む。炭化材はこの層上面にのる。

85号土坑



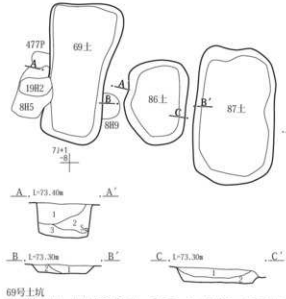
85号土坑
1　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ローム粒子を多く含む。
2　暗褐色土　粘性やや強く、しまり強い。ロームブロック、黒褐色土ブロックを含む。

67・83・84号土坑



67・83・84号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームブロックをやや多く含む。
2　暗褐色土　やや粘質で、しまりやや弱い。ロームブロック、ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ロームブロックを含む。

69・86・87号土坑



69号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームブロックを含む。
2　褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームの再堆積を主体とする。暗褐色土ブロックをやや多く、ロームブロックを含む。３層よりしまり強い。
3　褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームの再堆積を主体とする。暗褐色土ブロックをやや多く、ロームブロックを含む。

86号土坑
1　暗褐色土　粘性・しまりやや弱い。ローム小ブロックを含む。
2　褐色土　粘性・しまりやや弱い。ロームの再堆積土。

87号土坑
1　暗褐色土　粘性やや弱く、ややしまっている。ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームブロックを少量、黒褐色土ブロックを含む。

0　1:60　2m

第113図　１区65・67・69・72・79～87・90・91号土坑

70号土坑・161号ピット
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ローム小ブロック、ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームブロックを少量含む。
4　暗褐色土　やや砂質でしまりやや強い。ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ロームブロックを少量含む。

73号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ローム小ブロックをやや多く含む。

77号土坑
1　暗褐色土　粘性やや強く、しまり強い。ロームブロックを少量含む。

78号土坑
1　暗褐色土　やや粘質で、ややしまっている。ロームブロック、ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。

92号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。
2　黒褐色土　ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。

93号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。1層より暗い

94号土坑
1　暗褐色砂質土　ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。人為的埋土。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。人為的埋土。

96号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。

97号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。96号土坑より明るい色調。

95号土坑
1　暗褐色土　砂質。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。

98号土坑
1　暗褐色砂質土　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色砂質土　ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を含む。2層よりやや暗い色調。
4　灰褐色土　やや粘質。暗褐色土を多量に含む。

99号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。全体に斑状で不均質に堆積。人為的埋土か。

0　1:60　2m

第114図　1区70・71・73・77・78・92～99号土坑、161号ピット

10cmである。遺物は出土していない。

73号土坑(第114図、ＰＬ.18)

位置　７Ｊ・Ｋ－７グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－１°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる、底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸120cm・短軸60cm・深さ29cmである。26号掘立柱建物の西辺寄り中央に位置し、内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。遺物は出土していない。

74号土坑(第112図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－８グリッド。75号土坑より前出。平面形はほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は均質でローム小ブロックを含み人為埋没か。規模は長径110cm・短径95cm・深さ６～12cmである。遺物は出土していない。

75号土坑(第112図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－７・８グリッド。74号土坑、７号溝より後出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－11°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸170cm・短軸120cm・深さ９～15cmである。遺物は出土していない。

76号土坑(第112図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ・Ｍ－７グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－84°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームと黒褐色土のブロックを多く含み、人為埋没。規模は長軸140cm・短軸100cm・深さ10cmである。遺物は出土していない。

77号土坑(第114図)

位置　７Ｌ－８・９グリッド。９号掘立柱建物Ｐ２、25号掘立柱建物Ｐ１と重複するが新旧関係不明。平面形は乱れた隅丸長方形。主軸方位はＮ－11°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。北西隅がピット状に凹むが、伴うものか不明。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸180cm・短軸130cm・深さ6cmである。須恵器甕類１片が出土している。

78号土坑(第114図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－８グリッド。316号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はやや乱れた隅丸長方形。主軸方位はＮ－８°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸220cm・短軸130cm・深さ10cmである。在地系土器皿１片が出土している。

79号土坑(第113図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－６グリッド。80号土坑と重複するが新旧関係不明。上面は隅丸方形に近いが、底面は整った方形を呈する。主軸方位はＮ－82°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸120cm・短軸100cm・深さ23～29cmである。３号掘立柱建物東庇の中央に位置し、若干主軸方位が異なるが関連する可能性もある。遺物は出土していない。

80号土坑(第113図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－６グリッド。79号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形か。主軸方位はＮ－35°－Ｅ壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。底面に灰褐色土が２・３cm程度水平堆積するように見え、一時的に開口して使用されていたことも考慮される。中央南寄りにピット状の落ち込み２基があるが、伴うものかは不明。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸108cm以上・短軸82cm・深さ12cmである。遺物は出土していない。

81号土坑(第113図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－６グリッド。82号土坑より前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－88°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸190cm・短軸79cm・深さ19cmである。土師器壺甕類３片、須恵器甕類１片が出土している。

82号土坑(第113図、ＰＬ.18)

位置　７Ｌ－６グリッド。81号土坑より後出。平面形は隅丸長方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸120cm・短軸70cm・深さ19cmである。遺物は出土していない。

83号土坑(第113 図、ＰＬ.18)

位置　７Ｋ－８グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＥ－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長軸153cm・短軸73cm・深さ10cmである。土師器甕類１片が出土している。遺物は出土していない。

84号土坑(第113図、ＰＬ.19)

位置　７Ｋ－８グリッド。８号掘立柱建物Ｐ３と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－86°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土はロームブロックを含むが、埋没状況不詳。８号掘立柱建物の内部施設の可能性を持つが、焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。規模は長軸169～175cm・短軸100cm・深さ10cmである。土師器杯類１片が出土している。

85号土坑(第113図、ＰＬ.19)

位置　７Ｊ－８グリッド。８号掘立柱建物Ｐ６より前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－７°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸160cm・短軸90cm・深さ10cmである。土師器杯類１片が出土している。

86号土坑(第113・115図、ＰＬ.19、第52表)

位置　７Ｊ－７グリッド。平面形は楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを含み均質で人為埋没か。規模は長径135cm・短径97cm・深さ14cmである。９の須恵器杯のほか土師器杯類２片・甕類２片、須恵器杯類１片が出土している。

87号土坑(第113図、ＰＬ.19)

位置　７Ｊ－７グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－３°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを含み均質で人為埋没。規模は長軸214cm・短軸125cm・深さ23cmである。土師器壺甕類１片が出土している。在地系土器皿１片が出土している。

90号土坑(第113図、ＰＬ.20)

位置　７Ｌ－６グリッド。３号掘立柱建物Ｐ７と重複するが新旧関係不明。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－Ｓ。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。中央西端にピット状の落ち込みがあり、底面は斜め西に延びる。伴うものかは不明である。埋没土はロームブロックをやや多量に含み人為埋没か。規模は長軸114cm・短軸53cm・深さ７～10cmである。遺物は出土していない。

91号土坑(第113図、ＰＬ.20)

位置　７Ｌ－７グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＥ－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームの再堆積土や炭化材を含み、半分程度埋没した段階で西側から炭化物層が流入する。規模は長軸105cm・短軸80cm・深さ13～22cmである。３号掘立柱建物身屋部の北東隅に接しており、炭化物層を含むが壁際であり、火処ではなく何らかの内部施設であろう。遺物は出土していない。

92号土坑(第114図、ＰＬ.20)

位置　７Ｌ－７・８グリッド。209号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土は黒褐色土とロームブロック混土が交互に水平堆積する。底面近くでロームブロック混土が顕著であり、桶などの据え方であったことも考慮される。規模は長径115cm・短径92cm・深さ11～16cmである。遺物は出土していない。

93号土坑(第114図、ＰＬ.19)

位置　７Ｌ－９グリッド。22号掘立柱建物Ｐ１と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－５°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸170cm・短軸90cm・深さ22cmである。遺物は出土していない。

94号土坑(第114図)

位置　７Ｋ－９グリッド。８号掘立柱建物Ｐ１と重複するが新旧関係不明。平面形は細長方形。主軸方位はＮ－６°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多く含み、人為埋没か。規模は長軸283cm・短軸97cm・深さ10～15cmである。西下屋壁面に沿って、梁間中央に位置しており内部施設と考えられる。焼土や炭化物の集中など特徴的な状況はない。遺物は出土していない。

95号土坑(第114図)

位置　７Ｋ－９グリッド。平面形は楕円形。主軸方位はＮ－70°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長径92cm・短径77cm・深さ24～29cmである。

96・97号土坑(第114図、ＰＬ.19)

96号土坑　位置　７Ｋ・Ｌ－９・10グリッド。97号土坑より前出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－６°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋土にはローム粒子を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸

177cm・短軸97cm・深さ10cmである。遺物は出土していない。

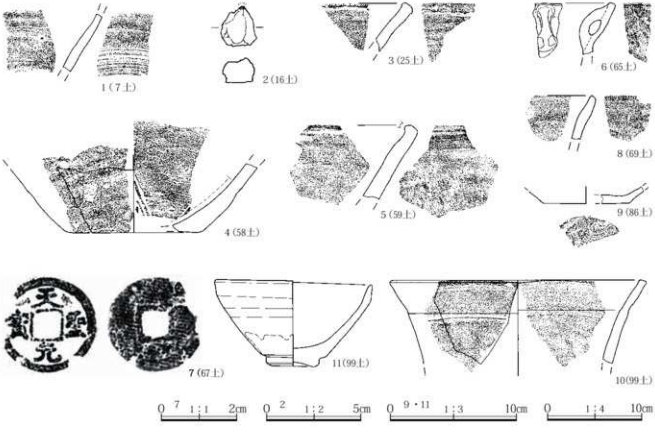
97号土坑　位置　７Ｌ－９・10グリッド。96号土坑より後出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－83°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋土にはローム粒子を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸262cm・短軸111cm・深さ5～11cmである。遺物は出土していない。

98号土坑(第114図)

位置　７Ｋ－10グリッド。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－19°－Ｅ壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、地山の大礫がやや多く露呈する。下位埋没土４は、やや粘質でほぼ水平に堆積する。木枠などの据え方も考慮される。その上位は均質な砂質土で人為埋没か。規模は長軸180cm・短軸100cm・深さ10cmである。遺物は出土していない。

99号土坑(第114・115図ＰＬ.59、第52表)

位置　７Ｌ・Ｍ－９グリッド。平面形は両丸長方形。主軸方位はＮ－86°－Ｅ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は均質で人為埋没か。中位に巨円礫を含む。規模は長軸169cm・短軸82cm・深さ11～16cmである。北辺際埋没土上位で、逆位の状態でほぼ完形の11の古瀬戸天目茶碗、その西側で10の在地系土器内耳鍋口縁部大片が出土する。底面よりも高いが、逆位ながら水平であり、意図的に置かれたことも考えられる。時期は出土遺物から15世紀前半に比定される。中世在地系土器鍋鉢類２片が出土している。



第115図　１区７・16・25・58・59・65・67・69・86・99号土坑出土遺物

第52表　１区屋敷内土坑出土遺物

掲　図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備　考
115図 PL.59	1	古瀬戸	盤類	7上坑	—	—	—	体部片		淡黄	外面は回転篦削り。内面から外面中位に灰釉。縦かい貫入が入る。	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期。
115図	3	在地系土器	片口鉢	25上坑	—	—	—	口縁部片		灰	断面は灰白色、器表は灰色。口縁部は外反。口縁端部は丸みを有し、端部内面は尖り、端部外面は丸みを有して小さく突き出る。端部内面の器表は摩滅。	Ⅲ・Ⅳ期。

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第115図	4	在地系土器	すり鉢	+10cm 58土坑	—	—	—	下半部片	A	にぶい橙	底部外面は砂底状。内面に粗いすり目。直径５㎝ほどの礫少量含む。	Ⅳ・Ⅴ期。
第115図 PL.59	5	在地系土器	片口鉢	+9cm 59土坑	—	—	—	口縁部片	A	黄灰	断面は灰白色、器表は黄灰色。器壁は厚く、口縁部は内面を窄ませて器厚を減じる。口縁端部内面は丸く突き出す。端部内面の器表は摩滅。	Ⅲ期。
第115図 PL.59	6	在地系土器	内耳鍋	65土坑	—	—	—	口縁部片	A	にぶい橙	断面はにぶい橙色、器表は黒褐色。口縁部に内耳貼り付け。	中世。
第115図	8	在地系土器	内耳鍋	69土坑	—	—	—	口縁部片	B	灰	器壁厚い。口縁部はゆるく内湾。内面口縁部下に段差はない。内面左端に内耳貼り付け時の窪みが残る。	Ⅰ期。
第115図 PL.59	10	在地系土器	内耳鍋	+10cm 99土坑	(27.6)	—	—	口縁部片	B	灰黄褐	器壁厚い。口縁部はゆるく内湾し、長く延びる。口縁部内面下部の段差は横撫での境程度で非常に小さく低い。	Ⅱ・Ⅲ期。
第115図	11	古瀬戸	天目碗	+7cm 99土坑	12.3	4.1	6.4～6.8	ほぼ完形		灰白	体部は直線的に延び、口縁部は直立気味に長く延びる。口縁部はやや外湾。内面から体部外面下位に天目釉。釉の一部は高台内まで垂れる。底部内面の釉に入ったヒビを中心に赤色物が認められる。この赤色物は体部内面の割れ目にも認められる。	古瀬戸後Ⅲ期。

挿図 PL.NO.	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第115図 PL.59	2	火打ち石	16土坑	寵子状	石英閃緑岩	2.1	1.9	5.2	上端稜部が潰れる。裏面側は平坦な分割面。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第115図 PL.59	7	銭貨 天聖元豊	67土坑	25.26	—	1.39～1.48	—	周縁1/4欠	僅かに変形し周縁が波打つ。真書。北宋、1023年初鋳。

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	口成形・整形の特徴	摘要
第115図	9	須恵器 杯	86土坑 底部片	底 6.9	細砂粒/酸化焔/にぶい黄	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	

（３）１号屋敷内の１土坑（井戸状土坑）

本遺構は土坑として調査されており、断定は避け、名称はそのままとした。屋敷に関係する井戸として、北辺17号溝より北側に位置する３号井戸、68号土坑もあげられる。

66号土坑（第116図、ＰＬ.17）

位置　７Ｋ・Ｌ－５・６グリッド。

確認面形状と規模　長径160㎝・短径124㎝のやや楕円形を呈する。形態から井戸になるものと思われる。

断面形　円筒形か。完掘しておらず、深さ100㎝以上である。調査部分では壁面のえぐり込みは見られない。

埋没状況　埋没土は全体的に砂質で浅間Ｂ軽石を含んでいる。

遺物　土師器杯類１片・甕類１片、須恵器甕類１片が出土するが、混入と見られる。

時期　埋没土に浅間Ｂ軽石を含んでおり、中世以降に埋没する。

66号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ロームブロックを含み、浅間Ｂ軽石を含むと思われる。
2　黒褐色土　やや砂質で、ややしまっている。ロームの微小なブロックと白色軽石を含む。
3　黒褐色土　やや砂質で、しまっている。白色軽石を含む。
4　黒褐色土　やや砂質で、しまっている。壁面から崩落したロームブロックを含む。浅間Ｂ軽石を含むと思われる。
5　黒褐色土　やや砂質でしまっている。ロームの微小なブロックを少量含む。

第116図　66号土坑（井戸状）

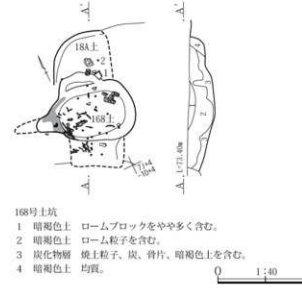
（４）１号屋敷内の土坑（火葬跡）

168号土坑（第117図、ＰＬ．25・59、第53表）

位置　７Ｊ・Ｋ－10グリッド。８号土坑より前出で、18号土坑より後出。１号屋敷の南西端に位置する。西辺を区画する溝は未確認であり、建物やピットの分布からほぼ南西端となる。土坑との重複関係は前後しており、時期判断は総合的な評価を必要とする。主体部は二段に分かれ、全体は長方形と推定され、中央部が楕円形に凹む。この西壁が溝状に張り出し、全体として歪なＴ字形を呈する。壁は斜めに立ち上がる。底面は上下段とも平坦。底面近くに炭化物層があり、焼土・焼骨片を多く含む。壁面の焼土化は中央部に凹んだ楕円形の外形に沿って、西壁を中心に橙色に焼け、南北壁に部分的に広がる。東壁では焼土化は確認できない。焼骨片も凹みの中央から西壁の範囲に集中する。主体部は長軸推定141cm・短軸推定60cm・深さ16cmで、中央の凹みの規模は長さ84cm・幅59cm・深さ28cm、張り出し部の規模は長さ23cm・幅20cmである。底面に礫は敷かれていないが、中央部を凹ませることで同様な効果を生じさせたものとして注目される。鑑定の結果（第４節１）、被火葬者は頭を東にした屈位で火葬され、30歳代の男性と判明した。出土遺物は18号土坑と重複する北辺で、炭混入土中から１の在地系土器内耳鍋大部片、２の銅銭小片が出土する。銅銭は混入とは見なし難く、火葬時に携帯または収骨後に入れられたと考えられる。掲載遺物の他に土師質甕類が３片出土している。出土遺物から中世に比定される。

備考　調査段階１号火葬墓を名称変更。

168号土坑



168号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックをやや多く含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。
3　炭化物層　焼土粒子、炭、骨片、暗褐色土を含む。
4　暗褐色土　均質。

第 117 図　168 号土坑（火葬跡）と出土遺物

第 53 表　１区 168 号（火葬墓）土坑出土遺物

掛図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
117図	1	在地系土器	内耳鍋	底直	－	－	－	体部片	A	黄灰	断面は黄灰色、器表は黒褐色。外面の器表は煤付着。体部下位は丸みを有し、丸底と推定される。	中期。

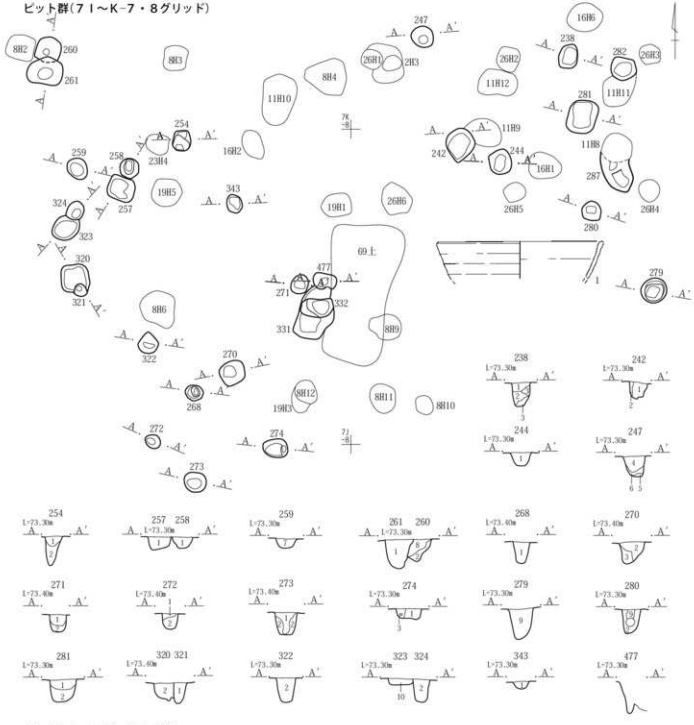
掛図 PL.NO.	NO.	種類器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第117図 PL.59	2	不詳	*1cm	－	－	－	－	1/4	劣化が著しく 1/4 のみ残存。

（５）１号屋敷内のピット（第118～121図、第54～56表）

調査区全体で352基のピットを検出したが、ここでは１号屋敷内に分布し、掘立柱建物として認定されなかったピット152基を、ピット群１か所と個別のピットとして扱う。このため、基本的に形態や埋没土などにおいて、掘立柱建物と大差はない。ただし、形態的な例外として、土坑に近いものも含まれる。179・180・197・225・226号ピットなどが該当する。また、ピットが集中する部分は、建物の集中に比例しており、ここでピット群とした部分が特に集中する部分とは一致しない。非掲載遺物の出土量は第55・56表に示したとおりである。

柱痕を残すものは３基と少なく、ピット群１の273号ピット、個別の170・388号ピットに過ぎない。一方、292号ピットは人為的に埋め戻された状況であり、近接する11号掘立柱建物の特徴と一致する。出土遺物は細片が多く、掲載遺物は１の須恵器杯のみである。

ピット群（７Ｉ～Ｋ-７・８グリッド）



７Ｉ～Ｋ－７・８グリッドピット群

1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒子・細粒白色軽石含む。
5　ロームブロック
6　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
7　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
8　黒褐色土　小礫・細粒白色軽石含む。
9　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。
10　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。

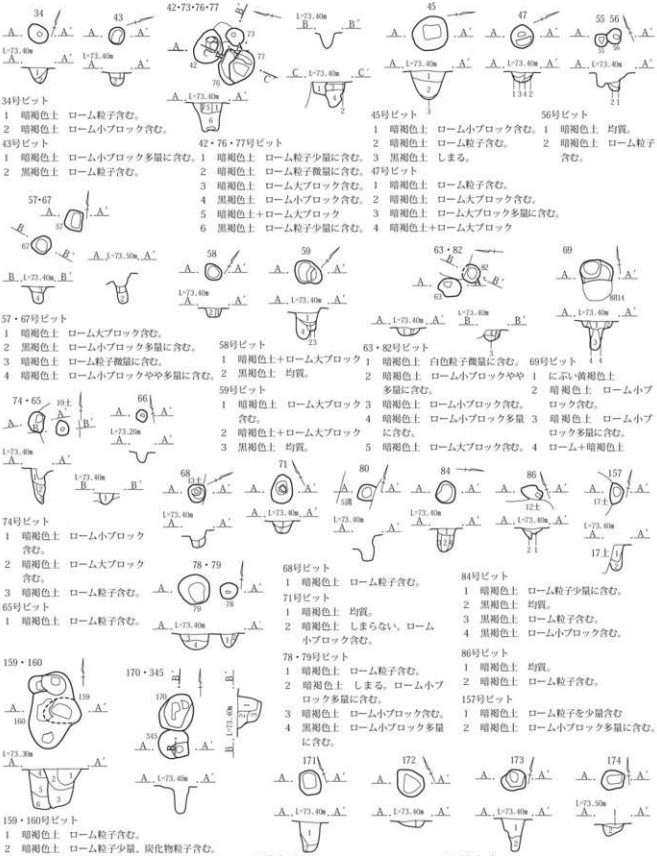
0　1：3　10cm

0　1：60　2m

第 118 図　１区屋敷内ピット群、280号ピット出土遺物

第 54 表　１区 208 号ピット出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第118図	1	須恵器 杯	口縁部片	口 12.8	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	



34号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロック含む。

43号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
2　黒褐色土　ローム粒子含む。

42・76・77号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ローム粒子微量に含む。
3　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
4　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
5　暗褐色土＋ローム大ブロック
6　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

45号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ローム粒子含む。
3　黒褐色土　しまる。

47号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
3　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
4　暗褐色土＋ローム大ブロック

56号ピット
1　暗褐色土　均質。
2　暗褐色土　ローム粒子含む。

57・67

57・67号ピット
1　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
2　黒褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
3　暗褐色土　ローム粒子微量に含む。
4　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。

58・59

58号ピット
1　暗褐色土＋ローム大ブロック
2　黒褐色土　均質。

59号ピット
1　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
2　暗褐色土＋ローム大ブロック
3　黒褐色土　均質。

63・82

63・82号ピット
1　暗褐色土　白色粒子微量に含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量に含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
4　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
5　暗褐色土　ローム大ブロック含む。

69

69ピット
1　にぶい黄褐色土
2　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。
4　ローム＋暗褐色土

74・65

74号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
3　暗褐色土　ローム粒子含む。

65号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

66

68

71

80

84

86

157

68号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。

71号ピット
1　暗褐色土　均質。
2　暗褐色土　しまらない。ローム小ブロック含む。

78・79

78・79号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　しまる。ローム小ブロック多量に含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
4　黒褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

84号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　黒褐色土　均質。
3　黒褐色土　ローム粒子含む。
4　黒褐色土　ローム小ブロック含む。

86号ピット
1　暗褐色土　均質。
2　暗褐色土　ローム粒子含む。

157号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む
2　暗褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

159・160

159・160号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子含む。
2　暗褐色土　ローム粒子少量、炭化物粒子含む。
3　暗褐色土　小礫・風化軽石少量に含む。
4　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
5　黒褐色土　ローム小ブロックごく多量に含む。
6　黒褐色土　ローム小ブロック少量に含む。

170・345

171

172

173

174

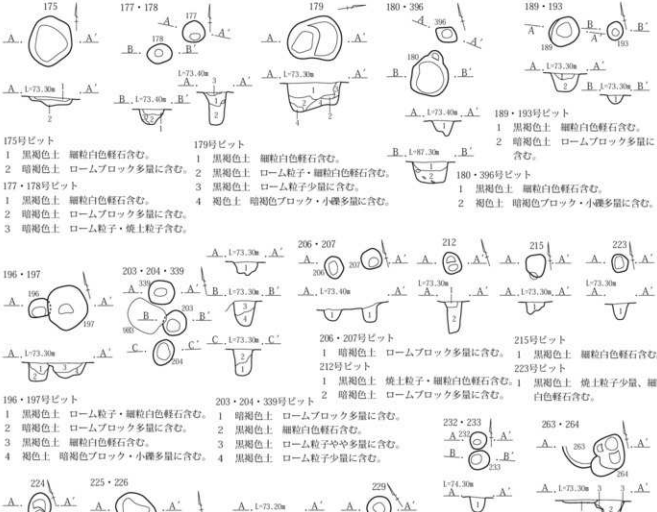
170号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
3　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

172号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

171号ピット
1　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

173・174号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

第119図　１区屋敷内側別ピット(１)



175号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

177・178号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子含む。

179号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子・細粒白色軽石含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
4　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

180・396号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

189・193号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

196・197号ピット
1　黒褐色土　ローム粒子・細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
4　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

203・204・339号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
3　黒褐色土　ローム粒子やや多量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

206・207号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

212号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

215号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

223号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。

224号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

225・226号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

229号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子少量、細粒白色軽石含む。

232・233号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

263・264号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石微量に含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
3　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

278号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

289号ピット
1　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

292号ピット
1　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒少量に含む。
4　ロームブロック

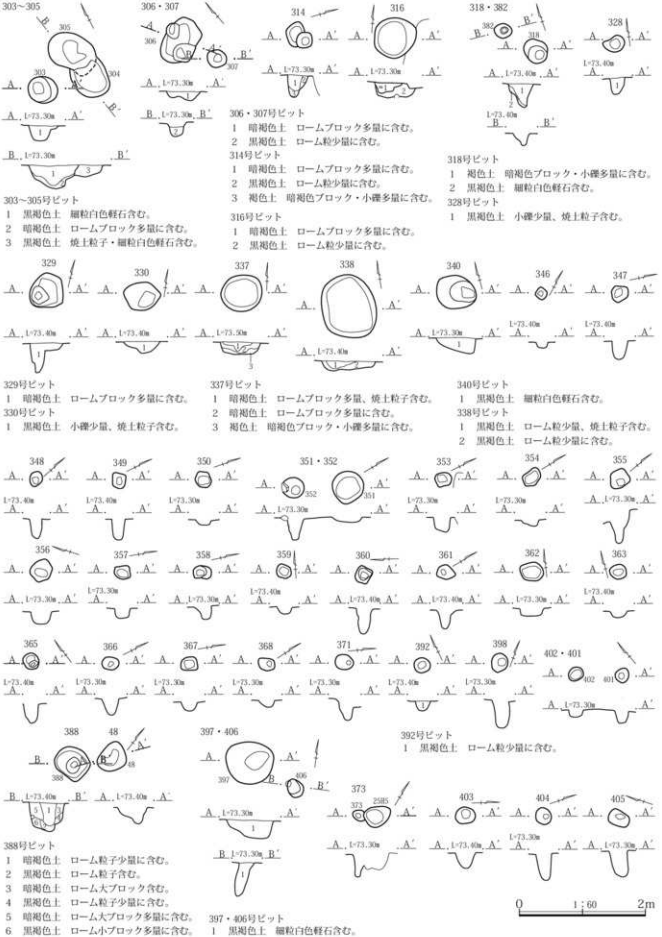
295・296号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　黒褐色土　ローム粒子多量、細粒白色軽石含む。

298号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量、焼土粒子含む。

301号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

302号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量、焼土粒子含む。

第120図　１区屋敷内個別ピット（２）



303～305号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
3　黒褐色土　焼土粒子・細粒白色軽石含む。

306・307号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

314号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

316号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

318号ピット
1　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。
2　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

328号ピット
1　黒褐色土　小礫少量、焼土粒子含む。

329号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

330号ピット
1　黒褐色土　小礫少量、焼土粒子含む。

337号ピット
1　暗褐色土　ロームブロック多量、焼土粒子含む。
2　暗褐色土　ロームブロック少量に含む。
3　褐色土　暗褐色ブロック・小礫多量に含む。

340号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

338号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量、焼土粒子含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

392号ピット
1　黒褐色土　ローム粒少量に含む。

388号ピット
1　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
2　黒褐色土　ローム粒子含む。
3　暗褐色土　ローム大ブロック含む。
4　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
5　暗褐色土　ローム大ブロック多量に含む。
6　黒褐色土　ローム小ブロック多量に含む。

397・406号ピット
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。

第121図　1区屋敷内側別ピット(3)

第 55 表　１区屋敷内ピット計測表(１)

No.	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片
24	7 J－11	41	—	23	
34	7 J－10	34	25	39	
42	7 J－9	51	48	47	
43	7 J－9	27	23	26	
45	7 J－8	58	51	42	
47	7 J－8	36	34	21	
48	7 I－8	52	45	49	土師壺１
55	7 J－10	20	19	20	
56	7 J－10	24	21	14	
57	7 J－9	30	26	48	
58	7 J－11	31	24	16	
59	7 J－10	36	35	38	
63	7 J－10	37	28	17	
65	7 J－9	22	20	10	
66	7 K－11	18	16	15	
67	7 J－9	30	28	24	
68	7 J－9	30	28	38	
69	7 J－9	50	—	50	
71	7 I－10	44	30	18	
73	7 J－9	28	23	28	
74	7 J－9	31	22	57	
76	7 J－9	50	—	29	
77	7 J－9	52	35	41	
78	7 J－10	27	24	25	
79	7 J－10	46	46	27	
80	7 I－9	25	24	42	
82	7 J－10	27	26	26	
84	7 I－9	33	29	35	
86	7 J－10	34	14	28	
157	7 J－9	31	20	40	
159	7 K－5	(59)	(40)	66	
160	7 K－6	123	65	64	土師壺１
161	7 L－5	36	28	20	
170	7 O－7	53	50	42	
171	7 N－7	38	32	35	
172	7 O－7	48	42	11	
173	7 M－9	38	32	42	
174	7 M－9	37	29	13	
175	7 M－9	77	64	16	
177	7 L－9	33	32	50	
178	7 L－9	38	30	27	
179	7 L-10	83	58	47	
180	7 L－9	25	(12)	23	
189	7 L－8	48	40	35	土師壺１
191	7 K－8	26	(22)	23	
193	7 M－8	30	24	17	
196	7 L－8	33	28	32	
197	7 L－8	66	60	24	
203	7 L－8	39	35	39	
204	7 L－8	40	30	40	
206	7 L－7	35	27	14	
207	7 L－7	31	30	46	
212	7 K－8	33	26	53	
215	7 K－8	34	29	56	
223	7 L－7	26	24	25	
224	7 L－7	42	32	32	
225	7 M－7	64	50	21	
226	7 L－6	62	60	16	
229	7 L－7	39	36	49	
232	7 K－7	26	26	21	
233	7 K－7	31	29	25	
238	7 K－7	36	27	32	
240	7 K－7	30	(20)	16	
242	7 J－7	42	42	30	
244	7 J－7	38	36	30	
247	7 K－7	34	31	37	
254	7 J－8	31	25	44	
257	7 J－8	41	35	16	
258	7 J－8	30	28	25	
259	7 J－8	34	29	19	
260	7 K－8	30	28	66	
261	7 K－8	41	34	34	
263	7 J－9	45	—	7	
264	7 J－9	53	51	23	
268	7 J－8	28	24	37	
270	7 J－8	38	35	34	
271	7 J－8	30	24	33	
272	7 J－8	24	20	24	
273	7 I－8	34	29	35	
274	7 I－8	36	30	15	
278	7 I－6	57	55	35	
279	7 J－7	39	38	49	
280	7 J－7	30	29	44	土師甕１
281	7 K－7	50	42	39	
282	7 K－7	40	33	32	
287	7 J－7	(75)	42	41	
289	7 J－6	32	30	35	
292	7 K－6	45	40	35	
295	7 J－6	30	—	22	
296	7 J－6	(36)	36	32	
298	7 K－6	43	40	23	
301	7 L－5	46	34	34	
302	7 L－5	55	44	32	
303	7 L－5	45	40	25	
304	7 L－5	(59)	54	15	
305	7 M－5	69	52	38	
306	7 L－4	74	50	35	
307	7 L－4	30	27	22	
314	7 K－9	44	34	18	
316	7 L－8	67	60	26	
318	7 J－9	38	34	38	
320	7 J－8	42	42	33	
321	7 J－8	22	20	36	
322	7 J－8	32	30	38	
323	7 J－8	(45)	36	12	
324	7 J－8	29	24	31	
328	7 J－4	33	24	26	土師壺２
329	7 I－4	54	50	46	
330	7 J－3	52	43	17	
337	7 M－9	62	54	19	
338	7 N－5	96	80	14	
339	7 L－8	38	36	22	
340	7 K－4	60	51	31	
343	7 J－8	29	22	11	
345	7 O－7	52	48	47	
346	7 O－7	16	16	17	
347	7 N－7	25	25	32	
348	7 O－7	23	18	34	
349	7 O－6	23	20	35	
350	7 N－7	24	24	10	
351	7 M－7	50	49	6	
352	7 M－7	34	30	36	
353	7 M－7	26	20	32	
354	7 M－7	30	21	8	
355	7 M－4	32	27	45	
356	7 L－4	32	30	25	

第56表　１区屋敷内ピット計測表(２)

№	グリッド	長径	短径	深さ	非掲載破片
357	７Ｌ－４	24	20	22	
358	７Ｌ－４	27	19	21	
359	７Ｋ－４	24	20	10	土師壺１
360	７Ｊ－３	25	24	42	
361	７Ｊ－４	28	20	28	
362	７Ｊ－５	36	28	13	
363	７Ｊ－４	25	21	10	
365	７Ｋ－５	26	22	31	
366	７Ｌ－６	26	19	26	
367	７Ｌ－６	25	20	12	
368	７Ｌ－６	25	20	10	
371	７Ｌ－７	27	21	35	
373	７Ｌ－９	22	16	42	
382	７Ｊ－９	26	22	12	
388	７Ｉ－８	60	59	31	
392	７Ｋ－９	24	23	27	
396	７Ｌ－９	35	25	26	
397	７Ｍ－８	72	66	35	
398	７Ｌ－４	29	24	45	
401	７Ｌ－９	22	20	22	
402	７Ｌ－９	24	20	17	
403	７Ｎ－７	30	25	25	土師甕２
404	７Ｋ－５	24	22	38	
405	７Ｋ－４	32	23	32	
406	７Ｍ－８	28	24	19	
477	７Ｊ－８	36	24	54	

（６）１号屋敷内の溝

１号屋敷を区画する溝３条と内部の溝４条がある。１号屋敷は16・17号溝を北限とし、両者には約2.5mの間隔があり、屋敷の出入口となっていた可能性がある。22号溝はその東辺を区画するが、南半分しか区画しておらず、特徴的である。なお、南側は調査区域外に延びて２区16号溝と同一となり、南辺も区画する。内部に位置する５・14・23号溝はともに小規模で、外側を区画する溝ではない。５・14号溝は周辺の土坑の一部と走向方位が一致し関連が想定できる。23号溝は並走する22号溝と比べて走向方位が西に傾いており、並存は想定しにくい。ただし、北端が一致していることから、同様な位置にある21号溝とあわせて、屋敷との関連も想定できる。

５号溝(第122図、ＰＬ.36)

位置　７Ｉ－９グリッド。25・27・29号土坑、80号ピットと重複するが新旧関係不明。29号土坑は主軸方位が一致しており、本遺構の一部である可能性もある。平面形は直線状。走向方位はＮ－３°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は０cm。自然埋没か。規模は長さ2.35m上端幅44～62cm最大深24cmである。土師器甕類が２片出土している。

14号溝(第124図)

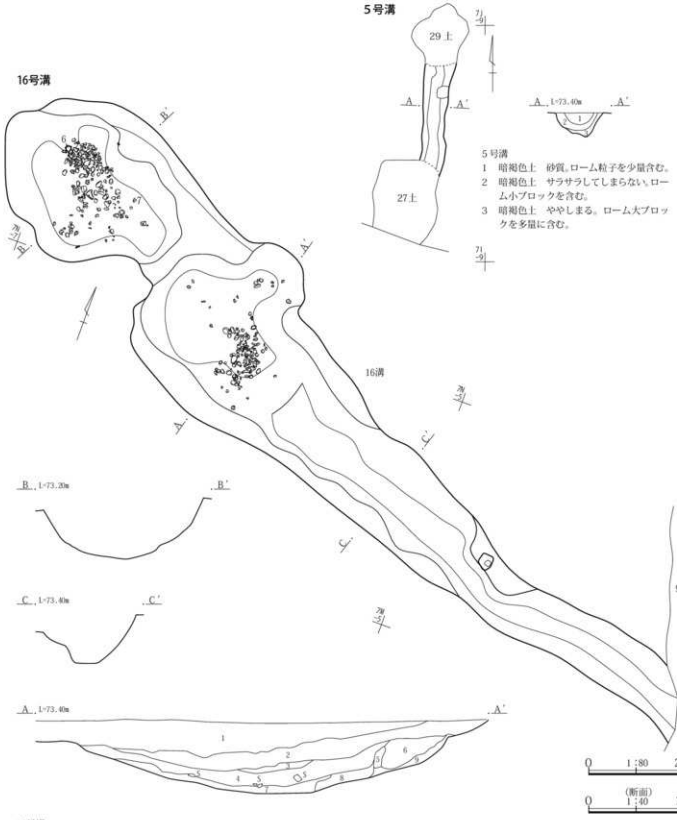
位置　７Ｉ・Ｊ－５グリッド。55・59号土坑より後出で、327号ピットと重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はＮ－４°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は１cmで、勾配0.29%で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ3.41m上端幅35～48cm最大深６cmである。遺物は出土していない。

16号溝(第122・123図、ＰＬ.38・60、第57表)

位置　７Ｌ～Ｎ－３～７グリッド。調査所見により９号溝より後出で、13号溝と重複するが新旧関係不明。東端は９号溝と重複して不明となるが、18号溝と合流する可能性もある。17号溝とあわせて1号屋敷の北辺を区画する。東半部は直線状で、東端から13m付近から北側に屈曲し不整形となる。走向方位はＮ－68°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は19cmで、勾配1.77%で西方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ18.92m上端幅115～384cm最大深50cmである。西端部は２か所が土坑状に凹む。東側の規模は長さ3.74m幅3.21m最大深63cm、西側の規模は長さ4.24m幅2.66m最大深66cmである。ともに底面にこぶし大の円礫が面的に広がり、６・７の内耳鍋大片も混じる。埋没土中からも在地系土器を中心に遺物がやや多く出土する。12の古瀬戸直縁大皿口縁部片(14世紀後半)、13の瀬戸陶器片口鉢(14世紀代)とほぼ一致して、在地系土器を含む遺物の年代は14世紀後半から15世紀前半でまとまりがある。生活痕跡を残す遺構と見られるが詳細は不明。井戸状の68号土坑も近いため、水場に関係する可能性がある。掲載遺物の他に土師器杯椀類６片・壺甕類13片、須恵器杯類１片・甕類７片、中世在地系土器鍋鉢類６片・皿１片、近世国産磁器１片・施釉陶器１片が出土している。

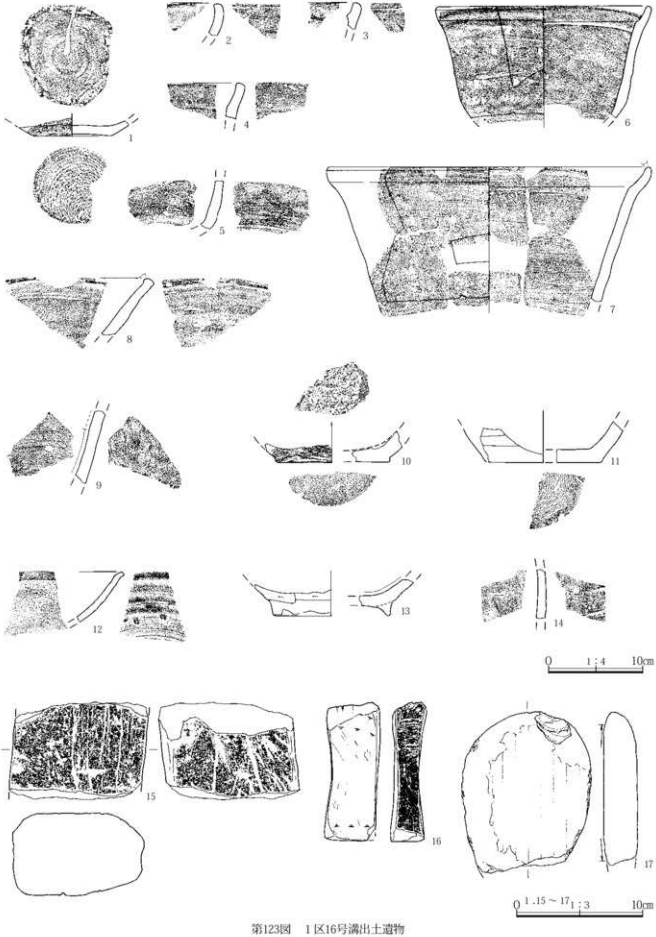
17号溝(第124・125図、ＰＬ.38・60、第58表)

位置　７Ｍ－６～９グリッド。７号溝より前出。１号屋敷の北辺を区画する。平面形は直線状で、西端から約３mは幅が半分程度に狭くなる。走向方位はＮ－87°－Ｗ。断面形はＵ字形で、西端の壁は垂直気味となる。底面は



16号溝
1　黒褐色土　白色軽石を含む。
2　黒褐色土　白色軽石、ローム粒子を含む。
3　黒褐色土　２層に近いが、白色軽石、ローム粒子、共に少量。
4　黒褐色土　小礫を多く含む。
5　黄褐色土　ローム主体。
6　黒褐色土　１層に近いがローム粒子を少量含む。
7　灰褐色粘質土　赤褐色粒子(鉄分か)、小礫を含む。
8　黄褐色土　ローム主体。赤褐色粒子(鉄分？)を多く含む。
9　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多く含む。

第122図　１区５・16号溝



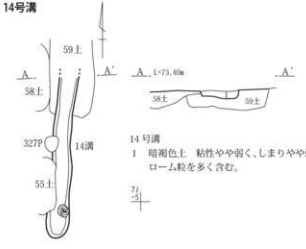
第123図　1区16号溝出土遺物

第 57 表　１区 16 号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第123図	1	在地系土器	皿	フク土	－	6.2	－		A	橙	底部左回転糸切無調整。底部内面の轆轤目は螺旋状。底部外面から体部外面に焼成後の線状痕多く残る。	中世か。
第123図	2	在地系土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短く、内溝。口縁端部内面は尖り気味。内耳貼り付け痕残る。	Ⅰ期。
第123図	3	在地系土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短く、内溝。口縁端部内面は尖り気味。内耳貼り付け痕残る。内耳は粘土紐を口縁部に貫通させて接合。	Ⅰ期か。
第123図	4	在地系土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	口縁部片	B	にぶい橙	器表は明褐灰色。口縁部は短く、端部付近は内溝。口縁端部上面は平坦で、内面側にやや肥厚。	Ⅰ期。
第123図	5	在地系土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	体部下位片	B	灰黄褐	断面は橙色。器表は灰黄褐色。焼成最終段階は還元炎気味。体部下位は内溝。外面体部下端は篦撫で。丸底。	Ⅰ・Ⅱ期。
第123図 PL.60	6	在地系土器	内耳鍋	+19cm	(22.0)	－	－	1/7	B	暗灰黄	焼成最終段階は還元炎気味。小型の鍋で、口縁部内面は明瞭な段をなして、器厚を減じる。口縁部は短い。口縁部は横撫で。体部は撫でで、外面には指頭厚痕状の窪みが残る。体部外面下端は篦撫で。体部下位は内溝。平底であろう。	Ⅰ期。
第123図 PL.60	7	在地系土器	内耳鍋	+1cm	(33.7)	－	－	1/8	B	黄灰	還元炎。体部下位は僅かに内溝し、体部中位以上は直線的に開く。口縁部は短く、内溝。内面口縁部下の稜線は明瞭だが段差はない。口縁端部内面は摩滅。	Ⅰ期。
第123図 PL.60	8	在地系土器	片口鉢	フク土	－	－	－	口縁部片	B	灰	還元炎。器壁やや薄く、口縁部は直線的に延びる。口縁端部は内外に肥厚し、内面側は明瞭に突き出す。突出部は摩滅。	Ⅳ期。
第123図	9	在地系土器	片口鉢	フク土	－	－	－	体部片	B	褐灰	断面はにぶい赤褐色。器表付近から器表は褐灰色。焼成最終段階は還元炎。体部は緩く外反。体部内面中位以下は使用により器表が摩滅し、上位は平滑となる。	中世。
第123図	10	在地系土器	片口鉢	フク土	－	(12.0)	－	底部片	A	にぶい橙	底部内面の器表剥離。底部外面は砂底状で、周縁は摩滅。	中世。
第123図	11	在地系土器	片口鉢	フク土	－	(12.0)	－	1/4	B	黄灰	内面器表と外面器表の１部は灰色。還元炎。底部左回転糸切無調整。内面と底部外面周縁は摩滅しない。	中世。
第123図 PL.60	12	古瀬戸	直縁大皿	フク土	－	－	－	口縁部片		淡黄	口縁部は小さく外反。体部外面下位以下は回転篦削り。内面から体部外面下位に灰釉。体部内面下半の釉は刷毛塗りか。	古瀬戸後Ⅰ期
第123図 PL.60	13	瀬戸陶器	片口鉢	フク土	－	(12.0)	－	1/4		にぶい赤褐	高台貼り付け。体部外面下端篦削り。内面は使用により平滑。	瀬戸。尾張型10型式。
第123図	14	常滑陶器	甕か	フク土	－	－	－	体部片		浅黄橙	外面器表のみ赤色。	中世。

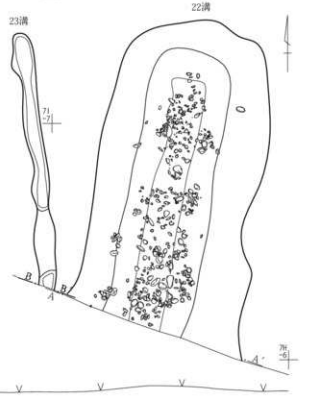
挿図 PL.№	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第123図	15	砥石	フク土一括	礫砥石	粗粒輝石安山岩	7.6	11.0	658.6	表裏面に縦位の刃なしし傷。四面を機能面として使用、全体形状は角柱状を呈する。上半部を欠損。	
第123図	16	砥石	フク土	手持ち砥石	砥沢石	10.9	4.4	172.7	四面使用。右辺下半に縦位の刃なしし傷。上端側欠損。	
第123図 PL.60	17	砥石	－	磨石 楕円扁平礫	粗粒輝石安山岩	(12.7)	10.2	496.2	背面側に光沢を帯びた摩耗面。礫砥石としての可能性がある。小口部・側縁に敲打痕・衝撃剥離痕。	

14号溝

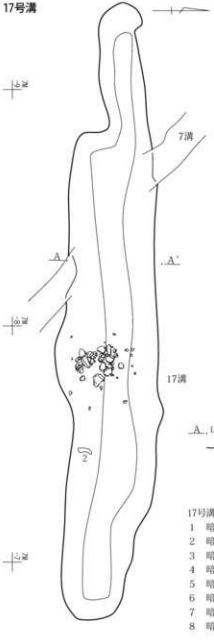


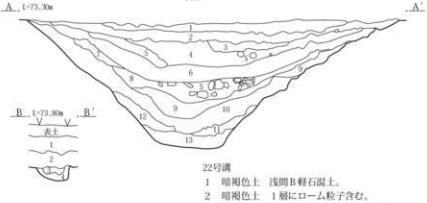
14号溝
1　暗褐色土　粘性やや弱く、しまりやや弱い。ローム粒を多く含む。

22・23号溝



17号溝





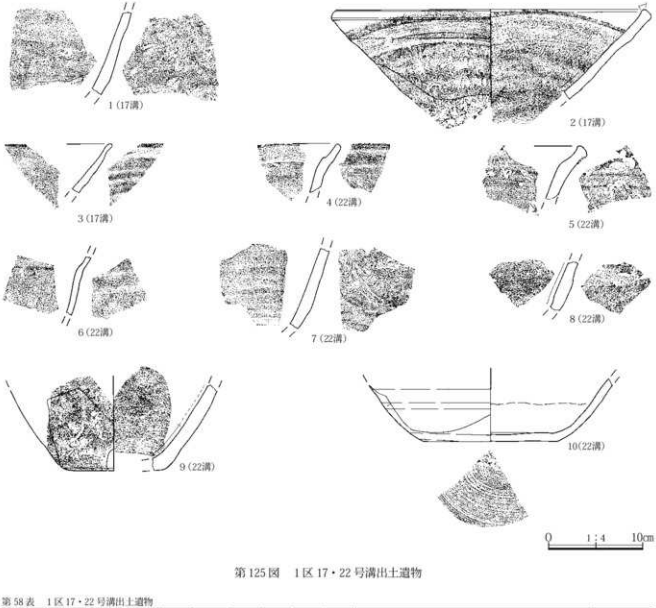
22号溝
1　暗褐色土　浅間Ｂ軽石混上。
2　暗褐色土　１層にローム粒子含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック含む。
4　黒褐色土　１～10cmの礫多量に含む。
5　黒褐色土　３層に３～８cmの礫含む。
6　黄褐色土　砂粒、ローム粒子、小礫多量に含む。
7　灰褐色土　やや粘性有り。小礫含む。
8　灰褐色土　粘性強い。３～15cmの礫多量に含む。
9　灰色土　粘性強い。ローム粒子、礫含む。
10　灰色土　粘性強い。砂粒、軽石多量に含む。
11　黒褐色土　やや粘性有り。砂粒多い。
12　褐色土　粘性弱い。礫含む。
13　暗褐色土　粘質土、礫、軽石含む。

23号溝南壁
1　暗褐色土　白色軽石含む。
2　暗褐色土　白色軽石を微量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子少量に含む。
4　褐色土　ロームブロック多量に含む。

17号溝
1　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　軽石を微量、焼土粒子を少量含む。
3　暗褐色土　軽石を微量含む。
4　暗褐色土　軽石を微量、焼土粒子を少量含む。
5　暗褐色土　しまり弱い。小礫を含む。
6　暗褐色土　ローム粒子を含む。
7　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
8　暗褐色土　灰褐色粘土ブロックを多く含む。

0　1:80　2m
（断面）
0　1:40　1m

第124図　１区14・17・22・23号溝



第125図　１区17・22号溝出土遺物

第58表　１区17・22号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第125図	1	在地系土器	内耳鍋	17溝フク土	—	—	—	体部片	B	黄灰	断面は黄灰色、外面の器表は黒褐色、内面の器表は褐灰色。小型の鍋。体部下位は内湾し、丸底と考えられる。	中世。
第125図 PL.60	2	在地系土器	片口鉢	17溝+5cm	〈32.6〉	—	—	1/4	B	黄灰	器表は黒褐色。器壁はやや薄く、体部は直線的に開く。口縁部丁寧な横撫で。口縁端部内面は上方に小さく突出。口縁端部は平坦で、外面は僅かに肥厚。体部内面下位は使用により器表摩滅。口縁端部内面の突出部摩滅。	Ⅲ・Ⅳ期。
第125図 PL.60	3	古瀬戸	直縁大皿	17溝フク土	—	—	—	口縁部片		灰白	口縁部は外面側の器厚を減じ、小さく外反。内外面に灰釉。細かい貫入が入る。	古瀬戸後Ⅰ期。
第125図	4	在地系土器	内耳鍋	22溝フク土	—	—	—	口縁部片	B	黄灰	断面中央は灰白色。断面から器表付近は黄灰色、内面器表は灰色、外面器表は黒褐色。小型の鍋であろう。口縁部は短く、内面は明瞭な段差を有して内面側の器厚を減じる。口縁端部内面は上方に尖り気味。端部外面は丸みを持つ。	Ⅰ期。
第125図	5	在地系土器		22溝フク土	—	—	—	口縁部片	B	灰黄	外面の器表保付着。器壁は厚く、口縁部は短い。口縁部は内湾し、端部内面は上方につき出す。	Ⅰ期。
第125図	6	在地系土器	内耳鍋	22溝フク土	—	—	—	体部上位編	A	明赤褐	断面は明赤褐色。器表は黄灰色。焼成最終段階は還元炎気味。器壁は薄い。内面口縁部下は低いく幅広の段差。口縁部下は屈曲。	Ⅳ・Ⅴ期。

挿　図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	胎土	色調	形・成調整等	備　考
第125図	7	在地系土器	内耳鍋	22溝フク土	－	－	－	体部下半片	A	黄灰	内面器表は灰色、外面器表は黒褐色で、端部下端は灰褐色。器壁厚く、体部下位は内湾気味。体部外面下端は箆撫で。	中世。
第125図	8	在地系土器	片口鉢	22溝フク土	－	－	－	体部下位片	A	灰黄	内面は使用により器表摩滅。	中世。
第125図	9	在地系土器	片口鉢	22溝フク土	－	(11.0)	－	1/4	B	青灰	断面中央は灰白色、器表付近は青灰色、器表は灰色。還元炎。体部内面下位は使用により器表摩滅し、中位は平滑で光沢を有する。体部はやや内湾。底部外面周縁は摩滅。底部と体部境の屈曲部は、すりこ木があたらず摩滅しない。	中世。
第125図 PL.60	10	古瀬戸	盤類	22溝フク土、表土	－	(14.0)	－	1/4		灰白	体部下位は内湾し、上位は外反。体部外面下位以下は回転箆削り。底部外面中央に回転糸切り痕残る。体部中位以上に灰釉。底部には貼り付けの三足を有したであろう。	古瀬戸後Ⅳ期古。

丸みを持ってやや凸凹する。両端の比高差は８cmで、勾配0.62％で西方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ12.88m上端幅39～107cm最大深45cmである。中央部底面から南壁にかけて、人頭大の円礫を含む集石が見られる。ほぼ楕円形に分布しており、重複する土坑も考慮されるが、傾斜に沿って下り込むため、底面に置かれたか、埋没当初投棄された可能性が高い。集石の東約１mの底面で、２の在地系土器片口鉢大片が出土する。出土数は比較的少ないが、３の古瀬戸直縁大皿など、遺物の年代は14世紀後半でまとまりがある。掲載遺物の他に土師器杯類１片・甕類３片、須恵器椀類２片・甕類２片、中世在地系土器鍋鉢類１片が出土している。

22号溝（第124・125図、ＰＬ.39・60、第58表）

位置　７Ｈ・Ｉ－６グリッド。南側は調査区域外に延びる。1号屋敷の東辺南半部を区画する。平面形は直線状。走向方位はＮ－10°－Ｅ。断面形は逆台形。北壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。両端の比高差は５cmで、勾配0.73％で北方へ下向する。底面から50cm程度灰色土ほかで埋まった段階で、こぶし大の円礫が平面的に投棄され、更に黄褐色土を挟んで、再度礫を含む黒褐色土で埋まる。人為的に埋めるが、礫層を挟むのはしまりを意識したものか。上位は平坦に埋まる。規模は長さ6.87m上端幅312～380cm最大深35cmである。調査範囲に比して出土数はやや多く、10の古瀬戸盤類片(15世紀半ば)もあり、在地系土器の年代は14世紀後半から15世紀後半までと幅がある。掲載遺物の他に中世在地系土器鍋鉢類３片が出土している。

23号溝（第124図、ＰＬ.39）

位置　７Ｈ・Ｉ－６・７グリッド。平面形は直線状。走向方位はＮ－７°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面はほぼ平坦で、南側が一部浅くなる。両端の比高差は１cmで、勾配0.19％で南方へ下向する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長さ5.40m上端幅24～48cm最大深16cmである。遺物は出土していない。

７　１号屋敷の周辺遺構

１号屋敷は溝で区画された屋敷であり、溝の外側を屋敷外とし、周辺の遺構についてここで扱う。遺構は分布位置により、１号屋敷の隣接部のもの、別の区画遺構と思われるもの、散在するものの３つの性格に分かれる。

１号屋敷の隣接部では、北・東・西の３方向に遺構が分布する。1号屋敷北辺は16・17号溝が間隔を開けており出入口も想定されることから、直接的な関連がうかがえる。特に３号井戸や68号土坑(井戸状)は関連する施設であろう。また、火葬跡である145・149号土坑も並存しない場合でも、屋敷空間を意識したものと考えられる。一方、１号掘立柱建物は主軸方位の違いなどから、中世以前と思われるが、他の掘立柱建物との対比も兼ねてここで扱う。土坑では51・101号土坑が埋没土に浅間Ａ軽石を含んで近世となり、100・102号土坑も近似するが、屋敷廃絶後の状況に関わるものと位置づけられる。また、やや離れて103～105号土坑がある。

東隣接部は土坑８基、溝１条が分布する。埋没土に浅間Ａ軽石を含む54号土坑もあるが、屋敷外縁部の土坑と対比される。21号溝は小規模ながら、22号溝と並走しており、屋敷との関係が考慮される。

１号屋敷の西側約15m範囲には、竪穴状遺構１基、土坑８基が分布する。竪穴状遺構は時期不明ながら、屋敷に関係する例が多いため、関係が考慮される。これに重複する土坑２基が後出であり、全体としても時期差が想定されるが、屋敷外縁部の土坑と対比される。

別の空間を区画する可能性があるものとして18号溝がある。16号溝と合流する可能性もあるが、１号屋敷の東に隣接する別の区画が想定される。新旧関係は不明。位置関係から４号井戸を関連するものと考えられる。

散在するものとして、調査区東端の土坑６基がある。このうち150～153号土坑４基は火葬跡であり、２区の東端も含めて集中部となっている。

(１)掘立柱建物

１区全体で27棟の掘立柱建物が認定され、そのうち24棟は１号屋敷内部に位置する。ここでは、周辺に分布する残り３棟を扱う。

第90表に示したとおり、主軸方位による分類で、１類は調査区東端の６号掘立柱建物１棟である。主軸方位は真北に対して東へ20～25度傾いている。周辺には古墳～平安時代の竪穴住居が集中するが、それらと主軸方位が異なっており、別時期と考えられる。

３類は調査区東北部の５号掘立柱建物と、１号屋敷内の４号掘立柱建物の２棟である。主軸方位は真北に対して西へ５～12度傾く。両者の間隔は約33mあり、直接は関連づけ難い。

４類は１号屋敷の北外側に位置する１号掘立柱建物で、主軸方位は同じく西へ35～39度傾く。この建物は１号屋敷内部の建物と主軸方位が異なる。混入にしろ、各柱穴がやや多く土師器を含むことから、古代に属する可能性は高い。

１号掘立柱建物(第126図、ＰＬ.10、第59表)

位置　７Ｎ・Ｏ－８・９グリッド　　**重複**　なし

主軸方位Ｎ－35～39°－Ｗ　　**面積**13.74㎡

形態　１間×２間・南北棟。南辺が北辺より32cm短いため、東辺は西に向傾する。西辺の中間柱Ｐ５は７cm北へ寄る。柱痕は見られない。Ｐ４・５は埋没土中位まで多量のロームブロックを含んだ埋没土４・５で埋まり、Ｐ１も水平方向に埋まることから、廃棄後に人為的に埋められた可能性が高い。Ｐ１の長径は78cmと大きく、Ｐ３・４も長径方向に広がっており、柱が抜き取られた可能性もある。柱穴の径は60cm前後が主体で、深さも50cm前後である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。底面には径10cm程度の小穴がすべてに見られ、柱部分に当たると言える。１区の他の掘立柱建物に見られない特徴であり、この面でも古代以前の所産と見ることができる。詳細な規模・非掲載遺物は第59表のとおり。

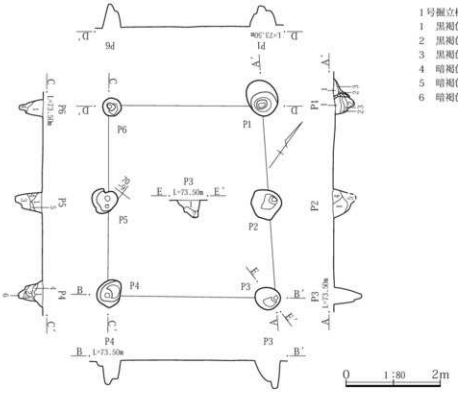
５号掘立柱建物(第127図、ＰＬ.10、第60表)

位置　97Ｌ－18・19グリッド。

重複　Ｐ１は158号土坑と、Ｐ５は498号ピットと重複するが新旧関係不明。

主軸方位Ｎ－８～12°－Ｗ　　**面積**11.33㎡

形態　１×２間以上・南北棟。北方の調査区域外へ延びる。東辺・西辺とも柱間はほぼ均等である。Ｐ３・４は柱痕とも見えるが、黄褐色土は壁面の崩落も考慮される。柱穴の径は40cm前後が主体であり、深さは50cm前後が主体である。柱穴の形態は隅丸方形が多い。底面に径10cm前後の小穴を持つものがある。詳細な規模は第60表のとおり。



第126図　１区１号掘立柱建物

第 59 表　１区１号掘立柱建物計測値

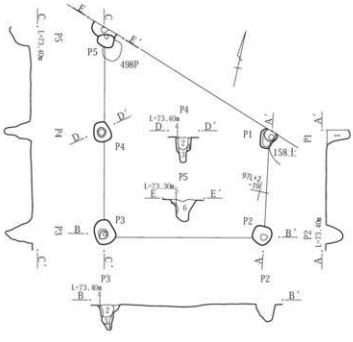
建物全体の規模		1間×2間・南北棟			面積	13.74㎡	非掲載遺物破片数	旧ピット番号
主軸方位		N－35～39°－W			位置	7N・O－8・9		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm) 長径	短径	深さ	形状	次ピットとの間隔(m)		
東辺　4.08	P 1	78	62	43	楕円形	2.01	土師壺類２	166
	P 2	63	62	47	円形	2.08	土師壺類１	168
南辺　3.56	P 3	53	47	58	円形	3.56		169
西辺　4.00	P 4	58	50	51	楕円形	2.05		167
	P 5	54	52	43	円形	1.95	土師壺類７	165
北辺　3.24	P 6	39	39	51	円形	P１へ3.24		231

第 60 表　１区５号掘立柱建物計測値

建物全体の規模		1間×2間以上・南北棟			面積	11.33㎡	非掲載遺物破片数	旧ピット番号
主軸方位		N－8～12°－W			位置	97L－18・19		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm) 長径	短径	深さ	形状	次ピットとの間隔(m)		
	P 1	(40)	35	47	楕円形	2.12	土師杯１・甕５	496
南辺　3.36	P 2	40	40	35	隅丸方形	3.36		491
西辺　4.32	P 3	52	42	53	隅丸方形	2.14	土師壺１	425
	P 4	42	36	55	隅丸方形	2.18	土師甕１	424
	P 5	56	(37)	43	不明(重複)			497

第 61 表　１区６号掘立柱建物計測値

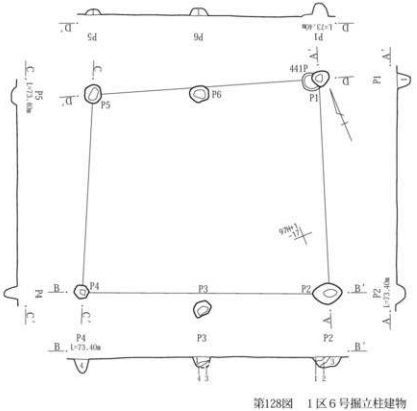
建物全体の規模		2間×1間・南北棟			面積	21.78㎡	非掲載遺物破片数	旧ピット番号
主軸方位		N－20～25°－E			位置	97H－16・17		
桁・梁の規模(m)	柱穴No.	規模(cm) 長径	短径	深さ	形状	次ピットとの間隔(m)		
東辺　4.55	P 1	36	32	27	円形	4.55	土師杯１・甕３	441
南辺　5.21	P 2	62	44	18	楕円形	2.71		454
	P 3	38	30	20	楕円形	2.56	土師杯１・甕１	457
西辺　4.18	P 4	31	27	29	円形	4.18		459
北辺　4.77	P 5	39	37	11	円形	2.25	土師甕２	438
	P 6	40	35	16	楕円形	P１へ2.53		439



５号掘立柱建物
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量に含む。
2　暗褐色土　軟らかくしまり良い。ロームブロック・白色軽石少量に含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまり粘性あり。ロームブロックやや多量に含む。
4　黄褐色土　軟らかくしまり良い。暗褐色土含む。
5　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
6　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

0　1:80　2m

第127図　１区５号掘立柱建物



６号掘立柱建物
1　黒褐色土　細粒白色軽石含む。
2　褐色土　暗褐色粒子含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。

0　1:80　2m

第128図　１区６号掘立柱建物

６号掘立柱建物(第128図、ＰＬ.27、第61表)

位置　97Ｈ－16・17グリッド。

重複　Ｐ１は441号ピットと重複するが新旧関係不明。

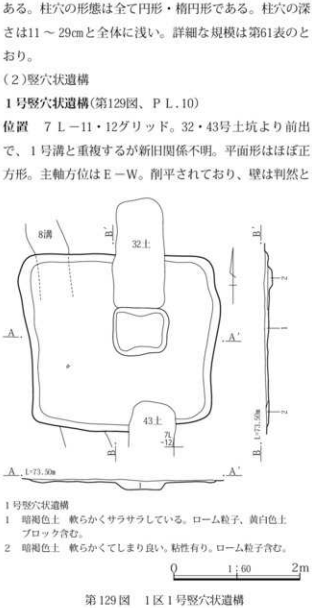
主軸方位Ｎ－20～25°－Ｅ　　**面積**21.78㎡

形態　２間×１間・南北棟。南辺は北辺より23㎝長いため、北辺は西下がりに傾き、東辺は西へ内傾、西辺は東へ内傾する。平面形は台形。位置がややずれるが、442・499号ピットを下屋としていたことも想定される。北辺の中間柱Ｐ６は５㎝西に寄り、柱筋よりも南内側に入る。南辺の中間柱Ｐ３も柱筋より中心が15㎝程南外側へ外れており、棟持ち柱と見なされる。柱痕も見られず、埋没土に特徴的なものはない。Ｐ２は長径62㎝の楕円形で、柱の立て替えなどによる柱穴の重複や、柱が抜き取られた可能性もある。そのほかの径は40㎝前後が主体である。柱穴の形態は全て円形・楕円形である。柱穴の深さは11～29㎝と全体に浅い。詳細な規模は第61表のとおり。

(２)竪穴状遺構

１号竪穴状遺構(第129図、ＰＬ.10)

位置　７Ｌ－11・12グリッド。32・43号土坑より前出で、１号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はほぼ正方形。主軸方位はＥ－Ｗ。削平されており、壁は判然としない。底面はほぼ平坦。床面、硬化面は確認されていない。柱穴も見られない。埋没状況不詳。規模は長さ東西3.14m・南北2.71m、深さ北辺３～６㎝東辺１～６㎝南辺１～４㎝西辺１～３㎝である。中央北寄りの底面に長方形の土坑が設けられる。埋没状況から底面で開口されていた可能性を持つ。規模は長さ0.87m幅0.75m深さ17㎝である。土師器杯類３片が出土している。



第129図　１区１号竪穴状遺構

(３)土坑

１号屋敷周辺で25基の土坑が検出された。平面形は、以下のとおり７種類に分類される。

土坑形態	数量
隅丸方形	2
隅丸長方形	4
隅丸細長方形	7
両丸細長方形	3
円形	2
不整円形	4
楕円形	3
計	25

分布は４か所に大別され、１号屋敷の北側に位置する一群、東外縁部に沿って分布する一群、西側約15m範囲に分布する一群、残りは調査区東側に分布し、遺構の性格として同種として扱える一群である。

屋敷の北側では７基があり、特に16号溝と17号溝に挟まれる状況で３基が分布する。100Ａ・Ｂ号土坑は隅丸方形である。これに近接する101・102号土坑は、ともに不整円形で規模も近い。101号土坑は浅間Ａ軽石を含んでおり、102号土坑も近似する。したがって、屋敷との直接的な関連は想定しにくい。この３基の北側約５mに３基が分布する。103・105号土坑はともに楕円形だが、前者は人為埋没で隣接する104号土坑に近い。ただし、104号土坑の形態は両丸細長方形である。残る51号土坑は離れて、104号土坑の東方約18mに位置する。ほぼ円形で、屋敷東辺の延長線上にも一致する。埋没土は浅間Ａ軽石を含み、屋敷との直接的な関連は想定しにくい。

屋敷の東外縁部に沿って８基が分布する。54・56・60号土坑３基は 隅丸細長方形で、すべて南北軸を採る。54号土坑は埋没土に浅間Ａ軽石を含み、１号屋敷とは時期が異なる可能性が高い。ほか２基も同種と見られる。これらの西側に隣接する53・61号土坑は、ともに隅丸長

方形である。53号土坑の底面には、灰褐色土が薄く堆積し、開口して使用されていた可能性が高く、61号土坑と様相が異なる。53号土坑から南東へ５ｍ以上離れて、52・147・162号土坑がある。後２者はやや規模の大きい不整円形だが、147号土坑はロームブロックを多量に含んで人為埋没しており、自然埋没かと見られる162号土坑とは異なる。52号土坑は楕円形で規模も小さいが、埋没土は162号土坑に近似する。

１号屋敷の西側約15ｍ範囲には、８基の土坑が分布する。形態は隅丸方形１基、隅丸長方形１基、隅丸細長方形４基、両丸細長方形２基と４種類が混在する。31号土坑は隅丸方形で規模も小さい。残る７基は、端部の形態や長さの長短により形態は異なるが、南北軸を採る長方形の土坑群である。主軸方位の違いによれば、ほぼ真北を採る32・37号土坑、やや東に傾く30・33・43号土坑、やや強く傾く34・169号土坑に分けられる。

調査区東側では中世遺物を伴う２基をここで扱う。139号土坑は隅丸長方形である。142号土坑は整った円形であり、井戸の可能性もある。この領域は、ほかに井戸１基や火葬跡４基が点在する程度である。

30号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.13)

位置　７Ｍ－12グリッド。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－12°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は全体的に軟らかいが、埋没状況不詳。規模は長軸288㎝・短軸100㎝・深さ６～11㎝である。遺物は出土していない。

31号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.13)

位置　７Ｌ・Ｍ－11・12グリッド。平面形は隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は砂利を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸105㎝・短軸97㎝・深さ４～17㎝である。土師器甕類２片が出土している。遺物は出土していない。

32号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.10)

位置　７Ｌ－12グリッド。調査所見により１号竪穴状遺構より後出。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－２°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は全体的に軟らかくロームブロックを含むが、埋没状況不詳。規模は長軸174㎝・短軸72～83㎝・深さ９～12㎝である。土師器杯類１片・甕類１片が出土している。

33号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.13)

位置　７Ｍ－12・13グリッド。１号溝より後出。平面形は両丸細長方形。主軸方位はＮ－７°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は全体的に軟らかくローム粒子を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸294㎝・短軸104～117㎝・深さ12～18㎝である。土師器甕類３片が出土している。

34号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.14)

位置　７Ｍ・Ｎ－13グリッド。調査所見により４号溝より後出。平面形は両丸細長方形。主軸方位はＮ－21°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は全体的にサラサラするが、埋没状況不詳。規模は長軸618㎝・短軸91～106㎝・深さ11～17㎝である。土師器壺甕類が14片出土している。

37号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.14)

位置　７Ｌ－11グリッド。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－Ｓ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は全体的に軟らかくてサラサラするが、埋没状況不詳。規模は長軸294㎝・短軸100～110㎝・深さ21～25㎝である。土師器杯類４片・甕類２片が出土している。

43号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.10、第131表)

位置　７Ｋ・Ｌ－12グリッド。調査所見により1号竪穴状遺構より後出で、１号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－５°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没状況不詳。規模は長軸210㎝・短軸70㎝・深さ20㎝である。遺物は出土していない。

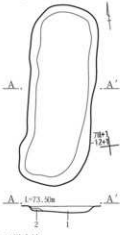
51号土坑(第130図、Ｐ Ｌ.15)

位置　７Ｍ・Ｎ－４グリッド。調査所見により９・13号溝より後出。平面形はほぼ円形か。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は浅間Ａ軽石を含み、自然埋没か。規模は長径110㎝・短径98㎝・深さ５～17㎝である。中世在地系土器鍋鉢類１片が出土している。

52号土坑(第130・132図、Ｐ Ｌ.15・60、第131表)

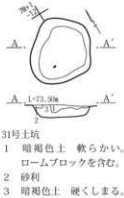
位置　７Ｈ－４グリッド。主体部分の平面形は楕円形で、南東部に一段高く半円形の部分が付く。断面観察では一度立ち上がっており、別の土坑にも見えるが、シミ状で掘り込みは明確ではない。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土にはローム粒子を含

30号土坑



30号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり悪い。ロームブロックを少量含む。
2　茶褐色土　軟らかくて粘性有り。

31号土坑

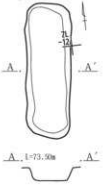


31号土坑
1　暗褐色土　軟らかい。ロームブロックを含む。
2　砂利
3　暗褐色土　硬くしまる。ローム粒子を少量含む。

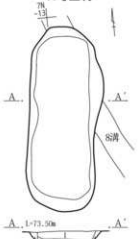
32号土坑

32号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてしまり悪い。ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　軟らかくて粘性有り。ローム粒子を多量に含む。

43号土坑

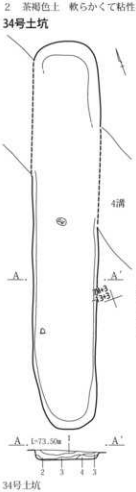


33号土坑



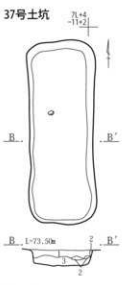
33号土坑
1　暗褐色土　軟らかい。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　軟らかくて、しまり良い。粘性有り。ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまり粘性有り。ローム粒子を含む。

34号土坑



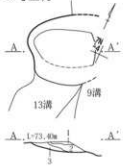
34号土坑
1　灰褐色土　やや硬くサラサラしている。暗褐色土ブロックを含む。
2　灰褐色土　軟らかくてサラサラしている。暗褐色土ブロックを少量含む。
3　灰褐色土　軟らかくて粘性有り。
4　灰褐色土　軟らかくて粘性有り。暗褐色ブロックを少量含む。

37号土坑



37号土坑
1　暗褐色土　軟らかくてサラサラしている。ローム粒子を含む。
2　灰褐色土　軟らかくて粘性有り。
3　灰褐色土　軟らかくてサラサラしている。ローム粒子を少量含む。

51号土坑

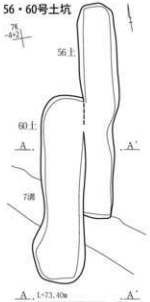


51号土坑
1　暗褐色土　浅間A軽石を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。
3　褐色土　ロームブロックを含む。

52号土坑

52号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ローム粒子を含む。

56・60号土坑



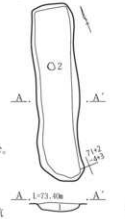
56号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ロームブロック、炭化物粒子を少量含む。

60号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でしまっている。ロームブロックを含む。浅間B軽石を含むと思われる。

53号土坑

53号土坑
1　暗褐色土　やや粘質でしまっている。ロームを帯状に含む。
2　黄褐色土　やや砂質でしまっている。ローム小ブロック、ローム粒子と暗褐色砂質土の帯状互層。ロームが主体。
3　暗褐色砂質土　しまっている。ロームを帯状に含む。

54号土坑



54号土坑
1　暗褐色土　やや砂質でしまっている。浅間A軽石、ローム粒子、ロームブロックを含む。

0　1:60　2m

第130図　１区30～34・37・43・51～54・56・60号土坑

む暗褐色土で自然埋没か。規模は長径87cm・短径75cm・深さ19cmである。出土遺物は南東部半円形部分で、１の砥石片が出土する。

53号土坑(第130図、ＰＬ.15)

位置　７Ｉ－５グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－18°－Ｅ。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。底面に１・２cm程度灰褐色土が水平に堆積しており、一時的に開口して使用されていたと見られる。埋没土下位はロームを含む暗褐色土で、上位はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸104cm・短軸74cm・深さ26cmである。土師器壺甕類が３片出土している。

54号土坑(第130・132図、ＰＬ.15、第131表)

位置　７Ｉ－４グリッド。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－18°－Ｅ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は浅間Ａ軽石を含み、ローム小ブロックを多量に含み人為埋没か。規模は長軸279cm・短軸65cm・深さ10～14cmである。中央やや北寄りで底面より浮いた状態で、２の土師器壺底部が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類７片・甕類３片が出土している。

56号土坑(第130図、ＰＬ.16)

位置　７Ｊ・Ｋ－４グリッド。60号土坑より前出で、７号溝より後出。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－９°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は炭化物粒子を少量含み、埋没状況不詳。規模は長軸340cm・短軸60cm・深さ５～10cmである。遺物は出土していない。

60号土坑(第130図、ＰＬ.16)

位置　７Ｊ－４グリッド。56号土坑、７号溝より後出。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－10°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土は浅間Ｂ軽石を含む均質な砂質土で人為埋没か。規模は長軸297cm・短軸72～84cm・深さ８cmである。遺物は出土していない。

61号土坑(第131図、ＰＬ.16)

位置　７Ｋ－４グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－８°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土は均質で人為埋没か。浅間Ｂ軽石を含まない。規模は長軸111cm・短軸55cm・深さ８～12cmである。遺物は出土していない。

100Ａ・Ｂ号土坑(第131図)

位置　７Ｍ－７グリッド。埋没土１・２を境に２基の土坑に分かれる。平面形はともに隅丸方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。Ａ土坑の規模は長軸97cm・短軸80cm・深さ13cmで、Ｂ土坑の規模は長軸86cm・短軸68cm・深さ23cmである。遺物は出土していない。

101号土坑(第131図)

位置　７Ｍ・Ｎ－７グリッド。平面形は不整円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没土は浅間Ａ軽石を含むが、埋没状況不詳。規模は長径80cm・短径66cm・深さ８～16cmである。遺物は出土していない。

102号土坑(第131図)

位置　７Ｎ－７グリッド。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。埋没状況不詳。規模は長径85cm・短径68cm・深さ８～17cmである。遺物は出土していない。

103号土坑(第131図、ＰＬ.19)

位置　７Ｏ－７グリッド。平面形は楕円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は砂質でロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長経99cm・短径66cm・深さ15cmである。遺物は出土していない。

104号土坑(第131図、ＰＬ.19)

位置　７Ｏ－７・８グリッド。平面形は両丸細長方形。主軸方位はＮ－15°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。底面に黒褐色土の間層を挟んで、10cm程度褐色土が水平堆積する。使用に伴って敷かれたことも考慮される。上位の埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸250cm・短軸97～106cm・深さ32cmである。土師器杯類８片・壺甕類２片、須恵器甕類２片が出土している。

105号土坑(第131図、ＰＬ.19)

位置　７Ｏ－８グリッド。平面形は楕円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。自然埋没か。規模は長経74cm・短径58cm・深さ12～19cmである。土師器杯類１片・甕類１片が出土している。

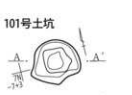
61号土坑

61号土坑
1　暗褐色土　粘性やや強く、しまっている。
　　ローム粒子、白色軽石を含む。

100A・B号土坑

100A・B号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。１層よりやや暗い色調。

101号土坑

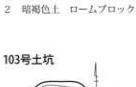


101号土坑
1　暗褐色土　砂質。浅間Ａ軽石を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
3　暗褐色土　軽石を少し含む。２層より暗い色調。

102号土坑

102号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を含む。攪乱か。
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
3　褐色土　ロームブロックを含む。

103号土坑



103号土坑
1　暗褐色土　砂質。ローム粒子、ローム
　　ブロックを多量に含む。

104・105号土坑

104号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
2　褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3　黒褐色土　ローム粒子を含む。

105号土坑
1　暗褐色土
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
　　２層よりやや明るい。
4　黒褐色土　ローム粒子を含む。

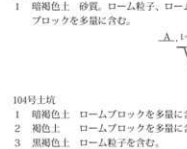
139号土坑

139号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、
　　白色軽石、炭化物粒子を含む。
2　黄褐色土　やや硬くしまる。ローム主体の層。

142号土坑

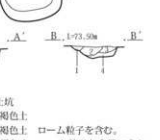
142号土坑
1　暗褐色土　やわらかくてサラサラしている。ローム粒
　　子浅間Ｂ軽石、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　やわらかくて粘性あり。茶褐色土を含む。

147号土坑



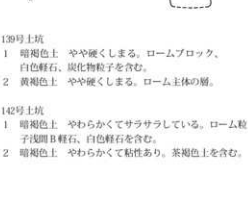
147号土坑
1　暗褐色土　白色軽石を含む。小礫を含む。
2　暗褐色土　しまり強い、白色軽石を少量含む。
3　暗褐色土　粘土ブロック、ロームブロックを含む。
　　小礫が混ざる。人為的埋土と思われる。
4　暗褐色土　軽石を微量含む。
5　暗褐色土　白色粘土ブロックを多量含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを多量含む。
7　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
8　暗褐色土　粘土ブロックを多く含む。人為的埋土か。
9　暗褐色粘質土　しまり強い。白色軽石を少量含む。

162号土坑



162号土坑
1　暗褐色土　ローム粒子を微
　　量含む。
2　黒褐色土　焼土粒子を微量
　　含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を多
　　く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、
　　ロームブロックを多く含む。
5　暗褐色土　３層に近いがよ
　　りロームが多い。

169号土坑



169号土坑
1　暗褐色土　サラサラしているをやや多く含む。
2　暗褐色土　粘性あり。ローム小ブロック。

0　1:60　2m

第131図　１区61・100～105・139・142・147・162・169号土坑

139号土坑(第131・132図、Ｐ Ｌ.22・60、第131表)

位置　97Ｋ－17グリッド。平面形は隅丸長方形。主軸方位はＮ－60°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋没土はロームと炭化物粒子を含むが、埋没状況不詳。規模は長軸110cm・短軸72cm・深さ15cmである。埋没土中から３の銅銭(熙寧元寶)が出土する。骨片などは見つかっていない。土師器壺甕類が３片出土している。出土遺物から中世に比定される。

142号土坑(第131・132図、Ｐ Ｌ.23、第131表)

位置　97Ｊ－17グリッド。３号住居の覆土中に構築されている。平面形は整った円形。断面形は円筒形。完掘しておらず、井戸の可能性もある。埋没土は浅黄Ｂ軽石、巨角礫を含み人為埋没か。規模は長径83cm・短径78cm・深さ80cm以上である。埋没土中から、４の在地系土器片口鉢が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類４片・甕類12片が出土している。出土遺物から中世に比定される。

147号土坑(第131・132図、Ｐ Ｌ.23、第131表)

位置　７Ｇ－５グリッド。21溝より前出か。南端は調査区域外に延びる。南方延長線上に２区18号溝があるが、埋没土が異なり同一と見なし難い。平面形は不整円形か。壁は斜めに立ち上がる。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。埋没土上位は21号溝埋没土とも考えられるが、断定できない。規模は長さ180cm以上・幅100cm・深さ37～91cmである。埋没土中から５の土師器杯口縁部片が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類４片・甕類３片が出土している。

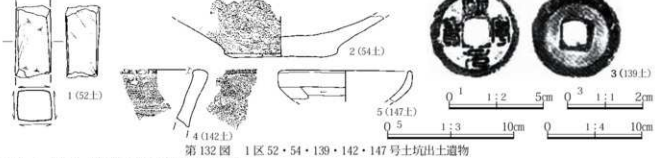
162号土坑(第131図、Ｐ Ｌ.25)

位置　７Ｇ－４グリッド。東端は調査区域外に延びる。平面形は不整円形か。北壁は丸みを持って斜めに立ち上がり、南壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持ち、すり鉢状に凹む。自然埋没か。規模は長径126cm・短径90cm・深さ30～48cmである。遺物は出土していない。

169号土坑(第131図)

位置　７Ｊ・Ｋ－11グリッド。１号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は隅丸細長方形。主軸方位はＮ－20°－Ｗ。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没状況不詳。規模は長軸365cm・短軸110cm・深さ５～11cmである。遺物は出土していない。

備考　調査段階２号溝を名称変更。



第132図　１区52・54・139・142・147号土坑出土遺物

第131表　１区52・54・139・142・147号土坑出土遺物

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第132図 PL.60	1	砥石	52号土坑	手持ち砥石	砥沢石	(3.8)	1.8	20.7	四面使用。四面とも浅い斜位線条痕が残る。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	口成形・整形の特徴	摘要
第132図	2	土師器 壺	54土坑床直 底部～胴部下位片	底 8.9	細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。	
第132図	5	土師器 杯	147土坑 口縁部～体部片	口 10.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第132図 PL.60	3	銅製品 銭貨	139土坑	23.47	23.51	1.30～1.44	2.50	周縁一部欠	「熙寧元寶」。北宋、1068年初鋳。粉を吹いたように遺存状態が悪く、周縁の一部が欠損。

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第132図	4	在地系土器	片口鉢	142土坑		－	－	口縁部片	A	灰	断面は灰色、器表付近はにぶい橙色、器表は黒色。器壁は厚く、口縁端部内面は突き出る。突出部の器表は小さい剥離が連続する。この剥離がより進むと摩滅状の痕跡になると考えられる。	口縁端部内面の使用痕形成過程を示す重要な資料。堀開か。

（４）井戸・土坑（井戸状）

１号屋敷周辺では３基の井戸、１基の井戸状土坑が分布する。なお、土坑は調査時の判断に従い、断定は避け、名称はそのままとした。３号井戸と68号土坑は、17号溝の北側に分布する。１号屋敷内では東外縁部の66号土坑1基しかなく、この屋敷に伴う可能性が高い。また、４号井戸は66号土坑から東へ約25m離れ、６号井戸はその南西約4.5mに位置するため、１号屋敷との関連は想定し難い。ただし、別の区画溝である18号溝の東端とほぼ一致することも考慮される。

３号井戸（第133図、ＰＬ.26・60、第63表）

位置　７Ｍ・Ｎ－９・10グリッド。南に隣接して１号集石がある。

確認面形状と規模　楕円形。長径288cm・短径235cm底面は確認できなかった。

断面形　漏斗状。完掘しておらず、深さ2.01m以上である。調査部分では壁面のえぐり込みは見られない。

埋没状況　埋没土の上位は砂質で、確認面下45cmの中央に、長径150cm短径95cmの楕円形に、巨円礫が集中して出土する。分布範囲は下位井筒の径に一致することから、木質の井筒などが残っていた状況で埋められた可能性がある。

出土遺物　礫集中部分で２の在地系土器内耳鍋片が出土するほか、埋没土中から８の石製火舎を含め、やや多く出土する。遺物の年代は14世紀後半から15世紀半ばにわたる。土師器杯類５片・甕類18片、須恵器甕類３片が出土している。

時期　出土遺物から14世紀後半から15世紀半ばに比定される。

４号井戸（第133図、ＰＬ.26・60、第63表）

位置　97Ｊ－20、７Ｊ－１グリッド。やや距離があるが、18号溝との関連が想定される。

確認面形状と規模　円形。長短ともに133cm。

底面形状と規模　円形。長径65cm・短径60cm。

断面形　円筒形。深さ1.34m。上面から1.05mで段を作って、中央部が更に20cm掘り込まれる。桶などの据え方か。深さも浅く、井戸以外の用途も考慮される。

埋没状況　全体に水平方向に堆積しており人為埋没。最上位は埋没土１の黄褐色土で丹念に埋める。

出土遺物　埋没土中から９の中国青磁碗が出土する。掲載遺物の他に土師器甕類８片、須恵器甕類１片が出土している。

時期　中国青磁は伝世するため、概ね中世に比定される。

６号井戸（第134図、ＰＬ.26・60、第64表）

位置　７Ｉ－１グリッド。

確認面形状と規模　乱れた円形。東側に張り出す方形の平坦面は重複する遺構とも考えられる。長径1.86m・短径1.86m。

底面形状と規模　ほぼ円形。長径0.87m・短径0.84m。

断面形　軽微な漏斗状。深さ2.0m。上面から約1.2m以下は円筒形になる。壁面のえぐり込みは見られない。

埋没状況　中位以下はロームと黒褐色土の互層で人為埋没であり、底面に巨礫が集中して投棄される。上位は自然埋没と見られる。

出土遺物　埋没土中から１の在地系土器皿大片、２の尾張陶器片口鉢底部片が出土する。掲載遺物の他に土師器壺甕類５片、須恵器杯類１片・甕類１片が出土している。

時期　出土遺物から12～13世紀に比定される。

68号土坑（第134図、ＰＬ.17、第64表）

位置　７Ｎ－８グリッド。３号井戸の東７mに位置する。

確認面形状と規模　楕円形。長径237cm・短径212cm。形態から井戸になるものと思われる。

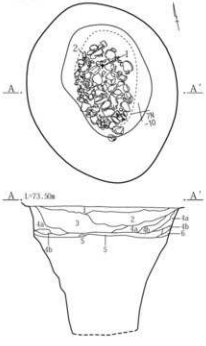
断面形　漏斗状。完掘しておらず、深さ212cm以上である。調査部分では壁面のえぐり込みは見られない。

埋没状況　埋没土は全体的に砂質で、最上層には浅間Ａ軽石や拳大から人頭大の礫を含む。

出土遺物　埋没土中から４の古瀬戸天目碗（14世紀後半～15世紀）、５の在地系土器壺を含め少量出土する。掲載遺物の他に土師器杯類３片・甕類５片、埴輪片が1片出土している。

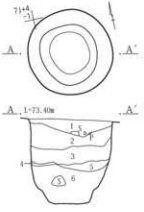
時期　出土遺物から15世紀末を下限とする。

３号井戸

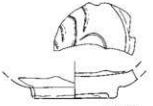


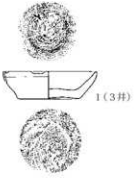
３号井戸
1　暗褐色土　砂質。ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土　砂質。小礫を含む
3　暗褐色土　砂質。ローム粒子、小礫含む。
4ａ 暗褐色土　ローム粒子を含む。３層より明るい。
4ｂ 暗褐色土　ローム粒子を含む。4ａ層に比べやや暗い色調。
5　暗褐色粘質土　10～30cmの礫を含む。
6　褐色土　壁の崩落土。

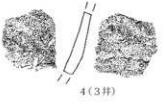
４号井戸

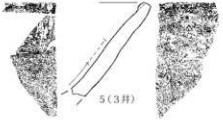


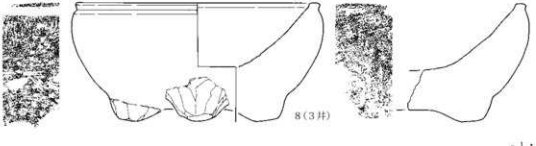
４号井戸
1　黄褐色土　やや硬い。ロームを多量に暗褐色土、白色軽石を含む。
2　暗褐色土　やや硬い。ロームブロックを多量に白色軽石を含む。
3　茶褐色土　軟らかくて粘性有り。黄白色粘質土ブロックを多量に、暗褐色土、砂利を含む。
4　灰褐色土　軟らかくてしまり良い。粘性有り。
5　暗褐色土　軟らかい。黄白色粘質土ブロックと暗褐色土の混土。
6　黄褐色土　軟らかく粘性有り。ローム主体で暗褐色土を含む。

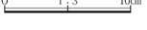












第133図　１区３・４号井戸と出土遺物

第63表　１区3・４号井戸出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第133図 PL.60	1	在地系土器	皿	３井戸	(7.3)	5.0	2.1	3/4	B	灰白	底部中央厚い。体部は緩く内湾。口縁端部外面は直立し、端部は尖り気味。	14世紀後半。
第133図	2	在地系土器	内耳鍋	３井戸	—	—	—	口縁部片	B	橙	断面は橙色、内面の器表は黄灰色、外面の器表は灰黄褐色。器壁厚く、口縁部は短い。口縁部内面の段差は鈍いが明瞭。口縁部横撫で。	Ⅰ期。
第133図	3	在地系土器	内耳鍋	３井戸フク土	—	—	—	口縁部片	B	に ぶい黄褐	器壁は厚いが、口縁部は直線的に長く延びる。内面口縁部下の段差は鈍いが明瞭。	Ⅱ・Ⅲ期。
第133図	4	在地系土器	内耳鍋	３井戸フク土	—	—	—	体部下位片	B	に ぶい黄橙	外面煤付着。下部は内湾し、器壁厚い。外面下部は横位撫撫で。	Ⅰ・Ⅱ期。
第133図	5	在地系土器	片口鉢	３井戸フク土	—	—	—	口縁部片	A	黄灰	還元炎焼成。体部は緩く内湾。内面から口縁部外面は横撫で。内面下部は使用により器表摩滅し、中位は平滑となる。口縁端部は内面に折り返す。	
第133図	6	在地系土器	鉢か	３井戸フク土				体部上位片	A	黄灰	還元炎焼成。上位は外反して口縁部にいたると考えられる。内面下位の器表は使用により平滑。	中世。
第133図	7	在地系土器	片口鉢	３井戸フク土	—	—	—	底部片	A	褐灰	外面器表は黄橙色。底部外面は回転糸切無調整。底部内面周縁は使用による摩滅が著しく、ドーナツ状に窪む。	中世。
第133図 PL.60	9	龍泉窯系青磁	碗	４井戸フク土	—	(6.4)	—	1/4		灰白	青磁釉はやや薄く、粗い貫入が入る。底部内面片彫りによる施文。底部内面周縁は段を有する。底部の器壁厚い。内面から高台端部及び高台内側まで施釉。底部外面は無釉。	Ⅰ-1・2・4類

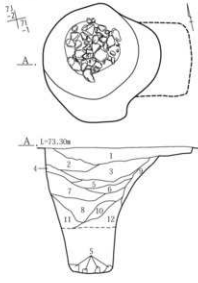
挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	口径	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第133図 PL.60	8	火舎	３井戸フク土	粗粒輝石安山岩		(19.2)	高さ9.2	727.4	口縁部は玉縁様。脚は三ヶ所が推定される。内外面は磨き整形を施しているが、底面は内外面とも粗い敲き整形痕を残す。脚部は削り整形仕上げ。	

第64表　１区6号井戸・68号土坑出土遺物

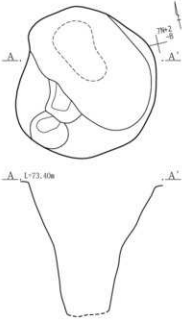
挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第134図 PL.60	1	在地系土器	皿	6井戸フク土	(8.3)	(5.4)	1.4	口縁部1部、底部1/2	A	橙	底部の器壁厚く、器高低い。口縁部は内湾気味に開く。底部右回転糸切無調整。	13世紀か。
第134図	2	尾張陶器	片口鉢	6井戸フク土	—	—	—	底部片		灰白	外面砂底状で、周囲は高台貼り付け時の横ナデ。内面は使用により平滑となる。	中世。尾張型、常滑の1類にあたる。
第134図	3	在地系土器	内耳鍋	68土坑フク土	—	—	—	体部上位片	A	に ぶい橙	断面はに ぶい橙色、器表は黒褐色。内面上部にゆるい段差。器壁厚い。	Ⅰ～Ⅲ期。
第134図	4	古瀬戸	天目碗	68土坑フク土	—	—	—	体部片		灰白	内面から外面上位に天目釉。釉はやや薄い。	古瀬戸後期。
第134図 PL.60	5	在地系土器	壺	68土坑フク土	(24.0)	—	—	1/4	B	灰	断面中央と器表は灰色。器表付近はに ぶい赤褐色。口縁部は上方に立ち上げ。端部は尖り気味。口縁部内面は窪む。頸部以下の器表は剥離。	中世。

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第134図 PL.60	6	砥石	68号土坑	礫砥石	牛伏砂岩	(22.1)	(12.2)	2828.2	背面側に幅３～５mm・深さ２～６mmを測る研磨溝。研磨溝の端部は緩く立ち上がり、弧状運動によることを示す。	

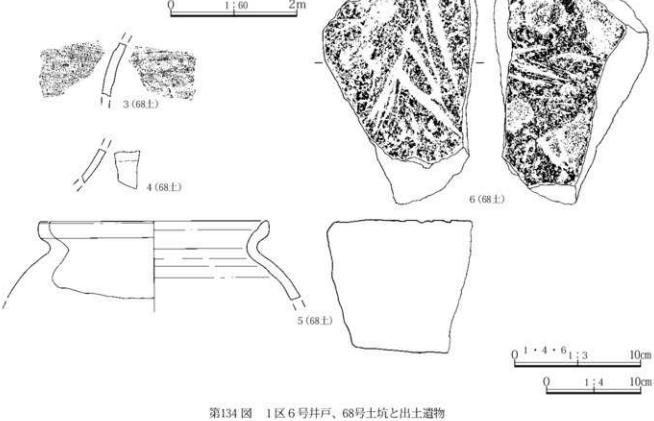
６号井戸



68号土坑



６号井戸
1　暗褐色土　ロームブロック、軽石を含む。
2　暗褐色土　１層に近いがロームブロックがより少ない。
3　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
4　暗褐色土　２層に近いが、ロームブロックがより少ない。
5　暗褐色土　ローム粒子、小礫を含む。
6　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
7　暗褐色土　ロームブロック、軽石を多く含む。
8　暗褐色土　７層に近いがローム粒子がより少ない。
9　褐色土　ロームブロックを多く含む。地山の流れこみ。
10　黒褐色土　ローム粒子を含む。
11　褐色土　ロームブロックを多く含む。
12　暗褐色土　ロームと黒褐色土の互層。



第134図　１区６号井戸、68号土坑と出土遺物

（５）土坑（火葬跡）

１号屋敷北側隣接部で２基、東方に離れて４基、合計６基が検出されている。１号屋敷北側隣接部の149号土坑は１号屋敷の北辺を区画する17号溝の東約70cmに位置し、同じく北辺に一致する16号溝の南約50cmにも位置する。この２条の溝が並存していた場合には、149号土坑は通路を塞ぐこととなり、同時期とは考えにくい。ただし、１号屋敷を意識した位置関係は認められよう。145号土坑は更に北側に外れ、北辺17号溝の縁辺から約２m離れる。

１号屋敷の東方に離れた４基のうち調査区南東部の152号土坑は東西軸であり、２区検出の３基と共通して、一群の火葬跡と見なされる。その西方約20mに位置する150・153号土坑は、主軸方位がほぼ一致する。11号溝と７号溝それぞれに重複し、走向方位も概ね一致する。溝が残っている状態か、凹んでいる状態で、その凹みを意識し利用したのものと想像される。152号土坑の北約18mに位置する151号土坑も、東に隣接する10号溝と主軸方位が一致しており、150・153号土坑と同様な状況にある。

西に張り出しを持つものが３基あるが、残る３基も著しく削平されており、張り出しの有無は不明である。底面に礫が置かれるものは、152号土坑のみである。被火葬者は成人男性２人と、年齢性別不明１体である。

145号土坑（第135図、ＰＬ.23）

位置　７Ｎ－７グリッド。68号土坑の南東に位置している。主体部は長方形で、西辺中央部に半楕円形の張り出しを持つＴ字形を呈する。火葬跡。主軸方位はＮ－４°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はロームがコブ状に盛り上がり、北半部は不定形に凹む。張り出し部の底面も同じ深さでつながり、大礫が３点見られる。埋没土は焼土粒を含む程度であり、炭化物層や焼土層は見られず、埋没前に収骨とあわせて除去された可能性が高い。壁面は全体に橙色に焼土化するが、張り出し部は焼けていない。主体部の規模は長軸95cm・短軸60cm・深さ27cm、張り出し部の規模は長さ35cm・幅29cmである。焼骨は確認できていない。遺物は出土していない。

149号土坑（第135図、ＰＬ.23）

位置　７Ｍ－６グリッド。16号溝に隣接している。主体部は長方形で南辺は丸みを持ち、東辺中央に溝状の張り出しを持つＴ字形を呈する。火葬跡。壁は斜めに立ち上がる。北半部底面はほぼ平坦で、中央を境に南半部底面は不整方形に一段下がりやや凸凹する。この部分と張り出し部の底面がつながり、斜めに立ち上がる。埋没土の底面近くは炭化物と焼土を含むが、炭化物層や焼土層は見られず、埋没前に収骨とあわせて除去された可能性が高い。東壁のうち張り出し部と接する南側数cmが部分的に焼土化する。張り出し部は焼けていない。主体部の規模は長軸137～149cm・短軸74cm・深さ20cm、張り出し部の規模は長さ43cm・幅27cmである。鑑定の結果（第４節１）、被火葬者は成人女性と判明した。土師器杯類１片・甕類１片が出土するが、混入と見られる。

150号土坑（第135図、ＰＬ.23）

位置　７Ｆ・Ｇ－２グリッド。11号溝の覆土中に構築されている。隅丸長方形を呈する。火葬跡。主軸方位はＮ－43°－Ｅで、11号溝の走向方位Ｎ－63°－Ｅにほぼ一致する。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。東西壁中央を中心に連続的に焼土化が見られる。埋没土は炭化物と焼土粒子を含み、底面近くに炭混土が平面的に広がる。焼骨は確認されていない。規模は長軸120cm・短軸62cm・深さ7～19cmである。遺物は出土していない。

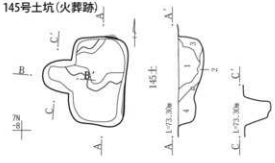
151号土坑（第135図、ＰＬ.24）

位置　97Ｉ－18グリッド。平面形は隅丸長方形。火葬跡。主軸方位はＮ－65°－Ｅ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋没土中位に炭化物層が一部認められる。壁面や底面が焼土化する状況および焼骨は確認されていない。規模は長軸124cm・短軸83cm・深さ９～15cmである。土師器杯類４片・壺甕類４片、須恵器杯類１片が出土するが、混入と見られる。

152号土坑（第135図、ＰＬ.24）

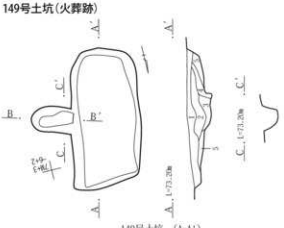
位置　97Ｅ－17グリッド。８号住居の覆土中に構築されている。主体部の平面形は隅丸長方形で、西辺中央部に半楕円形の張り出しを持ち全体形はＴ字形を呈する。火葬跡。主軸方位はＮ－13°－Ｅ。壁は垂直に立ち上がる。底面は張り出し部まで平坦につながる。埋没土中層以下は、炭化物片、焼土、焼骨片をやや多く含むが、炭化物層や焼土層は見られず、埋没前に収骨とあわせて除去された可能性が高い。壁面は全体に淡橙～橙色に焼土化し、特に西壁の張り出し部周辺から北半分と、張り出し部の南北両壁の東側が顕著に焼けている。底面は焼けていな

145号土坑(火葬跡)



145号土坑
1　暗褐色土　軽石を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。
3　暗褐色土　1層に焼土粒子を含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを多量含む。

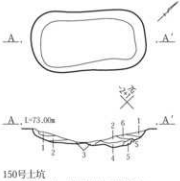
149号土坑(火葬跡)



149号土坑　(A-A')
1　暗褐色土　軽石を含む。
2　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を含む。
5　褐色土　ロームブロック、炭化物粒子、焼土粒子を含む。

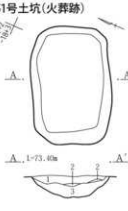
149号土坑　(B-B')
1　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を含む。
2　褐色土　焼土粒子を微量含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土　灰、焼土、炭化物を含む。
5　黄褐色土　粘土ブロックを含む。

150号土坑(火葬跡)



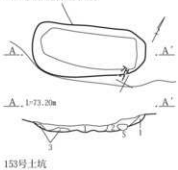
150号土坑
1　暗褐色土　炭化物を微量含む。
2　黒褐色土　炭化物を多く、焼土粒子を微量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子を含む。
4　暗褐色土　3層に近いがローム粒子がより多い。
5　暗褐色土　炭化物を微量含む。
6　暗褐色土　5層に近いが焼土粒子を含む。

151号土坑(火葬跡)



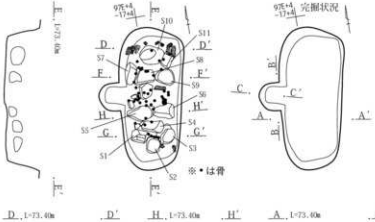
151号土坑
1　暗褐色土　やや硬くしまる。ロームブロック、白色軽石、炭化物、焼土粒子を含む。
2　暗褐色土　軟らかくてしまり良い。炭化物を多量に焼土粒子を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまる。ローム粒子,焼土粒子を含む。

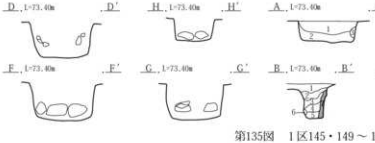
153号土坑(火葬跡)



153号土坑
1　暗褐色土　白色軽石、炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　炭化物を少量含む。
3　暗褐色土　炭化物,焼土ブロックを多量含む。

152号土坑(火葬跡)





152号土坑(A-A')
1　暗褐色土　やや硬くしまる。白色軽石、焼土粒子を少量含む。
2　暗褐色土　軟らかい。炭化物、焼土粒子、骨片を含む。
3　暗褐色土　やや硬くしまり粘性有り。焼土粒子を含む。

152号土坑(B-B')(C-C')
1　暗褐色土　軽石を含む。
2　暗褐色土　軽石,炭化物を微量含む。
3　暗褐色土　焼土粒子を含む。
4　暗褐色土　焼土粒子、灰を含む。
5　暗褐色土　炭化物を少量含む。
6　暗褐色土　焼土粒子を多く含む。
7　焼土
8　暗褐色土　軽石を微量含む。

0　1:40　1m

第135図　1区145・149～153号土坑

い。張り出し部の南北両壁の延長線上にあわせて、主体部中央に長径30cm大の円礫を横断方向に並べる。北側は２列で礫５点、南側は３列で礫６点が並ぶ。礫の焼け状態を観察すると、中央を起点として南３列目西隅のＳ１は火を受けて細かくはぜており、観察不能である。南３列目中央のＳ２は上面南側～下面まで黒く変色し、上面北側～側面は焼けて白色化するが小さな黒斑が２点見られる。南３列目東隅のＳ３は上面北端が焼けてやや赤色化し、側面下半分～下面が黒く変色する。南２列目のＳ４は上面から側面がやや焼け、下面は全体ににじみ気味に黒く変色し側面上方へ延びる。南１列目西のＳ５は上面から北側面がよく焼けて強くはぜる。南側面～下面は黒く変色する。南１列目東のＳ６は上面はやや焼け、下面が全体にやや光沢を持って黒く変色し側面上方へ延びる。北１列目西のＳ７は上面が焼け、側面は黒く変色する。北１列目中央のＳ８は上面は赤く変色気味に焼け、側面は黒く変色、底面もやや黒く変色する。北１列目東のＳ９は上面西隅が明瞭で白く10cm大の楕円形に焼け、南側面も焼け、顕著にひび割れる。そのほかの側面は全体ににじみ気味に黒く変色し、筋状に垂れるものが見られる。下面は変化なし。北２列目西のＳ10は上面が赤く焼け、側面は黒く変色する。下面は変化なし。北２列目東のＳ11は上面から側面にかけて黒く変色する。下面は変化なし。総括的に見ると、南側３列は上面が焼け、下面は黒く変色する。なお、黒い変色はススけたというよりも油煙が溶着した感じであり、一部筋状に垂れたりにじむものがある。北側２列は上面の焼け範囲が少なく南側が焼け、北側面を中心に黒く変色する。中央Ｓ８を除き下面に黒色化が見られない。礫は全て底面より浮いた状態で検出されており、黒色化の状態でも裏付けられる。ただし、整然と並んでおり、底面近くに設置されたことは間違いない。北列は変色が少ない点からも、底面直置きに近いと思われる。主体部の規模は長軸149cm・短軸70cm・深さ35cm、張り出し部の規模は長さ29cm・幅22cmである。鑑定の結果（第４節１）、被火葬者は頭を北にした屈位で火葬された成人男性と判明した。土師器杯類35片・甕類49片、須恵器杯椀類２片・甕類２片が出土するが、混入と見られる。

153号土坑（第135図、ＰＬ.24）

位置　７Ｇ・Ｈ－１グリッド。７号溝の覆土中に構築されている。隅丸長方形を呈する。火葬跡。主軸方位はＮ－66°－Ｅで、７号溝の走向方位Ｎ－54°－Ｗにほぼ一致する。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。埋没土は底面近くに炭化物、焼土ブロックを多量に含むが炭化物層はなく、埋没前に収骨とあわせて除去された可能性が高い。規模は長軸119cm・短軸45～54cm・深さ10～16cmである。火葬人骨は少なく、鑑定の結果（第４節１）、個体数・性別・死亡年齢とも不明である。土師器杯類１片・壺甕類２片が出土するが、混入と見られる。

（６）集石遺構

１号集石遺構（第136図、ＰＬ.26・61、第65表）

位置　７Ｍ－10グリッド。３号井戸の南に隣接する。長径20～30cm程度の細長い円礫６点が、丸みを持ってＪ字形に並ぶ。内外にやや小さい円礫が５点浮いた状態で点在しており、壊されて移動した可能性が高い。現存規模で長径94cm、短径56cmで６点が並び、本来は長径１ｍを超える楕円形であったと推測される。内側に１の在地系土器内耳鍋が出土しており、生活関連の施設と考えられる。出土遺物から14世紀末から15世紀前半に比定される。

（７）溝

溝は３条である。18号溝は掘り込みも浅いが、中世遺物を伴い、区画溝である可能性が高い。13号溝は１号屋敷の北辺となる16号溝と重複または合流し、関連が想定される。また、21号溝も同屋敷の東辺22号溝と並走し、関連が考慮される。すべて流水痕跡はない。

13号溝（第137図、ＰＬ.37・61、第66表）

位置　７Ｍ－４グリッド。51号土坑より前出で、９号溝より後出。16号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はＮ－16°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は５cmで、勾配3.38％で南方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ1.48ｍ上端幅24～40cm深さ15cmである。埋没土中から１の敲石が出土する。

18号溝（第137図、ＰＬ.38、第66表）

位置　97Ｌ－20、７Ｌ－１～４グリッド。９号溝と重複して状況から後出か。16号溝と合流する可能性もある。調査区の都合により中央で途切れるが、同一の溝である。平面形は弓状で、西端は不整円形状に広がる。走向方位はＮ－68°－Ｗ～Ｎ－83°－Ｅ。断面形はＵ字形。壁は

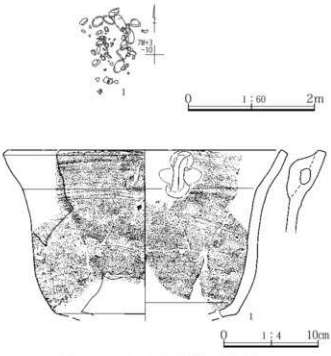
緩やかに立ち上がり、西端部は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。両端の比高差は14cmで、勾配0.67％で西方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ20.80m上端幅34～96cm深さ30cmである。埋没土中から２の在地系土器内耳鍋が出土する。出土遺物から中世に比定される。

21号溝(第137図、ＰＬ.38)

位置　７Ｇ・Ｈ－５グリッド。147号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は弓状で、北端は四角くなる。走向方位はＮ－８°－Ｗ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央から南側は一段下がる。埋没状況不詳。規模は長さ5.42m上端幅110～152cm深さ24cmである。

（８）遺構外出土遺物(第138・139図、ＰＬ.6、第67表)

縄文土器は４点出土し、前期後半２点、中期後半２点がある。古墳時代から江戸時代の遺物は、遺構年代とほぼ一致する。中世遺物については、１号屋敷に関係するものが多いと推測されるが、遺構深度の関係もあり、大片が遺構外となったことは残念である。掲載遺物の他に中世在地系土器鍋鉢類14片・皿１片、近現代陶磁器１片・瓦３片が出土している。



第136図　１区１号集石遺構と出土遺物

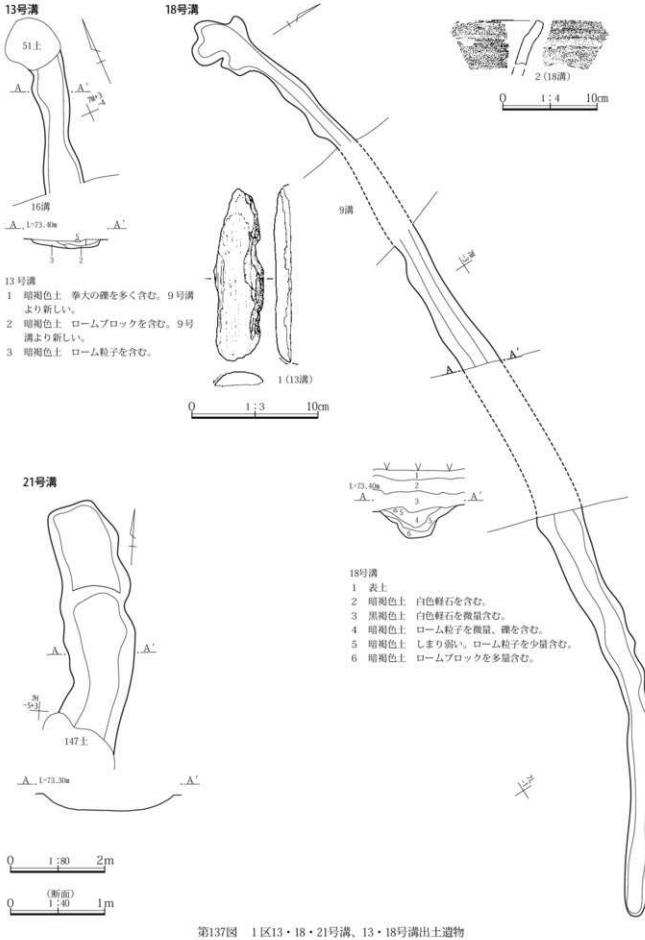
第 65 表　１区１号集石遺構出土遺物

挿図 PL.No.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第136図 PL.61	1	在地系土器	内耳鍋	表土	(28.6)	－	－	1/5	B	灰黄褐	器壁厚く、口縁部は長く延びる。口縁部はやや内湾。内面口縁部下の段差は不明瞭だが幅広。体部下位は内湾し、外面下端は箆撫で。丸底。	Ⅱ期。040063と同一個体の可能性高い。

第 66 表　１区13・18号溝出土遺物

挿図 PL.No.	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第137図 PL.61	1	敲石	13号溝フク上一括	棒状礫	雲母石英片岩	13.6	3.9	84.7	右側縁背面側を２ヶ所、左側縁裏面側を１ヶ所、粗く加工。右側縁側の加工はノッチ状を呈する。左側縁側に研磨面が部分的にある。	

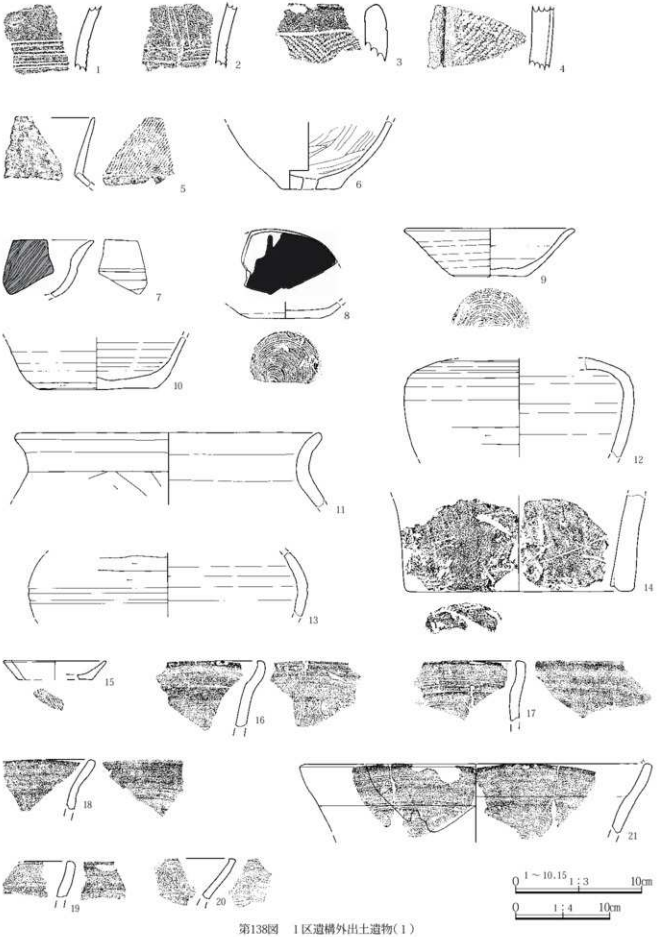
挿図 PL.No.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第137図	2	在地系土器	内耳鍋	18溝フク上	－	－	－	口縁部片	B	褐灰	還元炎。器壁厚く、口縁部は短い。内面口縁部下の段は、低いがやや明瞭。口縁端部内面は小さくつき出し、先端は尖る。	Ⅰ期。



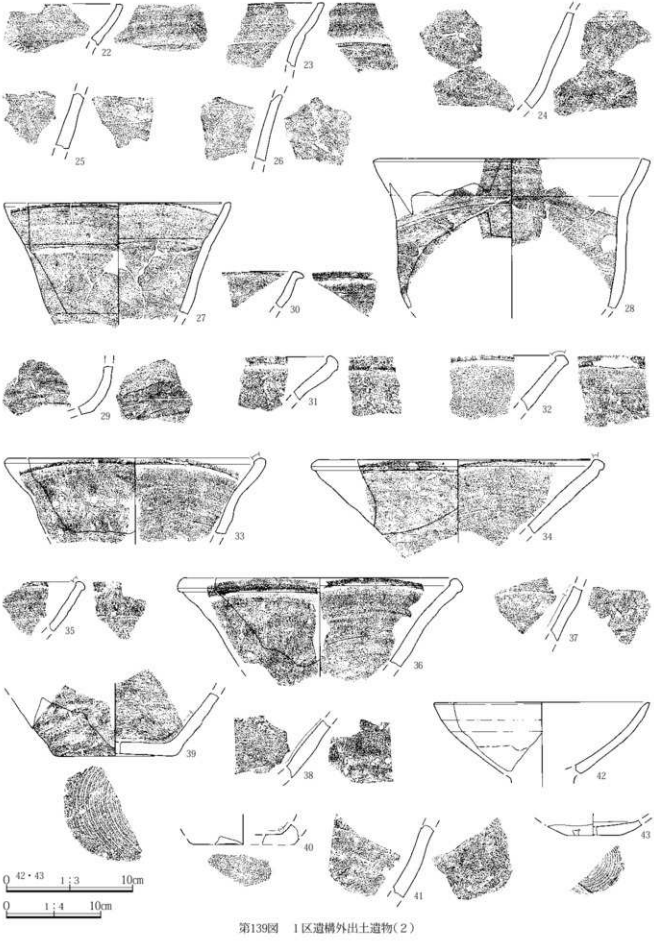
13 号溝
1　暗褐色土　拳大の礫を多く含む。９号溝より新しい。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。９号溝より新しい。
3　暗褐色土　ローム粒子を含む。

18号溝
1　表土
2　暗褐色土　白色軽石を含む。
3　黒褐色土　白色軽石を微量含む。
4　暗褐色土　ローム粒子を微量、礫を含む。
5　暗褐色土　しまり弱い。ローム粒子を少量含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを多量含む。

第137図　１区13・18・21号溝、13・18号溝出土遺物



第138図　１区遺構外出土遺物(１)



第139図　1区遺構外出土遺物(2)

第 67 表　１区遺構外出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別 器形	出土位置 残存率	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第138図 PL.61	1	縄文土器 深鉢	南表採 胴部破片	粗砂、細礫、黒色粒 / 良好 / にぶい黄橙	集合沈線による横帯構成。	諸磯ｂ式
第138図 PL.61	2	縄文土器 深鉢	9 溝 胴部破片		１と同一個体。横帯間に縦位沈線を３条施す。	諸磯ｂ式
第138図 PL.61	3	縄文土器 深鉢	45 土坑 口縁部破片	粗砂、黒色粒 / ふつう / にぶい赤褐	横位沈線をめぐらして幅狭な口縁部無文帯を区画、沈線下に ＬＲを充填施文する。	加曽利Ｅ４式
第138図 PL.61	4	縄文土器 深鉢	表採 胴部破片	粗砂、細礫 / ふつう / にぶい黄橙	降帯による懸垂文を施し、ＲＬを縦位充填施文する。	加曽利Ｅ４式

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第138図	5	土師器 壺	表 上 口縁部～胴部上位片		細砂粒/良好/浅黄	内外面とも赤色塗彩か。口縁部は胴部と頸部にて接合、口縁部は縄文が施文。	
第138図 PL.61	6	土師器 有孔鉢	表 上 底部～体部下位片	底 4.8 孔 1.1	細砂粒多/良好/橙	底部と体部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	
第138図	7	土師器 杯	フク上 口縁部～体部小片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部（稜下）から底部は手持ちヘラ削り。内面は斜放射状ヘラ磨き。	
第138図	8	須恵器 杯	フク上 底部片	底 5.6	微砂粒/還元焔/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面は平滑に擦れ、墨痕が残る。転用硯か。
第138図	9	須恵器 椀	表採 1/4	口 13.0 高 3.8 底 6.2	細砂粒/還元焔/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第138図 PL.61	10	須恵器 椀	表上 底部～体部下位片	底 9.4	細砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部と体部最下位は回転ヘラ削り。	
第138図	11	土師器 甕	フク上 口縁部～胴部上位	口 23.6	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第138図 PL.61	12	須恵器 長頸壺	フク上 胴部片	胴 18.0	細砂粒・黒色粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位は回転ヘラ削り。	
第138図	13	須恵器 瓶	フク上 胴部中位片	胴 22.0	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焔/灰	ロクロ整形。中位に２条の凹線が巡る。凹線の上位は回転ヘラ削り。	
第138図	14	埴輪 円筒	フク上 基底部片	底 17.4	細砂粒・粗砂粒・長石・片岩/良好/明赤褐	内外面と底面はヘラナデ。	

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第138図	15	在地系土器	Ⅲ	表採	(8.0)	(5.7)	1.5	1/8	A	橙	器表は灰黄褐色。底部回転糸切無調整。体部下端から次第に器厚を減じ、口縁端部にいたる。内面底部と体部の境は不明瞭。	14世紀後半～15世紀中頃。
第138図	16	在地系土器	在内耳鍋	16溝 表採	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短く、内湾。内面口縁部下の稜線は明瞭だが段差はない。口縁端部内面は尖り気味。	Ⅰ期。
第138図	17	地系土器	在内耳鍋	15住居 16	－	－	－	口縁部片	A	灰黄	断面は灰黄色、器表は灰色。焼成は還元であるが、焼成は軟質。口縁部横撫で。口縁部は下部で弱く屈曲し、内湾。	Ⅱ期。
第138図	18	在地系土器	内耳鍋	西表採	－	－	－	口縁部片	A	浅黄橙	断面は浅黄橙色、内面器表は灰黄褐色、外面器表は黒褐色。口縁部は外反。口縁端部外面は丸みを有し、端部内面は明瞭な稜をなす。	Ⅲ・Ⅳ期。
第138図	19	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短くい。口縁部の内湾は弱い。	Ⅰ期か。
第138図	20	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。外面の器表のみ褐灰色。器壁はやや薄く、口縁部はゆるく内湾。口縁端部内面は稜をなす。	Ⅲ・Ⅳ期。20・27と同一個体か。
第138図 PL.61	21	在地系土器	内耳鍋	表採	(37.0)	－	－	1/8	B	黄灰	還元炎。器壁やや厚く、口縁部は長く延びる。口縁部下半は内湾。内面口縁部下の段は不明瞭だが、幅は広い。口縁部横撫で。体部内外面は撫で。口縁端部内面はやや厚減。	Ⅱ期。
第139図	22	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	還元炎。外面の器表のみ褐灰色。器壁はやや薄く、口縁部はゆるく内湾。口縁端部内面は稜をなす。	Ⅲ・Ⅳ期。20・27
第139図	23	在地系土器	内耳鍋	排土	－	－	－	口縁部片	A	にぶい黄橙	口縁部はやや内湾。口縁部下は屈曲し、外面は強い横撫でにより凹線状に窪む。口縁端部上面はやや平坦で内外の端部は明瞭な稜をなす。口縁端部内面は小さく突き出す。	Ⅳ期。
第138図 PL.61	24	在地系土器	内耳鍋	西表採	－	－	－	体部片	A	にぶい黄橙	外面器表のみ黒褐色。体部下位は内湾。器壁やや厚い。丸底か。	Ⅰ・Ⅱ期か。
第139図	25	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	体部片	B	灰黄	還元炎。器壁厚い。	Ⅰ～Ⅲ期。
第139図	26	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	体部片	B	灰黄	還元炎。器壁厚い。	Ⅰ～Ⅲ期。

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第139図 PL.61	27	在地系土器	内耳鍋	表採	(24.0)	－	－	1/7	B	灰	外面の器表のみ黒褐色。還元炎。器壁やや薄く、口縁部は長く延びる。口縁部はゆるく内湾。内面口縁部下はゆるい稜をなして屈曲。体部外面下端は丸撫で。やや小型の鍋。	Ⅲ期か。20・22
第139図 PL.61	28	在地系土器	内耳鍋	西表採	(28.0)	－	－	1/5	B	灰黄褐	器壁厚く、口縁部は長く延びる。口縁部はやや内湾。内面口縁部下の段差は不明瞭だが幅広。体部下位は内湾。丸底であろう。	Ⅱ期。1号集石1
第139図	29	在地系土器	内耳鍋	表採	－	－	－	体部下位片	A	灰黄褐	体部下位は内湾し、丸底。器壁はやや厚い。	Ⅰ・Ⅱ期。
第139図	30	在地系土器	不詳	西表採	－	－	－	口縁部片	A	黄灰	断面は黄灰色、器表は暗灰色から黒色。口縁端部を外方に折り曲げる。	中世か。
第139図 PL.61	31	在地系土器	片口鉢	表土	－	－	－	口縁部片	B	灰黄褐	全体に器表剥離。口縁端部は内外に肥厚。口縁端部内面の突出はやや大きい。	Ⅲ・Ⅳ期。
第139図 PL.61	32	在地系土器	片口鉢	表採	－	－	－	口縁部片	B	灰	還元炎。外面の器表黒褐色。口縁端部は内面に突き出し、外面は丸く僅かに肥厚。口縁端部内面突出部の器表は摩滅。	Ⅲ・Ⅳ期。
第139図 PL.61	33	在地系土器	片口鉢	表採	－	－	－	1/7	B	灰白	還元炎。断面から器表付近は灰白色、器表は灰色。体部上位で外反し、口縁部はやや肥厚する。口縁部のみ横撫で。口縁端部内面は突出するが、器表は摩滅。体部内面下位は使用により平滑。	Ⅲ・Ⅳ期。
第139図 PL.61	34	在地系土器	片口鉢	表採	(29.2)	－	－	1/8	B	灰黄褐	還元炎。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに内湾。口縁端部は肥厚し、内面は上方に突き出る。口縁端部内面突出部は摩滅。体部内面下位は使用により平滑。	Ⅲ期。
第139図	35	在地系土器	片口鉢	表採	－	－	－	口縁部片	B	灰	還元炎。器壁は薄いが口縁端部は内外面に肥厚。口縁端部内面は摩滅。	中世。
第139図 PL.61	36	在地系土器	片口鉢	表採	(28.9)	－	－	1/8	A	灰	還元炎。口縁部器表のみ黒色から暗灰色。体部中位で外反し、口縁端部は内外に丸く肥厚。内面の使用痕と口縁端部内面突出部の摩滅は認められない。	Ⅳ期。
第139図	37	在地系土器	片口鉢	表採	－	－	－	体部下位片	A	にぶい黄橙	内面中位以下は使用により器表摩滅し、上位は平滑。	中世。
第139図	38	在地系土器	片口鉢	表採	－	－	－	体部下位片	A	橙	内面は使用により器表摩滅。	中世。
第139図 PL.61	39	在地系土器	片口鉢	表採	－	(13.0)	－	1/4	A	橙	断面は橙色、内面器表はにぶい黄色、外面器表は黄褐色。体部下位は直線的に開く。底部回転糸切無調整。底部周縁から体部内面下端の摩滅は著しく、ドーナツ状に窪む。窪みの周囲は使用により平滑。底部外面周縁は摩滅。	中世。
第139図 PL.61	40	在地系土器	片口鉢	表土	－	(11.0)	－	底部片	A	灰黄褐	断面は黒色。器表付近から器表は灰黄褐色。	Ⅴ期以降か。
第139図 PL.61	41	常滑陶器	甕	表採	－	－	－	体部片		にぶい赤	断面はにぶい赤色、内面器表は褐灰色、外面器表は暗赤褐色。内面は黒状に自然釉がかる。	中世か。
第139図 PL.61	42	古瀬戸	平碗	表採	(17.0)	－	－	1/7		淡黄	体部はやや内湾し、口縁部は小さく外反。内面から体部外面中位に灰釉。体部外面下位は回転篦削り。	古瀬戸後Ⅰ期。
第139図 PL.61	43	古瀬戸??	不詳	表採	－	(4.4)	－	1/2		灰白	底部右回転糸切無調整。底部内面は摩滅により平滑となる。内外面の1部に灰釉僅かに付着。	中世。

第３節　２区の遺構と遺物

１　竪穴住居

２区では北東隅で竪穴住居１軒検出された。西に並走する19号溝は、北方延長線上に位置する１区９号溝と同一の溝と見られる。１区ではこの溝を境として、東側に古墳時代から平安時代の竪穴住居が集中しており、２区も同じ集落域の一角に該当する

１号住居(第140図、ＰＬ.41・62、第68表)

位置　97Ｂ－18グリッド　　**重複**　なし

形態　東側半分が調査区域外となるが、ほぼ隅丸方形と思われる。　**主軸方位**　Ｎ－20°－Ｗ

規模　面積3.15㎡　長さ　南北2.73m、東西(2.1)m

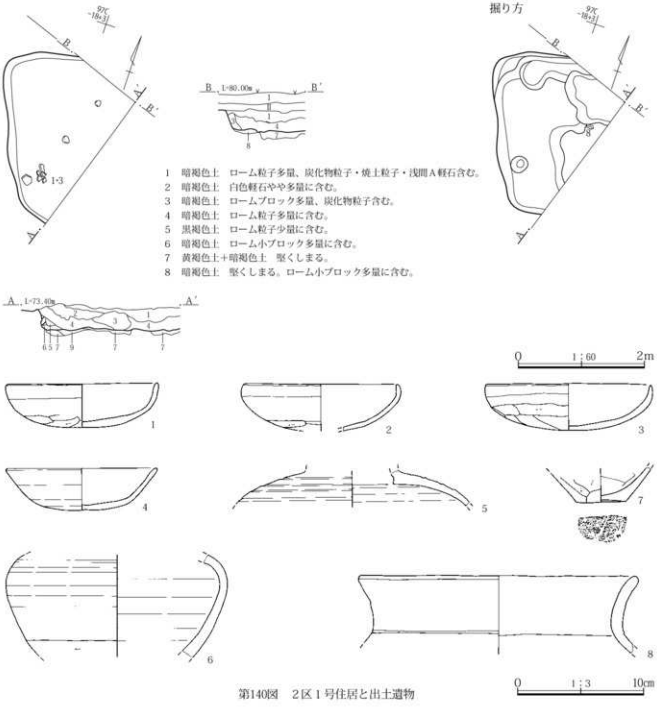
残存壁高　西辺21～25cm、北辺19～23cm

埋没土　自然埋没と考えられる。

カマド　未検出　柱穴　未検出

床　貼り床は見られないが、全体に堅くしまる。

掘り方　中央部を浅く台形に残し、壁面に沿ってＬ字形に10cm程度掘り込まれる。底面は比較的平坦。



第140図　２区１号住居と出土遺物

遺物　出土量は少ないが南西隅に土師器杯(１・３)などが、ややまとまって出土する。隣接して巨礫が見られるが、床面よりはやや高く特段関連は認められない。掲載した他に土師器杯類33片・甕類58片、須恵器杯椀類４片・甕類９片が出土している。

時期　出土遺物から７世紀第４四半期に比定される。

第 68 表　２区１号住居出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第140図 PL.63	1	土師器 杯	＋4cm 1/4	口 11.8　高 3.5	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第140図	2	土師器 杯	口縁部～底部小片	口 12.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第140図 PL.63	3	土師器 杯	＋4cm ほぼ完形	口 12.9　高 3.7	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第140図	4	須恵器 杯	1/6	口 11.8　高 3.3	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
第140図	5	須恵器 長頸壺	胴部上位片		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。内面頸部に頸部接続痕が残る。肩部には4条の凹線が巡る。	
第140図	6	須恵器 瓶	胴部片	胴 17.4	細砂粒・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下位に回転ヘラ削り。	
第140図	7	土師器 甕	底部～胴部下位片	底 4.0	細砂粒/良好/にぶい黄褐	底部には木葉痕が残る、胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第140図	8	土師器 甕	掘り方 口縁部～頸部片	口 21.4	細砂粒多/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

２　竪穴状遺構

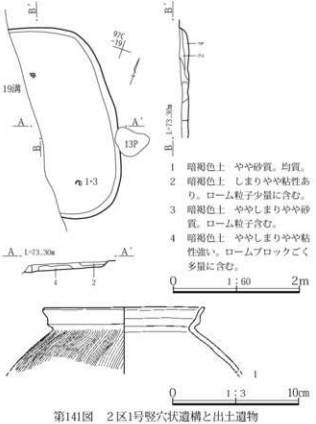
１基のみ確認される。１号住居に近接しており、同じ集落域に属している。

１号竪穴状遺構(第140図、ＰＬ.41・62、第69表)

位置　97Ｂ－18・19グリッド　　**主軸方位**Ｎ－25°－Ｗ

西半分は19号溝と重複するが、平面形は隅丸方形と推定される。新旧関係不明。規模は南北3.08m・東西(1.55)m・深さ北辺12cm・東辺12～13cm・南辺７～10cm。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、硬化面は確認されていない。自然埋没と見られる。遺物は南端で１の土師器台付甕口縁部片が出土するが概して少ない。掲載した他に土師器杯類８片・壺甕類13片が出土している。時期は掲載遺物から４世紀が想定できるが、19号溝からの混入も含めて、平安時代の遺物も含まれる。

備考　調査段階の３号土坑を名称変更。



1　暗褐色土　やや砂質。均質。
2　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム粒子少量に含む。
3　暗褐色土　ややしまりやや砂質。ローム粒子。
4　暗褐色土　ややしまりやや粘性強い。ロームブロックごく多量に含む。

第141図　２区1号竪穴状遺構と出土遺物

第 69 表　２区１号竪穴状遺構出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第141図 PL. 62	1	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 12.6	細砂粒/良好/灰白	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(１cmあたり６本)。内面胴部はナデ。	

３　土坑

全13基の分布は、１～４号溝周辺に集中する10基と調査区中央部に点在する３基に分けられる。形態を見ると、隅丸方形・隅丸長方形が１・２・５号土坑の３基で、１～４号溝周辺にある。整った円形のものは３基で、浅い11号土坑は調査区中央南端に偏在し、深さ70㎝前後と深い８号土坑は３号溝の南側、13号土坑は16号溝の比較的近い南側と共通性が認められる。３基とも形態から桶の埋設が想定されるが、ともに痕跡は認められない。不整円形で浅い６号土坑も８号土坑に近接する。残る６基は長楕円形・細長円形で調査区中央部に孤立する12号土坑以外は、１～４号溝周辺に所在する。

埋設土に着目すると、10号土坑のみ浅間Ａ軽石を含んでおり、３号溝から約５ｍ西に位置する点でも、他と区別される。浅間Ｂ軽石を含むものは４～６・８・９・11・15号土坑の７基で、すべて１～４号溝の周辺で、うち５号土坑は中世遺物を伴う。２号溝も中世遺物が出土する。また、１・２・７号土坑は、ロームブロックを多く含んで人為的に埋没する点で共通し、隅丸方形・隅丸長方形・長楕円形と形態は微妙に異なるが、分布からも近い関係にある。状況から中世段階が想定される。残る２基のうち13号土坑は深い円形で、中世に属する16号溝に近く、12号土坑は孤立して不明な点が多い。

以上から２区のほとんどの土坑は、中世に属する１区１号屋敷や区画溝に関連する可能性が高い。

１号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　97Ａ－19グリッド。平面形は隅丸方形。**主軸方位**Ｎ－76°－Ｗ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁は中位でややオーバーハングする。底面は平坦。埋設土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長軸116㎝・短軸92㎝・深さ52㎝である。土師器杯類６片・甕類６片、須恵器甕類１片が出土している。

２号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　97Ｂ－19グリッド。８・９号ピットより後出で、10号ピット、19号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は北辺の丸い隅丸長方形。**主軸方位**Ｎ－７°－Ｅ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。埋設土はロームブロックを含み均質で人為埋設。規模は長軸138㎝・短軸87㎝・深さ21㎝である。土師器杯類２片・壺類１片が出土している。

４号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　97Ｂ－19･20グリッド。６号ピットより前出で、５・７号ピットより後出する。平面形は半円に近い長円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋設土は浅間Ｂ軽石を含み均質で、人為埋設か。規模は長径205㎝・短径(106)㎝・深さ21㎝である。遺物は出土していない。

５号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　96Ｒ－20グリッド。１号溝より前出で、重複により南半分は消滅。平面形は隅丸方形か。**主軸方位**Ｎ－15°－Ｅ。東西壁は斜めに立ち上がり、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋設状況不明。規模は長軸129㎝・短軸110㎝・深さ20㎝である。土師器壺類が４片出土している。中世在地系土器鍋鉢類１片が出土している。

６号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　６Ｒ－１グリッド。１号溝より前出する。平面形は不整円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋設土は浅間Ｂ軽石を含むが、埋設状況不明。規模は長径120㎝・短径108㎝・深さ21㎝である。土師器杯類１片、須恵器甕類１片が出土している。

７号土坑(第142図、ＰＬ.42)

位置　97Ｂ・Ｃ－20グリッド。北半分は調査区域外となるが、平面形は長楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋設土はロームブロックをやや多量に含み人為埋設か。規模は長径(156)㎝・短径126㎝・深さ30㎝である。遺物は出土していない。

８号土坑（第142図、ＰＬ.42）

位置　６Ｒ－１・２グリッド。平面形は整った円形で、断面円筒形。底面は平坦。埋設土はロームブロックを多量に含み人為埋設。形態から桶の埋設も考慮されるが、痕跡は認められない。規模は長径100㎝・短径95㎝・深さ65㎝である。土師器杯類３片・甕類３片、須恵器杯類１片・甕類３片が出土している。

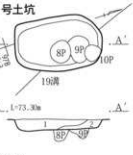
９・15号土坑(第142図、ＰＬ.42・43・62、第70表)

９号土坑　**位置**　６Ｒ・Ｓ－３グリッド。15号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。埋設土は浅間Ｂ軽石を含むが、埋設状況不明。規模は長径185㎝・短径105㎝・深さ41㎝である。埋設土中から１の板碑頭部が出土したため、中世に比定される。

1号土坑

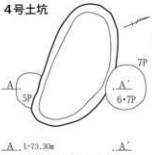
1号土坑
1　暗褐色土　しまり強くやや粘性強い。ローム小ブロック少量に含む。
2　褐色土　しまり強くやや粘性強い。ローム粒子やや多量に含む。

2号土坑



2号土坑
1　暗褐色土　ややしまり粘性やや弱い。ローム粒子・ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ややしまり強くやや粘性あり。ロームブロックごく多量に含む。

4号土坑

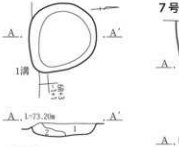


4号土坑
1　暗褐色土　しまり弱くやや砂質。浅間B軽石含むか。焼土粒子・ローム粒子含む。

5号土坑

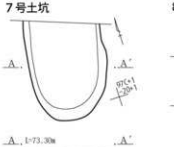
5号土坑
1　浅間B軽石　ややしまり弱くやや粘性あり。暗褐色土ローム粒子多量に含む。
2　浅間B軽石　ややしまりやや粘性あり。暗褐色土ロームブロック・ローム粒子含む。

6号土坑



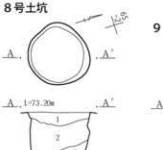
6号土坑
1　暗褐色砂質土　ややしまる。ローム粒子少量に含む。浅間B軽石含むか。
2　暗褐色土　ややしまりやや砂質。ローム粒子多量、ローム小ブロック含む。浅間B軽石含むか。

7号土坑



7号土坑
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ややしまり弱くやや粘性弱い。ローム小ブロック少量に含む。
3　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック・黒褐色土ブロック少量に含む。

8号土坑



8号土坑
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ロームブロックやや多量に含む。
3　黒褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック少量に含む。

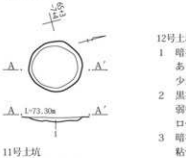
9・15号土坑

9・15号土坑
1　暗褐色土　ややしまりやや砂質。小円礫含む。浅間B軽石含むか。
2　浅間B軽石　ややしまりやや粘性あり。黒褐色土ローム粒子少量に含む。
3　黒褐色土　しまり強くやや粘性強い。ローム小ブロック少量に含む。

10号土坑

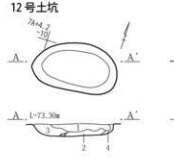
10号土坑
1　暗褐色砂質土　堅くしまる。浅間A軽石含む。

11号土坑



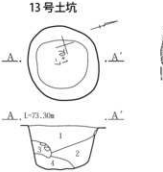
11号土坑
1　黒褐色砂質土　しまり弱い。浅間B軽石多量に含む。

12号土坑

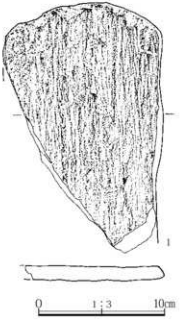


12号土坑
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子少量に含む。
2　黒褐色土　ややしまりやや粘性弱い。炭化物片・焼土粒子多量、ローム少量に含む。
3　暗褐色土　ややしまり弱くやや粘性弱い。ローム粒子・ローム小ブロック含む。
4　褐色土　しまり弱く粘性弱い。

13号土坑



13号土坑
1　暗褐色土　ややしまり弱い。ローム小ブロック含む。
2　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ロームブロック多量、浅間B軽石含む。
3　黒褐色土　しまり強くやや粘性強い。ロームブロック多量に含む。
4　黒褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム粒子微量に含む。



0　1:60　2m

第142図　2区1・2・4～15号土坑、9号土坑出土遺物

15号土坑　位置　６Ｒ－３グリッド。９号土坑と重複するが新旧関係不明。平面形は長楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は浅間Ｂ軽石を含むが、埋没状況不明。規模は長径(155)㎝・短径(67)㎝・深さ15㎝である。遺物は出土していない。

10号土坑(第142図、Ｐ Ｌ.43)

位置　６Ｒ－４グリッド。平面形は細長円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は浅間Ａ軽石を含むが、埋没状況不明。規模は長径121㎝・短径67㎝・深さ11㎝である。遺物は出土していない。

11号土坑(第142図、Ｐ Ｌ.43)

位置　６Ｓ－７グリッド。平面形は整った円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。埋没土は浅間Ｂ軽石を含み砂質。平面的には輪郭に沿って褐色粘土ブロックが点在する。形態・埋没土から桶の埋設も考慮されるが、痕跡は認められない。規模は長径84㎝・短径80㎝・深さ8㎝である。遺物は出土していない。

12号土坑(第142図、Ｐ Ｌ.43)

位置　７Ａ－９・10グリッド。平面形は長楕円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はやや凸凹する。自然埋没と思われる。規模は長径135㎝・短径77㎝・深さ19㎝である。遺物は出土していない。

13号土坑(第142図、Ｐ Ｌ.43)

位置　７Ｄ－６・７グリッド。平面形は整った円形で、断面円筒形。底面は平坦。埋没土はロームブロックを含み均質で人為埋没。形態から桶の埋設も考慮されるが、痕跡は認められない。規模は長径125㎝・短径114㎝・深さ73㎝である。遺物は出土していない。

第70表　２区９号土坑出土遺物

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第142図 PL.62	1	板碑	覆土		雲母石英片岩	(19.7)	(12.5)	555.2	板碑としては薄く、小形。表面側に工具痕を残す。上端側・右辺は丸味を帯び、初期の板碑としての形状を逸し、頂部山形の形骸化が著しい。	

４　井戸

調査区中央から東端にかけて３基が点在する。地表下の水みちなどを、特段意識したものとは思われない。１・２号井戸は埋没土に浅間Ｂ軽石を多く含むことから、中世以降の所産と考えられる。１号井戸周辺は遺構がやや集中し、１～４号溝に区画された内側に位置する。３号井戸も１区１号屋敷の南辺と見られる16号溝と17号溝に挟まれており、関連する可能性がある。

１号井戸(第143図、Ｐ Ｌ.43、第71表)

位置　97Ｂ－19グリッド

重複　19号溝と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模　楕円形。長径1.72m短径1.55m。

底面形状と規模　楕円形。長径0.76m短径0.52m。

断面形　漏斗状。深さ2.18m。底面から84㎝の壁面に顕著なえぐり込みが見られ、水位を反映したものであろう。

埋没状況　底面から埋没土10、９、５～８、４の順に明瞭な層境を持ち、およそ４段階の埋没過程を持ち、人為埋没である。その上位は自然埋没および覆土の沈み込みと見られる。浅間Ｂ軽石を含むが、概して砂礫の混入が少ない特徴を持つ。

遺物　土師器杯(１)の他、土師器杯類８片・甕類３片、須恵器杯類３片が出土するが、混入と見られる。

時期　埋没土に浅間Ｂ軽石を含むため、中世以降に埋められたものである。

２号井戸(第143図、Ｐ Ｌ.43、第71表)

位置　７Ｃ－４グリッド。**重複**　なし。

確認面形状と規模　不整円形。長径0.88m短径0.78m。

底面形状と規模　不整円形。長径0.60m短径0.53m。

断面形　円筒形。深さ1.48m。顕著にえぐれた部分はない。

埋没状況　底面から約20㎝は壁面の崩落による埋没土４により埋まる。その上位に巨角礫が集中しており、湛水との関係で意識的に廃棄されたものと見られる。その上位は比較的均質で、一気に埋められ、浅間Ｂ軽石を多量に含む。

遺物　須恵器長頸壺底部片(２)のほか須恵器杯１片、中世国産焼締陶器１点が出土する。

時期　埋没土に浅間Ｂ軽石を含み、出土遺物から中世以降に埋められたものである。

３号井戸(第143図、Ｐ Ｌ.43)

位置　７Ｄ－11グリッド。　**重複**　なし。

確認面形状と規模　楕円形。長径2.47m短径2.06m。

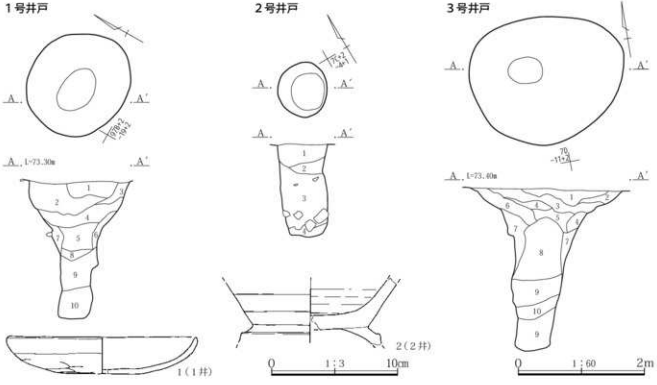
底面形状と規模　楕円形。長径0.56m短径0.45m。

断面形　漏斗状。深さ2.60m。底面から70～120cmの間にえぐれがあり、105cm付近が最大となる。水位の変化を反映したものであろう。

埋没状況　底面から中位は暗褐色土と明黄褐色土が互層堆積し崩落などによる自然埋没と見られる。中位の埋没土８は空隙が多い状況から、湛水状況での人為埋没が想定される。その上位は軽微な凹みとして、自然埋没したものと考えられる。

遺物　出土していない。

時期　遺物が出土せず、比定できない。



1号井戸
1　暗褐色土　しまりやや砂質。ローム小ブロック多量、炭化物粒子やや多量に含む。浅間Ｂ軽石含む。
2　暗褐色土　やや砂質。ローム粒子含む。浅間Ｂ軽石含む。
3　暗褐色土　ややしまりやや砂質。ローム粒子少量、炭化物粒子含む。
4　黒褐色砂質土　ややしまる。浅間Ｂ軽石多量に含む。
5　黒褐色土　しまり強くやや粘性強い。浅間Ｂ軽石少量に含む。
6　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム粒子少量に含む。
7　黒褐色土　しまり強くやや粘性強い。均質。
8　暗褐色土　しまりやや砂質。黒色砂層状に含む。
9　暗褐色土＋ローム大ブロック相互堆積。
10　黒褐色シルト質土　しまり弱い。

2号井戸
1　黒褐色砂質土　しまり弱い。浅間Ｂ軽石多量、ロームブロック含む。
2　黒褐色土　ややしまり弱く粘性弱い。ロームブロック多量帯状に含む。
3　黒褐色土　しまり弱く粘性弱い。ロームブロック・ローム粒子含む。
4　ローム＋砂・シルト　互層。

3号井戸
1　暗褐色壌土　しまり強くやや砂質。ロームブロック少量、炭化物粒子含む。
2　暗褐色土　しまり強くやや粘性強い。ロームブロック多量、黒褐色土小ブロック含む。
3　暗褐色土　しまりやや粘性あり。炭化物粒子やや多量、ローム粒子・焼土粒子含む。
4　暗褐色土　しまり強くやや砂質。炭化物粒子少量、ローム粒子含む。
5　暗褐色土　ややしまり強くやや粘性あり。ローム小ブロックやや多量に含む。
6　暗褐色土　しまりやや砂質。ローム粒子含む。
7　暗褐色土　ローム小ブロック含む。
8　暗褐色壌土　空隙多くしまり弱い。粘性弱い。ローム小ブロック含む。
9　明黄褐色シルト質土　黒色砂を薄い帯状に含む。
10　暗褐色土　ややしまりやや砂質。ローム小ブロック・シルト小ブロック含む。

第143図　２区１～３号井戸、１・２号井戸出土遺物

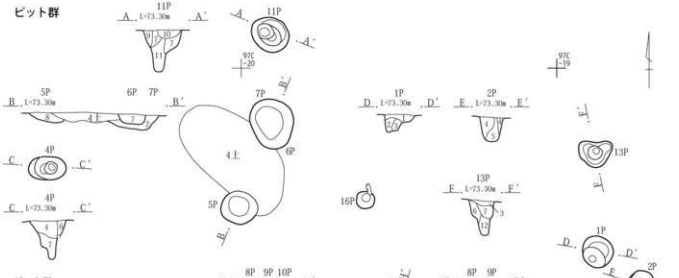
第71表　２区１・２号井戸出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第143図	1	土師器 杯	１号井戸 1/5	口 14.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第143図	2	須恵器 長頸壺	２号井戸 底部～胴部下位片	底 9.0	細砂粒/還元焔/暗灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、胴部下位は回転ヘラ削り。	

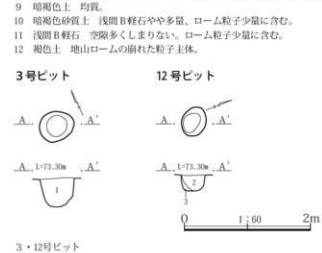
５　ピット（第144図、ＰＬ.44、第72表）

検出された18基のうち、17基は１～４号溝に区画された東側に位置する。12号ピットのみは、調査区中央に位置し、13号土坑と近接して周辺に遺構も乏しいため、関連する可能性が高い。残る17基のうち、３号ピットは１基だけ離れ、２号溝近くに位置する。そのほかの16基は調査区北東に位置し、東西約10m・南北約５mの範囲に集中するが、明確に並ぶものはなく、掘立柱建物などに復元できていない。掲載した出土遺物はない。非掲載遺物の出土量は第72表に示したとおりである。

重複関係では、13号ピットが１号住居、１号竪穴状遺構と重複するが新旧関係不明。土坑と重複するものでは、６号ピットが４号土坑、７号ピットより後出で、５・７号ピットは４号土坑より前出である。８～10号ピットは２号土坑と重複するが新旧関係不明である。また、６



ピット群
１・２・４～11・13ピット
1　褐色土　ローム粒子多量に含む。
2　暗褐色土　ローム粒子多量に含む。
3　暗褐色土　ロームブロックやや多量に含む。
4　暗褐色土　ロームブロックごく多量、焼土粒子・炭化物粒子含む。
5　黄褐色土　ローム小ブロック含む。
6　暗褐色土　ローム小ブロックごく多量に含む。
7　暗褐色土　ローム粒子含む。
8　暗褐色土　やや砂質。焼土粒子・ローム粒子含む。浅間Ｂ軽石含むか。
9　暗褐色土　均質。
10　暗褐色砂質土　浅間Ｂ軽石やや多量、ローム粒子少量に含む。
11　浅間Ｂ軽石　空隙多くしまりない。ローム粒子少量に含む。
12　褐色土　地山ロームの崩れた粒子主体。



３・12号ピット
1　暗褐色土　ローム小ブロック・炭化物片・焼土小ブロック含む。
2　黒褐色土　ロームブロック含む。
3　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。

第144図　２区ピット群、ピット

第72表　２区ピット計測表

No.	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	非掲載
1 P	97 B -18	50	48	28	
2 P	97 B -18	50	37	35	
3 P	7 A - 1	56	47	47	
4 P	97 B -20	60	36	60	
5 P	97 B -19	56	52	19	
6 P	97 B -19	43	-	16	須恵費片1
7 P	97 B -19	80	69	24	
8 P	97 B -19	38	32	18	
9 P	97 B -19	42	(35)	16	
10 P	97 B -19	25	24	55	
11 P	97C -19	62	52	66	
12 P	7 C - 7	47	38	29	
13 P	97 B -18	54	45	54	
14 P	97A -18	30	25	34	
15 P	97 B -19	74	(66)	19	
16 P	97 B -19	27	26	17	
17 P	97 B -19	30	25	73	
18 P	97 B -19	35	30	30	

～ 18号ピットは19号溝と重複するが新旧関係不明である。

11号ピットの埋没土11は、空隙が多く柱痕にも見えるが、掘り方を充填した埋没状況は観察できない。形態的にも長径62cmと長い。同じく長径50～60cmと長い２・４・13号ピットは、ロームブロックを多量に含む埋没土４によって上面まで全体に埋没したり、壁面が崩落した埋没土12によって中位まで埋まるなど、柱が建ちにくい状況にあるため、柱が抜き取られ人為的に埋められた可能性がある。１号ピットも底面が二段に分かれており、同様な状況であろう。８～ 10・14・17・18号ピットは長径25～ 42cmとまとまるが、深さは16～ 73cmとばらつき、19号溝と重複したことも考慮されるが、形態的に柱穴と見なされよう。

５・７・15号ピットは、長径56～ 80cmと長い楕円形で、深さは19～ 24cmと浅いため、柱穴とは見なしにくい。重複する６号ピットも同様か。３・12号ピットは長径56・47cmとやや長いが、孤立しており、柱穴とは見なしにくい。埋没土は均質であり、人為的に埋められてことも想定される。

6　墓

２区で検出された土壙墓は１基である。北側２mには１区１号屋敷の南辺と見られる16号溝があり、この境界意識に規制されていることも想定される。なお、火葬跡は別の区画を形成する１～４号溝の周辺に集中する点と対比される。

４号墓(第145図、ＰＬ.44・62、第73表)

位置　７Ｅ－８グリッド。平面形は隅丸方形で、北辺上面は丸みを持つ。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。規模は長軸138cm・短軸104cm・深さ38cm。底面はほぼ平坦。南北壁面からほぼ均等に埋まっており、木棺などの痕跡は認められない。埋没土中から人歯の歯冠部が数点出土している。鑑定の結果(第４節１)、歯種の同定はできず、性別・年齢とも不明である。中央南寄りでほぼ完形の在地系土器皿４点(１～４)が底面からやや上位で出土しており、埋葬時に木棺があったことが推測される。また、在地系土器皿(３)の下位から５の銅銭(洪武通宝)も出土し、やや北に離れて６の銅銭(元祐通宝か)も出土する。出土した炭化材・種実は、鑑定の結果(第４節２)クリの割材と、マメ科１点、イネ１点、オオムギ８点、コムギ３点などと判明した。出土遺物から14世紀後半に比定される。

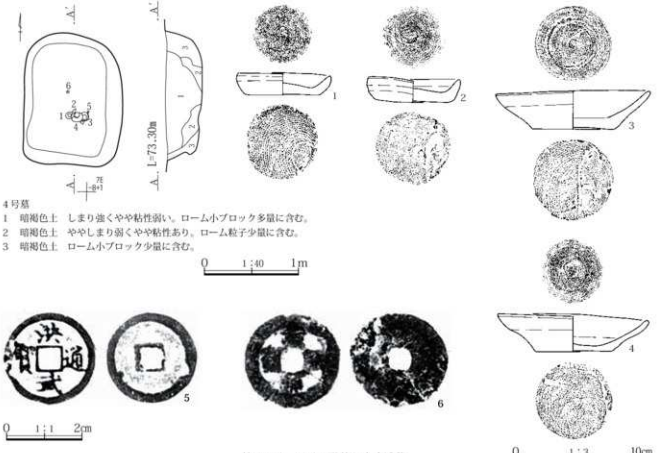
備考　調査段階14号土坑を名称変更。

7　火葬跡

火葬跡は３基検出され、すべて１～４号溝周辺に分布し、２基は区画された東側、１基は西側に位置する。主軸方位では東側の２基は南北方向を採り、西側の１基は東西方向を採る。底面に礫が置かれるものは、１・２号火葬跡であり、３号火葬跡は礫が置かれた痕跡はない。３号火葬跡にわずか張り出しの痕跡があるが、ほかの２基では見られない。被葬者はいずれも成人女性である。この周辺に火葬跡が集中する傾向は１区でもあり、１区152号土坑(火葬跡)は１区南東隅に位置し、南北軸を採っている。また、北西に約20m離れる153号土坑(火葬跡)、西に約24mはなれる150号土坑(火葬跡)は、ともに主軸方位を北東－南西軸に採っており、別の区画意識にあると想像される。遺物は出土していないが、状況から中世と考えられる。

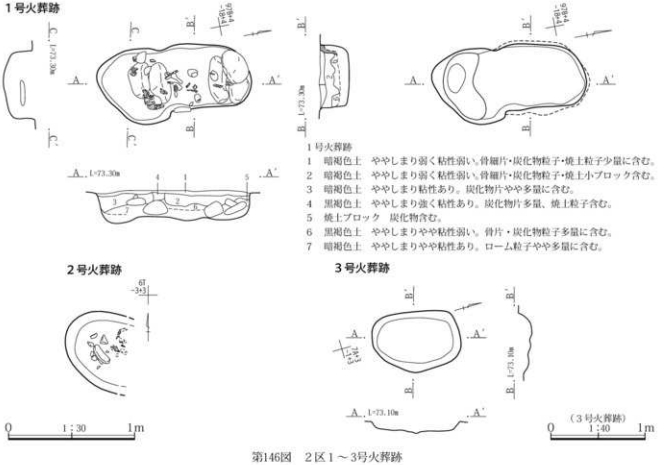
１号火葬跡(第146図、ＰＬ.44)

位置　97Ｂ－18グリッド。１号住居より後出。平面形は長楕円形に近いが、東西両壁は直線的。主軸方位はＮ－12°－Ｅ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。埋没土中に炭化物大片、焼土ブロック、焼骨片を含むが、炭化物層や焼土層の面的な広がりは見られず、収骨とあわせて除去された可能性が高い。壁面のうち、中央から北壁にかけては、東西壁に焼土化した部分が連続的に見られ、特に東壁中央は顕著に焼ける。南壁周辺・底面に焼土化は見られない。底面に接して南北両端に細長い円礫が横断方向に並ぶ。北端は北壁に接して２列並び、北側は20cm大の円礫が壁にもたれた状態で２石あり、一部火を受けてはぜている。更にその内側にやや重なって長径約37cmの円礫が置かれる。南側は南壁から約25cm離れて２列並び、内側は長径約33cmの円礫が底面に平置きされる。その南は長径約29cmの円礫で半石程度重なって上積みされる。原位置のままとは言い難いが、流れ込みではないため、北壁同様に壁にもたせて置かれたものと考えられる。したがって、南壁までの間きは余掘りのようなもので、使用時は埋め戻されていたものと言える。両



４号墓
1　暗褐色土　しまり強くやや粘性弱い。ローム小ブロック多量に含む。
2　暗褐色土　ややしまり弱くやや粘性あり。ローム粒子少量に含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロック少量に含む。

第145図　２区４号墓と出土遺物



1号火葬跡
1　暗褐色土　ややしまり弱く粘性弱い。骨細片・炭化物粒子・焼土粒子少量に含む。
2　暗褐色土　ややしまり弱く粘性弱い。骨細片・炭化物粒子・焼土小ブロック含む。
3　暗褐色土　ややしまり粘性あり。炭化物片やや多量に含む。
4　黒褐色土　ややしまり強く粘性あり。炭化物片多量、焼土粒子含む。
5　焼土ブロック　炭化物含む。
6　黒褐色土　ややしまりやや粘性弱い。骨片・炭化物粒子多量に含む。
7　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム粒子やや多量に含む。

第146図　２区１～３号火葬跡

第73表　2区4号墓出土遺跡

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第145図 PL.62	1	在地系土器	皿	底直	7.4	6.0	1.5～1.8	完形	B	浅黄橙	小型の皿。底部中央の器壁は厚い。口縁部内面は斜めに立ち上がり、外面は内湾するように立ち上がる。内面の轆轤目は不明瞭。底部左回転糸切無調整。	14世紀前半～中頃。
第145図 PL.62	2	在地系土器	皿	底直	7.1	5.9	1.8～2.0	完形	B	浅黄橙	小型の皿。底部中央の器壁は厚い。口縁部内面は斜めに立ち上がり、外面は内湾するように立ち上がる。内面の轆轤目は不明瞭。口縁部外面中央は凹線状に窪む。口縁部端部は、回転横撫により尖り気味。口縁端部付近外面は直立する。同様の傾向は0077にも認められる。	14世紀前半～中頃。
第145図 PL.62	3	在地系土器	皿	+2cm	12.0	6.4	2.7～3.0	完形	B	浅黄橙	内面調整は丁寧で轆轤目不明瞭。底部内面と体部の境はやや不明瞭。体部内面から口縁部内面は僅かに内湾。体部外面は外反し、口縁部はややや内湾。底部左回転糸切無調整。	14世紀前半～中頃。
第145図 PL.62	4	在地系土器	皿	底直	11.8	6.0	2.4～3.0	完形	B	浅黄橙	内面調整は丁寧で轆轤目不明瞭。底部内面と体部の境はやや不明瞭。体部は外反し、口縁部はやや内湾。底部左回転糸切無調整。	14世紀前半～中頃。

挿図 PL.NO.	NO.	種類器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第145図 PL.62	5	銅製品 銭貨	+2cm	23.71	23.60	1.22～1.38	2.98	完形	「洪武通寶」。「寶」字部分鋳不足。無背。明、1368年初鋳。
第145図 PL.62	6	銅製品 銭貨	+1cm	25.52	25.64	1.08～1.15	2.26	完形	「元祐通寶」か。篆書、祐の字が不鮮明であるが、他の書体から元祐通寶であろう。北宋、1086年初鋳。

端の円礫は約30cmの間隔で設置され、土坑中央に約45×30cmの空間を作り出す。焼骨はこの部分を中心に円礫上面にも広がる。規模は長軸123cm・短軸60cm・深さ28cmである。出土した種実は、鑑定の結果(第4節2)、モモ1点とオオムギ1点、コムギ1点と判明した。鑑定の結果(第4節1)、被火葬者は頭を北にした屈位で火葬され、約20歳～30歳代の女性と判明した。土師器杯類2片・壺甕類11片、須恵器杯類1片・壺甕類1片が出土するが、混入と見られる。

備考　調査段階1号墓を名称変更。

2号火葬跡(第146図、PL.44)

位置　6S－3グリッド。東半分を攪乱により壊されるが、平面形は楕円形か長楕円形と思われる。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。土坑中央に焼骨片が集中し、炭粒や焼土粒が点在する。壁面・底面に焼土化した部分は見られない。西壁寄りに火を受けて破砕した円礫片が10点程度あり、使用時から底面に置かれていた可能性が高い。したがって、本来東壁側にも礫があり、中央に空間が作られていたと想像され、焼骨も付合して、礫の下位レベルに集中する。規模は長軸60cm以上・短軸57cm以上である。確認段階ですでに底面が露呈しており、深さは不明である。鑑定の結果(第4節1)、被火葬者は成人女性と判明した。遺物は出土していない。

備考　調査段階2号墓を名称変更。

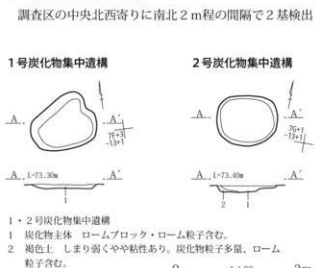
3号火葬跡(第146図、PL.44)

位置　7A・B－1グリッド。平面形は長楕円形で、東辺中央部がやや突出する。規模は長軸93cm・短軸65cm・深さ11cm。炭化物層の分布では、細く東へ延びる状況も確認できる。主軸方位はN－16°－E。全体形はT字形であったと推測される。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凸凹する。確認面で炭化物層が全面に広がり、残存深の浅い底面まで埋まる。東壁中央に一部焼土化した部分が見られる。出土した炭化材・種実は、鑑定の結果(第4節2)クリの割材2点とナシ亜科の割材1点、サクラ節2点、イネ4点、オオムギ6点と判明した。クリは火葬時の燃料材と考えられる。火葬人骨は鑑定の結果(第4節1)、30歳代の女性と判明した。遺物は出土していない。

備考　調査段階3号墓を名称変更。

8　炭化物集中遺構

調査区の中央北西寄りに南北2m程の間隔で2基検出



1・2号炭化物集中遺構
1　炭化物主体　ロームブロック・ローム粒子含む。
2　褐色土　しまり弱くやや粘性あり。炭化物粒子多量、ローム粒子含む。

第147図　2区1・2号炭化物集中遺構

された。炭化物は細片で、土壌化したものが多い特徴を持つ。掘り込みが明確なものは１基で、一方は表面的である。焼土も見られないため、直火を受けたものではない。比較的整った円形で、２基ともに規模も近似することから、何らかの型枠や容器などによる影響も考慮される。

１号炭化物集中遺構(第147図、ＰＬ.44)

位置　７Ｆ－13グリッド。確認面でほぼ円形に炭化物が集中する。炭化物は細片が多く、土壌化したものが多い。断ち割り調査による断面観察では、ロームブロックが混入するが、掘り込みは判然とせず、むしろ炭化物が下位に混入した様相を示す。焼土は見られない。完掘状況は不整円形の土坑状をなすが、図面ほど明確ではなく、底面も平坦とは言えない。規模は長径104㎝・短径90㎝・層厚７㎝である。遺物は出土していない。

２号炭化物集中遺構(第147図、ＰＬ.44)

位置　７Ｇ－13グリッド。確認面でほぼ円形に炭化物が集中する。炭化物は細片が多く、土壌化したものが多い。断ち割り調査による断面観察では、炭化物層が皿状に埋まり、掘り込みが存在する。埋没土２はロームブロックと混在するが、炭化物が下位に混入した様相にも見える。焼土は見られない。完掘状況は円形の土坑状をなすが、底面は図面ほど平坦でなく、むしろ丸みを持っていたものと推測される。規模は長径96㎝短径80㎝深さ12㎝である。遺物は出土していない。

９　溝

溝は調査区全体にわたり27条(枝番をもつもの３条含む)検出された。形態や機能面から、およそ３種類に分かれる。両端が調査区域外に延び、隣接する１区や綿貫原北遺跡、綿貫伊勢遺跡に同一の溝として連続するものは、13号溝、19Ａ～Ｄ号溝、20～23号溝の９条で、走向方位はすべて北西－南東軸をとることで一致している。なお、明確な流水痕跡を持つものはなく、用水路と見なされるものはない。

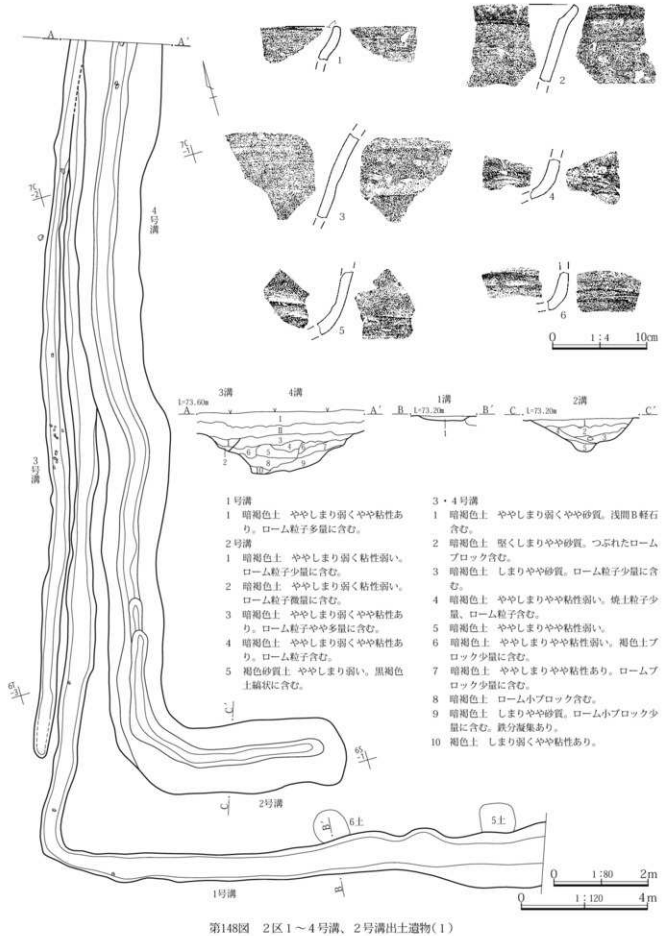
区画溝やそれに類する溝は８条である。18号溝は１区１号屋敷の南辺で、１区22号溝と同一であろう。その南側に並走する17号溝や、東に近接して同様な断面を持つ18号溝もこれに類する。２・４号溝は東側を区画するもので、同時期に当たる中世の火葬跡が周辺に分布する点を特徴とする。これに並走する１・３号溝はこれに類する。24号溝も小規模ながら、綿貫原北遺跡３区20号溝と同一と見られ、区画を意識した溝と考えられる。

残る10条は比較的小規模で、相互に交差・合流する点で、並存するものも含まれる。７号溝は両側が調査区域外へ延びる点で他とは異なるが、合流する11・12号溝、交差する６号溝や、並走する５号溝と関連して機能していたと考えられる。その点で、やや西方に離れて相互に交差する14・15号溝も同類であろう。また、走向方位は違うが、８号溝を本筋として10号溝が合流し、９号溝が並走する３条も同類の遺構と考えられる。

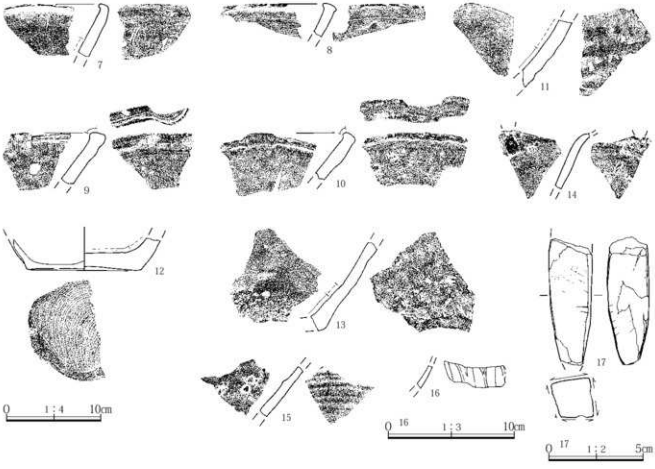
１～４号溝(第148・149図、ＰＬ.45・46・62、第74表)

１号溝　位置　96Ｑ・Ｒ－20、６Ｒ～７Ｃ－１～３グリッド。６号土坑より後出で、５号土坑、３・４号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はＬ字形。走向方位はＮ－74°－Ｗ～Ｎ－18°－Ｅ。東端は調査区域外へ延び、綿貫伊勢遺跡２区18号溝と同一と見られる。北端は３・４号溝と重複して不明となる。断面形は皿状。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦でやや丸みを持つ。両端の比高差は16㎝で、勾配0.39％で北方へ下向する。自然埋没か。流水痕跡はない。規模は長さ15.92ｍ上端幅48～200㎝最大深21㎝である。東側を区画する溝と見られる。土師器杯類２片・壺甕類４片、須恵器杯類４片が出土しているしている。

２・４号溝　位置　６Ｒ～７Ｃ－１・２グリッド。両溝の関係は不分明であり、あわせて扱う。３号溝より前出で、１号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はＬ字形で、南北軸は軽微に蛇行する。走向方位はＮ－77°－Ｗ～Ｎ－16°－Ｅ。北端は調査区域外に延びる。断面形は北辺から17.6ｍが逆台形で、そこから先折れて南辺までＶ字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は20㎝で、勾配0.67％で北方へ下向する。断面がＶ字形になる部分で、底面は段差を持って下がる。南辺の埋没状況は、下位で南壁面からの崩落が多く自然埋没するが、中位は均質で一気に埋まり、更に上位も南壁側から埋まる。北壁の埋没土もローム小ブロックを多く含んでおり、人為埋没の可能性もある。流水痕跡はないが、北壁の埋没土はやや砂質が目立つ。規模は長さ東西6.88ｍ南北23.04上端幅160～248㎝最大深70㎝である。東側を区画する溝と見られる。２号溝埋没土中から在地系土器・古瀬戸陶



第148図　２区１～４号溝、２号溝出土遺物（１）



第149図　２号溝出土遺物（２）

第74表　２区２号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第148図	1	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	口縁部片	A	灰	断面は灰白色、器表付近から器表は灰色。還元炎。口縁部は短く、内湾。内面口縁部下の段は低く不明瞭。口縁端部内面の器表は摩滅。	Ⅰ期。
第148図 PL.62	2	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	口縁部片	B	黄灰	還元炎。体部器壁は厚い。口縁部は短く内湾気味で、端部内面は小さく突き出す。内面口縁部下の屈曲部と口縁部内面端部は明瞭な稜をなす。	Ⅰ期。
第148図	3	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	体部片	A	灰黄褐	還元炎。上位は外反し、横撫で。外面下位は篦撫でか。	Ⅰ期～Ⅲ期。
第148図	4	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	体部下位片	B	黄灰	還元炎。体部外面下端は篦撫で。丸底。外面篦撫で部より上位に煤付着。	Ⅰ・Ⅱ期。
第148図	5	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	体部下位片	A	褐灰	体部外面下端は篦撫で。丸底。外面篦撫で部より上位に煤付着。	Ⅰ・Ⅱ期。
第148図	6	在地系土器	内耳鍋	フク土	—	—	—	体部下位片	B	にぶい黄橙	体部外面下位は篦撫で。丸底。器壁厚い。外面の篦撫で部より上位の器表は黒褐色。	Ⅰ・Ⅱ期。
第149図 PL.62	7	在地系土器	片口鉢か	フク土	—	—	—	口縁部片	B	灰白	還元炎。器壁やや薄く、口縁部は内湾気味。口縁端部は内方に折り曲げるように突き出す。端部は丸い。口縁部は横撫で。体部内面はやや平滑。	Ⅲ・Ⅳ期か。
第149図	8	在地系土器	片口鉢	フク土	—	—	—	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁端部内面は断面三角形状に突き出す。端部外面は小さく突き出す。端部上面は丸みを持つ。	Ⅲ・Ⅳ期。
第149図 PL.62	9	在地系土器	片口鉢	フク土	—	—	—	口縁部片	B	灰	断面中央は灰白色、器表付近はにぶい橙色、器表は灰黄色で口縁部外面の器表のみ暗灰色。在地製品としては焼き締まり気味。口縁端部上面は強い撫でにより窪む。口縁端部外面下位は強い横撫でにより円線状に窪む。端部内面は三角形状に突き出る。突出部上面は光沢を有し平滑となる。片口部片。	Ⅲ期。

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第149図 PL.62	10	在地系土器	片口鉢	フク土	—	—	—	口縁部片	B	にぶい黄橙	器表は灰色。焼成最終段階のみ還元炎。口縁端部は内外面に丸く突き出る。内面端部付近の器表は摩滅。片口部片。	Ⅳ期。
第149図	11	在地系土器	片口鉢	フク土	—	—	—	体部片	A	黒	断面は橙色。器表は黒色。焼成最終段階は燻し。内面下半は使用により器表が摩滅し、上半は平滑となる。	中世。
第149図 PL.62	12	在地系土器	片口鉢	フク土	—	(12.0)	—	1/3	B	黄灰	還元炎。器表は灰色。使用により、底部周縁から体部下端は摩滅し、ドーナッ状に窪む。窪み周囲は平滑となる。底部左回転糸切無調整。底部外面周縁の器表は摩滅。	中世。
第149図 PL.62	13	在地系土器	片口鉢	フク土	—	—	—	体部片	B	黄灰	断面はにぶい黄褐色、内面器表は黄灰色、外面器表は暗灰色。体部外面下端は攪拌で。内面下端から底部周縁は使用により器表摩滅し、下位は平滑となる。底部外面周縁は器表摩滅。	中世。
第149図	14	在地系土器	不詳	フク土	—	—	—	体上半部片	A	にぶい橙	口縁部は外反。屈曲部内面に丸い突起を貼り付ける。突起上部に焼成前の円孔。直径は11mm以上。	中世か。
第149図 PL.62	15	古瀬戸	盤類	フク土	—	—	—	体部片		浅黄	外面の糖蜜口銅著。内外面に灰釉。灰釉に細かい貫入が入る。内面に降り物付着。	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期。
第149図 PL.62	16	龍泉窯系	青磁碗	フク土	—	—	—	体部片		灰白	焼成不良。鎬蓮弁文碗。青磁釉は薄く、部分的に白濁。	Ⅰ-5-b・c・d類。

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ(g)	製作状況・使用状況	備考
第149図 PL.62	17	手持ち砥石	2溝			(6.6)	2.3	41.5	左辺を除く三面を使用。左辺は折断後、研磨整形。	

器などが多量に出土する。土師器杯類16片・壺甕類37片、須恵器杯類12片・壺甕類18片が出土している。周辺には火葬跡が点在するが、建物遺構などは見られない。出土遺物は調理具が多いため、周辺に住居地が求められる。時期を考慮すれば、1区1号屋敷が有力地となる。出土遺物は中国陶磁器は伝世品と考えれば、15の古瀬戸盤類（後Ⅰ・Ⅱ期、14世紀後半～15世紀初め）があり、出土量の多い在地系土器鍋（Ⅰ・Ⅱ期）、同片口鉢（Ⅲ・Ⅳ期）とほぼ一致し、15世紀前半頃まで機能したものと推定される。掲載遺物の他に中世在地系土器鍋鉢類5片・Ⅲ1片が出土している。

3号溝　位置　6S～7C－1・2グリッド。4号溝より後出で、1号溝と重複するが新旧関係不明。北端は調査区域外へ延びる。平面形は直線状ながら、わずか蛇行する。走向方位はN－19°－E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は17cmで、勾配0.74％で北方へ下向する。埋没土に浅間B軽石を含む。自然埋没か。規模は長さ22.84m上端幅32～68cm最大深23cmである。1・2・4号溝と並走しており、同様に区画を意識したものの可能性が高い。土師器杯類2片・甕類2片、須恵器杯類1片・甕類1片が出土している。

5号溝（第150図、P L.46）

位置　6Q・R－2・3グリッド。南側は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はN－7°－W。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は2cmで、勾配0.32％で南方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ6.28m上端幅20～28cm最大深12cmである。遺物は出土していない。

6号溝（第150図、P L.46）

位置　6R－3・4グリッド。7号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状で、東端は直角に折れて立ちあがる。西端は調査区域外へ延びる。走向方位はN－84°－E～N－13°－E。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は5cmで、勾配0.71％で東方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ7m上端幅20～40cm最大深6cmである。遺物は出土していない。

7～12号溝（第150図、P L.46・47）

8～12号溝はともに平面形は直線状で、削平が著しく断面形不明。埋没状況も不詳である。

7号溝　位置　6R～7D－4グリッド。6・8・10号溝と重複するが新旧関係不明で、11・12号溝と合流するが詳細不明。平面形は直線状でわずか蛇行する。走向方位はN－S。断面形はU字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は11cmで、勾配0.31％で南方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ34.96m上端幅24～44cm最大深cmである。

８号溝　位置　６Ｔ～７Ｃ－３～５グリッド。７号溝と重複するが新旧関係不明で、10号溝と合流するが詳細不明。走向方位はＮ－39°－Ｗ。削平が著しく、両端・中央部とも途切れる。底面はやや凸凹する。両端の比高差は5㎝で、勾配0.26％で北方へ下向する。規模は長さ19m上端幅24～40㎝最大深4㎝である。遺物は出土していない。

９号溝　位置　７Ｂ－３・４グリッド。走向方位はＮ－78°－Ｅ。底面はほぼ平坦。両端の比高差は３㎝で、勾配はほとんどない。規模は長さ3.68m上端幅28～40㎝最大深2㎝である。10号溝と並走して同種の遺構と見られる。土師器杯類が１片出土している。

5号溝
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。褐色土ブロック・白色軽石含む。

6号溝
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。褐色土ブロック・白色軽石含む。

7号溝
1　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。褐色土ブロック・白色軽石含む。

第150図　２区５～12号溝

10号溝　位置　７Ｂ－３・４グリッド。７号溝と重複するが新旧関係不明で、８号溝と合流するが詳細不明。走向方位はＮ－80°－Ｅ。底面はほぼ平坦。両端の比高差は３㎝で、勾配0.94％で西方へ下向する。規模は長さ3.2ｍ上端幅28～40㎝最大深3㎝である。９号溝と並走して同種の遺構と見られる。遺物は出土していない。

11号溝　位置　７Ｃ・Ｄ－３・４グリッド。７号溝と合流するが詳細不明。走向方位はＮ－84°－Ｅ。底面はやや凸凹する。両端の比高差は７㎝で、勾配1.46％で西方へ下向する。規模は長さ4.8ｍ上端幅24～32㎝最大深4㎝である。12号溝と並走して同種の遺構と見られる。遺物は出土していない。

12号溝　位置　７Ｄ－３・４グリッド。７号溝と合流するが詳細不明。走向方位はＮ－86°－Ｅ。底面はやや凸凹する。両端の比高差は７㎝で、勾配1.94％で西方へ下向する。規模は長さ3.6ｍ上端幅24～36㎝最大深４㎝である。11号溝と並走して同種の遺構と見られる。遺物は出土していない。

13～15号溝(第151図、Ｐ Ｌ.47・62、第75表)

13号溝　位置　６Ｒ～７Ｇ－５～10グリッド。14・17号溝より前出で、15・16号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はＮ－29°－Ｗ。南北端とも調査区域外へ延び、北方は１区４号溝と同一の溝である可能性が高い。断面形は皿状。底面は丸みを持つ。両端の比高差は４㎝で、勾配0.09％で南方へ下向するが、北端部分は凹む。埋没状況不詳。規模は長さ50.96ｍ上端幅56～96㎝最大深23㎝である。遺物は出土していないが、１区４号溝と同様４世紀代と考えられる。

14号溝　位置　６Ｓ～７Ａ－６・７グリッド。13号溝より後出だが、北端は不明となる。15号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状。走向方位はＮ－14°－Ｅ。断面形は皿状。底面は凸凹する。両端の比高差は４㎝で、勾配0.45％で北方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ8.88ｍ上端幅64～80㎝最大深12㎝である。埋没土中から１の銅銭が出土している。

15号溝　位置　６Ｔ～７Ａ－６・７グリッド。13・14号溝と重複するが新旧関係不明。平面形は直線状だが、わずか湾曲する。走向方位はＮ－80°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は１㎝で、勾配0.13％で東方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ８ｍ上端幅24～48㎝最大深11㎝である。土師器杯類が１片出土している。

16号溝(第152図、Ｐ Ｌ.47・48・63、第76表)

位置　７Ｅ・Ｆ－６～11グリッド。13号溝と重複するが新旧関係不明。平面形はＬ字形で、東端は調査区境で曲がり始め、調査区域外へ延びる。１区22号溝と同一の溝と見られ、１区１号屋敷の南辺を区画する。走向方位はＮ－０°～Ｎ－90°。断面形は逆台形。底面は平坦で、西側屈曲部とその北端が土坑状に凹む。両端の比高差は39㎝で、勾配1.24％で東方へ下向する。下位は壁面からの崩落土を含みながら埋没し、中位からは均質に埋没する。上位を埋没後の攪乱土が埋める。規模は長さ南北6.56ｍ東西24.88ｍ上端幅136～256㎝最大深112㎝である。埋没土中から在地系土器内耳鍋(１)、古瀬戸碗形鉢(２)、古瀬戸平碗(３)が出土する。掲載遺物の他に土師器杯類５片・甕類６片、須恵器杯類２片・甕類４片が出土している。出土した古瀬戸陶器が後Ⅲ期(15世紀前半)であり、在地系土器鍋(Ⅰ・Ⅱ期)の年代観と一致するため、15世紀前半頃まで機能したものと推定される。

17号溝(第153図、Ｐ Ｌ.48・63、第77表)

位置　７Ａ～Ｃ－６～13グリッド。１号道路より前出で、13号溝より後出。平面形は北側に弓状に膨らむ。走向方位はＮ－85°－Ｗ。断面形は皿状。底面は北端からほぼ平坦だが、北端から約12.5ｍ付近から底面がやや下がり凸凹する。あわせて、こぶし大の礫が南端までやや多く出土する。両端の比高差は４㎝で、勾配0.10％で西方へ下向する。埋没状況不詳。規模は長さ41.12ｍ上端幅76～184㎝最大深11㎝である。中央部で礫群に混じって、在地系土器内耳鍋(３)、在地系土器片口鉢(４・６)などが出土する。掲載遺物の他に土師器甕類４片、須恵器甕類10片、中世在地系土器鍋１片が出土している。出土した在地系土器の年代観から、15世紀前半頃まで機能したものと推定される。

18号溝(第154図、Ｐ Ｌ.48・63、第78表)

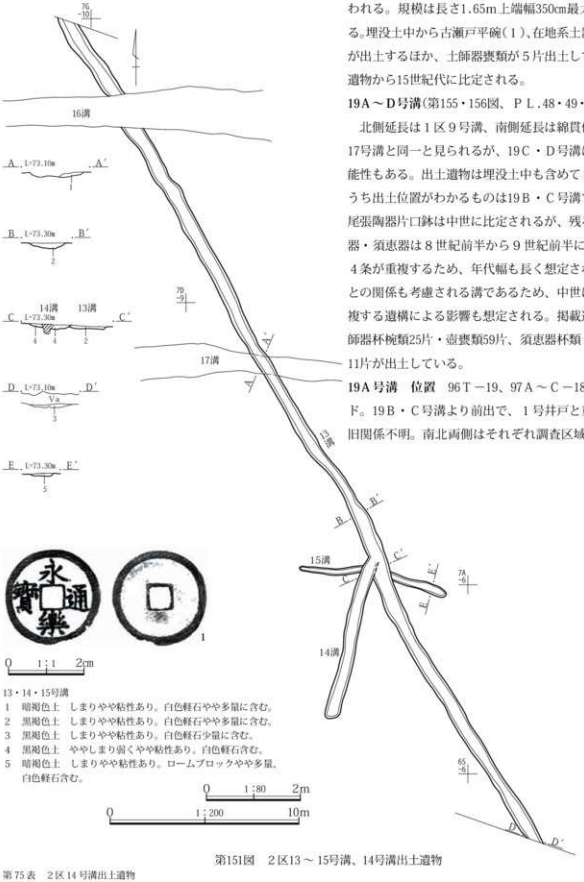
位置　７Ｄ・Ｅ－５グリッド。南端のみ検出されており、北方調査区域外に延びる。北方延長線上に１区21号溝があるが、形態が異なり同一と見なし難い。平面形不明。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。底面中央に円礫が多く出土し、その上層に壁面崩落土を多く含む暗褐色土が埋める。その上層は砂質土が目立つ。自然埋没と思

われる。規模は長さ1.65m上端幅350cm最大深81cmである。埋没土中から古瀬戸平碗（１）、在地系土器片口鉢（２）が出土するほか、土師器甕類が５片出土している。出土遺物から15世紀代に比定される。

19Ａ～Ｄ号溝（第155・156図、ＰＬ.48・49・63、第79表）

北側延長は１区９号溝、南側延長は綿貫伊勢遺跡２区17号溝と同一と見られるが、19Ｃ・Ｄ号溝は別となる可能性もある。出土遺物は埋没土中も含めて８点で、このうち出土位置がわかるものは19Ｂ・Ｃ号溝である。８の尾張陶器片口鉢は中世に比定されるが、残る７点の土師器・須恵器は８世紀前半から９世紀前半に比定される。４条が重複するため、年代幅も長く想定されるが、集落との関係も考慮される溝であるため、中世に関しては重複する遺構による影響も想定される。掲載遺物の他に土師器杯椀類25片・壺甕類59片、須恵器杯類５片・壺甕類11片が出土している。

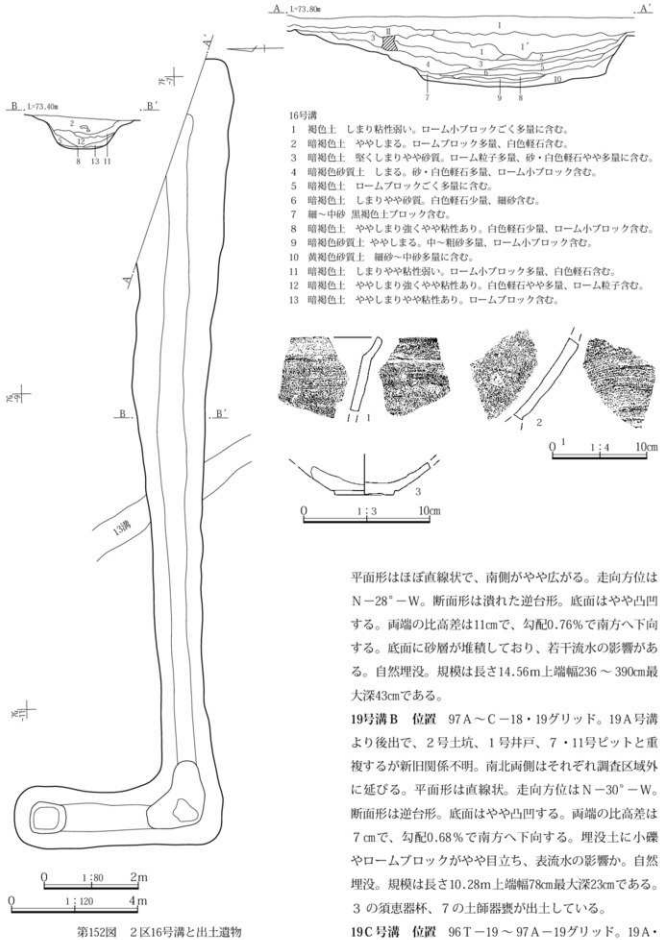
19Ａ号溝　位置　96Ｔ－19、97Ａ～Ｃ－18～20グリッド。19Ｂ・Ｃ号溝より前出で、１号井戸と重複するが新旧関係不明。南北両側はそれぞれ調査区域外に延びる。



第151図　２区13～15号溝、14号溝出土遺物

第75表　２区14号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第151図 PL.62	1	銅製品 銭貨	フケ土	24.88	24.80	0.99～1.16	2.78	周縁一部欠	『永樂通寶』。明、1408年初鋳。



第152図　２区16号溝と出土遺物

平面形はほぼ直線状で、南側がやや広がる。走向方位はＮ－28°－Ｗ。断面形は潰れた逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は11cmで、勾配0.76％で南方へ下向する。底面に砂層が堆積しており、若干流水の影響がある。自然埋没。規模は長さ14.56m上端幅236 ～ 390cm最大深43cmである。

19号溝Ｂ　位置　97Ａ～Ｃ－18・19グリッド。19Ａ号溝より後出で、２号土坑、１号井戸、７・11号ピットと重複するが新旧関係不明。南北両側はそれぞれ調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－30°－Ｗ。断面形は逆台形。底面はやや凸凹する。両端の比高差は７cmで、勾配0.68％で南方へ下向する。埋没土に小礫やロームブロックがやや目立ち、表流水の影響か。自然埋没。規模は長さ10.28m上端幅78cm最大深23cmである。３の須恵器杯、７の土師器甕が出土している。

19Ｃ号溝　位置　96Ｔ－19 ～ 97Ａ－19グリッド。19Ａ・

Ｄ号溝より後出。19Ｂ号溝から分岐するようにも見えるが、関係不詳。南側は調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－14°－Ｗ。断面形は逆台形。底面はややや凸凹する。両端の比高差は12cm で、勾配2.38％で北方へ下向する。埋没土に小礫やロームブロックがやや目立ち、表流水の影響か。自然埋没。規模は長さ5.04m 上端幅47 ～ 60cm最大深15cmである。４の須恵器杯、６の同甑が出土している。

19Ｄ号溝　位置　96Ｔ－19 ～ 97Ａ－19グリッド。19Ｃ号溝より前出。南側は調査区域外に延びる。平面形はほぼ直線状。走向方位はＮ－15°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は２cm で、勾配0.94％で南方へ下向する。埋没土にロームの混入が目立つが、自然埋没か。規模は長さ2.12m 上端幅80cm最大深20cmである。

20 ～ 23号溝（第157・158図、ＰＬ．49・50・63、第80・81表）

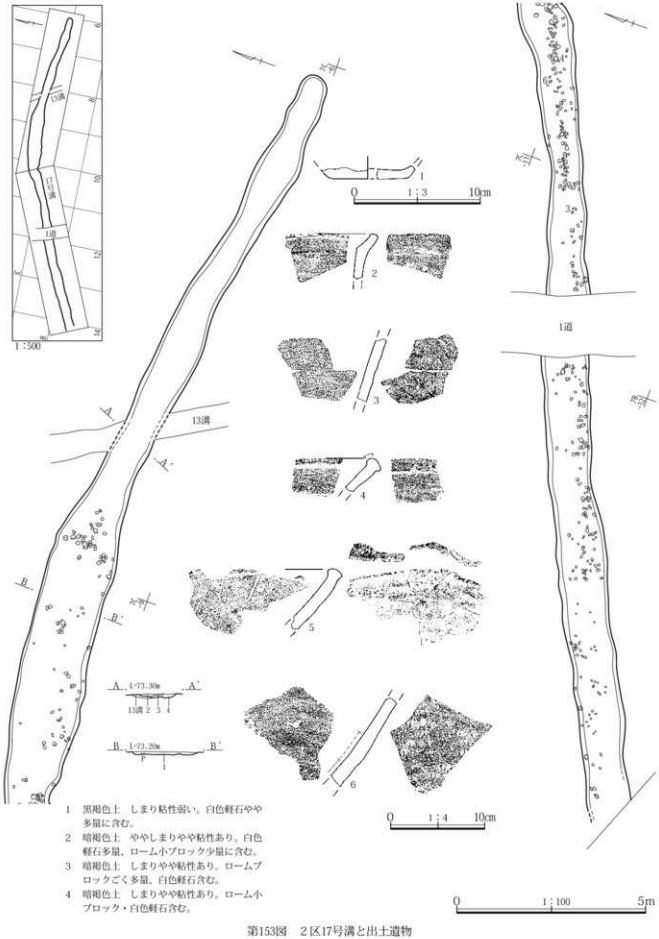
昭和期に実施されたほ場整備以前に、南北約500mにわたり帯状に凹んだ水田であった範囲に相当する。このため、埋没土上位の土層堆積も特徴的な様相を示す。北側Ａ断面の埋没土１は浅間Ａ軽石を主体とする砂礫層である。周辺の調査状況から、天明３(1789)年の浅間Ａ軽石降下に伴う耕作地の復旧作業、いわゆる「天地返し」によって生じた土層と見られるが、遺構として平面的な確認はできていない。また、下位の埋没土２・６・７は、調査段階の所見として水田耕作土、９は水田床土の可能性が指摘されている。昭和期の状況からも、この窪地範囲が水田であったことは想定でき、本遺構埋没後、天明３年までに水田化されていたものと言える。北側延長は１区26号溝、更に綿貫原北遺跡２区14号溝と同一の溝群と見られる。

第76表　２区16号溝出土遺物

挿　図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備　考
第152図	1	在地系 土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	口縁部 片	B	灰	断面は橙色、内面器表は灰色、外面器表は暗灰色。器壁はやや薄く、口縁部は短く外反。内面口縁下と端部は明瞭な稜をなす。口縁端部外面は丸い。外面頸由部は横撫でによる小さい段差が廻る。	Ⅰ・Ⅱ期。
第152図 PL.63	2	古瀬戸	瓶形鉢	フク土				体部片			内面から体部外面上位に灰釉。内面に目痕１箇所。口縁部は緩く屈曲して立ち上がる。体部外面下位は回転篦削り。高台欠損。	後期Ⅲ。
第152図 PL.63	3	古瀬戸	平碗	フク土	－	－	－	底部		淡黄	高台縁はやや扶るように削り、高台内は浅く削る。体部外面は回転篦削り。内面に灰釉。	後期Ⅲ。

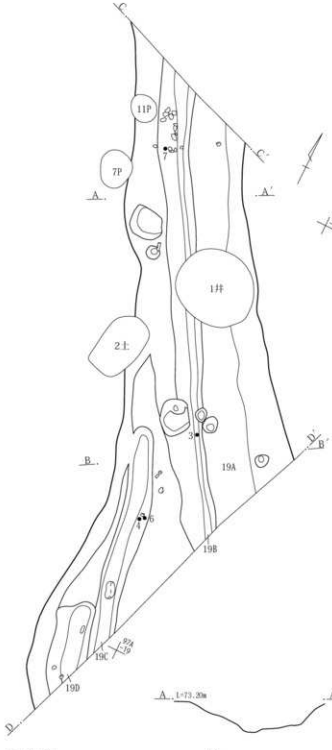
第77表　２区17号溝出土遺物

挿　図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備　考
第153図	1	在地系 土器	皿	フク土	－	(6.0)	－	1/4	B	にぶい 橙	器表摩滅し底部切り離し技法不明。	中世か。
第153図	2	在地系 土器	内耳鍋	フク土	－	－	－	口縁部 片	B	黄灰	還元炎。口縁部は短い。口縁部外面は緩く屈曲して内湾気味。内面の口縁部下と端部は明瞭な稜をなす。口縁部内面は直線的で、端部内面は屈曲し、低く突出するような形状を呈する。	Ⅰ期。
第153図	3	在地系 土器	内耳鍋	底直	－	－	－	体部片	B	灰	還元炎。器壁厚い。	Ⅰ～Ⅲ期か。
第153図	4	在地系 土器	片口鉢	+4cm	－	－	－	口縁部 片	B	暗灰	断面はにぶい褐色、器表は暗灰色から黒色。口縁端部上面は丸みを持ち、内外面に突き出す。外面の突出は丸みを持ち、内面は器表が摩滅して不明。	Ⅳ期か。
第153図 PL.63	5	在地系 土器	片口鉢	フク土	－	－	－	片口部 片	B	灰	還元炎。口縁部は内湾気味。口縁端部は丸みを持ち、内外面は断面三角形状に突き出す。内外面の稜はやや明瞭。	Ⅲ・Ⅳ期。
第153図	6	在地系 土器	片口鉢	+6cm	－	－	－	体部片	B	暗灰	断面はにぶい褐色、器表は暗灰色から黒色。内面下位は使用により器表が摩滅し、中位は平滑となる。	中世。

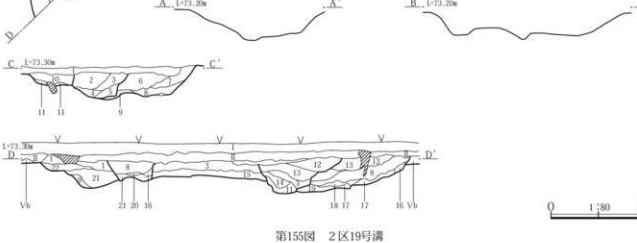


1　黒褐色土　しまり粘性弱い。白色軽石やや多量に含む。
2　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。白色軽石多量、ローム小ブロック少量に含む。
3　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ロームブロックごく多量、白色軽石含む。
4　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック・白色軽石含む。

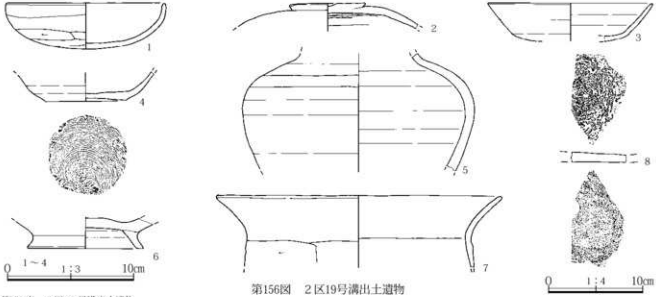
第153図　２区17号溝と出土遺物



19号溝
1　暗褐色土　白色軽石含む。
2　暗褐色土　しまりやや粘性弱い。白色軽石(ＦＰ含)多量、ロームブロックやや多量に含む。
3　暗褐色土　白色軽石・小円礫含む。
4　黒褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック多量に含む。
5　暗褐色粘質土　堅くしまる。白色軽石・小円礫多量に含む。
6　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック多量、白色軽石(ＦＰ含)含む。
7　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック少量、白色軽石(ＦＰ含)含む。
8　暗褐色土　ローム小ブロック・白色軽石含む。
9　暗褐色土＋黄褐色土
10　暗褐色土　ややしまり粘性弱い。ローム粒子多量、ＦＰやや多量に含む。
11　黒褐色土　ローム粒子少量に含む。
12　暗褐色土　ややしまり強くやや粘性あり。白色軽石(ＦＰ含)やや多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子含む。
13　暗褐色土　ローム粒子少量、白色軽石含む。
14　暗褐色シルト質土　ややしまり粘性弱い。ロームブロックやや多量に含む。
15　暗褐色砂質土　砂多量、小礫含む。
16　暗褐色土　ローム粒子少量、白色軽石微量に含む。
17　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック含む。
18　黒褐色シルト質土　ややしまり弱くやや粘性弱い。ロームブロック含む。
19　黒褐色砂礫　上位に細砂・シルトが堆積。
20　褐色シルト質土　しまり強く粘性弱い。小礫少量に含む。
21　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム粒子少量、小礫含む。
22　黒褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック少量に含む。
23　褐色土　ややしまりやや粘性あり。ロームブロック・小礫含む。



第155図　２区19号溝



第156図　２区19号溝出土遺物

第79表　２区19号溝出土遺物

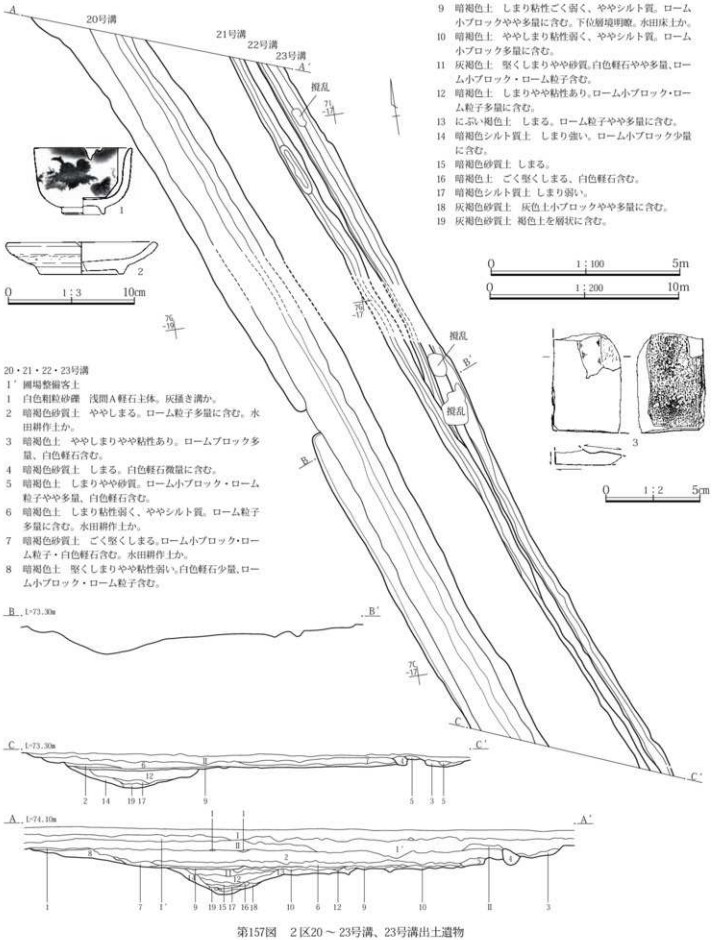
挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第156図	1	土師器 杯	1/4	口 12.4　高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第156図 PL.63	2	須恵器 杯蓋	天井部片	摘 6.0	細砂粒・粗砂粒/還元焔/灰褐	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部はヘラナデ、内面はヘラナデ。	
第156図	3	須恵器 杯	口縁部～底部片	口 12.9	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第156図	4	須恵器 杯	底部～体部下半	底 6.3	細砂粒・粗砂粒・片岩/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第156図	5	須恵器 短頸壺	胴部片	胴 18.2	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。胴部耳に1段の回転ヘラ削り。	胴部の一部に降灰が付着。
第156図	6	須恵器 瓶	底部	底 8.2　台 8.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部はヘラナデ。	
第156図	7	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	口 22.1	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考
第156図	8	尾張陶器	片口鉢	フク上	－	－	－	底部片		黄灰		底部外面は砂底状。内面は使用による摩滅著しく、平滑。	中世。

21号溝　位置　７Ａ～Ｉ－14～17グリッド。明確な重複関係ではないが、層位から20号溝より後出。北側は調査区域外へ延び、南側は22号溝と重複して不明となる。平面形は直線状。走向方位はＮ－21°－Ｗ。断面形はＵ字形か。両端の比高差は７㎝で、勾配0.16％で北方へ下向する。埋没土はロームブロックを多量に含み人為埋没。規模は長さ43.6m上端幅24～96㎝最大深29㎝である。水田耕作土と見られる埋没土２・６の中で作られており、水田耕作に伴う溝とも考えられる。遺物は出土していない。層位から天明３年以前である。

22号溝　位置　７Ｅ～Ｉ－16・17グリッド。23号溝より前出。南北両側はそれぞれ調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－21°－Ｗ。断面形はＵ字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は３㎝で、勾配0.13％で南方へ下向する。埋没土は均質で人為埋没か。規模は長さ23.04m上端幅40～64㎝最大深15㎝である。遺物は出土していない。

23号溝　位置　７Ａ～Ｉ－14～17グリッド。22号溝より後出。南北両側はそれぞれ調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－20°－Ｗ。断面形は皿状。底面はやや凸凹する。両端の比高差は30㎝で、勾配0.70％で南方へ下向する。下位は自然埋没するが、まだ埋まっていない状態で客土Ｉ'で埋められる。規模は長さ43.04m上端幅48～88㎝最大深20㎝である。埋没土中から、１の美濃磁器湯飲み碗、２の美濃陶器丸皿が出土する。掲載遺物の他に中世在地系土器鍋鉢類１片、近世国産施釉陶器１片・在地系土器鍋鉢類１片、近現代陶磁器５片・瓦１片が出土している。出土遺物から、ほ場整



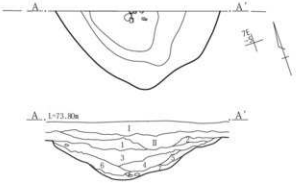
9　暗褐色土　しまり粘性ごく弱く、ややシルト質。ローム小ブロックややや多量に含む。下位層境明瞭。水田床土か。
10　暗褐色土　ややしまり粘性弱く、ややシルト質。ローム小ブロック多量に含む。
11　灰褐色土　堅くしまりやや砂質。白色軽石やや多量、ローム小ブロック・ローム粒子含む。
12　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック・ローム粒子多量に含む。
13　にぶい褐色土　しまる。ローム粒子やや多量に含む。
14　暗褐色シルト質土　しまり強い。ローム小ブロック少量に含む。
15　暗褐色砂質土　しまる。
16　暗褐色土　ごく堅くしまる、白色軽石含む。
17　暗褐色シルト質土　しまり弱い。
18　灰褐色砂質土　灰色土小ブロックやや多量に含む。
19　灰褐色砂質土　褐色土を層状に含む。

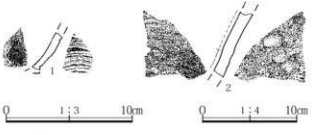
20・21・22・23号溝
1'　圃場整備客土
1　白色粗粒砂礫　浅間Ａ軽石主体。灰種き溝か。
2　暗褐色砂質土　ややしまる。ローム粒子多量に含む。水田耕作土か。
3　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック多量、白色軽石含む。
4　暗褐色砂質土　しまる。白色軽石微量に含む。
5　暗褐色土　しまりやや砂質。ローム小ブロック・ローム粒子やや多量、白色軽石含む。
6　暗褐色土　しまり粘性弱く、ややシルト質。ローム粒子多量に含む。水田耕作土か。
7　暗褐色砂質土　ごく堅くしまる。ローム小ブロック・ローム粒子・白色軽石含む。水田耕作土か。
8　暗褐色土　堅くしまりやや粘性弱い。白色軽石少量、ローム小ブロック・ローム粒子含む。

第157図　２区20～23号溝、23号溝出土遺物

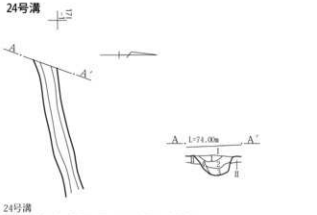
20号溝　位置　７Ｂ～Ｊ－15～19グリッド。南北両側はそれぞれ調査区域外に延びる。平面形は直線状。走向方位はＮ－20°－Ｗ。断面形はＶ字形に近い。底面は丸みを持つ。埋没状況から東側のテラス状の平坦面も並存すると見られる。両端の比高差は15cmで、勾配0.32％で北方へ下向する。埋没土下位は壁面からの崩落もあり砂質土で埋まるが、徐々に暗褐色土で自然埋没する。比較的大きな溝であり広域に及ぶ用水路とも考えられるが、砂層を形成するような流水痕跡はなかった。東側テラス状の平坦面は、検出状態で平面的に礫混土が広がっている。調査段階では地山と判断されているが、被覆土の可能性もあるのではないか。その場合、道路面であることも考えられる。規模は長さ46.96m上端幅320～392cm最大深115cmである。埋没土中から在地系土器（１～４）、６の常滑陶器甕、７の白磁皿が出土するが、５の瀬戸陶器片口鉢（登窯５～７小期、18世紀第１～３四半期）、８の新寛永通宝も出土する。掲載遺物の他に土師器杯類１片・甕類１片、須恵器甕類２片、埴輪片が1片出土している。出土遺物により中世頃には機能しており、18世紀後半、天明３年以前には埋没していたと言える。

18号溝





24号溝



18号溝
1　暗褐色砂質土　しまり強い。砂・浅間Ａ軽石・浅間Ｂ軽石多量に含む。
2　暗褐色砂質土　しまり強い。砂・浅間Ａ軽石・浅間Ｂ軽石・炭化物粒子多量に含む。
3　暗褐色砂質土　しまる。砂多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量に含む。
4　暗褐色砂質土　しまる。砂やや多量に含む。
5　褐色砂質土　ややしまる。ローム小ブロック・ローム粒子多量に含む。
6　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム小ブロック・ローム粒子少量、砂微量に含む。
7　褐色土　ややしまり弱くやや粘性あり。

24号溝
1　暗褐色土　浅間Ａ軽石やや多量、大礫含む。
2　暗褐色土　しまりやや粘性あり。ローム小ブロック・ローム粒子・白色軽石やや多量に含む。
3　暗褐色土　ややしまりやや粘性あり。ローム大ブロック・ローム粒子・白色軽石少量含む。
4　暗褐色土　しまり弱くやや粘性あり。ローム小ブロックごく多量に含む。

第154図　２区18･24号溝、18号溝出土遺物

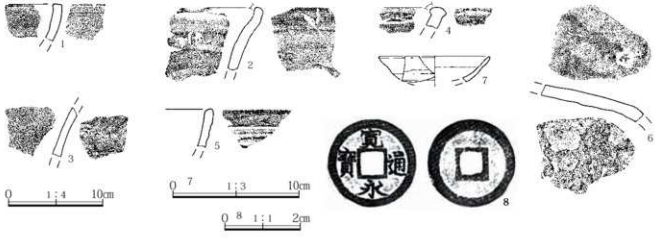
第78表　２区18号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第154図 PL.63	1	古瀬戸	平碗	フク土	－	－	－	体部片		灰白	内面に灰釉。体部外面は回転施削り。高台欠損。	古瀬戸後期。
第154図	2	在地系土器	片口鉢	フク土	－	－	－	体部下位片	B	にぶい黄	断面中央は暗灰色、器表付近から器表はにぶい黄色。内面下位は使用により器表摩滅し、中位以上は平滑となる。	中世。

備施工段階まで機能していたと推定される。

24号溝(第154図、ＰＬ．49)

位置　７Ｈ・Ｉ－20グリッド。東側は削平により消滅、西側は調査区域外へ延び、綿貫原北遺跡３区20号溝と同一と見られる。平面形は直線状。走向方位はＮ－78°－Ｅ。断面形はＵ字形。底面は丸みを持つ。両端の比高差は１ｍで、勾配0.34％で西方へ下向する。自然埋没か。規模は長さ2.97ｍ上端幅34～43cm最大深8cmである。遺物は出土していない。



第158図　２区20号溝出土遺物

第 80 表　２区 23 号溝出土遺物

挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第157図 PL.63	1	美濃磁器	湯飲み碗	フク上	7.6	3.4	5.3	ほぼ完形		白	外面に吹き墨で植物文。高台内に「岐409」の生産者番号押印。	昭和。
第157図 PL.63	2	美濃陶器	丸皿	フク上	(11.6)	(6.6)	2.5	1/2		灰白	外面口縁部以下は回転篦削り。内面から高台脇に灰釉。	登窯３・４小期。

挿図 PL.No	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長さ	幅	重さ (g)	製作状況・使用状況	備考
第157図 PL.63	3	砥石	23溝	中砥？	珪質頁岩	(5.2)	(3.6)	20.2	背面側に断面弧状を呈する浅い溝状の窪み。表裏面の二面を使用。表裏面とも被熱剥落。左辺・下辺は切り取り整形、横位線条痕が残る。	

第 81 表　２区 20 号溝出土遺物

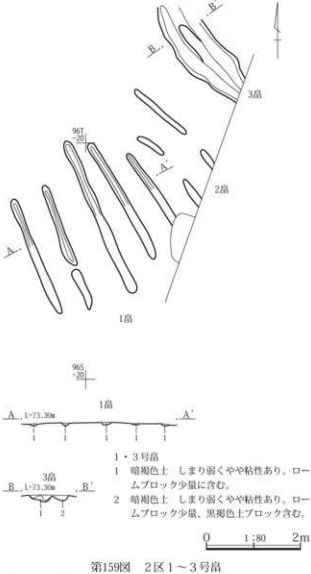
挿図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第158図	1	在地系上器	内耳鍋	フク上	－	－	－	口縁部片	B	黄灰	口縁部は内湾。口縁端部上面は平坦。	中世。
第158図	2	在地系上器	内耳鍋	フク上	－	－	－	口縁部片	B	灰	還元炎。断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は灰色。口縁部は短い。口縁部は外反し、端部は内面に突き出る。内面突出部の器表は摩滅。	Ⅰ期。
第158図	3	在地系上器	内耳鍋	フク上	－	－	－	体部片	B	灰	還元炎。断面中央は灰褐色、器表付近から器表は灰色。体部上位は外反。	中世。
第158図	4	在地系上器	片口鉢	フク上	－	－	－	口縁部片	B	灰	還元炎。口縁端部上面はやや丸みを帯びて尖る。端部内外面は突出する。内面突出部の器表は摩滅。	Ⅳ期か。
第158図	5	瀬戸陶器	片口鉢	フク上	－	－	－	口縁部片		淡黄	内外面に鉄釉。外面口縁部下の轆轤目は顕著。外面口縁部下に凹線１条廻る。	登窯５～７小期。
第158図	6	常滑陶器	甕	フク上	－	－	－	肩部片		灰	外面に自然釉厚くかかる。	中世。
第158図 PL.63	7	製作地不詳	白磁皿	フク上	(8.7)	－	－	口縁部片		白	口縁部のみ施釉。体部外面中位以下は回転篦削り。内面の無釉部は釉の掻き取りてはなく無釉。	中国製か。中世か。

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第157図 PL.63	8	銅製品 銭貨		23.16	23.22	1.00～1.13	2.60	完形	「寛永通寶」、新寛永。銅銭。

10　畠

１～３号畠(第159図、ＰＬ.50、第82表)

調査区東端に集中して畠３か所を検出した。相互に重複関係はないが、走向方位の違いから３つに分けられる。１号畠は畝間５条、２号畠は畝間２条、３号畠は畝間３条を確認したが、３号畠の畝間３条は重複して同時期ではない。畝はすべて削平され残っていない。埋没土はロームブロックを含む暗褐色土であり、地山面であるⅥ層ローム面を削り込んだ結果、平面的に把握されている。遺物は出土しておらず、時期不明である。詳細な規模は第82表のとおり。



第159図　２区１～３号畠

第 82 表　２区畠計測表

畠No.	位置	走行方位	条数	畝幅（cm）	畝間残存長(m)	畝間幅（cm）	畝間最大深さ（cm）	非掲載遺物
1	96Ｓ－19・20	Ｎ－24°－Ｗ	5	26 ～ 68	3.5	14 ～ 22	7	
2	96Ｓ－19	Ｎ－45°－Ｗ	2	56 ～ 62	1.4	10 ～ 17	9	
3	96Ｓ・Ｔ－19	Ｎ－42°－Ｗ	1	―	2.6	56 ～ 88	13	土師杯2・甕1

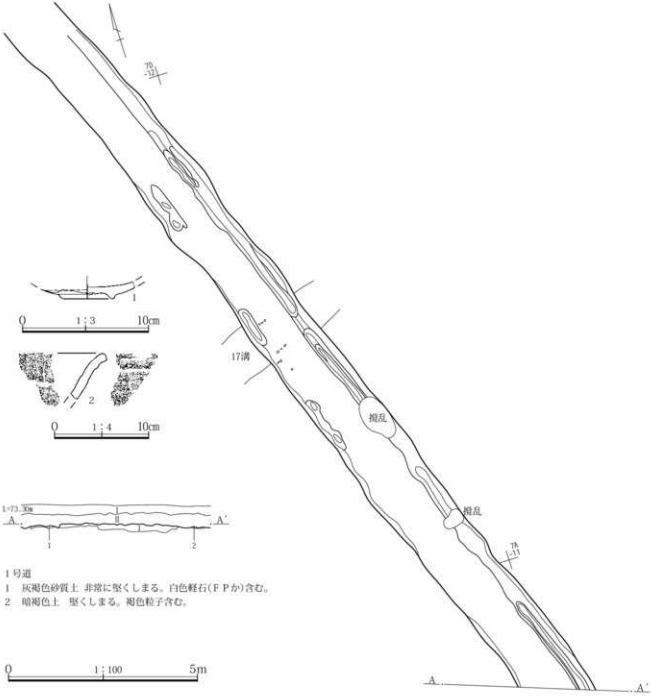
11　道路

１号道路(第160図、ＰＬ.50、第83表)

位置　６Ｔ～７Ｄ－10～12グリッド。17号溝より後出。北側は削平により消滅し、南側は調査区域外へ延びる。ほ場整備客土Ⅰ'を除去した結果、硬化面を確認した。平面形は直線状。走向方位はＮ－20°－Ｗ。硬化路面を除去した結果、溝状に凹む。断面は皿状で、東壁際底面に更に細い溝状が走向し、側溝状を呈する。道路として機能しながら、徐々に埋没したものと考えられる。規模は長さ23.24m上端幅22～188cm最大深9cmである。埋没土中から瀬戸陶器すり鉢などが出土する。掲載遺物の他に土師器杯類１片・甕類５片、須恵器杯類１片、近世国産磁器３片・施釉陶器３片、近現代陶磁器１片・瓦１片が出土している。出土遺物には近現代の遺物も含まれており、ほ場整備直前まで機能していたと考えられる。

12　遺構外出土遺物(第161・162図、ＰＬ.63、第84表)

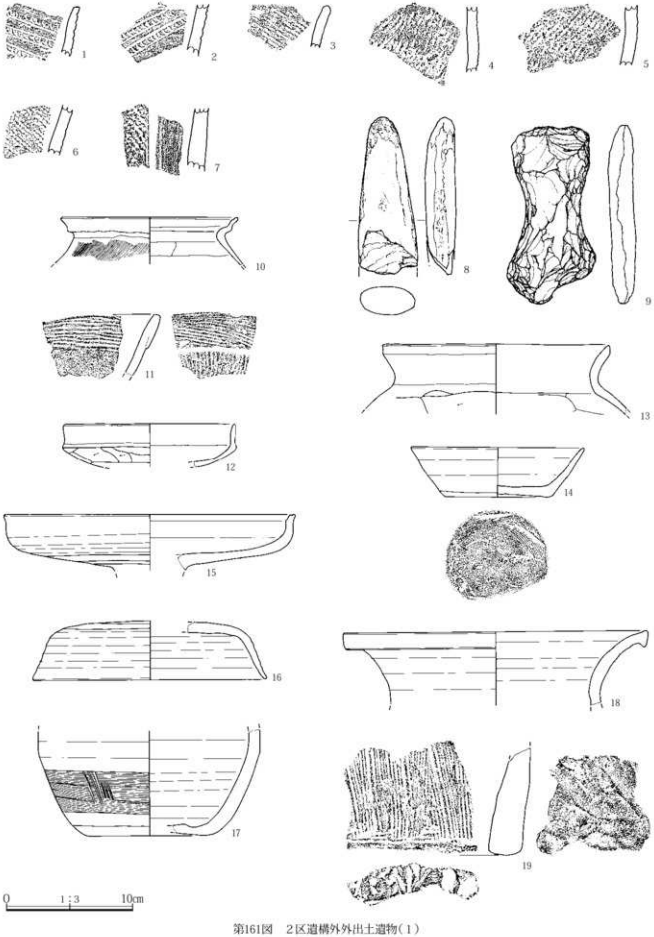
縄文土器７点のうち、２号溝に混入していた１点を除き、すべて表土採集である。石斧２点も同様である。古墳時代から江戸時代の遺物は、遺構年代とほぼ一致する。掲載遺物の他に中世在地系土器鍋鉢類４片、近世在地系土器鍋鉢類２片、近現代陶磁器１片が出土している。



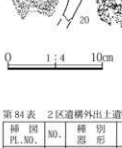
第160図　２区１号道路と出土遺物

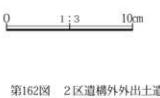
第 83 表　２区１号道路出土遺物

挿　図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	胎土	色調	形・成調整等	備　考
第160図	1	肥前陶器か	不詳	フク上	—	(4.0)	—	1/4		黄灰	無釉部分は赤褐色。内面から高台脇に灰釉。	江戸時代。
第160図	2	瀬戸陶器	すり鉢	フク上	—	—	—	口縁部片		淡黄	錆釉。口縁部は下位内面に小さい段を有し、端部付近で外反。口縁部外面は折り返し状の段を持つ。	連房11小期。



第161図　２区遺構外外出土遺物（１）





第162図　２区遺構外外出土遺物（２）

第 84 表　２区遺構外出土遺物

掛図 PL.NO.	NO.	種別 器形	出土位置 残存率	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備考
第161図 PL.63	1	縄文土器 深鉢	表採 口縁部破片	粗砂、繊維 / ふつう / 橙	波状口縁。口縁に沿った斜行する連続爪形文を複数条施す。	有尾式
第161図 PL.63	2	縄文土器 深鉢	２溝 胴部破片		No.１と同一個体。	有尾式
第161図 PL.63	3	縄文土器 深鉢	表採 口縁部破片	細砂、細礫、繊維 / ふつう / 橙	無節Ｒｌを横位施文する。	黒浜式
第161図 PL.63	4	縄文土器 深鉢	表採 胴部破片	粗砂、繊維 / ふつう / にぶい黄褐	無節Ｌｒを横位施文する。	黒浜・有尾
第161図 PL.63	5	縄文土器 深鉢	表採 胴部破片		No.４と同一個体。	黒浜・有尾
第161図 PL.63	6	縄文土器 深鉢	表採 胴部破片	細砂、石英、繊維 / ふつう / 明赤褐	附加条１種ＲＬ+Ｌを横位施文する。	黒浜式
第161図 PL.63	7	縄文土器 深鉢	表採 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒 / ふつう / 橙	沈線による懸垂文を施し、複節ＬＲＬを縦位充填施文する。	加曽利Ｅ３式

掛図 PL.No.	NO.	器種	出土位置	形態・素材	石材	長	幅	重さ（g）	製作状況・使用状況	備考
第161図 PL.63	8	磨製石斧	２溝	乳房状	変玄武岩	(12.3)	4.6	207.1	完成状態。刃部破損後、先端部を敲打使用。	
第161図 PL.63	9	打製石斧	表土	分銅型	黒色頁岩	14.0	6.9	225.2	完成状態？刃部再生に伴い刃部形状が大きく変形している。刃部摩耗・擦痕痕等は見られない。	

掛図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第161図	10	土師器 台付甕	表土 口縁部～胴部上位片	口 13.7	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目（１cmあたり９～10本）、内面胴部はヘラナデ。	
第161図	11	土師器 甕	表土 口縁部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は折り返し、口縁部外面は上半が横位、下半が縦位のハケ目(1cmあたり5本)、内面は上半が横位のハケ目、下半はヘラナデ。	
第161図	12	土師器 杯	表土 口縁部～体部片	口 13.2 種 13.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部（種下）から底部は手持ちヘラ削り。	
第161図	13	土師器 甕	表土 口縁部～胴部上位片	口 17.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第161図 PL.63	14	須恵器 杯	表土 1/3	口 13.4　高 3.9 底 8.9	細砂粒/良好/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整、底部周縁は器面磨滅。	
第161図	15	須恵器 高盤	表土 盤身部1/4	口 22.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。盤身部底部は回転ヘラ削り。	内面口縁部に蓋受けを有す。
第161図	16	須恵器 短頸壺蓋	表土 口縁部～天井部片	口 18.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。	
第161図	17	須恵器 瓶	表土 底部～胴部下半片	底 9.0 胴 17.2	細砂粒・粗砂粒/還元焔/暗灰	ロクロ整形、回転左回り。底部から胴部下位は回転ヘラ削り、その上位にカキ目。	
第161図	18	須恵器 甕	フク土 口縁部片	口 23.7	細砂粒/還元焔/灰	口縁部はロクロ整形。	
第161図	19	埴輪 円筒	表土 基底部		細砂粒・長石/良好/橙	外面はハケ目（２cmあたり９本）、内面と底面はナデ。	

掛図 PL.NO.	NO.	種別	器形	出土位置	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	胎土	色調	形・成調整等	備考
第162図	20	在地系土器	片口鉢	表土	—	—	—	口縁部片	B	黄灰	還元炎。口縁部は玉縁状。端部器表は摩滅。内外面の器表は剥離部分多い。	Ⅱ期。
第162図 PL.63	21	瀬戸陶器	反皿	表採	—	(8.0)	—	1/4		淡黄	底部器壁は厚い。高台端は抉り込む。高台内の抉りは浅い。内面から高台外面に灰釉。底部内面に目痕１箇所。	登窯３・４小期。

掛図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置	径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	残存	形・成調整等
第162図 PL.63	22	銅製品 銭貨	68土坑	—	—	1.11～1.19	—	周縁欠	不詳。周縁一部残存。政和通寶か。

第４節　鑑定分析・自然科学分析

１　出土人骨鑑定分析

（１）はじめに

当遺跡では、調査された墓、火葬跡を理解するため、出土人骨の鑑定分析を生物考古学研究所橋崎修一郎氏に委託して実施した。

（２）分析目的

当遺跡で調査された火葬跡は、１区で７基確認されたが、このうち人骨が出土したものは４基である。２区では、火葬跡が３基確認され、すべてに人骨が伴う。また、２区では人骨を伴う土壙墓１基が検出された。以上の人骨について、年齢・性別・個体数・部位の鑑定を行い、あわせて出土状況から火葬及び埋葬時の体位や、火葬方法や収骨法など、幅広い分析を行った。

当遺跡出土の火葬跡では、底面に石が並べられた遺存状態の良好な事例があり、同種の遺構解明に有用な資料である。また、中世の屋敷遺構も隣接して発見されており、生活状況も含めた総合的な検討が可能となる。

（３）分析結果

当遺跡の１区及び２区の中世土坑・火葬跡・墓坑から、人骨が出土したので、以下に報告する。人骨は、クリーニング後、観察・写真撮影・計測を行った。なお、出土歯の計測方法は、藤田(藤田　1949)の方法に従い、歯の歯冠計測値の比較は、中近世人は松村(Matsumura 1995)を現代人は権田(権田　1949)を使用した。

（４）１区出土人骨

１区では、149号土坑・152号土坑・153号土坑・168号土坑の４基から、人骨が出土している。これら4基の遺構は、密集しておらず、散在して位置している。

149号土坑出土火葬人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸約137 ～ 149㎝・短軸約74㎝・深さ約20㎝の長方形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。本土坑の東側には長さ約43㎝・幅27㎝の張出部がある。この形状は、群馬県の中世火葬遺構の典型であり、本報告者はこの張出部を焚き口であると推定しているので、火葬時には東側から風が吹いていたと推定される。焼土を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。

②火葬方法

火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。

③被火葬者の頭位・焼成状態

火葬人骨の出土量が非常に少なく、出土位置も不明であるため、被火葬者の頭位は不明である。

④副葬品　副葬品は、検出されていない。

⑤火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は非常に少ないが、頭蓋骨片及び四肢骨片が同定された。

⑥被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量は非常に少ないが、被火葬者の個体数は１個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別

火葬人骨の残存量は非常に少ないが、頭蓋骨片の骨壁が非常に薄いため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢

火葬人骨の残存量は非常に少ないが、頭蓋骨縫合は内板及び外板共に癒合していない。但し、この頭蓋骨縫合癒合の年齢は部位毎に異なるため、被火葬者の死亡年齢は成人であるとしか推定できない。

⑨収骨(拾骨)方法

火葬人骨の残存量は非常に少ないため、ほとんどの火葬人骨を収骨した東日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

152号土坑出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸約149㎝・短軸約70㎝・深さ約35㎝の隅丸長方形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。本土坑の西側には長さ約22㎝・幅約30㎝の張出部がある。この形状は、群馬県の中世火葬遺構の典型であり、本報告者はこの張出部を焚き口であると推定しているので、火葬時には西側から風が吹いていたと推定される。炭化材・炭化物・焼土を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。また、土坑底部には径約15㎝の石が少なくとも13点敷かれている。これは、燃

焼効率を高めるためであると推定される。

②火葬方法

火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には亀裂・歪み・捻れが認められるため、白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

③被火葬者の頭位・焼成状態

火葬人骨は、北部から頭蓋骨片が、南部から四肢骨片が出土している。特に、Ｂ 16 とＢ 19 は、左右側頭骨片であり、この２点ともに土坑の北部から出土している。被火葬者は、成人であると推定されているので、被火葬者は頭位を北にして屈位で火葬にされたと推定される。

④副葬品　副葬品は、検出されていない。

⑤火葬人骨の出土部位

火葬人骨の出土部位は、全身に及ぶ。

⑥被火葬者の個体数

火葬人骨には、重複部位が認められないため、被火葬者の個体数は１個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別

火葬による収縮を考慮しても、四肢骨は頑丈で大きいため、被火葬者の性別は男性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢

今回、歯根が多く同定された。この内１点は、明らかに第３大臼歯の歯根である。このことは、少なくとも老齢ではないことを示す。また、膝蓋骨も１点同定されたが、癒合は完了しているので、成人であると推定される。

⑨収骨(拾骨)方法

火葬人骨の残存量は多いため、一部の火葬人骨を収骨した西日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

写真１．綿貫牛道遺跡１区152号土坑出土人骨(膝蓋骨)

153号土坑出土人骨

人骨は、長軸約119cm・短軸約45 ～ 54cm・深さ約10 ～ 16cmの隅丸長方形土坑から出土している。長軸は、北東～南西方向である。炭化粒・焼土ブロックを含み、骨は被熱を受けているので火葬跡であると推定される。

しかしながら、人骨の残存量が非常に少ないため、被火葬者の個体数・性別・死亡年齢は不明である。

168号土坑出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸推定141cm・短軸推定60cm・深さ16 ～ 28cmの不整楕円形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ東西である。なお、西側には突出部のような構造があり、焚き口として機能していた可能性があるが詳細は不明である。もし、焚き口として機能していたとすれば、火葬時に風は西から東にふいていたと推定される。

なお、このような構造の火葬遺構は、本報告者が知るかぎり、群馬県では初見である。通常、突出部は土坑の長辺に付随し、短辺に付随していない。また、本遺構は、８号土坑及び18号土坑と重複している。焼土・炭を含み、骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。

②火葬方法

火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には、亀裂・歪み・捻れが認められるため、火葬方法は白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

③被火葬者の頭位・埋葬状態

火葬人骨の出土位置は、大きな傾向として、東側から頭蓋骨片が、西側から四肢骨片が出土しているので、被葬者の頭位は東であると推定される。また、土坑の規模から、被火葬者は屈位で火葬にされたと推定される。

④副葬品

副葬品は、中世の在地鍋１点と銭貨１点が検出されている。

⑤火葬人骨の出土部位

火葬人骨の出土部位は、ほぼ全身に及ぶ。

⑥被火葬者の個体数

火葬人骨には、明かな重複部位が認められないため、被火葬者の個体数は１個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別

火葬人骨は、火葬による収縮を考慮しても、頑丈で大きいため、被火葬者の性別は男性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢

火葬人骨の頭蓋骨の縫合を観察すると、内板が癒合していた状態が認められた。したがって、被火葬者の死亡年齢は、約30歳代であると推定される。

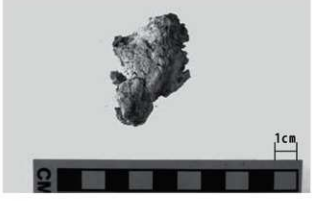


写真２．綿貫牛道遺跡1区168号土坑出土人骨

第163図　綿貫牛道遺跡1区168号土坑出土人骨出土部位図

（５）２区出土人骨

２区からは、１号火葬跡・２号火葬跡・３号火葬跡・４号墓の４基から人骨が出土している。

１号火葬跡出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸約123㎝・短軸約52㎝・深さ約25㎝の楕円形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。焼土及び炭化物を含み人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。また、土坑には、北部に大石３点・南部に大石２点が検出されている。これは、燃焼効率を高めるためであると推定される。

②火葬方法

火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。また、火葬人骨には、亀裂・歪み・捻れが認められるため、火葬方法は、白骨化したものを火葬にしたのではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

③被火葬者の頭位・焼成状態

被火葬者は、成人であると推定されている。また、大きな傾向として、土坑の北側から頭蓋骨片が、南側から四肢骨片が出土している。被火葬者は、成人であると推定されているので、土坑の規模から、被火葬者は、頭を北にした屈位で火葬されたと推定される。

④副葬品　副葬品は、検出されていない。

⑤火葬人骨の出土部位

火葬人骨の出土部位は、部分的にほぼ全身にわたる。

⑥被火葬者の個体数

火葬人骨には、明瞭な重複部位が認められないため、被火葬者の個体数は１個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別

火葬による収縮を考慮しても、全体的に華奢で小さいため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢

歯根がある程度の数、確認されている。また、下顎第３大臼歯の歯根も確認された。さらに、頭蓋骨の主要縫合は癒合していない状態であるので、被葬者の死亡年齢は約20歳代～ 30歳代であると推定される。

⑨収骨（拾骨）方法

火葬人骨の残存量は比較的多いため、一部の火葬人骨のみを収骨した西日本タイプの収骨（拾骨）方法であると推定される。

２号火葬跡出土人骨

①人骨の出土状況

土坑の東側は、攪乱を受けているため規模は不明である。現状で、長軸約55㎝以上・短軸約60㎝・深さ約５㎝の土坑から出土している。長軸は、ほぼ東西である。人骨は被熱を受けているので、火葬跡であると推定される。

②火葬方法

火葬人骨の色は、白色を呈しているため、火葬の際の温度は、約900℃以上であると推定される。

③被火葬者の頭位・焼成状態

火葬人骨の出土位置には、大きな傾向は認められない

ため、被火葬者の頭位は不明である。また、火葬人骨の残存量も少ないため、焼成状態も不明である。

④副葬品　副葬品は、検出されていない。

⑤火葬人骨の出土部位

火葬人骨の出土部位は、部分的にほぼ全身にわたる。

⑥被火葬者の個体数

火葬人骨には、明瞭な重複部位が認められないため、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑦被火葬者の性別

火葬による収縮を考慮しても、全体的に華奢で小さいため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

⑧被火葬者の死亡年齢

年齢指標となる部位が出土していないので、被火葬者の死亡年齢は不明である。しかしながら、恐らく、成人であると推定される。

⑨収骨(拾骨)方法

火葬人骨の残存量は少ないため、収骨を丁寧に行った東日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

３号火葬跡出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸約93cm・短軸約64cm・深さ約15cmの不整楕円形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北方向である。

②人骨の頭位・埋葬状態

出土人骨の出土位置が不明であるので、頭位は不明である。被葬者は、成人であるので、土坑の規模から埋葬状態は屈位で火葬されたと推定される。

③副葬品　副葬品は、検出されていない。

④人骨の出土部位

人骨は、遊離歯の歯冠部及び四肢骨片が出土している。

⑤被葬者の個体数

遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は１個体であると推定される。

⑥被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値を比較すると、小さいため被葬者の性別は女性であると推定される。

⑦被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状及び線状に露出する程度のマルティンの２度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

⑧古病理

出土遊離歯３本に、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕が認められた。いずれも、Ｃ３(齲蝕症第３度)の状態で、歯頸部に認められた。

写真３．綿貫牛道遺跡２区３号火葬跡出土遊離歯齲蝕

第85表　綿貫牛道遺跡出土人骨歯冠計測値

	歯種	計測項目	綿貫牛道遺跡２区３号火葬跡		中世時代人* Matsumura 1995		江戸時代人* Matsumura 1995		現代人** 権田 1959	
			右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上顎	I2	MD	—	6.8	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	—	5.6	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	C	MD	—	7.2	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71
		BL	—	7.5	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13
	P1	MD	—	6.0	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	—	8.3	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P2	MD	—	6.0	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		BL	—	8.3	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
	M1	MD	9.0	—	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		BL	10.3	—	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
	M2	MD	9.2	—	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74
		BL	10.6	—	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31
下顎	I2	MD	5.5	—	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11
		BL	5.5	—	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30
	C	MD	6.5	—	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
		BL	(破損)	—	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50
	P1	MD	6.8	6.5	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19
		BL	7.2	7.2	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
	P2	MD	6.3	—	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		BL	6.8	—	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26

註１．計測値の単位は、すべて、「mm」である。
註２．歯種は、I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。
註３．計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠舌唇径)を意味する

４号墓出土人骨

４号墓から、歯の歯冠部分の破片が数点出土している。しかしながら、破片であるため、歯種の同定は不可能である。但し、人歯である。

まとめ

綿貫牛道遺跡の１区及び２区から、人骨が出土した。表86に、まとめを示した。

第86表　綿貫牛道遺跡出土人骨まとめ

	遺構	人骨	個体数	性別	死亡年齢
１区	149号土坑	火葬人骨	1個体	女性	成人
	152号土坑	火葬人骨	1個体	男性	成人
	153号土坑	火葬人骨	不明	不明	不明
	168号土坑	火葬人骨	1個体	男性	約30歳代
２区	１号火葬跡	火葬人骨	1個体	女性	約20歳代～30歳代
	２号火葬跡	火葬人骨	1個体	女性	成人
	３号火葬跡	土葬人骨	1個体	女性	約30歳代

２　出土した炭化材の樹種同定

（１）はじめに

本遺跡では、調査された墓、火葬跡を理解するため、炭化材の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

（２）分析の目的

本遺跡では火葬跡が１区で７基、２区で３基、計10基、土壙墓は２区で１基出土している。火葬跡については、遺存状態が良好な場合、炭化物層が見られる。これらは燃料として使用した木材などが想定され、地域的な傾向を調べる必要がある。また、本遺跡では土壙墓が少ないが、火葬跡と対比される資料となる。火葬跡は、焼人骨も出土しており、同鑑定とあわせて総合的な評価が可能となる。

（３）試料と方法

試料は、2区3号火葬跡１・３・６、４号墓から各１点出土した、炭化材4点である。試料の時期は、３号火葬跡が中世、４号墓が14世紀後半と考えられている。形状が良好に残存しているものについて、年輪数と残存径を記録した。

樹種同定方法は、試料をまず乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）についてカミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VE-8800）にて検鏡および写真撮影を行った。なお同定試料およびその残りは、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

（４）結果

同定の結果、広葉樹のクリとナシ亜科の２分類群が産出した。クリが３点産出し、ナシ亜科は１点みられた。同定結果を第87表と、一覧に示す。

次に同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

①クリ　*Castanea crenata* Siebold. et Zucc.　ブナ科　図版１　1a-1c(No.2)、2a-2c(No.4)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

②ナシ亜科　Subfam. *Maloideae*　バラ科　図版１　3a-3c(No.1)

ほぼ単独の小型で丸い道管が、年輪のはじめはやや密に、晩材部ではややまばらに散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、１～３列となる。

ナシ亜科はナナカマド属やサイフリボク属、カマツカ属など11属を含む、落葉ないし常緑の高木または低木である。材組織ではカマツカ属以外の識別は出来ず、カマツカ属以外のナシ亜科の樹種と考えられる。

５．考察

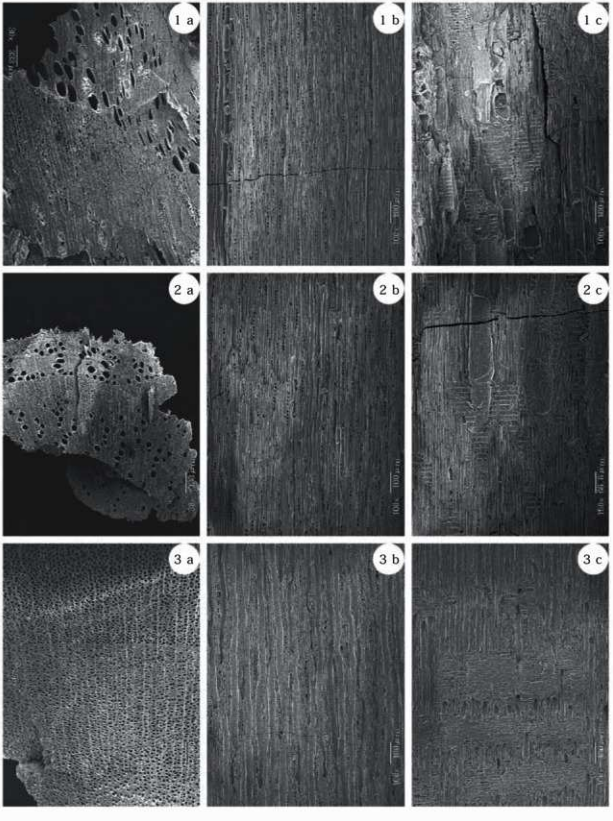
中世の２区３号火葬跡から出土した燃料材では、クリが２点とナシ亜科が1点産出した。直径の計測では残存径で3.0、4.0、6.0cmであり、小径木であった。炭化材の観察では、試料が木植であるかどうかの確認はできなかった。また14世紀後半の２区４号墓出土の燃料材？では、クリが１点産出した。試料は直径２cmの小径木であった。枝材であった可能性が考えられる。

一覧　出土炭化材の樹種同定結果

樹種／遺構	３号火葬跡	４号墓	合計
クリ	2	1	3
ナシ亜科	1		1
合計	3	1	4

第 87 表　綿貫牛道遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	地区	出土遺構	樹種	木取り	残存年輪数	残存直径(cm)	器種	備考	時代
1	２区	３号火葬跡１	ナシ亜科	割材	8	6.0	燃料材		中世か
2	２区	３号火葬跡３	クリ	割材	3	4.0	燃料材		中世か
3	２区	３号火葬跡６	クリ	割材	4	3.0	燃料材		中世か
4	２区	４号墓	クリ	割材	2	2.0	燃料材	内樹皮あり	14世紀後半



第 164 図　綿貫牛道遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
1a-1c.クリ(No.2)、2a-2c.クリ(No.4)、3a-3c.ナシ亜科(No.1)

３　出土した炭化種実の同定

（１）はじめに

本遺跡では、調査された墓および火葬跡について理解するため、炭化種実の同定を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

（２）分析の目的

本遺跡では火葬跡が１区で７基、２区で３基の計10基、土壙墓が２区で１基出土している。火葬跡については、遺存状態が良好な場合、炭化物層が見られる。出土種実は、土壙墓については副葬品、火葬跡についても共伴して焼かれたものと解される。したがって、出土種実は当時の習俗を示しており、出土人骨鑑定、出土炭化材の同定とあわせて、総合的な評価が可能となる。

（３）試料と方法

対象試料として、２区の４号墓と１号火葬跡、３号火葬跡の３遺構分の炭化種実を検討した。各遺構とも発掘調査現場において最少１試料から最多７試料に分けて土壌が採取された。

試料の採取と水洗、分類までの作業は群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行なわれた。水洗前の土壌重量は不明である。水洗は、フローテーション法で湯垢すくいを用いて行なわれた。同定に用いられた試料は、水洗選別後に種実などが抽出済みの試料で、試料番号ごとにある程度分類されてプラスチックケース内に水漬けあるいは乾燥状態で保存されていた。

炭化種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行なった。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として１点と数え、１個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、群馬県埋蔵文化調査センターに保管されている。

（４）結果

同定した結果、木本植物ではモモ炭化核とサクラ属サクラ節炭化核の２分類群、草本植物ではマメ科炭化種子と、イネ炭化種子、オオムギ炭化種子、コムギ炭化種子４分類群の計６分類群が見いだされた（表１）。このほかに、破片や遺存状態が悪いためにオオムギかコムギかの区別ができなかった一群をオオムギ-コムギ炭化種子とした。また、科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。同定結果の一覧を付表１に示す。

以下に、遺構別の炭化種実出土傾向を記載する（同定不能種実を除く）。

第88表　綿貫牛道遺跡から出土した炭化種実（括弧は破片を示す）

分類群	部位/時期	地区	2区 4号墓 14世紀後半	2区 1号火葬跡 中世か	2区 3号火葬跡 中世か
モモ	炭化核			(1)	
サクラ属サクラ節	炭化核				1　(1)
マメ科	炭化種子		1		
イネ	炭化種子		1		1　(2)
オオムギ	炭化種子		8	1	6
コムギ	炭化種子		3		
オオムギ-コムギ	炭化種子		(2)	(1)	
同定不能	炭化種実				(2)

２区４号墓：オオムギがやや多く、マメ科と、イネ、コムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

２区１号火葬跡（３,石下南,石下北）：モモとオオムギ、オオムギ-コムギがわずかに得られた。

２区３号火葬跡（１,２,３,４,５,６,一括）：オオムギが少量、サクラ属サクラ節とイネがわずかに得られた。

以下に、炭化種実の記載を行い、同定の根拠とする。

①モモ　*Amygdalus persica* L.　炭化核　バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。破片のため、計測はしていない。

②サクラ属サクラ節　*Prunus* sect. *Pseudocerasus*　炭化核　バラ科

上面観は円形に近い楕円形、側面観は円形～楕円形で、上部がわずかに尖る。下端に大きくくぼんだ着点がある。表面は平滑。核皮は厚く硬い。長さ6.8mm、幅6.1mm程度。

③マメ科　Fabaceae　炭化種子

上面観および側面観は楕円形。表面は平滑。臍が残存せず、残存状況が悪いため、マメ科とした。

④イネ　*Oryza sativa* L.　炭化種子　イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。任意に抽出した10点の大きさは、長さ4.0～5.0（平均4.6）mm、幅2.4～3.0（平均2.7）mm程度。

⑤オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は円形となる（Jacomet, 2006）。長さ5.2mm、幅3.4mm、厚さ3.0mm程度。

⑥コムギ(パンコムギ)　*Triticum aestivum* L.　炭化種子　イネ科

側面観は楕円形。腹面中央部には、上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい形状である。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる(Jacomet, 2006)。側面観で最も背の高い部分(幅の広い部分)が基部付近に来る。長さ3.5mm、幅2.7mm、厚さ2.8mm程度。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。破片や変形などによりオオムギとコムギを明確に識別できなかったものはオオムギ-コムギとした。

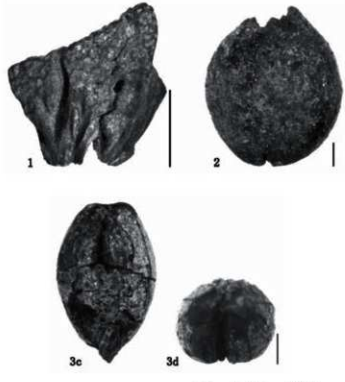
(５)考察

本遺跡では、栽培植物として果樹のモモ、水田作物のイネ、畑作作物のオオムギとコムギの４分類群が産出した。また、栽培種と野生種の両方の可能性がある分類群としてマメ科、野生種であるが利用された可能性のある分類群としてサクラ属サクラ節が産出した。

14世紀後半の４号墓からは、マメ科とイネ、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギ、中世の可能性がある１号火葬跡からは、モモとオオムギ、オオムギ-コムギ、同じく中世の遺構と推定される３号火葬跡からは、オオムギとサクラ属サクラ節、イネが産出した。いずれも栽培植物が主体であり、副葬や火葬に伴う種実の可能性がある。

引用文献

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.



スケール 1:5mm，2,3:1mm

1.モモ炭化核(２区、1号火葬跡、3)、2.サクラ属サクラ節炭化核(２区、３号火葬跡、1)、3.オオムギ炭化種子(２区、３号火葬跡、2)

第165図　綿貫牛道遺跡から出土した炭化種実

第89表　綿貫牛道遺跡から出土した試料番号別の炭化種実(括弧は破片を示す)

	地区	2区										
	遺構名	4号墓	1号火葬跡			3号火葬跡						
	時期	14世紀後半	中世か			中世か						
分類群	試料番号	−	3	石下南	石下北	1	2	3	4	5	6	一括
モモ	炭化核		(1)									
サクラ属サクラ節	炭化核					1	(1)					
マメ科	炭化種子	1										
イネ	炭化種子	1					(1)		1	(1)	1	
オオムギ	炭化種子	8		1		1	1			2	1	1
コムギ	炭化種子	3										
オオムギ-コムギ	炭化種子	(2)	(1)									
同定不能	炭化種実							(1)				(1)

第５節　まとめと考察

１　縄文時代

縄文時代の遺構と考えられる確実な遺構は検出されていない。遺構外を主体に縄文土器片が少量出土しているだけである。それは前期中葉の黒浜・有尾式、前期後葉の諸磯ｂ式、中期後半の加曽利Ｅ３式と同Ｅ４式である。いずれも小破片であった。ただし１区からは前期中葉の土器片の出土はなかった。

このほか石器類５点、剥片類18点(255.2ｇ)が出土した。石器類５点のうち１点は１区９号土坑から出土した多孔石である。２区２号溝出土の磨製石斧は形態的特徴から前期的、同じく２区表土出土の打製石斧は中期的である。剥片類は４種類の石材からなり、黒色頁岩や硬質泥岩を用いた少量の剥片生産が行われたものと見られる。石器類と剥片類は対応関係になく、剥片類は削器類等の便宜的石器の製作に由来するものと思われる。

２　古墳時代から奈良時代

１区からは14軒の住居、２区から１軒の住居の計15軒が検出されている。いずれも区東部からの検出であり、東に隣接する綿貫伊勢遺跡１区・２区検出集落群の西端に位置する住居群となる。１区12号住居は欠番となったので、古墳時代前期４世紀代の住居は１区１・２・９・11・13号の５軒、６世紀代の住居は１区５・６・10号の３軒、７世紀代の住居は１区３・４号と２区１号の３軒、８世紀代の住居は１区７・８・14・15号の４軒となる。

４世紀代の住居は大型を呈するものと思われる９・11・13号の各住居は、重複や路線外に延びているためにその全容は不明である。いずれも確認面からの掘り込みは浅いが、綿貫原北遺跡３区３号住居のように住居外周に溝をもつ「周溝をもつ建物」ではない。１・２号住居は前記の住居に比べると小規模な住居であるが、掘り込みはやや深い。

１区・２区の北西から南東(Ｎ－24°～29°－Ｗ)にほぼ直線的に約90ｍ走行する、４世紀代の溝が検出されている。１区４号溝ではその上幅82～150cm、下幅24～99cm、深さ43cmを測り、２区13号溝では上幅56～96cm、下幅28～72cm、深さ23cmを測る。いずれも北西から南東に向かってわずかに傾斜している。２区にいたってやや規模と深さが縮小となっているのは、上面を削平されている可能性が考えられる。というのも１区４号溝の覆土上層(底面上14～35cm)からは廃棄と考えられる多量の土器、Ｓ字状口縁台付甕・壺・高杯・坩・器台などが出土しているにもかかわらず、２区13号溝覆土中からは遺物の出土がなかったことである。もちろん全く遺物が出土しなかったことは、それはそれで問題となろう。同時期集落との関係で論じられなければならない事項である。

１区４号溝の遺物出土状況を見ると、大きく５群に分かれるようである。発掘区北端から約３ｍまで遺物の空白域があり、そしてＳ字状口縁台付甕・甕・壺・坩・有孔鉢からなる一群(底面上14～30cm)、そして約４ｍの空白域を挟んで杯・鉢・壺の一群(底面上22～31cm)、そこからまた約４ｍの遺物空白域、次の一群はＳ字状口縁台付甕と壺(底面上23～29cm)、そこからまばらな分布が続いて前記分布から約10.6ｍ経てＳ字状口縁台付甕を主体とする一群(底面上20～35cm)、さらに約4.6ｍ離れて壺の一群(底面上17～29cm)となる。この間、ややまばらな土器の分布が認められる。壺の一群から南約10ｍは遺物空白域となって２区13号溝となっている。

当概時期に多量の土器を伴う溝は綿貫小林前遺跡からも検出されている。それはＲ区溝跡130である(第165図左)。この溝は幅約210～250cm、下幅54～64cm、深さ98～102cm、Ｎ－35°45′－Ｗの走行で土塁の存在が推測されている。覆土上層から中層にかけて廃棄された大量の土器片が出土した。この溝は昭和58年度に高崎市教委が発掘した綿貫遺跡ＳＤ0005(第166図右)に繋がる可能性が指摘されている。同じく覆土中から古墳時代前期の土器が出土している。となると総延長約133ｍになる。一方、当遺跡１区４号溝はＳＤ0005の南東約160ｍの所に走行をほぼ同じくして存在し、さらに底面の幅や断面もほぼ平坦である共通性から、ＳＤ0005の延長の可能性も指摘できる。さらに言えば綿貫小林前Ｒ区溝跡130と共通する要素としては、遺構密度の希薄な場所に存在すること、溝底面に流水を示す砂質土(第166図断面図参照)が存在することである。当遺跡１区４号溝最下層からも砂層が検出されていることから、同一遺構の可能性が高い。この場合、綿貫小林前遺跡Ｒ区溝跡130－綿貫遺跡

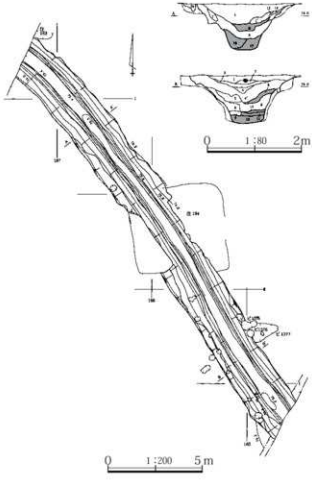
ＳＤ0005－綿貫牛道遺跡１区４溝・２区13号溝の総延長は約360mにおよぶ。綿貫小林前遺跡の報告者・大江正行は溝跡130の機能について「遺跡の立地する低台地以西の低地帯に水源を求めれば、200 ～ 300m以上の開鑿を必要とする、南東側は延々と低台地が続くため以南に利水機能を水田等のため通水させていたとは考え難く、以南東は、井野川に落水させたのではないだろうか。このように考えると溝130の機能は、集落を囲繞させた環濠的要素ばかりではない。」(p.547)としている。なお、このような溝は元島名将軍塚古墳の溝４と呼称された遺構と類似している可能性も指摘できる。また１区５号井戸と綿貫小林前Ｑ区井戸跡18が形態や構造が近似している。平面形は楕円形を呈し、上方に向けてラッパ状に開いている。そして底面には石敷きが認められ、４世紀代の土器が覆土上層から中層にかけて出土した。

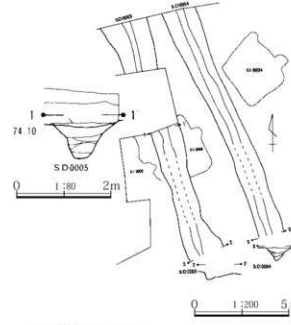
６世紀前半の住居は１区６・10号住居の２軒、同後半は１区５号住居の１軒である。住居規模はほぼ同様な一辺2.5m前後の小規模住居である。またカマド位置は前半住居で東から北東に設置され、後半住居では南西に設置されている。６号住居と10号住居の間隔は約18m、一方６号住居と５号住居では約７ｍを測る。

７世紀前半の住居は１区３・４号住居の２軒、同後半は２区１号住居の１軒である。しかし２区１号住居の全容は不明である。１区３号と４号の間隔は約４ｍと近接するが、規模は異なりまたカマド設置位置も北西と南西とに分かれている。

８世紀第１四半期の住居は１区14・15号住居の２軒、第２四半期の住居は１区８号住居の１軒である。重複し路線外に延びるために14･15号住居の全容は不明である。

いずれにせよ綿貫牛道遺跡１区・２区検出の住居群や溝については、綿貫伊勢遺跡１区・２区住居群の中であらためて検討されなければならない。





綿貫小林前遺跡R区溝跡130

上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)
210 ～ 250	54 ～ 64	98 ～ 102

綿貫遺跡ＳＤ005

上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)
110 ～ 248	22 ～ 56	36 ～ 66

綿貫牛道遺跡１区４号溝

上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)
82 ～ 150	24 ～ 99	43

綿貫牛道遺跡２区13号溝

上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)
56 ～ 96	28 ～ 72	23

第166図　綿貫小林前Ｒ区溝跡130(左)と綿貫遺跡ＳＤ0005(右)

３　中世

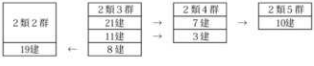
当遺跡では、掘立柱建物や土坑など多くの遺構が確認されたが、遺構を性格づける要素として、１区１号屋敷の存在がある。以下、これを中心に各遺構を取り上げることにより、まとめと考察を行う。

（１）１区１号屋敷

①建物の新旧関係と変遷

１区で27棟あり、主軸方位の違いから４つに分類できた。各建物別の詳細な数値は、第26表(98頁)に示した。このうち、24棟が１号屋敷内に位置し、４号掘立柱建物を除く23棟は、すべて２類である。状況から考えて、この23棟の掘立柱建物が、１号屋敷の内部を構成する建物と考えられ、更に５つの群に細分される。各群は３～６棟で構成され、重複して３時期程度の時期差が生じている。以下、この分類を時期的なまとまりと考えて、検討を行う。

建物の新旧関係は、柱穴同士の直接的な重複関係で捉えられる。これにより、新旧関係が判明したものは以下のとおりである。



分析を進めるため、各建物の新旧関係を、帰属する建物分類に反映させると、２類３群→同４群→同５群という系列と、２類３群→同２群に分かれ、新旧関係で矛盾は生じていない。なお、２類１群は、重複関係が不明である。

ところで、当遺跡の掘立柱建物で、注目される点として、柱穴の埋没状況がある。これは、12・14・16号掘立柱建物で認められるもので、人為的に埋め戻されたと判断されるものだ。特に16号掘立柱建物の場合、Ｐ２に大量の礫が入れられ、Ｐ５では黒褐色土と褐色土の互層により埋められている。一方で、柱穴に柱痕を残すものがある。これは柱が抜き取られず残されたと想像されるが、埋め戻しと対比した場合、建物の立て替えがなく、そのまま廃棄しても支障のなかった段階と考えることもできよう。以上を整理すると、２類１群では４棟中２棟が柱穴を埋め戻され、同３群では埋め戻しのある１棟と、柱痕の残る２棟が混在する。この場合、同群内での新旧関係と捉えられる。また、同４群は３棟中２棟に柱痕があり、同５群では６棟中２棟に柱痕が見られたこととなる。なお、同２群は、埋め戻しも柱痕も見られない一群である。

以上を新旧関係に反映すれば、２類１群は最古段階となり、同３群はそれに次ぐこととなる。したがって、以下のとおり整理される(第167図)。

ただし、２類５群の場合、主屋に相当する建物がなく、附属屋のみが抽出された観がある。しかし、主軸方位では、屋敷の北辺となる17号溝の走向方位と一致しており、建物棟数から見ても、ひとつの段階として抽出することに問題はないと言える。なお、後述するが、出土遺物の状況から、出土時期の中間である14世紀後半頃にまとまりがあることから、これを建物の多い２類３群にあてることも可能であろう。

②建物の形態的な特徴

建物の状況を第90表のとおり整理した。棟方向については、２類３群だけ東西棟が特段に多いが、それ以外は同数程度である。主屋を南向きと考えれば、同数の場合は主屋と附属屋のセットと見なすことができる。２類１・２群では重複関係から、２棟ずつ２時期という構成が復元される。また、東西棟であっても、規模から附属屋となるものはあり、２類３群が主屋のみであるわけではない。しかし、３時期以上が想定されるため、煩雑な印象は受ける。

規模では、小規模なものが多い。桁行・梁間とも２間以内の建物は19棟で、全体の73％を占める。桁行３間未満の建物が屋敷内で主屋となることは考えにくいが、２類１群の場合は、13号掘立柱建物が東下屋を持つことで、やや規模を大きくする。ただし、零細なイメージは

第 90 表　建物総括表

棟別	１類	２類					３類	４類	計	比率
		１群	２群	３群	４群	５群				
東西棟		2	2	5	1	4		1	15	55.6%
南北棟	1	2	2		2	2	2		11	40.7%
正方形				1					1	3.7%
計	1	4	4	6	3	6	2	1	27	
規模	１類	２類					３類	４類	計	比率
２×１間	1	1	1	1	1	1			6	23.1%
１×２間		3	1	2	1	4		1	12	46.2%
２×２間					1				1	3.8%
１×３間			2	2			1		5	19.2%
２×３間				1		1			2	7.7%
計	1	4	4	6	3	6	1	1	26	
面積㎡	１類	２類					３類	４類	計	比率
～10		1	1			4			6	23.1%
～20		2	1	1	2	2	1	1	10	38.5%
～30	1	1	2	3	1				8	30.8%
～40				1					1	3.8%
～50				1					1	3.8%
計	1	4	4	6	3	6	1	1	26	
桁行平均柱間（尺）	１類	２類					３類	４類	計	比率
～5.8							1		1	14.3%
～6.3			1	2		1			4	57.1%
～6.8			1						1	14.3%
～7.3									0	0.0%
～7.8									0	0.0%
～8.3				1					1	14.3%
計			2	3	0	1	1	0	7	

残る。一方、２類４群については、梁間が５ｍを超え、更に西下屋を設けることで規模を確保している。

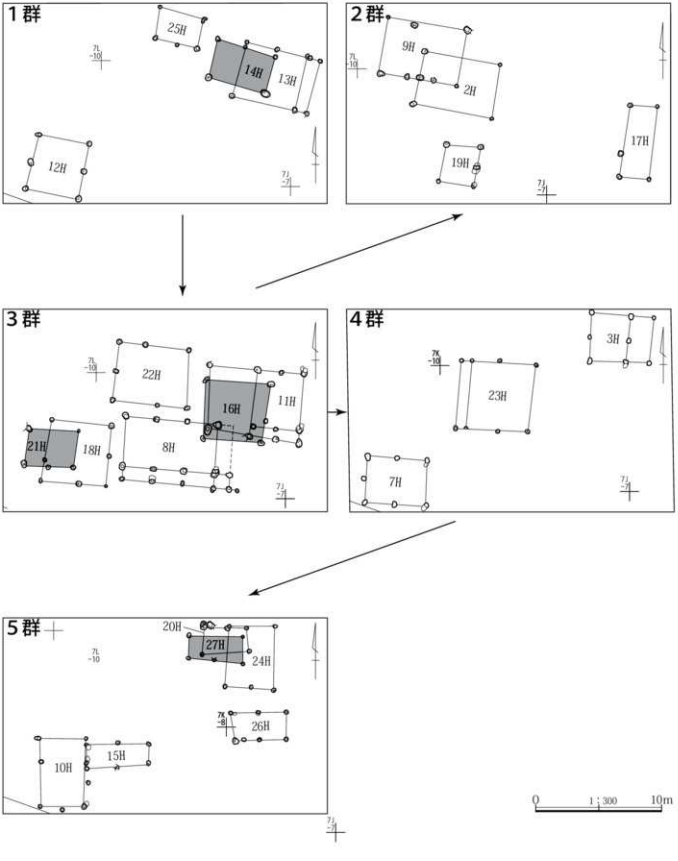
零細な状況は、面積で更に明らかとなる。２類１・４群では下屋により、26㎡を超える規模を保っている。同５群では、わずかに20㎡に達していない。いずれにしろ、主屋が30㎡を超えない屋敷は、かなり零細と見なさざるを得ない。以上を考慮すれば、30㎡を超える２棟が存在する２類３群は、傑出した時期となる。両建物は重複するため、別時期のそれぞれの主屋と見なされる。柱痕の状況から８号掘立柱建物を後出と見ることも可能かもしれない。いずれにしろ、屋敷内建物の変遷では、中期にあたる同３群段階で、建物規模が最盛期を迎えることは、後述する出土遺物の状況と合致している。

桁行平均柱間は、桁行２間以下が多い状況のため、７棟のみのデータとなり、分析上良好ではない。ただし、２類３群の８号掘立柱建物は、やはり傑出した存在であり、約2.44m・8.3尺となっている。他が１例を除き、約5.8～6.3尺である点と対照的である。８号掘立柱建物は、規格性においても整然としている。他の建物が比較的歪みの多い状況とも対照的である。つまり、８号掘立柱建物は、屋敷内で特別な存在であり、建物の施工主体が違っていることも考慮されるべきであろう。その要因は不明とせざるを得ず、ここでは問題提起にとどめる。

③その他の遺構

屋敷内では土坑の配置に傾向があり、形態的な傾向は本文中で詳述したとおりである。ただし、分類はできたが、機能までは推測することはできなかった。土坑は建物内部に関係するものを除けば、およそ隣接して存在することが判明する。集中する部分は、南西付近となるが、建物についても零細なものが多く、附属屋に伴うという想像も可能である。２類４群の７号掘立柱建物では、大規模で浅い10号土坑が内部施設として存在し、むしろ覆屋状となっている。23号掘立柱建物に対する附属屋と考えられ、機能としてはやや特殊な観がある。

井戸は周辺も含め３基が検出され、２基は北辺である17号溝の外側に位置する。屋敷の範囲を、溝の内部と考えた場合、区画された外部となるため、通例では関連が疑わしくなる。しかし、本屋敷の場合、区画意識がややルーズな面があり、東辺の北半部および西辺のほとんどが区画されていない。痕跡の残らない生け垣等で囲って



第167図　１区２類建物変遷

いた可能性は残るが、やはり開放的な面は残る。したがって、井戸も自由に出入り可能な外部にあることで、一体として使われていたものと考えられる。

課題となるのは、火葬跡と土壙墓の存在である。屋敷の縁辺および隣接する外部にあるため、屋敷を意識した配置とも考えられる。出土遺物では２区１号墓で在地系土器皿が出土しており、14世紀半ば過ぎと比定される。１号屋敷の最盛期は２類３群であり、14世紀末から15世紀前半頃と考えられるため、土壙墓や火葬跡はその前段階で、屋敷としては未発達な状況下であった可能性も考慮されよう。

④総括

１号屋敷は、遺構の分布や区画溝の配置から、南北約39m、東西約25mの規模と復元され、屋敷としては　町規模と見なされる。機能した時期は、後述する出土遺物の分析から、14世紀半ばから15世紀半ば頃と考えられる。中世屋敷としては、比較的古段階にあるため、区画意識も弱く、区画溝が半端となったものと結論づけられる。内部の建物は比較的零細であり、最盛期で漸く面積40㎡をわずかに超える程度である。ただし、この段階の８号掘立柱建物は、建物の建築における施工状況が他より傑出しており、何らかの要因が想定される。出土遺物においても、貿易陶磁は少ないが、搬入品である吉瀬戸陶器は多くあり、居住者がある程度の財力を持つことは容易に推測できる。なお、屋敷の東西南辺を区画する１区22号溝では、人為的な埋め戻し状況が見られ、屋敷の廃絶を示している可能性が高い。出土遺物は14世紀後半から15世紀後半までと幅があるが、15世紀後半は１点であり、埋め戻しも数度に及ぶことから、廃絶期と一致しない可能性も残る。廃絶に際して、埋め戻しを行う背景には、再整備による土地利用が想定され、屋敷も周辺へ移転したことも考えられる。隣接する綿貫伊勢遺跡や綿貫原北遺跡でも同時期からやや後代の中世屋敷が発見されていることから、その報告における課題となろう。

（２）墓域とその他の区画遺構

①墓域

１区１号屋敷の周辺で火葬跡３基と土壙墓１基が見つかっているが、１区の東部から２区の東部にかけて、火葬跡がやや多く分布している。時期を示すような遺物がないが、墓域を区画あるいは規制する位置関係に２区２・４号溝が存在する。南北約23mで東西規模は不明である。内部の遺構は散漫で同時期のものかも判然としない。火葬跡は区画された中央でなく、内外の縁辺部に位置していることを考えると、区画内部に何らかの宗教施設があり、これに影響されて遺構が展開した可能性も指摘できる。２区２・４号溝では14世紀後半から15世紀前半の遺物が出土しており、１区１号屋敷と同時期である。土壙墓は１基にすぎず、大半は火葬跡となるが、屋敷に付帯する葬送空間と考えることができる。

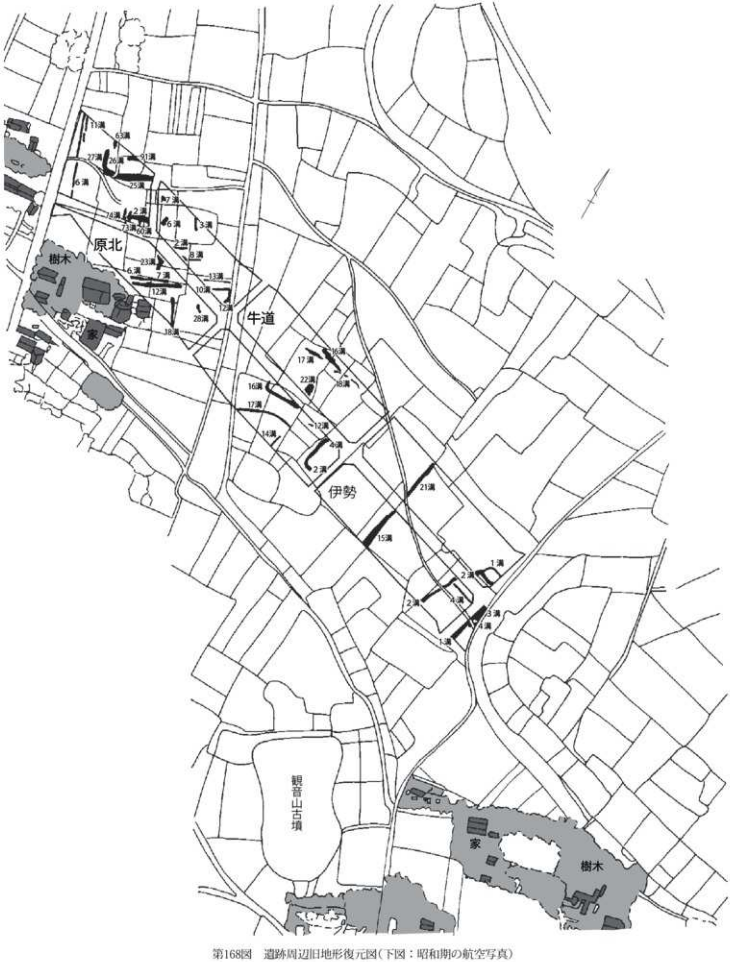
②その他の区画遺構

１区では１号屋敷の北辺となる16号溝と重複する位置に18号溝があり、形態から区画溝と評価できる。遺物の出土数は少なく、破片であり混入であろうが、14世紀後半頃である。区画の全体像は不明であり、内部遺構についても不明な点が多いが、中世に位置づけられる４・６号井戸が伴う可能性も考えられる。６号井戸は12～13世紀に比定されており、１号屋敷よりも古い。４号井戸からも伝世する遺物ではあるが、同時期の遺物が出土している。こうした状況を考慮すると、１号屋敷に先行する区画遺構が、東に隣接して存在していた可能性を認めることができよう。

③区画と地割

中世屋敷や墓域については、遺構範囲が広域に及ぶため、調査区域だけでは不明な点が多くなる。当遺跡では幸いほ場整備以前の航空写真があり、この地割を都市計画図と合成することで、第168図のとおり、やや詳細な地割図を復元することができた。

１区１号屋敷は南北に長い長方形であるが、これにほぼ一致する形で、地割が存在することが判明する。また、２区２・４号溝も地割境界にほぼ一致するが、走向方位が若干異なるようにも見える。なお、２区17号溝は1区１号屋敷とほぼ同時期でありながら、区画との関係が不明瞭であったが、蛇行する形態を採ることで、西方で地割方位が西に傾く形態の変化に対して、良く整合している状況がわかる。綿貫原北遺跡や綿貫伊勢遺跡の状況は各遺跡の報告に譲るが、特に前者は地割と良く整合することが判明する。また、１区26号溝および、同一となる２区20・21号溝は、中世まで遡る可能性を持つ道路が想定され、地割においても屋敷群を規定している状況を読



第168図　遺跡周辺旧地形復元図（下図：昭和期の航空写真）

み取ることができる。

（３）出土遺物

在地系土器は比較的多く出土している。しかし、皿は少なく、井戸や墓を除けば、溝から出土した小片である。６号井戸１は、底部器壁が厚く器高の低いロクロ成形である。13世紀かと比定される。共伴する２の尾張陶器片口鉢は常滑Ⅰ類(12世紀前半)とやや古いが、使用時期と埋没時期に差が生じやすい井戸であることも考慮すれば、ほぼ12 ～ 13世紀の遺構に比定される。中国陶磁器を除けば、他にこの時期の遺物はなく、１期と位置づけられる。（第169図）

次いで、２区４号墓では、ほぼ完形の皿４枚が出土している。小型２枚と中型２枚であり、器形は異なる。小型のものは、ともに底部中央の器壁が厚く、口縁部内面は斜めに、外面はやや内湾する。口唇部は尖り気味である。中型のものは、底部器厚に差があるが個体差の範囲であり、体部は外反して口縁部でやや内湾している。14世紀前半～中頃に比定されるが、洪武通寶(初鋳1368年)と共伴関係にある。内耳鍋の出現と時期差があり、２期と位置づけられる。

１区３号井戸２については、共伴関係から５期に含めたが、14世紀後半に比定されており、遺構の性格上混在もやむをえないだろう。底部中央も器壁は厚く、体部は緩く内湾し、口唇部は直立し尖り気味である。皿については、以上の３段階が認められる。

内耳鍋は比較的多く出土している。３期としたものは、いずれも１区16号溝から出土している。共伴して古瀬戸直縁大皿口縁部片(14世紀後半)、瀬戸陶器片口鉢(14世紀代)が出土しており、溝という性格にしては時期的なまとまりがある。大きさは大小に分かれる。ともに還元炎焼成であり、器壁は厚く口縁部が短く内湾する。横撫整形が顕著である。14世紀後半頃に比定され、３期に位置づけられる。

次いで４期としたものも、大小２種に分かれる。14世紀末～ 15世紀前半に比定される。遺構深度が浅かったためか、大型破片も遺構外となったのは残念である。１区１号集石遺構も掘り込みのないもので、１の内耳鍋も確認面に露呈していた。他の遺物もこうした状況が推測される。１区１号集石遺構（１）・遺構外出土遺物(28)は、いずれも器壁が厚く、口縁部は３期より長くなりやや内湾する。内面の稜線はやや不明瞭で、丸底と推定される。また、小型の遺構外出土遺物(27)は、器壁がやや薄くなり、口縁部もやや長いため、一段階新しい可能性もある。

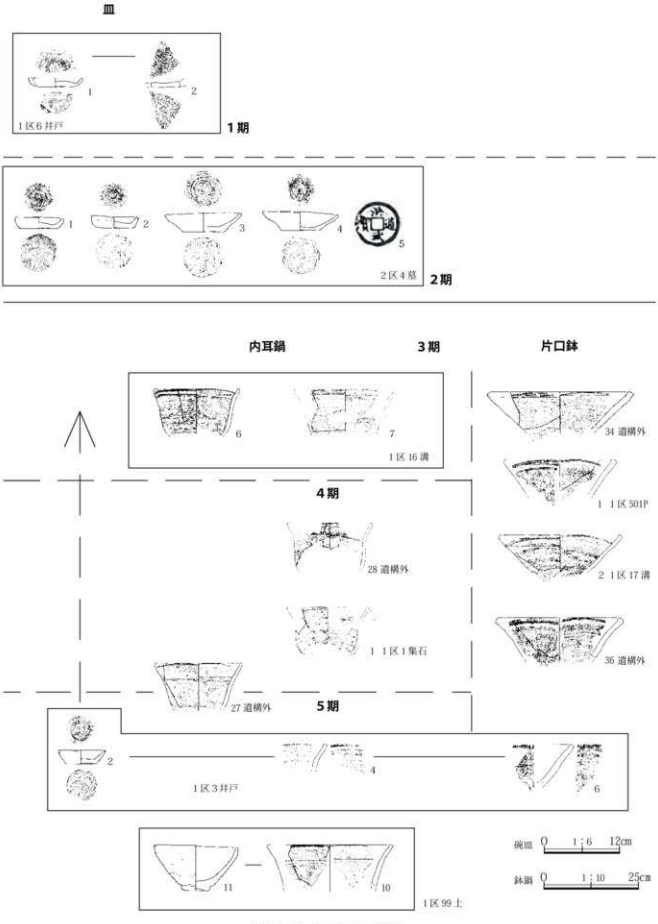
５期としたものは、大きく復元されるものはない。しかし、１区99号土坑10の鍋は、完形の古瀬戸天目茶碗(後皿期:15世紀前半)と共伴関係にある。器壁はやはり厚く、口縁部は長くゆるく内湾する。口縁部内面下部の段差は非常に小さい。４期とわずかな変化であるが、15世紀中頃まで下がる可能性がある。以上、内耳鍋については、器壁の厚いものが多く、当遺跡の時期を示唆する。なお、遺構外出土遺物では、器壁の薄い破片もあり、後代のものも見られる。何らかの遺構は若干継続するのであろうが、具体像はうかがえない。

片口鉢についても、大きく復元されるものは、やや遺構外が多い。全体に器形変化はあまりなく、時期差をとらえにくい。比定年代では14世紀後半頃から15世紀前半頃となるが、当遺跡では３期～５期にあたるとしておく。１区３号井戸６も共伴関係として５期に含めたが、特徴的には他と変わらず、後代となる根拠はない。

遺構外出土遺物(34)は、還元炎焼成で器高はやや厚く、口縁部は直線的で端部に向かい肥厚する。口唇部内面は明瞭に突出する。１区501号ピット（１）は、器壁が厚く口唇部の特徴も遺構外出土遺物(34)に一致するが、体部は外反する。１区17号溝（２）は、器壁がやや薄く体部は直線的に開く。口唇部内面は上方に小さく突出する。遺構外出土遺物(36)は15世紀前半頃に比定される。器壁はやや厚く体部中位で外反する。口縁端部は内外に丸く肥厚する。なお、口縁部破片はないが、１区58号土坑ではスリ目を持つ15世紀後半のすり鉢もあり、内耳鍋同様に遺構面でも若干の継続が認められる。

この他、１区68号土坑(井戸状)からは３の在地系土器壺の口縁部が出土しており、時期は中世で絞り込めないが、１区１号屋敷の北側に隣接し、周辺に火葬跡も２基あるなど、骨蔵器としての利用を推測させる遺物である。

以上、在地系土器から見て、屋敷遺構の最盛期は３・４期であり、年代では14世紀後半から15世紀前半頃にあてられる。鍋・鉢類は比較的多く出土するが、溝や遺構外出土遺物が多い。屋敷の年代を示すにしても、内部の遺構と直接的に結びつき、その機能をうかがえる例は少



第169図　在地系土器整理図

なかった。特異な状況として、３・４期では皿の出土数が極めて少なかった。また、皿の場合、古い例が目立つが、むしろ内耳鍋出現以前と考えれば、当然の結果である。ただし、片口鉢に前段階の出土例がないことを考慮すれば、14世紀前半以前は屋敷としては未発達と見なさざるをえないだろう。

搬入製品では、第91表に示したとおり、瀬戸美濃系陶磁器が調査面積に比して、多く出土している。天目茶碗が２点出土するが瓶類はなく、食膳具が多い。年代も後Ⅰ～Ⅲ期に集中し、14世紀後半から15世紀前半に比定される。また、後Ⅳ古期も１点あり、15世紀中頃となるため、屋敷における在地系土器の状況と一致する。常滑系陶器は掲載したものも少なく、出土量も少ない。中国製陶磁器は、12世紀後半から13世紀前半に比定される青磁碗１点のみで、ほかに可能性のある白磁皿１点がある。中世屋敷では通例出土する蓮弁文の青磁が見られないのは、やや異例な印象を受ける。

石製品、石造物の出土は、やや少ない。中世屋敷で通例見られる茶臼、粉挽臼もない。注目されるものとしては、１区３号井戸出土の石製火舎がある。また、板碑は小片であり、五輪塔は出土していない状況から、火葬跡は多いが、埋葬地は別に設置されたと考えられよう。

4　近世

近世の遺構は少なく、明確なものは１区26号溝と、同一となる２区20～23号溝である。後者の北壁では、浅間Ａ軽石を天地返しした土層が確認でき、天明３年の浅間山噴火による降下軽石に対して、耕地の復旧が行われたことが判明する。また、これにより、２区20・21号溝は浅間Ａ軽石降下以前であることが確定し、出土遺物から中世から継続していた可能性も高い。この溝の上層は、埋没後浅間Ａ軽石降下までに水田化されていた可能性が高い。

当遺跡では、ほかに近世の遺物を含む土坑や溝などがなく、不明な点が多いが、一部水田を含む耕作地が広がっていたものと想像される。

第 91 表　瀬戸美濃系陶磁器総括表

時期	古瀬戸後期					小計	合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新		
天目			1			1	2
			1			1	
碗類	1		2			3	4
			1			1	
皿類	2					2	2
盤類		2		1		3	3
折皿							
擂鉢		1（尾張型）				1	1
壺・瓶類							
神仏具							
その他							
合　計	3		3	1		12	
	2						
		1					
	2						

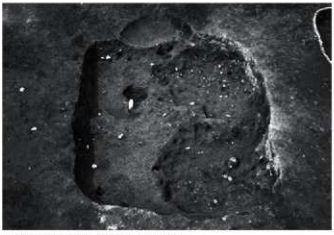
写 真 図 版

遺跡全景航空写真

1区1号住居全景(北東から)

1区1号住居掘り方全景(北東から)

1区2号住居全景(南東から)



1区2号住居掘り方全景(北東から)

1区3号住居全景(南東から)

1区3号住居カマド全景(南東から)

1区3号住居貯蔵穴全景(南東から)

1区3号住居遺物出土状況(南東から)

1区3号住居遺物出土状況(北東から)

1区3号住居遺物出土状況(南から)

1区3号住居掘り方全景(南東から)

1区4号住居全景(北東から)

1区4号住居掘り方全景(北東から)

1区4号住居カマド全景(北東から)

1区4号住居貯蔵穴遺物出土状況(北東から)

1区5号住居全景(北から)

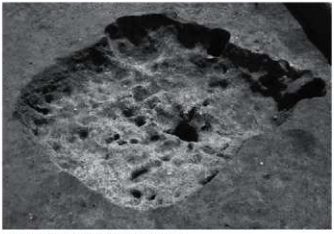
1区5号住居カマド全景(北から)

1区5号住居掘り方全景(北から)

1区6号住居全景(西から)

1区6号住居カマド使用面全景(西から)

1区6号住居掘り方全景(西から)



1区7号住居掘り方全景(北西から)

1区7号住居カマド全景(西から)

1区8号住居全景(西から)

1区8号住居カマド全景(西から)

1区8・13～15号住居掘り方全景(西から)

1区9号住居全景(南西から)

1区9号住居貯蔵穴遺物出土状況(北から)

1区9号住居掘り方全景(南から)

1区10号住居遺物出土状況(南西から)

1区10号住居カマド全景(西から)

1区10号住居掘り方全景(南西から)

1区11号住居掘り方全景(南西から)

1区11号住居遺物出土状況(西から)

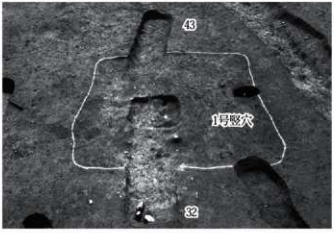
1区11号住居遺物出土状況(北東から)

1区11号住居全景(南西から)

1区14号住居全景(北から)

1区14号住居掘り方全景(北から)

1区1号屋敷全景(上空から)



1区1号竪穴状遺構、32・43号土坑全景(北から)

1区1号掘立柱建物全景(北西から)

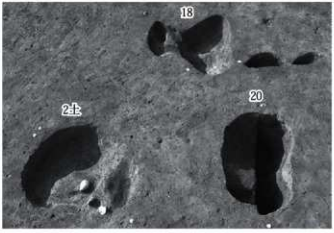
1区2号掘立柱建物全景(西から)

1区3号掘立柱建物全景(西から)

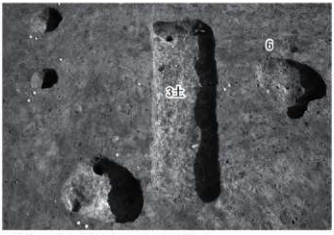
1区4号掘立柱建物全景(西から)

1区5号掘立柱建物全景(南東から)

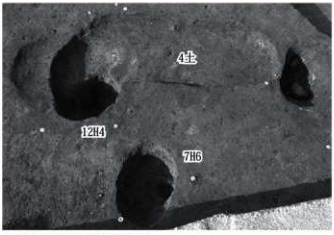
1区1号土坑全景(北から)



1区2号土坑、18・20号ピット全景(南から)

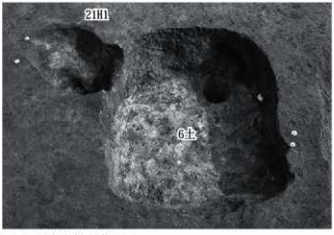


1区3号土坑、6号ピット全景(北から)

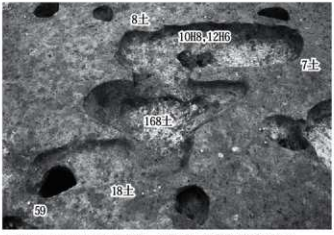


1区4号土坑全景(南西から)

1区5号土坑全景(南から)

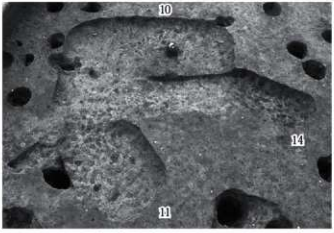


1区6号土坑全景(北から)



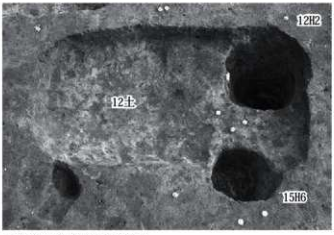
1区7・8・18・168号土坑、59号ピット全景(北東から)

1区9号土坑灰出土状況(北から)

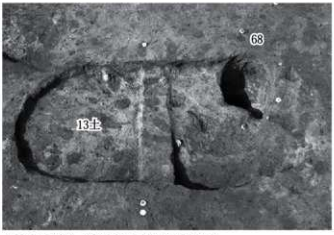


1区10・11・14号土坑全景(東から)

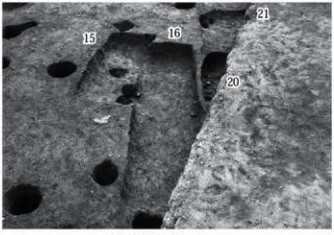
1区11号土坑全景(南西から)



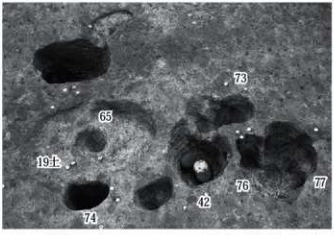
1区12号土坑全景(北東から)



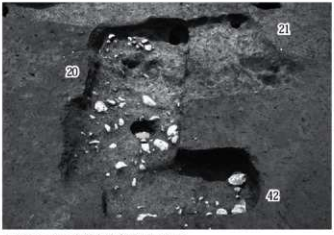
1区13号土坑、68号ピット全景(南西から)



1区15・16・20・21号土坑全景(東から)



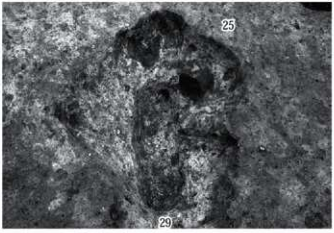
1区19号土坑、42・65・73・74・76・77号ピット全景(西から)



1区20・21・42号土坑全景(北から)

1区23号土坑全景(南から)

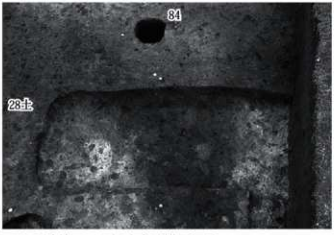
1区24号土坑全景(南から)



1区25・29号土坑全景(南から)

1区26号土坑全景(北西から)

1区27号土坑全景(東から)



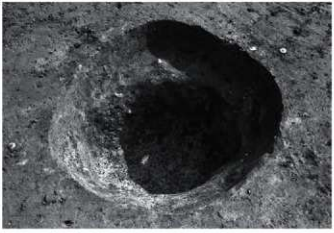
1区28号土坑、84号ピット全景(北西から)

1区30号土坑全景(東から)

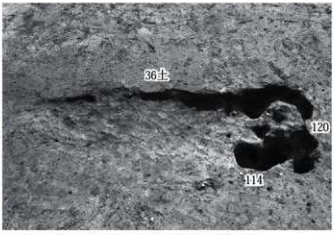
1区31号土坑全景(北東から)

1区33号土坑全景(東から)

1区34号土坑全景(北東から)



1区35号土坑全景(北から)



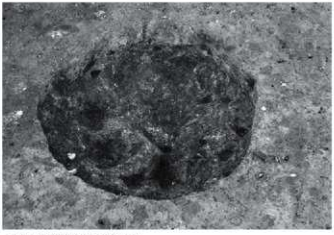
1区36号土坑、114・120号ピット全景(北東から)

1区37号土坑全景(東から)

1区38号土坑全景(南から)

1区39号土坑全景(北東から)

1区44号土坑全景(北から)

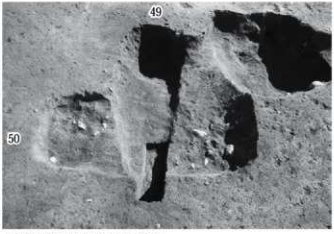


1区45号土坑全景(北から)

1区46号土坑全景(北から)

1区47号土坑全景(南から)

1区48号土坑全景(北から)



1区49・50号土坑全景(北から)

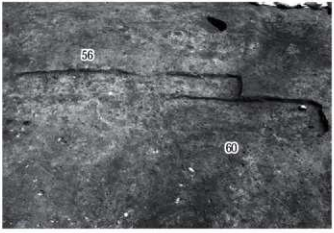
1区51号土坑セクション(南から)

1区52号土坑全景(南西から)

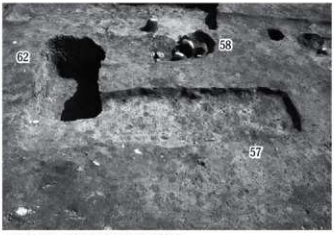
1区53号土坑全景(東から)

1区54号土坑全景(南東から)

1区55号土坑全景(西から)



1区56・60号土坑全景(西から)



1区57・58・62号土坑全景(西から)

1区58号土坑全景(西から)

1区59号土坑全景(西から)

1区61号土坑全景(西から)

1区62号土坑全景(西から)

1区63号土坑全景(北から)

1区64号土坑全景(西から)

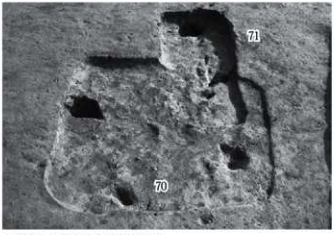
1区65号土坑全景(北から)

1区66号土坑全景(北西から)

1区67号土坑全景(東から)

1区68号土坑全景(南東から)

1区69号土坑セクション(南から)



1区70・71号土坑全景(北から)

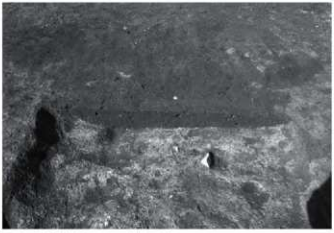
1区72号土坑全景(南から)

1区73号土坑全景(東から)

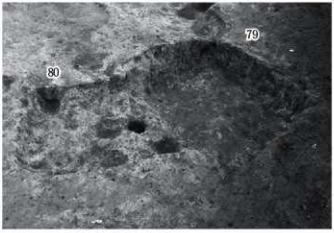
1区74号土坑全景(南から)

1区75号土坑全景(西から)

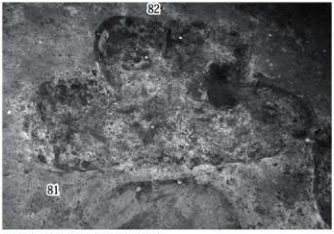
1区76号土坑全景(南から)



1区78号土坑セクション(南から)

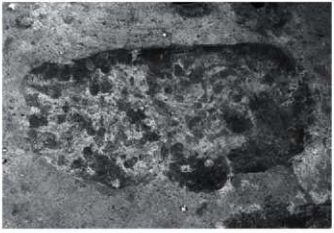


1区79・80号土坑全景(北西から)



1区81・82号土坑全景(北から)

1区83号土坑全景(南から)

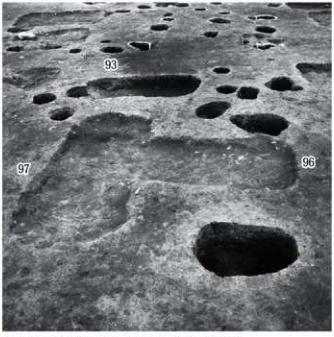


1区84号土坑全景(北から)

1区85号土坑全景(東から)

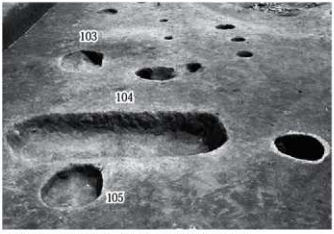
1区86号土坑全景(東から)

1区87号土坑全景(南から)



1区93・96・97号土坑、ピット群全景(西から)

1区99号土坑全景(南から)

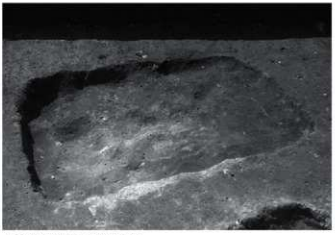


1区103～105号土坑、ピット群全景(北西から)

1区90号土坑全景(東から)

1区91号土坑セクション(南から)

1区92号土坑全景(北西から)



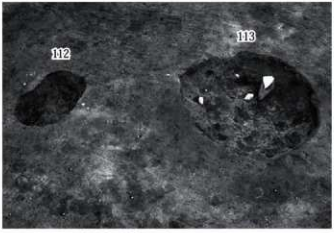
1区106号土坑全景(東から)

1区107号土坑全景(北東から)

1区108号土坑全景(南西から)

1区109号土坑全景(南東から)

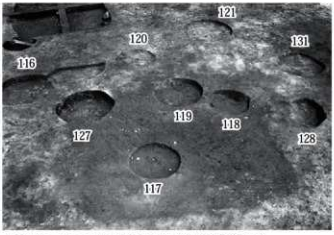
1区110号土坑全景(南から)



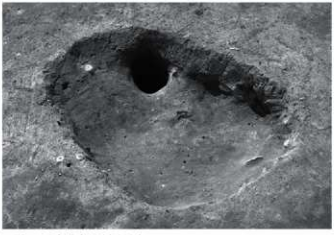
1区112・113号土坑全景(南から)

1区114号土坑全景(東から)

1区115号土坑全景(南から)



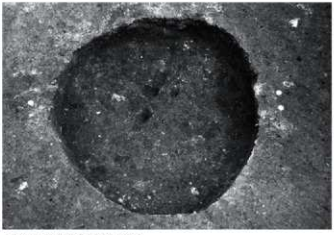
1区116～121・127・128・131号土坑全景(南から)



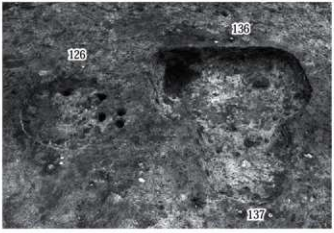
1区122号土坑全景(東から)

1区123号土坑全景(南東から)

1区124号土坑全景(南から)



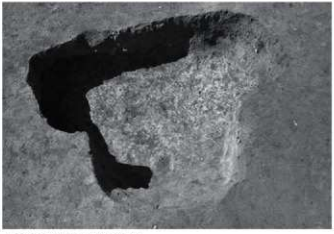
1区125号土坑全景(南から)



1区126・136・137号土坑全景(東から)

1区129号土坑全景(東から)

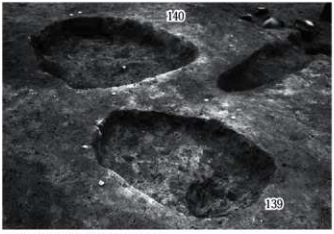
1区132号土坑全景(東から)


1区133号土坑全景(北から)

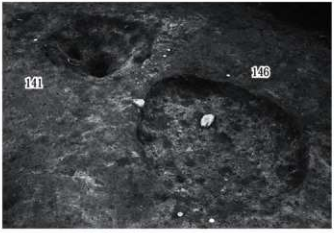
1区134号土坑全景(北東から)

1区135号土坑全景(東から)

1区138号土坑全景(北東から)



1区139・140号土坑全景(西から)



1区141・146号土坑全景(南から)

1区142号土坑全景(北から)

1区143号土坑全景(南西から)

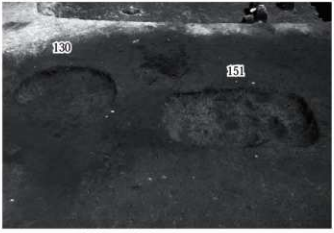
1区145号土坑全景(北から)

1区147号土坑全景(北東から)

1区148号土坑全景(北東から)

1区149号土坑全景(西から)

1区150号土坑全景(北東から)



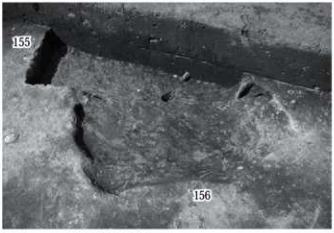
1区130・151号土坑全景(南東から)

1区153号土坑全景(南西から)

1区152号土坑全景(東から)

1区152号土坑骨片出土状況(西から)

1区154号土坑全景(北東から)



1区155・156号土坑全景(南から)

1区157号土坑全景(南から)

1区158号土坑全景(南から)

1区160号土坑遺物出土状況(東から)

1区161号土坑全景(北東から)

1区162号土坑全景(北から)

1区165・166号(3号住居のカマド痕跡か)土坑全景(南西から)

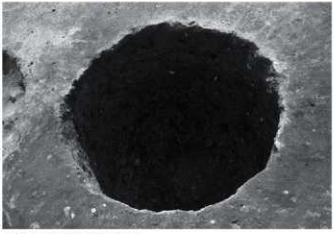
1区168号土坑(旧1号火葬墓)全景(北から)

1区168号土坑(旧1号火葬墓)骨片出土状況(東から)

1区1号井戸礫出土状況(北から)

1区3号井戸・1号集石礫出土状況(南西から)

1区3号井戸全景(東から)



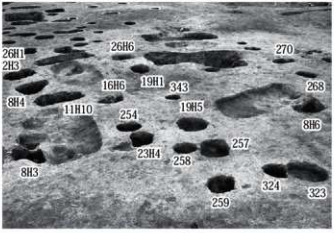
1区4号井戸全景(東から)

1区5号井戸礫出土状況(北西から)

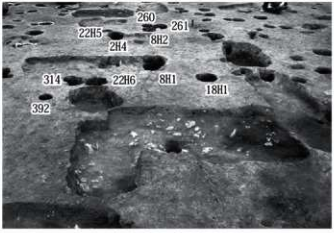
1区6号井戸礫出土状況(東から)

1区5号井戸全景(北から)

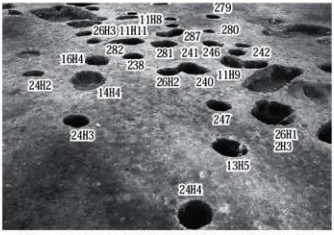
1区6号井戸全景(西から)



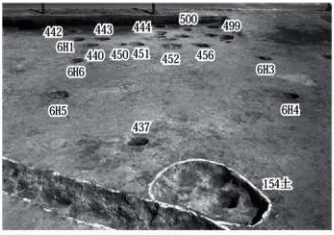
1区2・8・11・16・19・23・26号掘立ピット全景(西から)



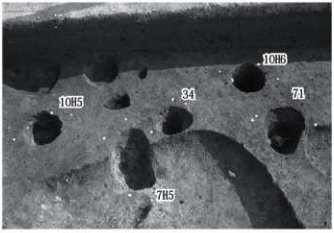
1区2・8・18・22号掘立ピット全景(西から)



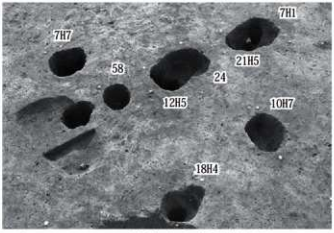
1区2・11・13・14・16・24・26号掘立ピット全景(北西から)



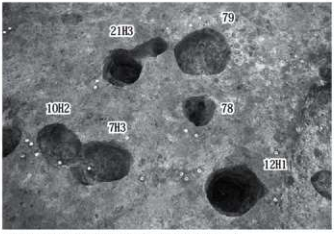
1区6号掘立ピット全景(北西から)



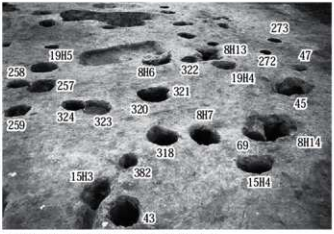
1区7・10号掘立ピット全景(北東から)



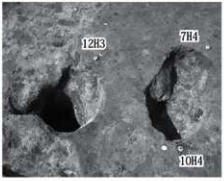
1区7・10・12・18・21号掘立ピット全景(東から)



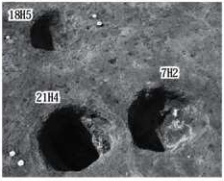
1区7・10・12・21号掘立ピット全景(東から)



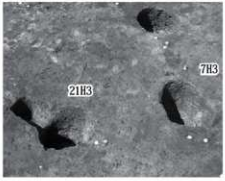
1区8・15・19号掘立ピット全景(西から)



1区7・10・12号掘立ピット全景(南西から)



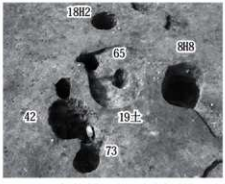
1区7・18・21号掘立ピット全景(南から)



1区7・21号掘立ピット全景(南から)

1区8号掘立ピット9全景(西から)

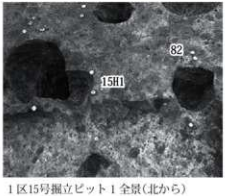
1区8号掘立ピット15全景(北から)



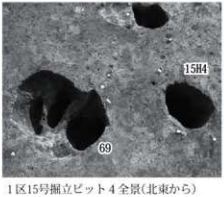
1区8・18号掘立ピット、19号土坑全景(南から)

1区8・19号掘立ピット全景(北から)

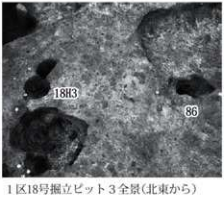
1区10号掘立ピット3全景(南東から)



1区15号掘立ピット1全景(北から)



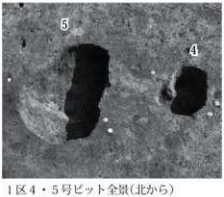
1区15号掘立ピット4全景(北東から)



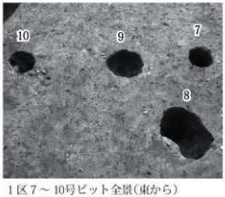
1区18号掘立ピット3全景(北東から)

1区18号掘立ピット6全景(南から)

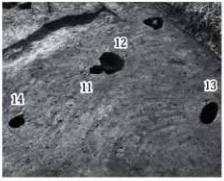
1区1～3号ピット全景(南から)



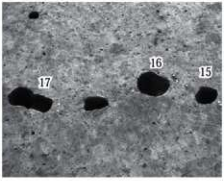
1区4・5号ピット全景(北から)



1区7～10号ピット全景(東から)



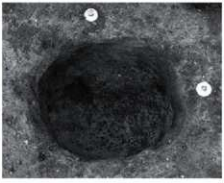
1区11 ～ 14号ピット全景(南東から)

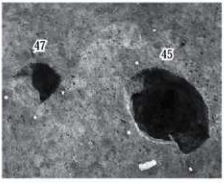


1区15 ～ 17号ピット全景(東から)

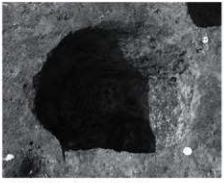
1区19号ピット全景(北から)

1区23号ピット全景(北東から)


1区43号ピット全景(南から)



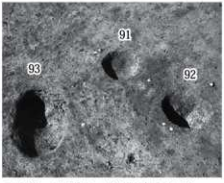
1区45・47号ピット全景(北東から)


1区48号ピット全景(南から)

1区60号ピット全景(北東から)

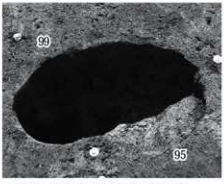
1区88号ピット全景(北から)

1区89号ピット全景(北西から)

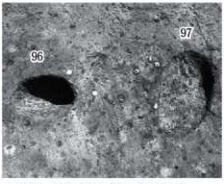


1区91 ～ 93号ピット全景(南東から)

1区94号ピット全景(北から)

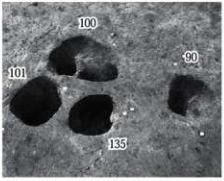


1区95・99号ピット全景(北東から)

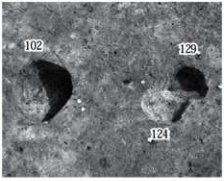


1区96・97号ピット全景(北西から)

1区98号ピット全景(南から)



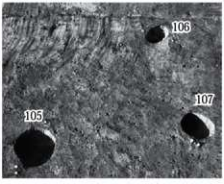
1区90・100・101・135号ピット全景(東から)



1区102・124・129号ピット全景(北西から)

1区103号ピット全景(東から)

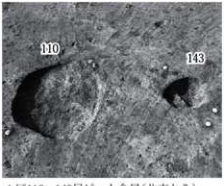
1区104号ピット全景(東から)



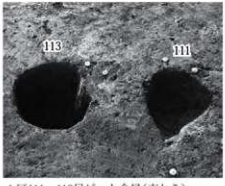
1区105～107号ピット全景(南から)

1区108号ピット全景(北東から)

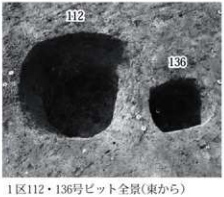
1区109号ピット全景(北東から)



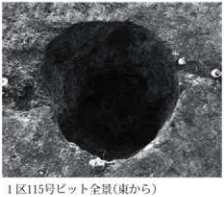
1区110・143号ピット全景(北東から)

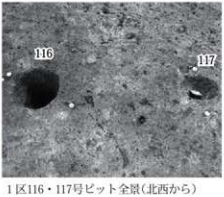


1区111・113号ピット全景(東から)



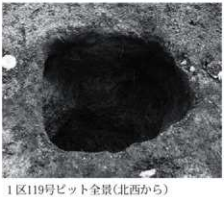
1区112・136号ピット全景(東から)


1区115号ピット全景(東から)

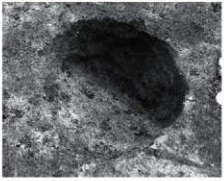


1区116・117号ピット全景(北西から)

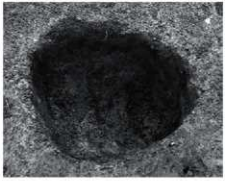
1区118号ピット全景(北から)


1区119号ピット全景(北西から)

1区121号ピット全景(東から)

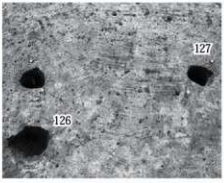


1区122号ピット全景(北から)



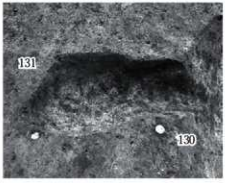
1区123号ピット全景(北東から)

1区125号ピット全景(東から)

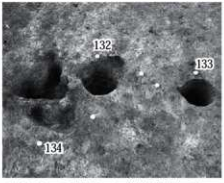


1区126・127号ピット全景(北東から)

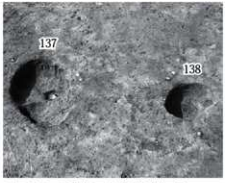
1区128号ピット全景(北西から)



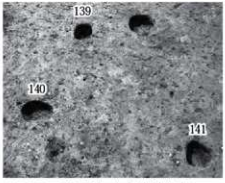
1区130・131号ピット全景(北から)



1区132～134号ピット全景(南東から)



1区137・138号ピット全景(東から)



1区139～141号ピット全景(北から)

1区142号ピット全景(西から)

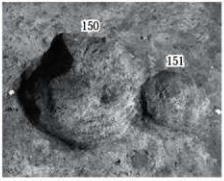
1区145号ピット全景(南西から)

1区146号ピット全景(東から)

1区147号ピット全景(北から)

1区148号ピット全景(北西から)

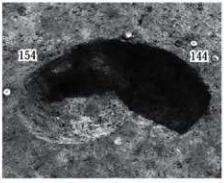
1区149号ピット全景(北西から)



1区150・151号ピット全景(東から)

1区152号ピット全景(北西から)

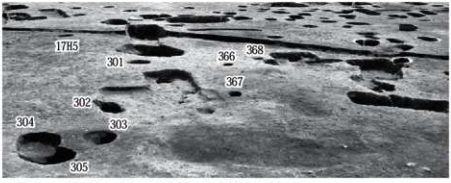
1区153号ピット全景(南東から)



1区144・154号ピット全景(西から)

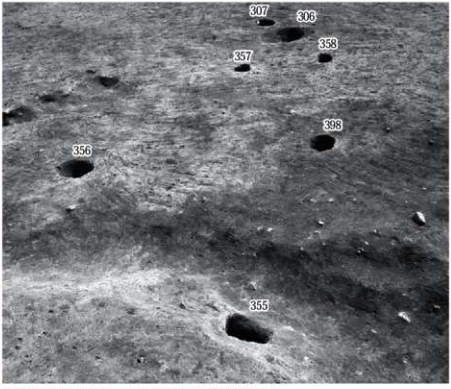
1区155号ピット全景(東から)

1区338号ピット全景(西から)



1区301 ～ 305・361・366 ～ 368号ピット全景(北から)

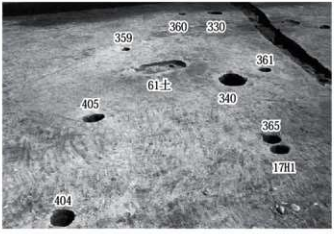
1区341号ピット全景(西から)



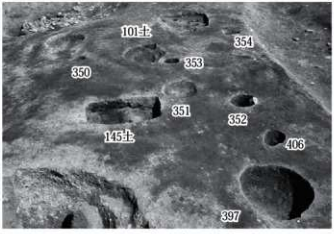
1区306・307・355 ～ 358・398号ピット全景(北から)

1区477号ピット全景(南東から)

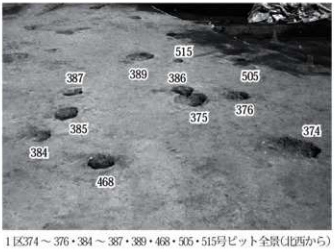
1区501号ピット遺物出土状況(北東から)



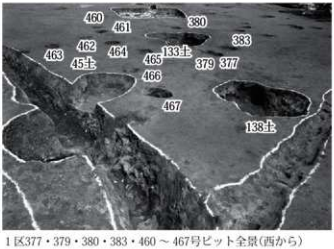
1区330・340・359～361・365・404・405号ピット全景(北西から)



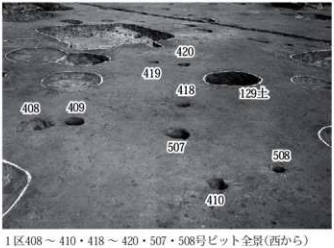
1区350～354・397・406号ピット全景(北西から)



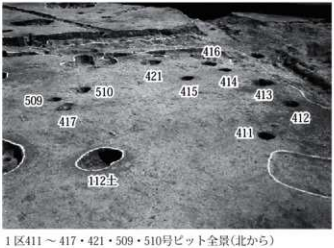
1区374～376・384～387・389・468・505・515号ピット全景(北西から)



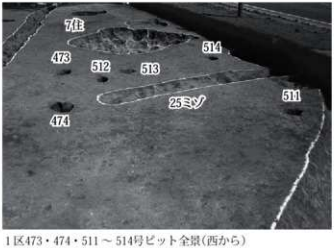
1区377・379・380・383・460～467号ピット全景(西から)



1区408～410・418～420・507・508号ピット全景(西から)



1区411～417・421・509・510号ピット全景(北から)



1区473・474・511～514号ピット全景(西から)

1区1号溝全景(北西から)

1区1号溝全景(南東から)

1区2号溝全景(北から)

1区3号溝全景(北から)

1区4号溝遺物出土状況(南東から)

1区4号溝遺物出土状況(南東から)

1区4号溝遺物出土状況(北東から)

1区4号溝遺物出土状況(南東から)

1区4号溝遺物出土状況(北東から)

1区4号溝遺物出土状況(北東から)

1区4号溝遺物出土状況(南東から)

1区5号溝全景(北から)

1区6号溝全景(南東から)

1区7号溝全景(西から)

1区９号溝全景(北西から)

1区13号溝全景(南から)

1区10～12号溝全景(南西から)

1区26号溝全景(北東から)

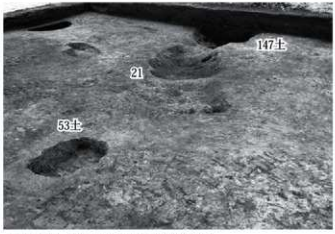
1区19号溝全景(北西から)

1区16号溝全景(東から)

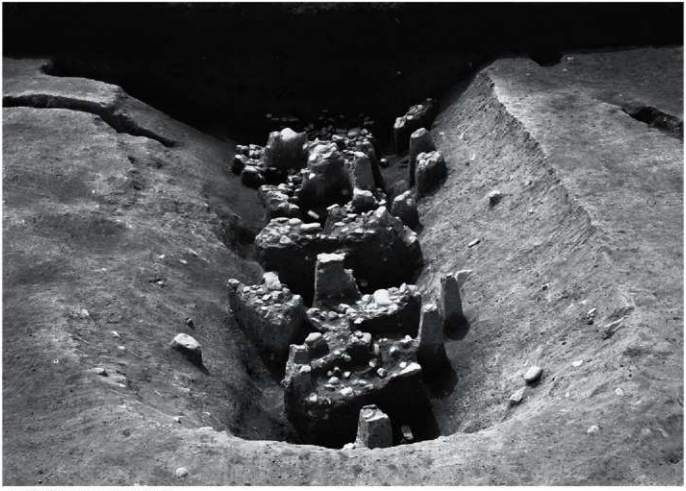
1区17号溝全景(東から)

1区18号溝全景(西から)

1区20号溝全景(北西から)



1区21号溝、53・147号土坑全景(北から)



1区22号溝遺物出土状況(北から)

1区22号溝全景(北から)

1区23号溝、278号ピット全景(北から)

1区24号溝全景(西から)

1区25号溝全景(北から)

2区全景(上空から)

2区1号住居全景(南東から)

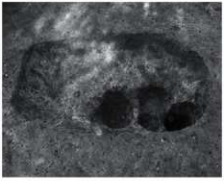
2区1号住居掘方全景(南から)

2区1号住居掘方東壁セクション(西から)

2区1号竪穴状遺構(東から)

2区1号竪穴状遺構セクション(南から)

2区1号土坑全景(南から)


2区2号土坑全景(東から)

2区4号土坑全景(西から)

2区1号土坑セクション(南から)

2区2号土坑セクション(東から)

2区4号土坑セクション(東から)

2区5号土坑全景(東から)

2区6号土坑全景(東から)

2区7号土坑全景(南から)

2区5号土坑セクション(東から)

2区6号土坑セクション(東から)

2区7号土坑セクション(南から)

2区8号土坑全景(東から)

2区8号土坑セクション(東から)

2区9・15号土坑全景(東から)

2区９・15号土坑セクション(東から)

2区10号土坑全景(南から)

2区11号土坑全景(東から)

2区12号土坑全景(南から)

2区10号土坑セクション(南から)

2区11号土坑セクション(東から)

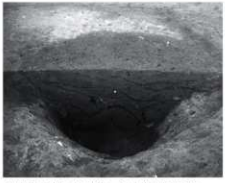
2区12号土坑セクション(南から)

2区13号土坑全景(東から)

2区13号土坑セクション(東から)

2区１号井戸セクション上位(東から)

2区２号井戸全景(東から)


2区３号井戸セクション上位(南から)

2区１号井戸セクション(南から)

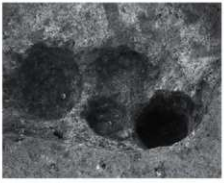
2区２号井戸セクション(南から)

2区３号井戸セクション(南から)

2区２号ピットセクション(南から)

2区３号ピットセクション(南から)

2区４号ピットセクション(南から)


2区８～10号ピット全景(東から)

2区11号ピットセクション(南から)

2区13号ピットセクション(東から)

2区４号墓全景(東から)

2区４号墓セクション(東から)

2区４号墓遺物出土状態(東から)

2区１号火葬跡遺物出土状態(東から)

2区２号火葬跡遺物出土状態(東から)

2区３号火葬跡全景(西から)

2区１号火葬跡全景(東から)

2区１号炭化物集中遺構セクション(南から)

2区２号炭化物集中遺構セクション(南から)

2区１号溝全景(南東から)

2区１号溝・６号土坑セクション(東から)

2区２号溝全景(南から)

2区２号溝セクション(西から)

2区３号溝全景(南から)

2区3・4号溝セクション(南から)

2区5号溝全景(南から)

2区6号溝全景(西から)

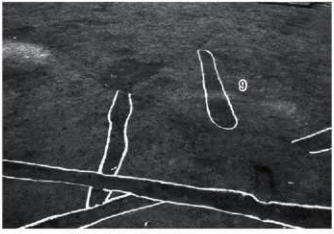
2区5号溝南壁セクション(北から)

2区6号溝南壁セクション(北から)

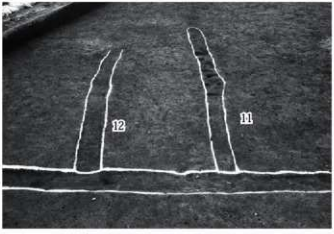
2区7号溝全景(北から)

2区8号溝全景(北から)

2区7号溝北壁セクション(南から)



2区9・10号溝全景(西から)



2区11・12号溝全景(西から)

2区13号溝全景(北から)

2区14号溝全景(北から)

2区13・17号溝セクション(西から)

2区15号溝全景(東から)

2区16号溝全景(東から)

2区16号溝セクション(南から)

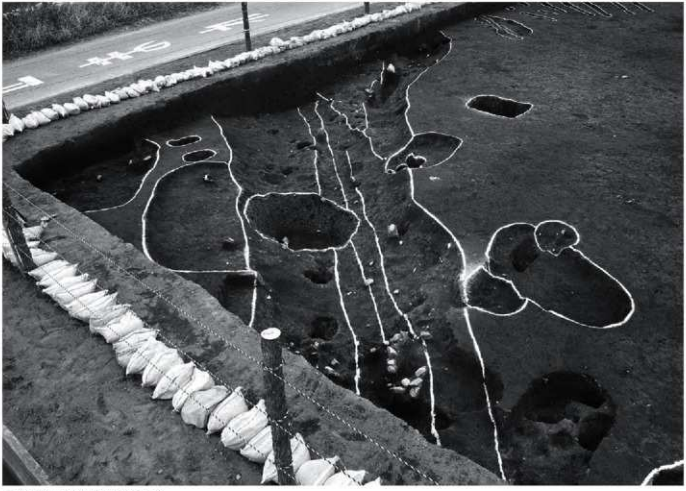
2区16号溝全景(西から)

2区16号溝セクション(西から)

2区17号溝全景(東から)

2区18号溝全景(南から)

2区19号溝東壁セクション(西から)



2区19A～D号溝全景(北から)

2区19号溝北壁セクション(南から)

2区20号溝北壁セクション(南から)

2区21～23号溝北壁セクション(南から)

2区24号溝西壁セクション(東から)

2区20～23号溝全景(北から)

2区1・2号畠全景(北から)

2区1号道路全景(北から)

2区3号畠全景(北から)

2区1号道路南壁セクション(北から)

1区2号住居出土遺物

2

3

5

1区3号住居出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

13

15

14

PL.52

1区3号住居出土遺物

1区4号住居出土遺物

2

7

1区5号住出土遺物

3

1区6号住居出土遺物

1

2

1区7号住居出土遺物

1

3

4

5

1区8号住居出土遺物

5

6

8

10

11

13

14

15

17

1区8号住居出土遺物

22

26

27

1区13号住居出土遺物

1

3

2

5

1区14号住居出土遺物

1

1区15号住居出土遺物

2

3

7

4

5

6

9

1区 15号住居出土遺物

8

10

11

1区 10号住居出土遺物

1

2

1区 9号住居出土遺物

1

3

1区 11号住居出土遺物

6

9

12

13

14

PL.56

1区土坑出土遺物

160 土7

1区井戸出土遺物

5井戸2

5井戸3

5井戸5

5井戸6

5井戸13

5井戸10

5井戸14

5井戸7

1区屋敷外ピット出土遺物

505 ピット4

1区ピット出土遺物

501 ピット1

1区4号溝出土遺物

1

5

10

7

8

1区4号溝出土遺物

11

12

14

13

17

18

21

23

22

24

26

27

PL.58

1区4号溝出土遺物

28

29

30

31

33

34

36

37

38

1区4号溝出土遺物

39

40

41

43

46

47

48

1区11号溝出土遺物

6

1号掘立柱建物

1

1区土坑出土遺物

1(7上)

2(16上)

7(67上)

6(65上)

5(59上)

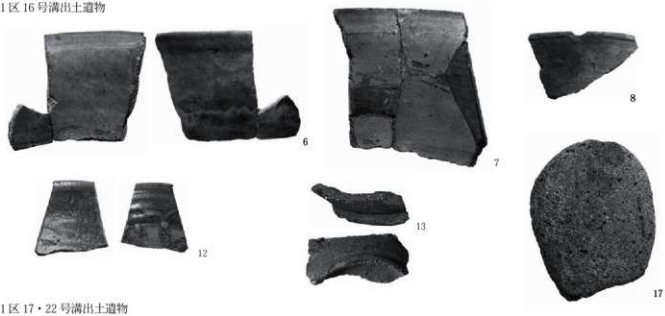
1区土坑(火葬跡)出土遺物

2(168上)

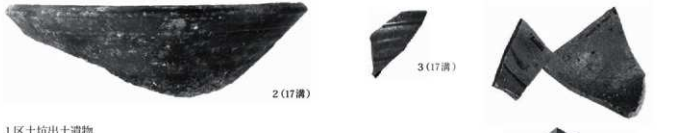
11(99上)

PL.60

1区 16号溝出土遺物



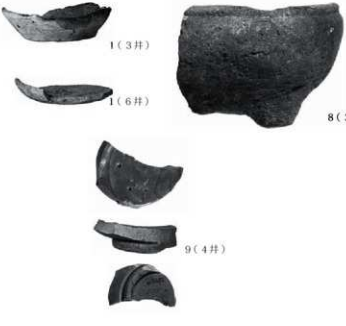
1区 17・22号溝出土遺物



1区土坑出土遺物

1区土坑(井戸状)出土遺物

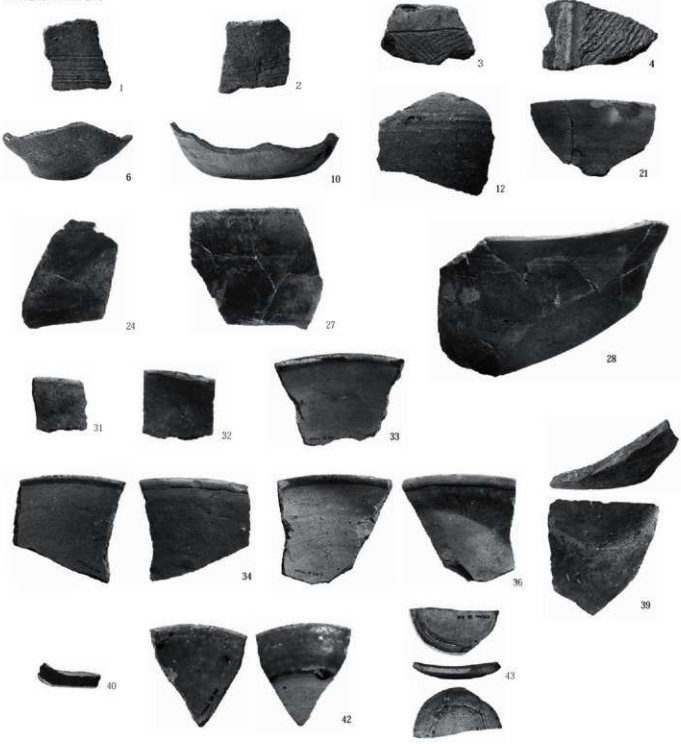
1区井戸出土遺物



1区1号集石出土遺物

1区13号溝出土遺物

1区遺構外出土遺物



PL.62

2区1号住居出土遺物

1

3

2区1号竪穴状遺構出土遺物

1

2区土坑出土遺物

1（9土）

2区4号墓出土遺物

1

2

3

5

6

4

2区2号溝出土遺物

2

7

9

10

12

13

15

16

17

2区14号溝出土遺物

1

2区 16 号溝出土遺物

2区 17 号溝出土遺物

2区 18 号溝出土遺物

2区 19 号溝出土遺物

2区 20 号溝出土遺物

2区 23 溝出土遺物

2区遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	わたぬきうしみちいせき
書　　名	綿貫牛道遺跡
副　書　名	国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	547
編 著 者 名	菊池実　飯森康広
編 集 機 関	公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 年 月 日	20121219
作成法人ＩＤ	21005
郵 便 番 号	377-8555
電 話 番 号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	わたぬきうしみちいせき
遺　跡　名	綿貫牛道遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしわたぬきまち
遺 跡 所 在 地	群馬県高崎市綿貫町
市町村コード	10202
遺 跡 番 号	1439
北緯（日本測地系）	361823
東経（日本測地系）	1390443
北緯（世界測地系）	361834
東経（世界測地系）	1390431
調 査 期 間	20080627-20090525
調 査 面 積	8935
調 査 原 因	道路建設
種　　別	集落／屋敷／散布地
主 な 時 代	縄文／古墳／飛鳥・奈良・平安／中世／近世
遺 跡 概 要	散布地－縄文－土器＋石器／集落－古墳－竪穴住居10＋土坑＋溝－土器＋石器＋鉄器／集落－飛鳥・奈良・平安－竪穴住居４＋掘立柱建物１＋土坑＋溝－土器＋石器＋鉄器／屋敷－中世－掘立柱建物26＋土坑89＋井戸４＋溝10－陶磁器＋石器・石製品＋金属器/その他－近世－溝２
特 記 事 項	古墳時代前期の広域にわたる溝１条が検出される。中世では14世紀半ばから15世紀半ばにかけて、５時期程度の変遷を持つ屋敷遺構がある。
要　　約	縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。古墳時代から平安時代の竪穴住居跡15軒を検出した。中世の屋敷とその周辺では、掘立柱建物26棟ほかが見つかり、在地系土器を中心に多くの陶磁器が出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第547集

綿貫牛道遺跡

国道354号高崎玉村バイパス地域活力基盤創造事業に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

平成24年(2012) 12月12日　印刷
平成24年(2012) 12月19日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
電話(0279) 52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／杉浦印刷株式会社